

# 京都府遺跡調査報告集

## 第199冊

国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡発掘調査報告

- (1)新町遺跡第2次
- (2)三分井根遺跡第2・3次
- (3)佐屋利遺跡第1～3次

2026

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1  
新町遺跡第 2 次



新町遺跡 I 区と峰山盆地遠景(北東から)

巻頭図版 2

佐屋利遺跡第1～3次



7区掘完掘状況(東から)

巻頭図版 3

佐屋利遺跡第1～3次



第2次調査遠景(東から)

## 序

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や地域の歴史教育などに活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する京丹後市新町遺跡第2次調査と同佐屋利遺跡第1～3次調査は、府道建設工事に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施したものです。このたび、発掘調査ならびに整理等作業が完了しましたので、『京都府遺跡調査報告集』第199冊として刊行する運びとなりました。

ここに報告する新町遺跡は、縄文時代早期の押型文土器や縄文時代後期の土器埋納遺構を検出し、丹後半島におけるあらたな縄文遺跡の拡がりを知る資料となりました。佐屋利遺跡では、弥生時代、平安時代から戦国時代にかけての各時代の遺構を確認しました。弥生時代中期の段丘面における遺構群の検出は、弥生集落の立地を考えるうえで貴重な資料です。また、平安時代末期から鎌倉時代には、区画溝を伴う居住域を確認し、木簡や人形などの木製品が出土しました。さらに、戦国時代は国衆などの居館に伴うとみられる巨大な堀を検出し、京都府北部ではじめて黒樂茶椀が出土しています。これらの調査成果から、一帯は各時代を通じた物流の集積地となり、政治・経済の拠点であったことが判明しました。

以上の調査成果は、今後、それぞれの遺跡が立地する地域の歴史や日本史研究を進めるうえで重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました京都府丹後土木事務所をはじめ、ご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝するとともに、心より御礼を申し上げます。

令和8年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 上 原 眞 人

## 例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡発掘調査報告

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
新町遺跡第2次	京丹後市峰山町新町	令和2年7月6日～ 令和3年2月26日	京都府丹後 土木事務所	竹原一彦
三分井根遺跡 第2・3次	京丹後市峰山町新町	令和3年2月1日～ 令和3年2月26日 令和3年5月12日～ 令和3年6月29日		面 将道
佐屋利遺跡 第1～3次	京丹後市峰山町新町・ 荒山	令和3年5月12日～ 令和4年3月4日 令和4年5月12日～ 令和5年1月30日 令和5年6月14日～ 令和5年11月14日		面 将道

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。

6. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。

# 本文目次

## 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡発掘調査報告

1. はじめに-----	1
2. 位置と環境	
1) 地理的環境-----	3
2) 歴史的環境-----	4
(1) 新町遺跡第2次	
1. はじめに-----	7
2. 小規模調査-----	7
3. 面的調査-----	11
1) 検出遺構-----	12
2) 出土遺物-----	22
4. まとめ-----	24
(2) 三分井根遺跡第2・3次	
1. はじめに-----	33
2. 調査概要-----	34
3. まとめ-----	37
(3) 佐屋利遺跡第1～3次	
1. はじめに-----	38
2. 調査の方法-----	39
3. 1区の調査	
1) 地区の概要と検出遺構-----	40
2) 出土遺物-----	48
3) 1区の土砂流堆積と地形変化の考察-----	71
4. 2区・4区の調査	
1) 地区の概要と検出遺構-----	73
2) 出土遺物-----	82
3) 小結-----	107
5. 3区の調査	
1) 地区の概要と検出遺構-----	107
2) 出土遺物-----	112
3) 小結-----	122

6. 5 区の調査	
1) 地区の概要と検出遺構	123
2) 小結	123
7. 6 区の調査	
1) 地区の概要と検出遺構	124
2) 出土遺物	128
3) 小結	135
8. 7 の区調査	
1) 地区の概要と検出遺構	136
2) 出土遺物	141
3) 小結	145
9. 総括	
1) 地形帯の区分と調査地の全体構造	148
2) 遺跡の変遷	149
3) 総合評価	150

## 挿 図 目 次

第1図 調査地の位置	1
第2図 調査地周辺の地質	4
第3図 調査地周辺の微地形図	5
第4図 調査地周辺の遺跡分布	6
第5図 小規模調査位置図	8
第6図 小規模調査1-bトレンチ、5トレンチ平・断面図	9
第7図 面的調査I～III区位置図	11
第8図 I～III区検出遺構平面図	13
第9図 I区南東平面図	14
第10図 土坑SK95・土坑SK100平・断面図	14
第11図 井戸SE91平・断面図	15
第12図 古墳・弥生時代検出遺構平・断面図	16
第13図 自然流路NR42南壁面断面図	18
第14図 竪穴建物SH70平・断面図	19
第15図 縄文時代遺構平・断面図	20
第16図 新町遺跡出土遺物1	21

第17図	新町遺跡出土遺物 2	-----	23
第18図	新町遺跡出土遺物 3	-----	24
第19図	新町遺跡出土遺物 4	-----	25
第20図	三分井根遺跡調査対象地位置図	-----	33
第21図	三分井根遺跡調査区配置図	-----	34
第22図	三分井根遺跡第 2 次調査調査区平面図	-----	35
第23図	三分井根遺跡第 3 次調査調査区平面図	-----	35
第24図	三分井根遺跡トレンチ柱状図	-----	36
第25図	遺跡周辺地形区分図	-----	37
第26図	佐屋利遺跡調査区位置図	-----	39
第27図	1 区第 1 遺構面遺構配置図	-----	41
第28図	掘立柱建物 S B 1001 平・断面図	-----	42
第29図	掘立柱建物 S B 1002 平・断面図	-----	43
第30図	柵 SA 1003 平・断面図	-----	44
第31図	1 区第 2 遺構面遺構配置図	-----	47
第32図	木組み遺構 S X 1053 平・断面図	-----	48
第33図	1 区南北畔断面図	-----	49
第34図	1 区出土土器・土製品 1	-----	51
第35図	1 区出土土器・土製品 2	-----	52
第36図	1 区出土土器・土製品 3	-----	54
第37図	1 区出土土器・土製品 4	-----	56
第38図	1 区出土土器・土製品 5	-----	57
第39図	1 区出土土器・土製品 6	-----	59
第40図	1 区出土石製品、銭貨	-----	60
第41図	1 区出土木製品 1	-----	61
第42図	1 区出土木製品 2	-----	62
第43図	1 区出土木製品 3	-----	63
第44図	1 区出土木製品 4	-----	64
第45図	1 区出土木製品 5	-----	66
第46図	1 区出土木製品 6	-----	67
第47図	1 区出土木製品 7	-----	68
第48図	1 区出土木製品 8	-----	70
第49図	2 区・ 4 区遺構配置図	-----	73
第50図	2 区北壁断面図	-----	74
第51図	4 区中央断面図	-----	75

第52図	4区中央部断ち割り部断面図	75
第53図	2区4区主要遺構配置図	76
第54図	自然流路N R 1008南北断面図	78
第55図	溝S D 2143断面図	78
第56図	土坑状遺構S X 2153断面図	79
第57図	溝S D 4001断面図	79
第58図	掘立柱建物S B 4001、S B 4002平面図	80
第59図	石組遺構S E 4142平・断面図	80
第60図	井戸S E 4073断面図	81
第61図	2区出土土器	83
第62図	4区出土土器 1	87
第63図	4区出土土器 2	89
第64図	4区出土土器 3	92
第65図	4区出土土器 4	95
第66図	4区出土土器 5	98
第67図	4区出土土器 6	100
第68図	4区出土石製品、鉄製品	101
第69図	4区出土銭貨	102
第70図	4区出土木製品 1	104
第71図	4区出土木製品 2	105
第72図	4区出土木製品 3	106
第73図	4区出土木製品 4	107
第74図	3区遺構配置図	108
第75図	3区東部北壁断面図	109
第76図	3区西部西壁断面図	109
第77図	3区西部検出遺構図	110
第78図	不定形土坑S X 3002平・断面図	111
第79図	溝S D 3096・S D 3095断面図	111
第80図	3区出土土器 1	113
第81図	3区出土土器 2	115
第82図	3区出土土器 3	118
第83図	3区出土土器 4	119
第84図	3区出土石器・石製品	121
第85図	5区検出遺構図	123
第86図	5区西壁断面図	124

第87図	6区検出遺構図	125
第88図	6区北壁断面図1	126
第89図	6区北壁断面図2	127
第90図	掘立柱建物S B6001平・断面図	128
第91図	6区出土土器1	129
第92図	6区出土土器2	131
第93図	6区出土土器3	133
第94図	6区出土石製品	136
第95図	7区検出遺構図	137
第96図	堀S D7001断面図	139
第97図	堀S D7006断面図	140
第98図	7区出土土器1	142
第99図	7区出土土器2	144
第100図	7区出土石造物	146
第101図	7区出土石造物、石製品	147
第102図	佐屋利遺跡地形区分図	149
第103図	佐屋利遺跡の変遷	151

## 付表目次

付表1	新町遺跡出土土器観察表	26
付表2	新町遺跡出土縄文土器観察表	28
付表3	新町遺跡出土鉄製品・石製品観察表	32
付表4	1区出土土器・土製品観察表	153
付表5	1区出土石器・石製品観察表	161
付表6	1区出土銭貨計測表	161
付表7	1区出土木製品観察表	162
付表8	2区出土土器・土製品観察表	164
付表9	4区出土土器・土製品観察表	166
付表10	2区・4区出土石製品、鉄製品観察表	171
付表11	4区出土銭貨観察表	171
付表12	4区出土木製品観察表	172
付表13	3区出土土器・土製品観察表	173
付表14	3区出土石器・石製品観察表	176

付表15	6区出土土器・土製品観察表	176
付表16	6区出土石器・石製品観察表	179
付表17	7区出土土器・土製品観察表	180
付表18	7区出土石器・石製品観察表	181

## 図版目次

巻頭図版1	新町遺跡第2次 新町遺跡I区と峰山盆地遠景(北東から)
巻頭図版2	佐屋利遺跡第1～3次 7区堀完掘状況(東から)
巻頭図版3	佐屋利遺跡第1～3次 第2次調査遠景(東から)

### 新町遺跡第2次

図版第1	(1) 調査前遠景(南から) (2) 調査前状況(西から) (3) 1-a トレンチ全景(東から)
図版第2	(1) 1-a トレンチ全景(南から) (2) 1-b トレンチ全景(西から) (3) 1-b トレンチ北壁セクション(南から)
図版第3	(1) 尾根上調査前状況(南から) (2) 2 トレンチ全景(南西から) (3) 2 トレンチ勾玉出土状況(東から)
図版第4	(1) 3 トレンチ全景(南西から) (2) 3 トレンチSH70検出状況(南東から) (3) 4 トレンチ遺構検出作業(西から)
図版第5	(1) 4 トレンチ耕作溝群・ピット検出状況(西から) (2) 5 トレンチ調査前状況(北東から) (3) 5 トレンチ全景(東から)
図版第6	(1) 5 トレンチ流路NR89(北西から) (2) 尾根上I区南西部遺構検出状況(北東から) (3) I区南東部NR42検出状況(北西から)

- 図版第7 (1) I区南東部N R 42検出状況(北東から)  
(2) I区西部S E 91検出状況(北から)  
(3) S E 91埋土分割調査状況(西から)
- 図版第8 (1) S E 91埋土中層部セクション(東から)  
(2) S E 91埋土下層部セクション(南東から)  
(3) S E 91断ち割り断面状況(南東から)
- 図版第9 (1) I区南東角中近世遺構検出状況(東から)  
(2) 土坑S K 95完掘状況(北から)  
(3) 土坑S K 96埋土セクション(西から)
- 図版第10 (1) 土坑S K 100半割埋土セクション(北東から)  
(2) 土坑S K 100全景(西から)  
(3) 土坑S K 90検出状況(南東から)
- 図版第11 (1) S K 90埋土セクション(南東から)  
(2) S K 90完掘状況(南東から)  
(3) 風倒木跡S X 102埋土セクション(南から)
- 図版第12 (1) S X 102完掘状況(南から)  
(2) 竪穴建物S H 70埋土セクション(南から)  
(3) S H 70周壁溝検出状況(南西から)
- 図版第13 (1) S H 70床面調査状況(南西から)  
(2) S H 70 S K 236埋土セクション(北西から)  
(3) S K 236完掘状況(南東から)
- 図版第14 (1) S H 70支柱穴S P 248埋土セクション(南から)  
(2) S H 70全景(東から)  
(3) S H 70全景(南から)
- 図版第15 (1) 土坑S K 266遺物出土状況(西から)  
(2) 土坑S K 232遺物出土状況(南から)  
(3) 柱穴S P 215遺物出土状況(西から)
- 図版第16 (1) S H 70支柱穴S P 247埋土セクション(南から)  
(2) S P 215埋土セクション(南から)  
(3) 柱穴S P 216埋土セクション(東から)
- 図版第17 (1) 自然流路N R 42埋土第18層検出状況(北東から)  
(2) N R 42第18層調査状況(東から)  
(3) N R 42完掘状況(北西から)

図版第18 (1) N R 42調査区南西壁面セクション(北東から)

(2) I 区全景(北東から)

(3) 1 区全景(右下が北)

図版第19 (1) I 区遠景と佐屋利遺跡(南西から)

(2) 1 区遠景(南西から)

(3) II 区と峰山盆地遠景(北から)

図版第20 (1) II 区全景(南西から)

(2) 土器埋納坑 S X 205(南西から)

(3) S X 205深鉢埋納状況(南西から)

図版第21 出土遺物 1

図版第22 (1) 出土遺物 2

(2) 出土遺物 3

三分井根遺跡

図版第23 (1) 1 区完掘状況(北から)

(2) 2 区完掘状況(北から)

(3) 3 区完掘状況(北から)

図版第24 (1) 4 区完掘状況(北から)

(2) 1 区壁面(北東から)

(3) 3 区壁面(東から)

図版第25 (1) 6 区完掘状況(南から)

(2) 7 区完掘状況(北から)

(3) 7 区壁面(東から)

図版第26 (1) 第2次調査遠景(南西から)

(2) 第3次調査遠景(北東から)

佐屋利遺跡第1～3次

図版第27 (1) 1 区調査前状況(南東から)

(2) 1 区上層検出状況(北西から)

図版第28 (1) 1 区上層 S X 1053検出状況(南から)

(2) 1 区上層 S X 1053遺物出土状況(南から)

(3) 1 区上層 S X 1053掘削状況(南から)

図版第29 (1) 1 区上層 S P 1031半裁状況(南から)

(2) 1 区上層 S P 1050半裁状況(南から)

(3) 1 区上層 S P 1033半裁状況(南から)

- 図版第30 (1) 1区上層 S P 1097段下げ(南から)  
 (2) 1区上層 S P 1092段下げ(南から)  
 (3) 1区上層 S P 1095段下げ(南から)
- 図版第31 (1) 1区上層 S P 1094段下げ(南から)  
 (2) 1区上層 S P 1099段下げ(南から)  
 (3) 1区上層 S P 1096半裁状況(南から)
- 図版第32 (1) 1区上層 S X 1054セクション(南から)  
 (2) 1区上層 S P 1099半裁状況(南から)  
 (3) 1区上層 S P 1097半裁状況(南から)
- 図版第33 (1) 1区上層 S P 1095半裁状況(東から)  
 (2) 1区上層 S P 1093半裁状況(南から)  
 (3) 1区上層 S P 1075半裁状況(南から)
- 図版第34 (1) 1区上層 自然流路内木製品(下駄か)出土状況(南西から)  
 (2) 1区上層 自然流路内木製品(下駄)出土状況(南西から)
- 図版第35 (1) 1区上層 自然流路内木製品(下駄、木簡)出土状況(南西から)  
 (2) 1区上層 自然流路内木製品(戸板)出土状況(南西から)
- 図版第36 (1) 1区上層全景(西から)  
 (2) 1区上層全景(東から)
- 図版第37 (1) 1区上層 柵列検出状況(東から)  
 (2) 1区上層 柵列近景(西から)
- 図版第38 (1) 1区上層 掘立柱建物(北東)検出状況(東から)  
 (2) 1区上層 掘立柱建物(南西)検出状況(東から)
- 図版第39 (1) 1区下層検出状況(西から)  
 (2) 1区下層検出状況(東から)
- 図版第40 (1) 1区下層 木組遺構検出状況遠景 (東から)  
 (2) 1区下層 木組遺構検出状況近景 (西から)  
 (3) 1区下層 木組遺構検出状況近景(北東から)
- 図版第41 (1) 1区下層全景(西から)  
 (2) 1区下層全景(東から)
- 図版第42 (1) 1区上層空撮(南から)  
 (2) 1区下層空撮(北東から)
- 図版第43 (1) 2区北壁 1(南から)  
 (2) 2区北壁 2(南から)  
 (3) 2区耕作溝掘削状況(南から)

- 図版第44 (1) 2区西半全景(南東から)  
(2) 2区西部(北東から)  
(3) 2区中部(南から)
- 図版第45 (1) 銭貨埋納柱穴 S P 2003 半裁状況(南東から)  
(2) 銭貨検出状況近景(南から)  
(3) S D 2143 掘削状況(南から)
- 図版第46 (1) 2区全景(上が北)  
(2) 2区・3区遠景(南西から)
- 図版第47 (1) 3区 S X 3002 土器出土状況(南から)  
(2) 3区 S D 4095 大型石包丁出土状況(西から)  
(3) S D 3069 完掘状況(南から)
- 図版第48 (1) 3区西壁(東から)  
(2) 3区東半全景(東から)  
(3) 3区西半全景(西から)
- 図版第49 (1) 3区空撮(上が北)  
(2) 3区空撮(南西から)
- 図版第50 (1) 4区東半調査前(東から)  
(2) 4区西半全景(西から)
- 図版第51 (1) S D 4001 検出状況(北西から)  
(2) S D 4001 検出状況(南から)  
(3) S D 4003 検出状況(南から)
- 図版第52 (1) S D 4001 セクション(南から)  
(2) S D 4003 セクション(南から)
- 図版第53 (1) S P 4035 半裁状況(南から)  
(2) S P 4061 半裁状況(南から)  
(3) S P 4345 半裁状況(南から)
- 図版第54 (1) S P 4214 土器・鉄刀出土状況(南から)  
(2) S P 4214 鉄刀出土状況(南から)
- 図版第55 (1) S P 4040 銭貨出土状況(南から)  
(2) S P 4040 銭貨出土状況近景(南から)
- 図版第56 (1) S P 4030 セクション(南から)  
(2) S P 4044 セクション(南から)  
(3) S P 4065 セクション(南から)

- 図版第57 (1) S D4071内石組遺構検出状況(南から)  
(2) S D4071セクション(南から)  
(3) S D4071完掘状況(南から)
- 図版第58 (1) S E 4073検出状況(南から)  
(2) S E 4073完掘状況(南から)  
(3) S E 4073半裁状況(南から)
- 図版第59 (1) 自然流路検出状況(西から)  
(2) 自然流路内井戸 S E 4215検出状況(南から)  
(3) 自然流路内石組井戸底? S E 4004検出状況(南から)
- 図版第60 (1) 自然流路内木質集中部(西から)  
(2) 自然流路内木柵井戸 S E 4215検出状況(南から)  
(3) 自然流路内木柵井戸 S E 4215完掘状況(南から)
- 図版第61 (1) 4区空撮(上が北)  
(2) 4区空撮(上が北)
- 図版第62 (1) 5区調査前状況(北から)  
(2) 5区西壁(北東から)  
(3) 5区完掘状況(北から)
- 図版第63 (1) 6区調査前状況(東から)  
(2) 6区全景(北東から)  
(3) 6区全景(西から)
- 図版第64 (1) S P 6046半裁状況(北から)  
(2) S P 6070半裁状況(北から)  
(3) S P 6072半裁状況(北から)
- 図版第65 (1) S P 6037半裁状況(北から)  
(2) S B 6200全景(南から)  
(3) S K6144半裁状況(南から)
- 図版第66 (1) 6区空撮(上が北)  
(2) 6区空撮(東から)
- 図版第67 (1) 7区調査前状況(西から)  
(2) 7区検出状況(西から)
- 図版第68 (1) 7区東壁(西から)  
(2) S D7001セクション1(北西から)  
(3) S D7001セクション2(西から)

- 図版第69 (1) S D7002検出状況(東から)  
 (2) S P7004検出状況(南東から)  
 (3) S P7004半裁状況(南東から)
- 図版第70 (1) S D7001下層検出状況(南西から)  
 (2) S D7001下層検出状況(東から)
- 図版第71 (1) S D7001セクション1南(東から)  
 (2) S D7002セクション1北(南西から)
- 図版第72 (1) S D7003セクション1(東から)  
 (2) 7区拡張部セクション(西から)  
 (3) 7区拡張部南壁(北から)
- 図版第73 (1) S D7001完掘状況(東から)  
 (2) S D7001完掘状況(西から)
- 図版第74 (1) 7区空撮(西から)  
 (2) 7区空撮(東から)
- 図版第75 出土遺物1 4区出土陶磁器類1
- 図版第76 出土遺物2 4区出土陶磁器類2
- 図版第77 出土遺物3 4区出土陶磁器類3
- 図版第78 出土遺物4 4区出土陶磁器類4
- 図版第79 出土遺物5 4区出土陶磁器類5
- 図版第80 出土遺物6 6区出土陶磁器類
- 図版第81 (1) 出土遺物7 1区出土白磁、灰釉陶器(外面)  
 (2) 出土遺物8 1区出土白磁、灰釉陶器(内面)
- 図版第82 (1) 出土遺物9 1区出土青磁、緑釉陶器、須恵器(外面)  
 (2) 出土遺物10 1区出土青磁、緑釉陶器、須恵器(内面)
- 図版第83 (1) 出土遺物11 1区出土墨書土器  
 (2) 出土遺物12 1区出土縄文土器、土錘
- 図版第84 出土遺物13 1区出土土師器壺
- 図版第85 出土遺物14 1区出土土師器甕、高杯
- 図版第86 出土遺物15 1区出土土師器高杯、皿、弥生土器
- 図版第87 出土遺物16 1区出土土器
- 図版第88 (1) 出土遺物17 NR1007出土板戸  
 (2) 出土遺物18 NR1007出土板戸
- 図版第89 (1) 出土遺物19 NR1007出土板戸部材  
 (2) 出土遺物20 NR1007出土板戸部材

- 図版第90 (1) 出土遺物21 NR 1007出土板戸部材(棧)  
 (2) 出土遺物22 NR 1007出土板戸部材(棧)
- 図版第91 (1) 出土遺物23 NR 1007出土板戸部材(棧)  
 (2) 出土遺物24 もえさし
- 図版第92 (1) 出土遺物25 目釘付板材  
 (2) 出土遺物26 目釘付板材
- 図版第93 (1) 出土遺物27 折敷 1  
 (2) 出土遺物28 折敷 2
- 図版第94 (1) 出土遺物29 折敷 3  
 (2) 出土遺物30 有孔木材
- 図版第95 (1) 出土遺物31 下駄  
 (2) 出土遺物32 下駄
- 図版第96 (1) 出土遺物33 下駄  
 (2) 出土遺物34 下駄
- 図版第97 (1) 出土遺物35 木製品(不明木製品)  
 (2) 出土遺物36 木製品(不明木製品)
- 図版第98 (1) 出土遺物37 木製品(曲物部材)  
 (2) 出土遺物38 木製品(曲物部材)
- 図版第99 (1) 出土遺物39 木製品(382・383・384；椀、385・386；櫛)  
 (2) 出土遺物40 木製品(382・383・384；椀、385・386；櫛)
- 図版第100 出土遺物41 鎌柄ほか木製品(389；鎌柄、351・348・350；不明目製品、349；卒塔婆)
- 図版第101 (1) 出土遺物42 呪符木簡(赤外線写真は奈良文化財研究所撮影)  
 (2) 出土遺物43 木簡
- 図版第102 (1) 出土遺物44 木製品(388・387；球、347・352；不明木製品)  
 (2) 出土遺物45 銭、石製品、石器
- 図版第103 出土遺物46 2区出土遺物
- 図版第104 出土遺物47 3区出土遺物 1
- 図版第105 出土遺物48 3区出土遺物 2
- 図版第106 (1) 出土遺物49 3区出土遺物 3  
 (2) 出土遺物50 3区出土遺物 4 (大型石包丁)
- 図版第107 出土遺物51 4区出土遺物 1
- 図版第108 (1) 出土遺物52 4区出土遺物 2  
 (2) 出土遺物53 6区出土遺物 1
- 図版第109 出土遺物54 6区出土遺物 2
- 図版第110 出土遺物55 6区出土遺物 3

図版第111 出土遺物56 7区出土遺物1

図版第112 (1)出土遺物57 7区出土遺物2(軟質施釉陶器 楽茶碗)

(2)出土遺物58 7区出土遺物3(軟質施釉陶器 楽茶碗)

# 国道312号(大宮峰山インター線) 関係遺跡発掘調査報告

## 1. はじめに

国道312号は宮津市を起点に、京丹後市内の東西に走り兵庫県姫路市に至る幹線道路であり、観光・防災・医療において重要な位置を占める。平成27年度から国土交通省により開始された高規格道路山陰近畿自動車道整備事業に伴う大宮IC～(仮称)峰山ICへのアクセス道路として大宮峰山道路整備事業が計画された。

今回、道路建設予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれることから、京都府教育委員会による現地踏査がなされた。その結果、京都府丹後土木事務所と京都府教育委員会の協議により、当調査研究センターが、京都府丹後土木事務所より依頼をうけて、発掘調査を実施した。現地調査にあたっては、新町区自治会、荒山区自治会の両自治会には格別のご高配を賜った。また、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会にご指導、助言をいただいた。なお、調査にかかる経費は京都府丹後土木事務所が全額負担した。本文は現地を担当した調査課の各調査担当者が執筆した。

〔調査体制等〕

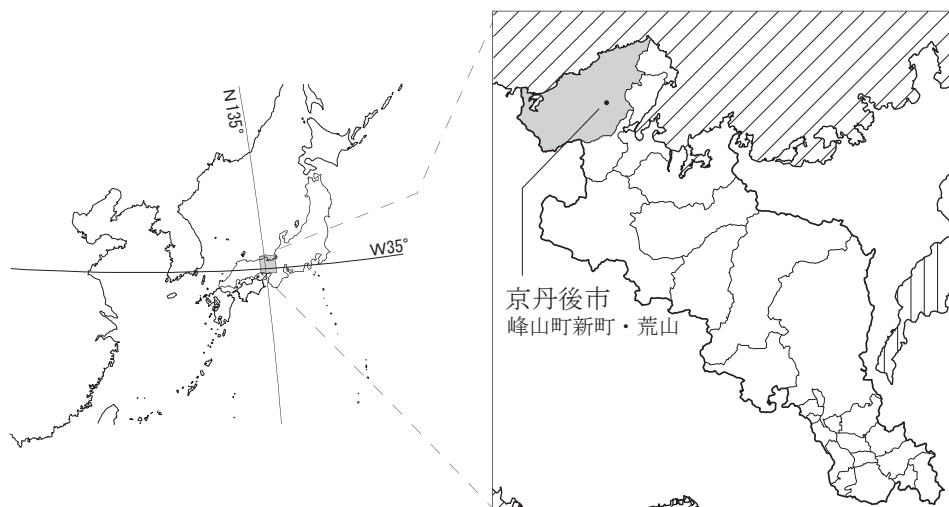
〈新町遺跡第2次〉

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課参事調査第3係長事務取扱	中川和哉
	同 調査第3係副主査	竹原一彦

調査場所 京丹後市峰山町新町・荒山

現地調査期間 令和2年7月6日～令和3年2月26日

調査面積 1,610㎡



第1図 調査地の位置

〈三分井根遺跡第2次〉

現地調査責任者 調査課長 小池 寛  
 現地調査担当者 調査課参事兼調査第4係長 中川和哉  
 同 調査第4係調査員 面 将道  
 調査場所 京丹後市峰山町新町  
 現地調査期間 令和3年2月1日～令和3年2月26日  
 調査面積 300㎡

〈三分井根遺跡第3次〉

現地調査責任者 調査課長 小池 寛  
 現地調査担当者 調査課課長補佐兼調査第1係長 吹田直子  
 同 調査第1係調査員 面 将道  
 同 野島悠之  
 調査場所 京丹後市峰山町新町  
 現地調査期間 令和3年5月12日～令和3年6月29日  
 調査面積 700㎡

〈佐屋利遺跡第1次〉

現地調査責任者 調査課長 小池 寛  
 現地調査担当者 調査課課長補佐兼調査第1係長 吹田直子  
 同 調査第1係副主査 三好博喜  
 同 調査第1係副主査 崎山正人  
 同 調査第1係主任 面 将道  
 同 調査第1係調査員 野島悠之  
 調査場所 京丹後市峰山町新町・荒山  
 現地調査期間 令和3年5月12日～令和4年3月4日  
 調査面積 4,300㎡

〈佐屋利遺跡第2次〉

現地調査責任者 調査課長 小池 寛  
 現地調査担当者 調査課課長補佐兼調査第1係長 吹田直子  
 同 調査第1係長 森島康雄  
 同 調査第1係副主査 三好博喜  
 同 調査第1係主任 面 将道  
 同 調査第1係調査員 加藤雄太  
 調査場所 京丹後市峰山町新町・荒山  
 現地調査期間 令和4年5月12日～令和5年1月30日  
 調査面積 3,240㎡

〈佐屋利遺跡第 3 次〉

現地調査責任者 調査課長 小池 寛  
 現地調査担当者 調査課調査第 1 係長 森島康雄  
                   同 調査第 1 係主任 面 将道  
 調査場所 京丹後市峰山町荒山  
 現地調査期間 令和 5 年 6 月 14 日～令和 5 年 11 月 14 日  
 調査面積 850㎡

〈令和 6 年度整理作業〉

整理作業責任者 調査課長 小池 寛  
 整理作業担当者 調査課調査第 1 係長 森島康雄  
                   同 調査第 1 係主任 面 将道  
 整理作業期間 令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

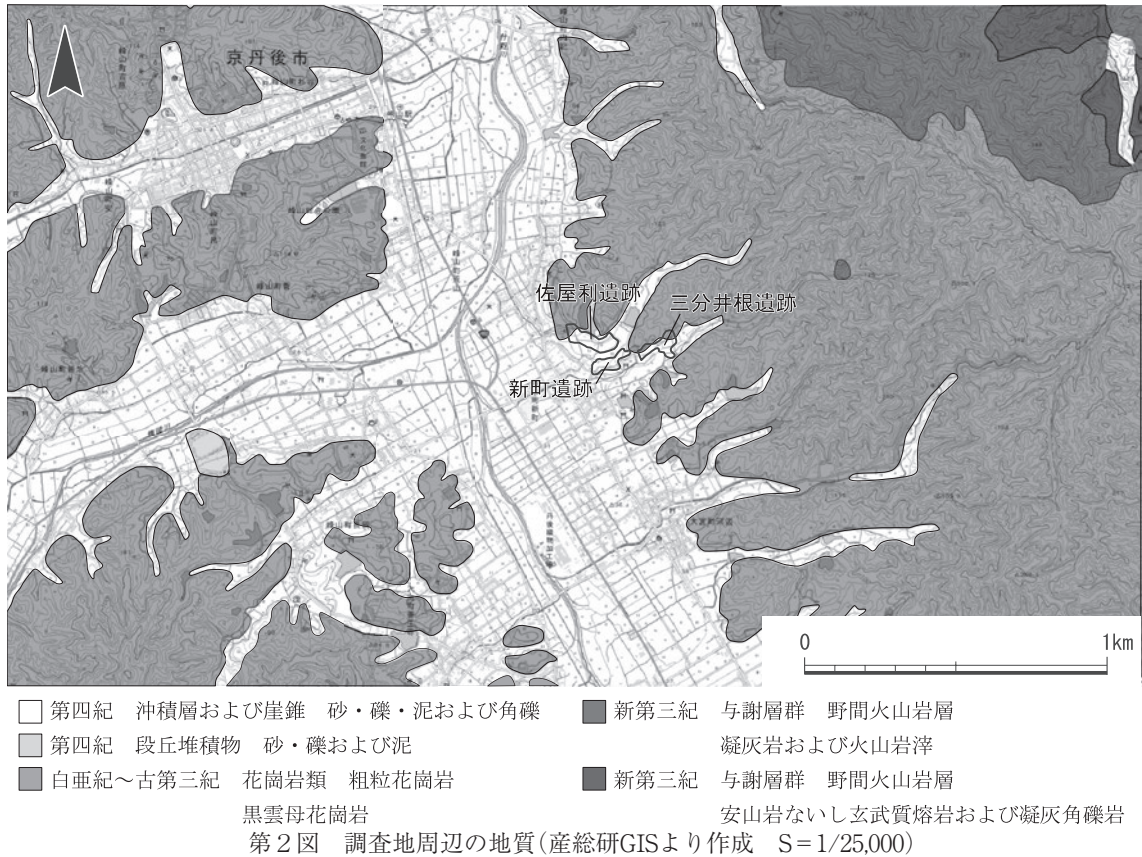
〈令和 7 年度整理作業〉

整理作業責任者 調査課長 高野陽子  
 整理作業担当者 調査課調査第 1 係長 森島康雄  
                   同 調査第 4 係主任 面 将道  
 整理作業期間 令和 7 年 4 月 25 日～令和 8 年 3 月 31 日

2. 位置と環境<sup>(注1)</sup>

1) 地理的環境

調査地は、丹後半島中央部を流れる竹野川中流域右岸に位置し、花崗岩山地から流下する小さな谷によって形成された扇状地の末端部に立地する。周辺一帯は、新第三紀に形成された花崗岩類を基盤とし、長期にわたる風化作用によって生成された真砂質砂層が広く分布する地域である。本地域では、山麓部から扇状地、さらに沖積低地が近接して分布しており、河川作用と斜面堆積が複合的に関与した地形が発達している。調査対象地周辺では、扇状地の緩斜面上に微高地と浅い凹地が点在し、とくに南北方向に連続する浅い凹地が複数確認される。これらの凹地は、旧流路あるいは氾濫面に由来する低位地形である可能性が高い。一方、凹地の縁辺部および外側には、相対的に標高の高い微高地が帯状に連続しており、乾燥度や地盤の安定性において低位地形との間に差異が認められる。調査地は、このような比較的安定した微高地と、侵食や堆積の影響を受けやすい低位地形とが近接する地形変換帯に位置している。区画整理以前の畑区画の配置をみると、浅い凹地に対応する位置を避けるように、区画が細長く帯状に配列する傾向が認められる。この配置は、低位で湿潤な地形条件の存在を反映したものと考えられる。微高地上では比較的安定した地表条件が確保されやすいのに対し、低位地形では洪水や侵食の影響を受けやすく、遺構の保存状況にも差が生じた可能性がある。本遺跡が立地する地域は、以上のような広域的な地質条件と、扇状地末端部に特有の微地形構造をもつ環境にある。土地利用に際しては地形条件に応

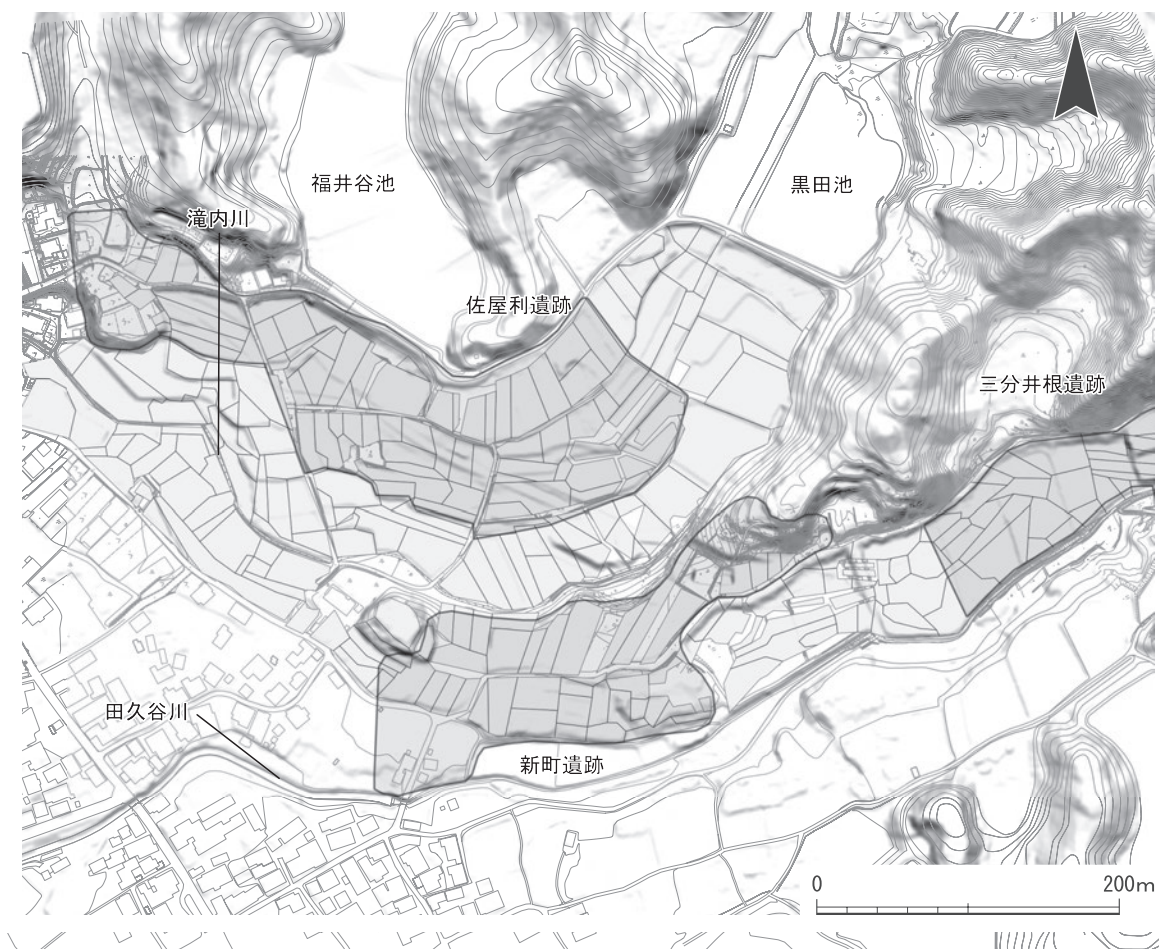


じた選択と調整が不可欠であり、この地質・地形的背景は、各調査区における遺構分布や時期ごとの土地利用の差異を理解するうえでの重要な前提条件となる。(面 将道)

## 2) 歴史的環境

調査地が位置する中郡盆地では、弥生時代から古墳時代、中世に至るまでの集落活動や生産活動について、断片的ながら調査研究によって明らかにされている。当地域は、古代以前から近世に至るまで継続的な人々の生活・生産の拠点となり得る地勢を有しており、竹野川を中心とする複数河川の沖積作用と微高地の発達が、集落立地に大きく寄与したと考えられる。一方で、中郡盆地における発掘調査の履歴には時期的な偏りがあり、古代・中世の遺跡は調査例に限られるため、時期ごとの資料量には顕著な差がみられる。このうち弥生時代の遺跡は調査例が多く、その性格や集落構造が比較的具体的に把握されている。本章では、佐屋利遺跡の立地と性格を理解するため、竹野川流域および中郡盆地における集落動態を概観する。

弥生時代の代表的事例として、扇谷遺跡および途中ヶ丘遺跡が挙げられる。扇谷遺跡では、弥生時代前期末から中期前葉にかけて構築された全長約830～850mの環濠が検出されている。この環濠は幅6m・深さ4mと大規模で、外郭としての防御的機能を備えるとともに、集落の範囲を画する役割を果たしていたと考えられる。同遺跡からは、鉄器、玉作り関連遺物、陶埴、磨製石器など多様な遺物が出土している。深い環濠と鉄や玉作り関連遺物の存在は、当地に専門的な生産集団が存在した可能性を示すとともに、丹後地域が山陰・北陸・畿内など広域交流圏の一部に位置づけられていたことを示唆する。途中ヶ丘遺跡では、弥生時代前期から後期にかけて長期間



第3図 調査地周辺の微地形図(国土地理院DEMより作成 S=1/5,000)

にわたり環濠が使用され、時期に応じて拡張・縮小が行われたことが、溝の重複関係から明らかとなっている。また、同遺跡においても玉類製作の痕跡が認められ、扇谷遺跡と並び、広域流通に関わる生産拠点としての性格がうかがえる。

古墳時代に入ると、中郡盆地周縁の山地部には多数の古墳が築造される。発掘調査例としては、カジヤ古墳、大耳尾古墳群、桃谷古墳などが知られ、これらから鍬形石などの石製腕飾類、筒形銅器、須恵器角杯、装飾付礎、ガラス製耳環、金銅製圭頭大刀などが出土している。これらの遺物群は、各地からの先進的な文物の流入を示すものであり、丹後地域が畿内政権や日本海側諸勢力との交流を維持していたことを示す資料といえる。古墳の立地は盆地縁辺部の尾根筋や台地縁部に集中しており、当時の政治的中心や勢力分布のあり方を考える手がかりとなる。

7世紀から8世紀前半にかけては、横穴墓が築かれ、近年調査した鶴尾遺跡では、九九木簡や墨書土器が出土し官衙の存在がうかがえる。また、窯業生産も行われ、奈良時代の阿婆田窯跡、平安時代の名地谷窯跡などの存在が知られる。

中世については、佐屋利遺跡と同時期に営まれたとみられる集落が、竹野川右岸・左岸の沖積台地や埋没谷上に多数確認されている。左岸側の菅外遺跡では、黒色土器を伴う掘立柱建物跡が検出され、古代末から中世にかけての生業活動の一端が具体的に示されている。対岸の松田遺跡



5117 金刀比羅山古墳群	5182 盗人神古墳群	5501 八幡池遺跡	6103 三本松古墳群	6181 滝ノ谷古墳群	6701 平岡城跡
5118 愛宕山古墳群	5183 狐田古墳群	5510 新町遺跡	6104 池田古墳群	6182 元林古墳群	6702 平岡城支城
5119 小長谷古墳群	5184 口元連古墳群	5518 丹教寺遺跡	6105 小池古墳群	6218 堀北古墳群	6703 善王寺小谷城跡
5120 舟泉寺横穴群	5185 菊ノ岡古墳群	5522 下菅遺跡	6107 本レ古墳群	6501 東八反田遺跡	6704 善王寺小谷城支城跡
5146 堂山古墳群	5186 奥芝原古墳群	5524 佐屋利遺跡	6110 菊岡神社古墳群	6502 小山遺跡	6706 山崎城跡(口大野別城跡)
5147 福井谷古墳群	5187 通り谷古墳群	5525 水分遺跡	6111 清瀬古墳群	6503 アバタ遺跡	6723 左坂城跡
5148 ハチさん古墳群	5188 兀ノ上古墳群	5526 三分井根遺跡	6112 太郎ヶ谷古墳群	6506 菅外遺跡	6724 周枳城跡(北村城跡)
5168 荒山北古墳群	5218 林ヶ谷古墳群	5712 荒山城跡	6115 十二社古墳群	6507 小僧谷遺跡	6728 饗野城跡(旧河辺城跡)
5169 ブチ谷古墳群	5227 法安北古墳群	5720 菅城跡	6116 十二社山古墳群	6524 ヒマ木遺跡	6729 松田城跡
5170 名柄古墳群	5228 中ノ谷古墳群	5726 城ノ上城跡	6119 山崎古墳群	6525 大宮亮神社遺跡	6730 河辺本城跡
5171 深谷古墳群	5229 立白古墳群	5727 屋敷ヶ谷城跡	6166 左坂古墳群	6528 北村遺跡	6731 北谷城跡
5172 追坂古墳群	5236 本昌寺古墳群	5730 新町城跡	6175 堀古墳群	6529 カンジョガキ遺跡	6756 堀城跡
5173 本昌寺裏山古墳群	5238 城ノ上古墳群	5751 追坂城跡	6176 今市古墳群	6530 小中田遺跡	6901 阿婆田窯跡群
5174 北谷古墳群	5239 敷谷古墳群	5903 大河原窯跡	6178 近江谷古墳群	6531 松田遺跡	6902 小僧谷経塚(山崎経塚)
5180 七尾南古墳群	5240 広久谷古墳群	6101 大塚谷古墳群	6179 小中田古墳群	6532 豊野遺跡	6910 今市経塚
5181 当日古墳群	5254 常泉寺北古墳群	6102 毘沙門堂古墳群	6180 松田古墳群	6549 東風ヶ奥遺跡	

第4図 調査地周辺の遺跡分布

からは、中世後半の土師器皿とともに緑釉陶器と青磁が多く出土し、掘立柱建物群や土壙墓も検出されている。これらの遺跡群は、地域伝承にみられる「谷川千軒」「松田千軒」との関連が指摘されており、竹野川流域における中世集落分布の具体像を示す事例である。さらに、佐屋利遺跡の東方に位置する三分井根遺跡周辺や田久谷川流域には、「田久千軒」の伝承が残されており、同流域にも中世集落が存在した可能性が高い。周辺の微高地や後背山地には、中世から戦国期にかけての山城・城館跡が点在しており、これらは当地域における居住構造や防御体系を理解するうえで重要な要素である。これらの分布状況から、竹野川流域およびその支谷では、中世を通じて複数の集落が共存し、時期に応じて盛衰を繰り返しながら地域的なネットワークを形成していたと考えられる。

以上のように、中郡盆地では、弥生時代の大規模環濠集落、古墳時代の周縁山地に展開する古墳群、中世の沖積地や谷沿いに営まれた集落群など、多層的な人類活動が確認される。これらの遺跡群は、各時代を通じて広域交流圏の結節点としての性格を有しており、丹後地域の歴史的展開を考えるうえで重要な資料を提供する。佐屋利遺跡は、竹野川流域における集落配置や土地利用のあり方を検討するうえで重要な位置にあり、本調査で得られた古代末から中世初頭の遺構検出は、これまで調査例が限られてきた中世集落動態を補う知見として位置づけられる。

(野島悠之)

## (1) 新町遺跡第 2 次

### 1. はじめに

新町遺跡は、京都府北部を縦貫し日本海に注ぐ竹野川中流域に広がる峰山盆地の北東部に位置し、竹野川の支流である田久谷川右岸の谷部から尾根筋の高台に立地している。

新町遺跡は、土地改良整備事業に伴い、昭和61年に峰山町教育委員会によるグリッド及びトレンチ調査が実施された。調査面積は合計283㎡であった。調査成果として、遺構は検出されていないが、弥生時代中期から中世にかけての土器が出土している。今回の調査地に近い南部の隣接畑地では、弥生時代中期の土器の出土が確認された。また、田久谷川が開析した東側谷部の調査では、砂や砂礫土・粘質土などの堆積層中からローリングを受けた土器が出土した。これらの遺物の出土状況から、付近の尾根上に古代～中世集落の存在が予想された。

調査は、調査対象地全域を対象にまず小規模調査に着手し、その成果をもって府教育委員会、京都府丹後土木事務所との協議を経て、9月24日から本調査を実施した。

### 2. 小規模調査

調査対象地の遺構・遺物分布状況把握を目的として、尾根上に4か所(1～4トレンチ)、北側尾根裾の平坦部に1か所(5トレンチ)の小規模調査地を設定した。調査前の現況は1トレンチと4トレンチの現況は耕作地、2トレンチと3トレンチは太いヒノキを主とする植林地であった。

5区は尾根北側裾に広がる竹林であった。2・3・5トレンチ周辺部で樹木等の伐採を実施したが、伐採木等の場外処分は行わず、トレンチの周辺に仮置きした。樹木伐採後、調査トレンチを現地に設定し重機掘削を行い、その後、人力による遺構の検出・調査を実施した。

(1) 1トレンチ

調査対象地丘陵尾根の東側中腹に沿う農道と尾根西側との間に存在する小規模平坦地に設定した調査地である。当初は1か所のトレンチ調査を計画したが、現地は一筆毎に獣除けフェンスで囲われていた。これによりトレンチを2か所(1-a・b)に分割して調査を行った。

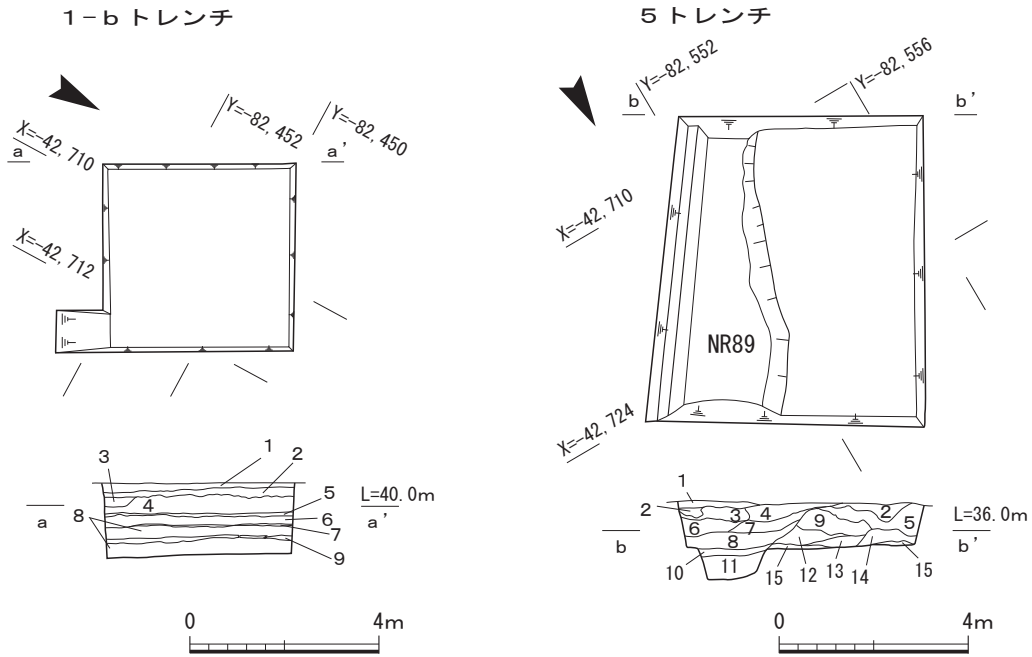
1-aトレンチ 南西側耕作地の設けた東西7.9m、南北10.6m規模の方形トレンチである。重機掘削で地表下3.1m(標高37.9m)まで掘削したが、大規模な攪乱を受けていた。コンクリート塊や鉄筋の産業廃棄物が調査面下まで続く状況を確認した。現地は調査の安全を考慮し、以後の掘削調査は断念した。

1-bトレンチ(第6図) 1-aトレンチの北東側やや離れて設定したトレンチである。東西4.3m、南北4.0m、深さ1.5mの規模を測る。ここでは竹野川支流の小河川で運ばれた、風化花崗岩(バイラン土)由来の粗砂と粘質細砂の互層堆積を検出した。なお、粘質極細砂の厚みは1~2cmと薄い。標高39.8m付近で検出した暗褐色粘質極細砂(第5層)には黒ボクが混じり、標高39.3m付近の黒褐色粘質微砂(第9層)は黒ボク層である。1-bトレンチの表土層(第1層)から染付破片が出土したが、下層の堆積層から遺物の出土はみられない。

(2) 2トレンチ



第5図 小規模調査位置図



1. 淡黄橙色 (10YR 3/4) 粗砂
2. 褐灰色 (10YR 4/1) 粗砂
3. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質細砂
4. 浅黄橙色 (10YR 8/3) 粗砂とにぶい黄橙色 (10YR 6/3) 粘質極細砂の水平ラミナ
5. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質極細砂
6. 浅黄橙色 (10YR 8/3) 粗砂とにぶい黄橙色 (10YR 7/4) 粗砂の水平ラミナ
7. 黄褐色 (10YR 5/6) 細砂
8. 黄橙色 (10YR 7/8) 粗砂とにぶい黄橙色 (10YR 6/3) 粗砂の水平ラミナ
9. 黒褐色 (10YR 2/2) 粘質微砂

1. 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質細砂
2. にぶい黄橙色 (10YR 7/2) 細砂と褐灰色 (10YR 6/1) 細砂のラミナ
3. 褐灰色 (10YR 6/1) 細砂
4. 褐灰色 (10YR 6/1) 粗砂
5. 浅黄橙色 (10YR 8/3) 小石混じり粗砂
6. 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質細砂に 1cm 大の小石含む
7. 7 層の暗色が強い
8. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質極細砂
9. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細砂
10. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 極細砂
11. 黒褐色 (10YR 2/3) 粘質極細砂
12. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 細砂～中粒砂のラミナ
13. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 細砂〈やや粘質〉
14. 褐灰色 (10YR 4/1) 極細砂
15. 白灰色 (10YR 7/1) 粗砂

第 6 図 小規模調査 1 - b トレンチ、5 トレンチ平・断面図(S=1/160)

丘陵尾根筋の南東側に位置する南北に長いトレンチである。全長16.4m、幅6.5m前後の規模を測る。表土下0.4～0.5mで遺構面を検出した。トレンチ北東端の遺構面の標高は41.8m、南西端部では標高41.4mを測る。耕作関連で削平を受けたようで、遺構の依存状況は良くない。ここでは 1 - a で検出した大規模攪乱と同じ攪乱坑(産業廃棄物含まず)が複数存在した。攪乱坑は遺構面下1.2m(標高40.6m)まで掘り下げたが底面は確認できていない。調査の安全面を考慮し、その後の掘削は行っていない。攪乱坑壁面の観察では、遺構面下は 1 - b と同様な花崗岩バイラン土堆積層が広がる。この花崗岩バイラン土は 3・4 トレンチと尾根筋の 5 トレンチにおいても同様である。攪乱坑以外で耕作溝と複数の柱穴を検出したが分布状況は薄い。耕作に伴う後世の削平で底の浅い遺構と遺物包含層が失われたと判断する。また、トレンチ南東端で自然河川NR42の左岸を検出した。2 トレンチでは、縄文土器・土師器・瓦器のほか、打製石鏃(第19図122)・滑石製勾玉(123)・碧玉剥片(124)が出土した。

### (3) 3トレンチ

2トレンチの北西やや離れた位置にあり、丘陵尾根北側斜面と尾根上平坦面の傾斜変換点近くに設定した調査地である。トレンチは尾根に主軸を合わせ、全長20.6m、幅4.5mの規模を測る。表土下約0.6mで遺構面を検出した。トレンチ北東端の遺構面の標高は41.9m、南西端部では標高41.5m、高低差約0.4mを測る。遺構面は北東から南西方向に緩やかに傾斜する。検出遺構は方形竪穴建物S H70、柱穴、溝、土坑などの遺構を検出した。遺物包含層は0.1～0.15mで、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器など多数の遺物の出土をみた。

### (4) 4トレンチ

丘陵尾根上調査対象地南部の畑に設定したトレンチである。方形の調査地は当初一辺10m四方で設定したが、果樹根の影響で北東隅がやや広がる。地表下0.6mで遺構面である黄褐色細砂層(第13図第13層)を検出した。遺構面の標高は41.1～41.2mを測る。ここでは暗褐色系埋土の円形柱穴ピット多数と土坑、それら遺構を切り壊す耕作溝を多数検出した。遺構面上にはにぶい黄褐色細砂層(第10図10層)が存在し、縄文時代後期～近世まで長期に及ぶ時代の遺物(縄文土器・碧玉剝片、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器)などの遺物が出土した。

### (5) 5トレンチ(第6図)

尾根西裾の小規模平坦地に設けた調査地である。東西5.2m、南北約6.5mの規模を測る。表土下0.5～0.6mで遺構面(標高35.9m)である白灰色粗砂層(第6図第15層)を検出した。ここでは尾根西側斜面の裾に沿って南西流する自然流路NR89を検出した。NR89は検出長5.8m、検出幅1.9m、深さ1.7mを測る。土師器・陶磁器数点が出土した。上層(第6層)出土の状況から、尾根斜面から転落した2次遺物と判断する。NR89の西側谷部は佐屋利遺跡が立地する谷水田が広がることから、中世以降の灌漑水路の可能性が高い。遺構面と現谷水田との比高差は約0.8mを測る。

### (6) 小結

小規模調査では、尾根上に設定した2～4トレンチにおいて、縄文時代後期～中世の遺構と遺物の分布状況を確認した。2トレンチ検出の攪乱坑は壁面が垂直に掘られ、埋土にはにぶい黄褐色～黒褐色細砂に灰黄褐色系砂質土の粘土ブロックが混じっている。攪乱坑壁面の観察では、遺構面下の土層は浅黄橙～にぶい黄橙色の花崗岩バイラン土由来の2次堆積層(ラミナ層)が広がり、本来の地山層は確認できない。丹後半島一帯の地質は花崗岩バイラン土の広域分布が知られ、現在も京丹後市各所で採掘が行われている。今回検出した攪乱坑は花崗岩バイラン土(真砂土)採掘跡と判断される。また、今回の調査対象地はバイラン土由来の扇状地でありながら、田久谷川など小河川の浸食を免れた尾根地形であることが判明した。

小規模調査では、尾根上に設定した2～4トレンチにおいて、縄文時代後期～中世の遺構と遺物の分布状況を確認した。遺構では円形掘形の柱穴・ピットが多数を占めた。このうち埋土内に柱痕跡が存在するものを柱穴、特に明瞭な痕跡が確認できないものをピットに分けた。2トレンチでは本調査で確認した自然河川NR42右岸の一部と数基のピットを検出した。3トレンチでは竪穴建物S H70の一部を検出した。4トレンチでは多数の耕作溝群と2トレンチから南西に延び



第7図 面的調査Ⅰ～Ⅲ区位置図

るNR42の右岸を検出した。5トレンチでは尾根裾を流れる流路(NR89)を検出した。

遺物では、縄文時代前期～後期の土器・石器・石製品、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器・近世陶磁器が出土した。遺構においては、縄文時代後期、古墳時代前期・後期、中世を中心とする集落遺跡であり、断続期はあるものの長期にわたって集落が営まれた複合遺跡であることが判明した。

### 3. 面的調査

小規模調査の成果をもとに、京都府教育委員会、京都府丹後土木事務所と遺跡の取り扱いについて協議した。その結果、丘陵尾根筋上で実施し、遺構・遺物の検出をみた小規模調査の2～4トレンチを拡張し面的調査を実施すること、丘陵西裾の5トレンチは西側谷部所在の佐屋利遺跡の近接地であり、遺構・遺物の有無確認を目的とした調査を実施することになった。

なお、尾根筋上の調査地については、小規模調査時の伐採樹木と調査過程で生じた廃土置き場の関係で、南部と北部に分割して反転調査を実施した。遺構密度の高い南部調査地(2・3トレンチ中央以南)をⅠ区、2・3トレンチ以北と尾根東西両端部分をⅡ区とし、遺構密度の高いⅠ区の調査を先行調査した。また、丘陵尾根西裾部のⅢ区は小規模であることから、Ⅰ区と同時に調査を行った。Ⅰ区・Ⅲ区の調査完了後は調査廃土をⅠ区に移し、空中写真撮影・図化用写真撮影(第1回)を実施した。その後、Ⅱ区を調査廃土で埋め戻し、Ⅰ区の調査で仮置きしていた伐採木と竹は場内搬出処分を行った。また、Ⅱ区の調査廃土はⅠ区に仮置きし、Ⅱ区の調査を実施した。Ⅱ区の調査を終える段階で空中写真および図化対応写真撮影(第2回)を実施した。現地調査

終了後はI区に仮置きした廃土による調査地の埋め戻しを重機で行い、現地の発掘調査を完了した。

## 1) 検出遺構

小規模調査のトレンチ周辺に仮置きした廃土をII区に移した後、重機による表土の掘削を行った。その後、人力による遺構検出作業を実施した。耕作溝群は4トレンチを中心に東西に広がり、溝群北端はトレンチの北辺に接して存在した幅約1.2mの農道に規制されて終わっていた。溝幅は0.3~0.5m、地表面からの深さ0.7~0.8mを測る。新町遺跡第1次調査報告書によれば、地元当該地付近では牛蒡栽培が盛んだったようである。今回検出した耕作溝群は、規模や形状から牛蒡栽培に特化した現代の耕作溝と判断した。

### (1) I区の調査

ほぼ全域から、耕作溝、柱穴、ピット、土坑、自然流路など多数の遺構を検出した。

#### ①中世~近世

近世では、4トレンチを中心に広がる耕作溝群や、南東端から検出した自然流路NR42埋没後に堆積した、にぶい黄褐色細砂(第13図第10層)を切る土坑S K 95・96・100を検出した。掘形検出面の標高は41.4m(地表下0.4m)を測る。また、調査地南西部は時期の判定ができない方形土坑がいくつか存在する。それらの埋土から縄文土器・土師器片の出土をみた。埋土がにぶい黄褐色極細砂(同図第7層)や、灰黄褐色粗砂(第8層)と酷似する状況から、近世遺構の可能性が高い。

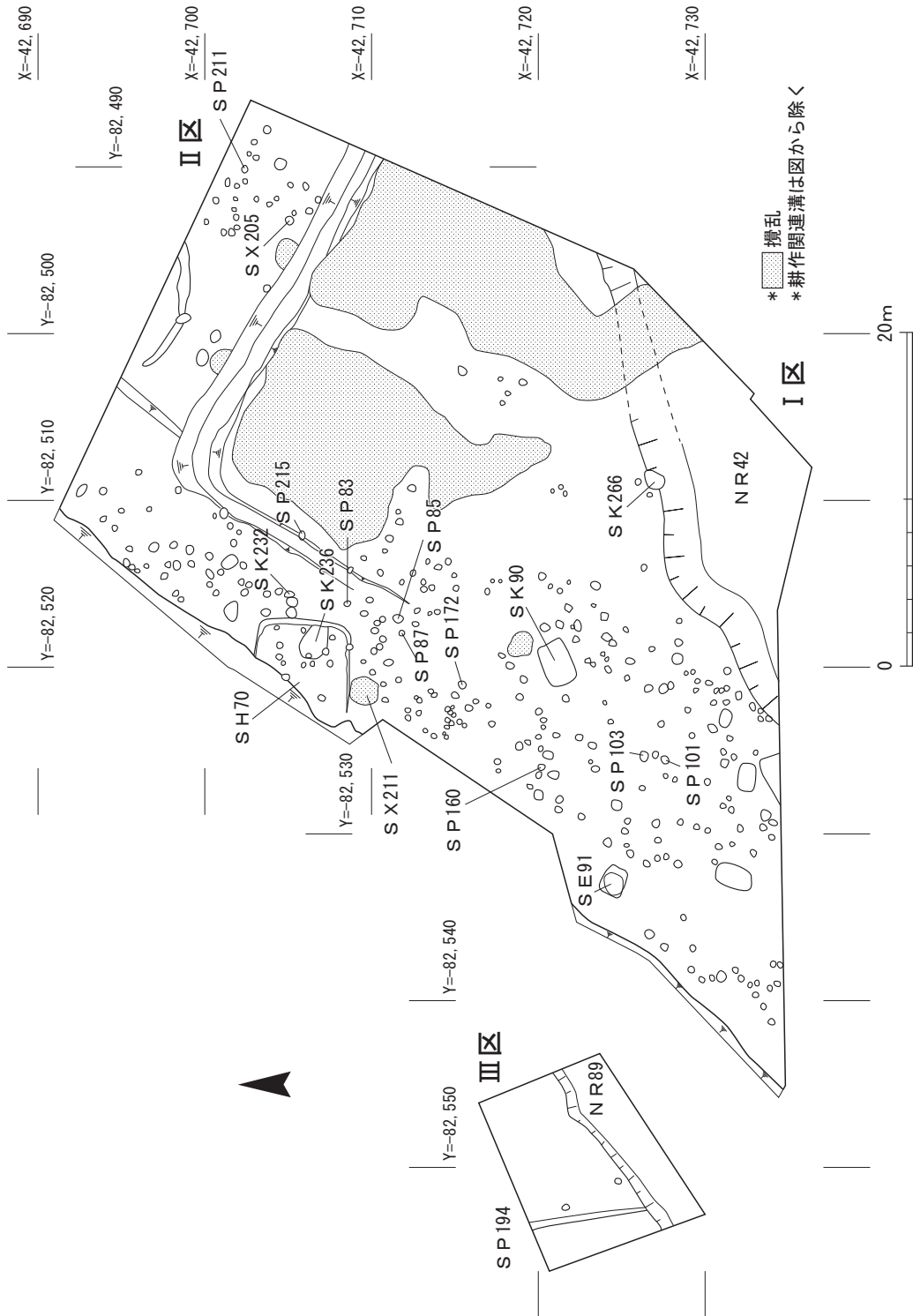
**土坑S K 95(第9・10図)** 調査地東端部から検出した。掘形は円形に近い隅丸方形を呈し、深さは0.35mを測る。底面は平坦であるが、西方向に向かってやや下がる。埋土中から弥生~近世土器の出土をみた。図化可能な土器として土師質の脚台(第16図28)が出土したが、混入遺物と判断する。

**土坑S K 96(第9図)** 調査地東端部から検出した。S E 95のやや南に位置し、東側は調査地外となる。掘形平面形は楕円形とみられる。全長1.0m、幅0.7m、深さ0.4m規模と推定する。埋土は褐灰色粗砂混じりの粘質細砂である。弥生土器・土師器とともに染付破片が出土した。

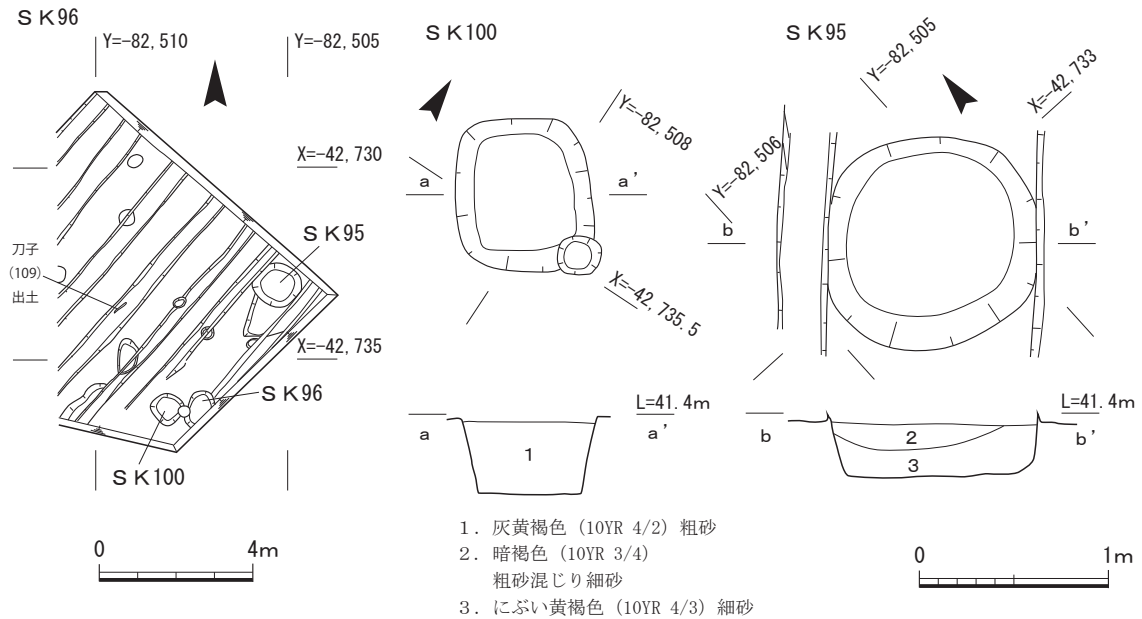
**土坑S K 100(第9・10図)** S K 96の西側に接して検出した方形堀形の土坑である。一辺0.8m、深さ0.4mを測る。埋土は石英粒(4~5mm大)を含む灰黄褐色粗砂であり、第10層とほぼ変わらない。弥生土器(第16図20・21)と土師器破片が出土したが混入遺物と判断する。

**井戸S E 91(第11図)** 南西部の斜面傾斜変換線付近から検出した、井戸枠が伴う井戸跡である。検出当初は一辺1.6~1.8m規模を測る方形土坑と判断したが、検出面の精査を行ったところ、方形掘形の埋土中央部に円形(直径1.1~1.2m)の土色変化を検出した。円形を呈する土色変化は井戸埋土であり、平面では粘質微砂・細砂(第1~4層)が同心円文様の堆積状況を示していた。この状況から、井戸には木製の円形井戸枠が設置されたとみられ、井戸枠外の方形区画埋土は裏込め土と判断した。

方形掘形埋土は土層観察畔を残し掘削を行った。方形掘形は検出面下約0.9m(標高40.6m)まで



第8図 I～III区検出遺構平面図(1/400)



第9図 I区南東平面図(S=1/200)

第10図 土坑S K 95・土坑S K 100平・断面図(S=1/20)

で止まり、それから下部は円形掘形に変化した。この間の井戸埋土は自然堆積の様相で、下層に比べ特に上端に近い層は厚みが薄い堆積を繰り返している。灰黄褐色細砂(第2層)～にぶい黄褐色粘質微砂(第5層)は0.05～0.2mの厚みを測り、弥生土器・土師器(第16図29～32)・須恵器・黒色土器(33)・瓦器・輸入陶磁器(34)が出土した。埋土中間層である8～12層は人為的に埋め戻されたようで、埋土に粘質砂や細砂ブロックが混じっている。下層部は、掘形壁面が大規模に抉られて崩落した状況がみられる。この崩落は木製井戸枠の腐朽に起因したものと判断する。井戸底面中央部には井戸枠より一回り小さい円柱状の窪みが存在する。集水桝として木製曲げ物が存在した可能性が高い。集水桝部の規模は直径約0.56m、深さ約0.25mを測る。集水桝の下端は標高39.0m付近のにぶい黄褐色粘土(第35層)に達して終わる。重機断ち割りの際にはこの粘土直上の褐色粗砂層(第32層)から一定量の湧水をみた。集水桝部に堆積した褐色粘質極細砂(第15層)と同シルト(第16層)は無遺物である。

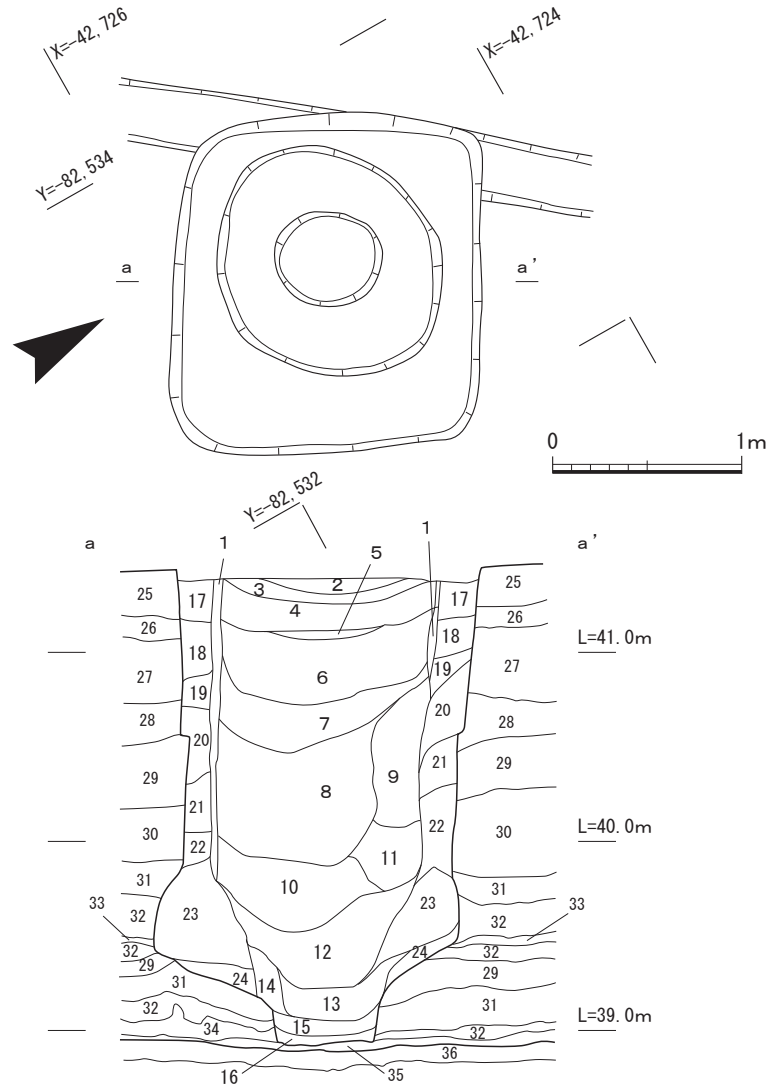
土坑S X 211 北東部の斜面近くで検出した円形土坑である。直径約1.6m、深さ0.2mを測る。底面は平らではなく凹凸が激しい。規模と形状から風倒木痕跡とみられる。埋土は灰黄褐色粗砂混じり細砂で土師器の出土をみた。

②古墳時代

土坑S K 90(第12図) I区の中央部で検出した長方形土坑である。長辺2.8m、短辺1.8m、深さ0.3mの規模を測る。埋葬施設の可能性もあり平面・畔断面で木棺痕跡の検証を行ったが、埋土に特段の変化は確認できない。なお、底面は平坦ではなく、緩やかな凹凸が認められた。埋土は2層に分かれ、第1層はにぶい黄褐色粗砂混じり細砂に灰黄褐色細砂がブロックで混じる。第2層は灰色粗砂混じり細砂で、縄文～弥生時代の土器片に混じって土師器の小破片が出土した。時代は古墳時代に属すると判断する。

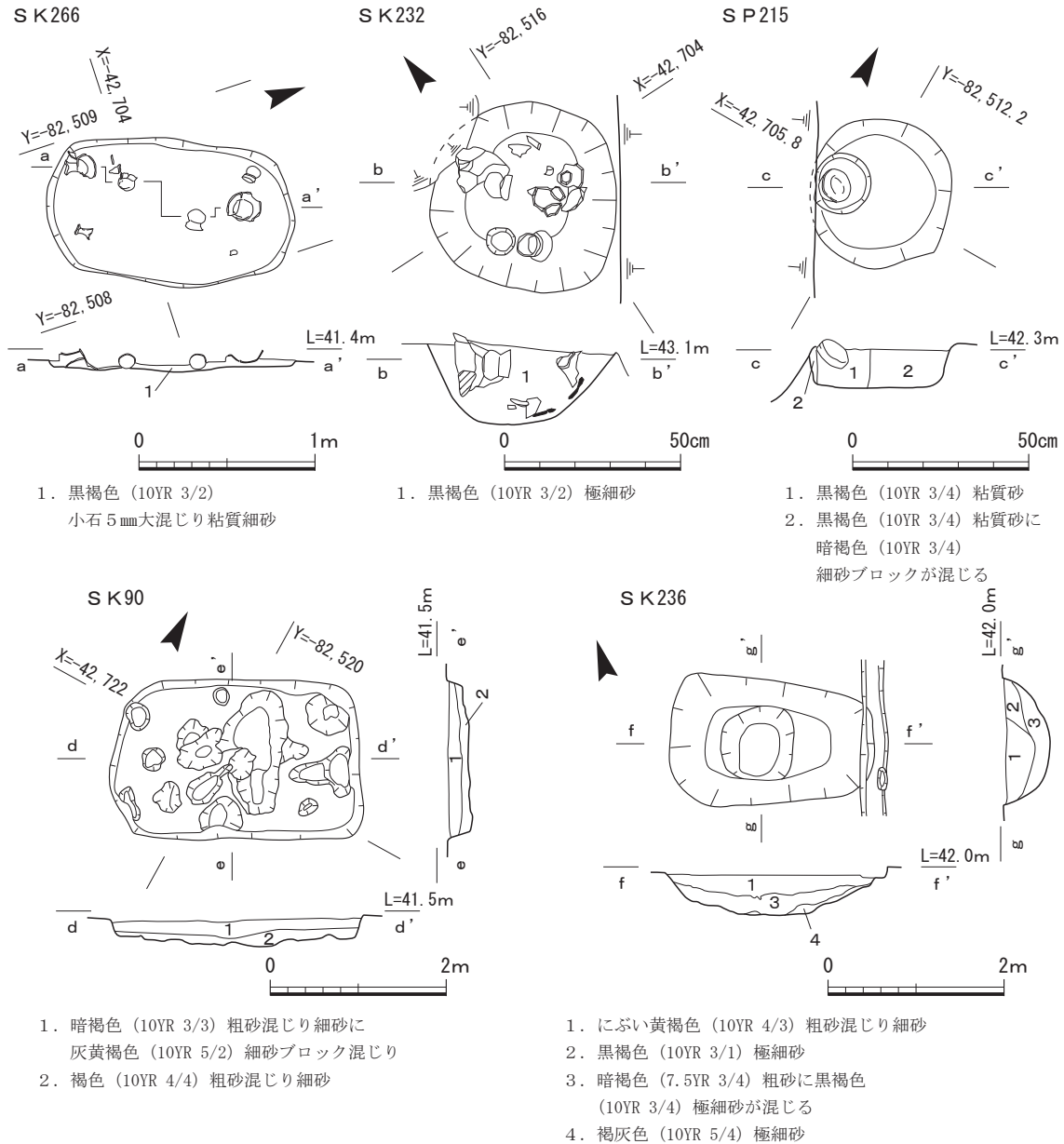
土坑S K 232(第12・16図) 掘形は円形ですり鉢状を呈し、直径0.55m×深さ0.43mの規模を

S E 91



- |   |   |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質微砂 (井戸枠痕)</li> <li>2. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 細砂</li> <li>3. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 細砂に浅黄橙色 (10YR 8/3) 細砂がブロックで混じる</li> <li>4. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘質細砂</li> <li>5. にぶい黄橙色 (10YR 7/3) 粘質微砂</li> <li>6. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 極細砂</li> <li>7. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 細砂ににぶい黄橙色 (10YR 5/3) 粘質砂が混じる</li> <li>8. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質細砂に浅黄橙色 (10YR 6/3) 細砂ブロックが混じる</li> <li>9. にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 粗砂 (2~3mm大)</li> <li>10. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細砂に灰黄褐色 (10YR 5/2) 微砂が混じる</li> <li>11. 8層の浅黄橙色細砂ブロックが細かい</li> <li>12. 浅黄褐色 (10YR 4/2) 粘質細砂ににぶい黄褐色 (10YR 6/3) 細砂がブロックで混じる</li> <li>13. 12層のにぶい黄褐色細砂が大きい</li> <li>14. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 極細砂</li> <li>15. 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質極細砂</li> <li>16. 褐灰色 (10YR 4/1) シルト</li> <li>17. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質土</li> <li>18. 17層の粘質が強い</li> <li>19. 17層に浅黄橙色 (10YR 8/3) 粗砂ブロックが混じる</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>20. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 粘質細砂</li> <li>21. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質細砂</li> <li>22. 褐色 (10YR 4/4) 粗砂混じり細砂</li> <li>23. 暗褐色 (10YR 3/3~3/4) 粗砂と細砂が混じる</li> <li>24. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質細砂</li> </ol> <p>以下 S E 91 外堆積土</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>25. にぶい黄褐色 (10YR 7/3) 粗砂に褐灰色 (10YR 5/1) 微砂 (木の根痕) が残る</li> <li>26. にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 粗砂 (3~5mm大)</li> <li>27. 浅黄橙色 (10YR 6/3) 粗砂と浅黄褐色 (10YR 6/2) 細砂のラミナ</li> <li>28. 褐灰色 (10YR 5/1) 粗砂ににぶい黄褐色 (10YR 7/3) 細砂が混じる</li> <li>29. 浅黄褐色 (10YR 8/3) 粗砂に黄褐色 (10YR 8/6) 細砂のラミナ</li> <li>30. 明黄褐色 (10YR 6/6) 粗砂と細砂のラミナ</li> <li>31. 30層の明度が高い</li> <li>32. 褐灰色 (10YR 6/1) 粗砂 (0.3~0.6mm大)</li> <li>33. 黒色 (10YR 2/1) 粘質微砂</li> <li>34. 灰白色 (10YR 7/1) 粗砂とにぶい黄褐色 (10YR 6/3) 粗砂のラミナ</li> <li>35. にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 粘土</li> <li>36. 黒褐色 (10YR 2/3) 粘質極細砂</li> </ol> |
|---|---|

第11図 井戸 S E 91平・断面図(S=1/40)



第12図 古墳・弥生時代検出遺構平・断面図

測る。埋土は黒褐色極細砂である。内部から厚みの薄い角礫1個と土師器の小型丸底壺2点(8・9)・高杯と甕破片が出土した。小型丸底壺はいずれも完形品である。小型丸底壺1点と土師器高杯は角礫とともに埋土上部から、もう1点の小型丸底壺は甕破片とともに底面付近から出土した。

土坑S K 266(第12・16図) II区南東部から検出した土坑である。掘形は楕円形を呈し、全長2.15m、幅1.3m、深さ0.15mを測る。埋土は暗褐色極細砂であり、底面から土師器の小型丸底壺3点(10~12)、高杯3点、甕破片が出土した。これら遺物は集中することなく、広く点在している。小型丸底壺3点のうち2点は完形品であったが、1点は口縁の一部を欠いている。高杯3点は全て破損状態で出土した。高杯のうち1点は土坑の南西隅にあり、ある程度の形を保ちながら横転状態にある。東側から出土した高杯は杯部のみ出土し、杯面を上に向ける。高杯脚部は杯か

ら離れた位置で出土した。完形品の小型丸底壺と破損した高杯の状況は、規模・形状が異なるが S K 232 との共通性が認められる。共に祭祀関連遺構の可能性が高い。

**柱穴 S P 101** I 区南東部から検出した柱穴である。円形掘形は直径 0.4m、深さ 0.3m を測る。にぶい黄褐色粗砂の掘形埋土の中央に、黒褐色粘質砂の柱痕跡が存在した。埋土内から縄文土器と土師器の破片が出土した。

**柱穴 S P 160** (第 8 図) I 区南東部から検出した柱穴である。崩れた方形掘形は一辺 0.5～0.6 m、深さ 0.3m の規模を測る。にぶい黄褐色粗砂の掘形埋土の中央に、黒褐色粘質砂の柱痕跡が存在した。底面は柱痕跡部分がやや窪む。弥生土器破片が出土した。

**柱穴 S P 215** (第 12・16 図) 直径 0.4m、深さ 0.15m の円形柱穴である。埋土は黒褐色粘質砂に暗褐色細砂ブロックが混じる。埋土の西側に偏って直径 0.16m の柱痕跡を検出した。柱跡の埋土は黒褐色粘質細砂である。柱痕跡埋土の上部、底面から 8 cm 離れた位置から完形の須恵器杯蓋 (35) が出土した。柱抜き取り穴に納めた祭祀遺物とみられる。

### ③縄文時代

自然河川 NR42 と縄文時代の遺物だけを含むピットを検出した。このうちピットは主だった遺物が出土したものを抽出して報告する。

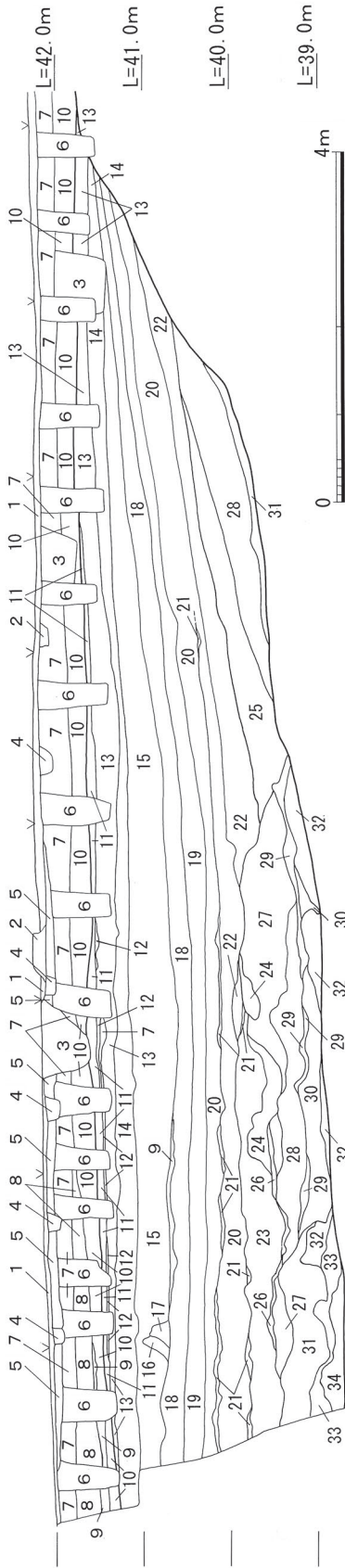
**自然河川 NR42** (第 6・13・17・19 図) 調査地南西部を北東から南西に流れた流路跡である。尾根東側谷部を南流する田久谷川の存在から、NR42 は同河川の旧流路跡と判断される。

I～II 区にかけて西岸部を検出したが、東岸は調査地外となる。検出規模は全長約 30m、検出幅 9.0m を測る。深さは西岸の遺構面 (標高 41.4m) から約 2.6m まで掘削したが、河川の底に達してはいないと判断する。しかし、掘削を進める過程でトレンチ南壁面が崩れる兆候が発生した。作業空間も狭く壁面崩壊の危険性が高い状況から、調査の安全面を考慮し、さらなる掘削調査は中止した。

河川堆積層の上層は、中世～近世遺物を包含するにぶい黄褐色細砂 (第 10 層) であり、西側遺構面上にも広がっている。標高 41.0～41.2m 付近の黄褐色細砂 (第 13 層) は、NR42 がほぼ埋没する堆積層である。縄文時代遺物 (土器・石器) に混じって弥生時代末～古墳時代前期の土器の出土をみている。下には灰白色のバイラン土由来の粗砂 (第 14・15 層) が均質に堆積し、ほぼ遺物を含まない。ここでは河川の流速・流量が強まった時期の河川堆積とみられる。

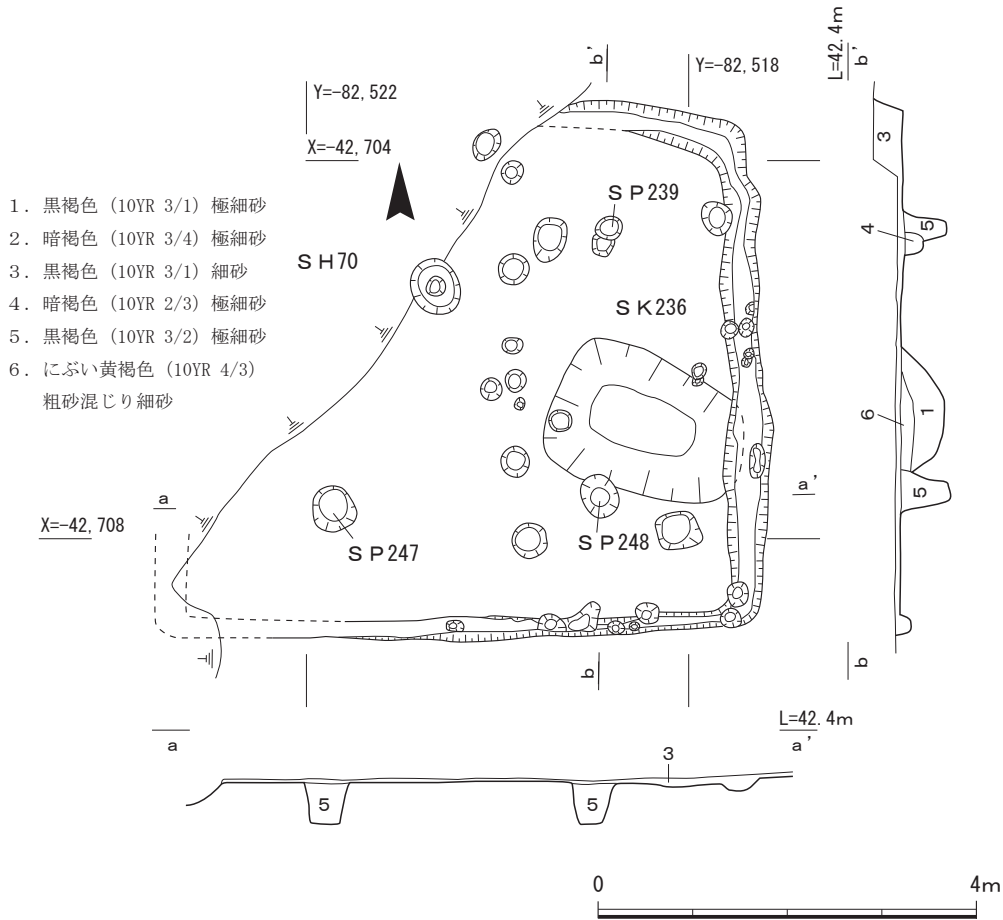
第 15 層の下には厚さ 0.2m 前後の黒褐色粗砂混じり粘質細砂 (第 18 層) が存在する。多くの縄文土器破片 (36～61)・石器 (120) とともに磨消し縄文の破片 (第 17 図 42・49・53 等) が出土した。第 18 層以下は石英粒 (3～5 mm 大) を主体としたバイラン土がラミナ状に堆積 (第 19～25 層) する。さらに標高 39.5m 以下には、明褐色～赤褐色酸化鉄が付着したバイラン土がラミナ状に堆積 (第 26～33 層) する。底面付近のにぶい褐色粗砂 (第 32 層) は酸化鉄の付着が著しく、土器破片 (62～83) も多数出土した。深鉢底部 (84) は第 29 層から出土した。

**ピット S P 83** (第 8・19 図) S H 70 の東で検出した円形ピットである。直径 0.3m、深さ 0.2m を測る。埋土は黒褐色粘質砂で縄文土器破片 (86～89) が出土した。



- |   |  |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土 (やや粘性強い)</li> <li>2. 1 よりやや硬質が強い</li> <li>3. 褐灰色 (10YR 5/1) 粗砂質土 (3mm大の石英粒含む)</li> <li>4. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 粘質細砂</li> <li>5. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質細砂 (小石を含む)</li> <li>6. 褐色 (10YR 4/6) 粘質細砂</li> <li>7. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 極細砂</li> <li>8. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粗砂 (2~3mm大)</li> <li>9. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質微砂</li> <li>10. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細砂</li> <li>11. 黒褐色 (10YR 7.5=3/2)</li> <li>12. 褐灰色 (10YR 6/1) 細砂</li> <li>13. 黄褐色 (10YR 5/6) 細砂</li> <li>14. 灰白色 (2.5Y 8/1) 粗砂 (3~5mm大)</li> <li>15. 灰白色 (10YR 8/1) 粗砂 (3~5mm大)</li> <li>16. 褐灰色 (10YR 5/1) 粘質粗砂</li> <li>17. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘質粗砂</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>18. 黒褐色 (10YR 2/2) 粗砂混じり粘質細砂</li> <li>19. 黒褐色 (10YR 2/3) 粗砂ににぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粗砂が混じる</li> <li>20. 褐灰色 (10YR 6/1) 粗砂と灰白色 (10YR 7/1) 細砂のラミナ</li> <li>21. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘質細砂</li> <li>22. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 細砂と粘質細砂のラミナ</li> <li>23. 褐灰色 (10YR 5/1) 粗砂 (2~3mm大) と粘質細砂のラミナ</li> <li>24. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 細砂と23層のラミナ</li> <li>25. 暗褐色 (7.5YR 3/3) 粗砂混じり細砂</li> <li>26. 明褐色 (7.5YR 5/6) 酸化鉄含む粗砂</li> <li>27. 明赤褐色 (5YR 5/6) 酸化鉄含む粗砂 (酸化が濃い)</li> <li>28. にぶい橙色 (5YR 7/4) 酸化鉄含む粗砂</li> <li>29. 赤褐色 (5YR 4/6) 酸化鉄含む粗砂 (酸化が濃い)</li> <li>30. 28層より酸化鉄の付着が厚い (酸化が濃い)</li> <li>31. にぶい橙色 (7.5YR 7/4) 粗砂</li> <li>32. にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 酸化鉄を含む粗砂ラミナ</li> <li>33. 明赤褐色 (5YR 3/6) 酸化鉄含む粗砂ラミナ</li> <li>34. 赤褐色 (2.5YR 4/6) 酸化鉄含む粗砂ラミナ</li> </ol> |
|---|--|

第13図 自然流路NR42南壁面断面図 (S=1/80)



第14図 竪穴建物 S H70平・断面図(S=1/80)

ピット S P 87 (第 8・18図) S H70の南から検出した円形ピットである。直径0.3m、深さ0.25mを測る。埋土は暗褐色細砂で縄文土器破片(91)が出土した。

ピット S P 103 (第 8・18図) S E 91の東側やや離れて検出した楕円形ピットである。南北長径0.4m、幅0.3m、深さ0.25mを測る。埋土は暗褐色細砂で縄文土器(90・94)が出土した。

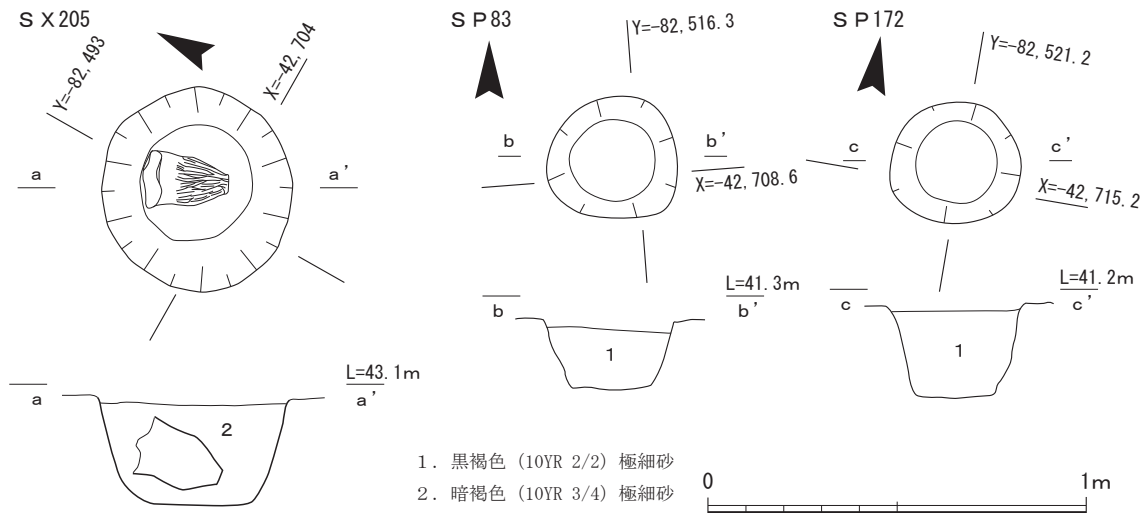
ピット S P 172 (第 8・18図) S K 90の西から検出した円形ピットである。直径0.35m、深さ0.25mを測る。埋土は黒褐色極細砂で縄文土器破片(92・93・96)が出土した。

## (2) II 区の調査

### ① 弥生時代～古墳時代

竪穴建物 S H70 (第 8・14・16・19図) 調査地西端部に位置し、尾根斜面の浸食で北東部が失われている。平面形は南北にやや長い方形を呈している。長辺約6.5m(推定)、短辺約5.7m、壁高は最大で0.3mを測る。床面の主柱穴は3か所(S P 239・247・248)を検出した。床の外周に浅い周壁溝が巡る。周壁溝は幅0.2～0.5m、深さ0.05～0.1mを測る。建物内埋土は黒褐色細砂であり、縄文時代の土器・石製品(113～115)や弥生土器に混じって、古墳時代前期の土器(1～7)や鉄製品(10)が出土した。

土坑 S K 236 (第12図) S H70の床面東部に位置し、周壁溝に切られている。平面形は楕円形



第15図 縄文時代遺構平・断面図(S=1/20)

に近い隅丸長方形を呈する。全長2.3m、幅1.2~1.5m、深さは最深部で0.46mを測る。底面は平坦でなく、周囲の壁面から中央にかけて緩やかな傾斜面をもち、船底状を呈している。埋土は4層に分かれる上層の南部側はにぶい黄褐色粗砂混じり細砂(第1層)、北半側は黒褐色極細砂(第2層)である。下層は褐色極細砂がほぼ全面を覆い、東側の底面と斜面の一部に暗褐色粗砂に黒褐色極細砂が混じる(第3層)が薄くみられる。

出土遺物は極僅かで、時期を特定する土器はみられない。S H 70に先行する遺構である。

## ②縄文時代

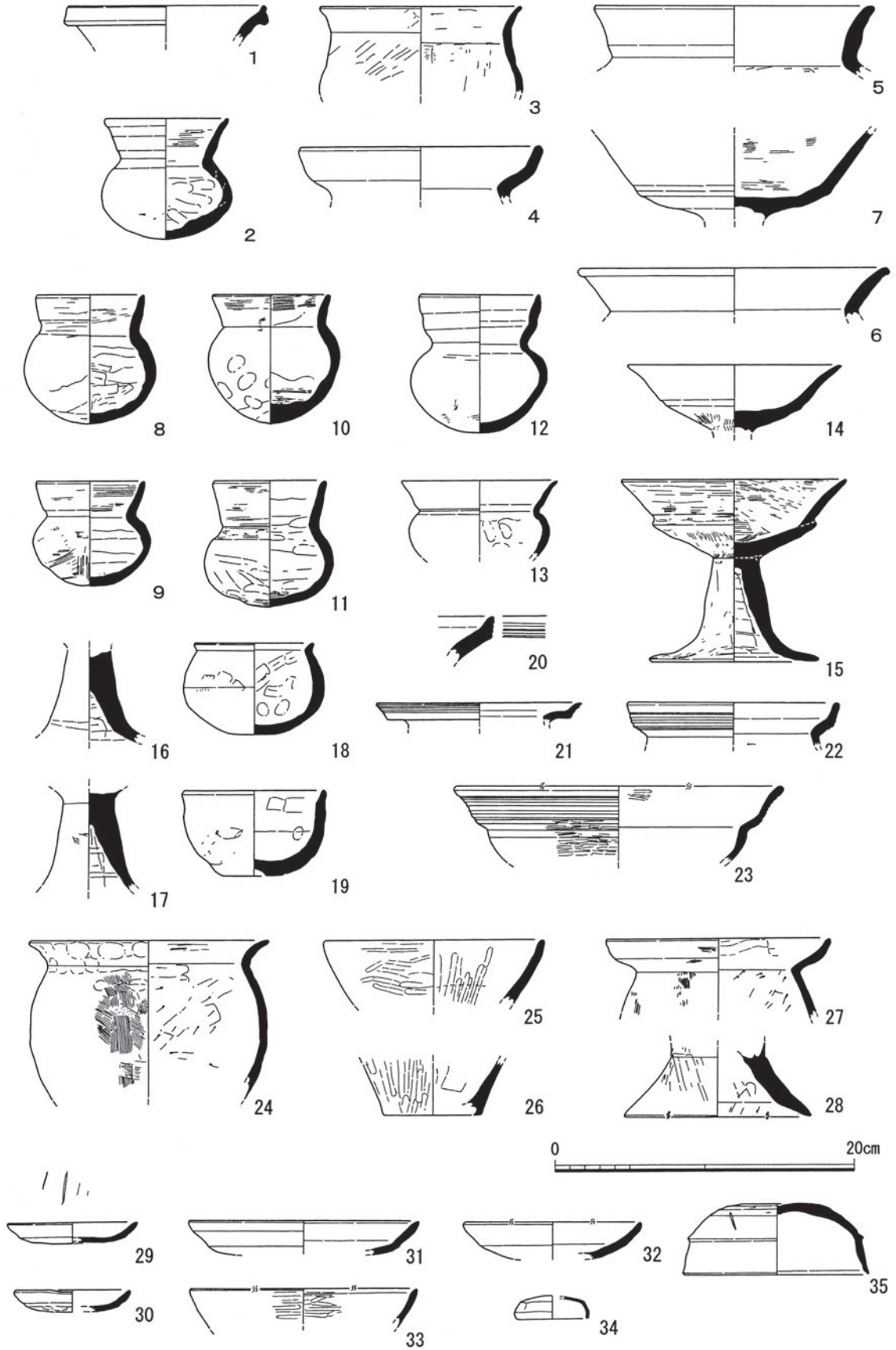
Ⅱ区の北部は後世の削平の影響が少ないようで、北から南に緩やかに下がる遺構面から多くの遺構を検出した。その多くは円形ピットであり、遺物が伴うものは僅かである。

**埋納遺構 S X 205 (第8・15・18図)** Ⅱ区の東部で検出した深鉢埋納遺構である。掘形は円形で直径0.56m×深さ0.28mを測る。埋土は暗褐色極細砂で、坑内には完形の深鉢(85)が納められていた。深鉢は口径6.2cm、器高21.1cmを測る。深鉢は底部をピットの中央付近に置き、北側側面に倒れた状態で出土した。内部には周囲と変化のない埋土が充満していた。深鉢以外の遺物の出土はみられない。

**ピット S P 211 (第8・18図)** S X 205の北から検出した円形ピットである。直径0.35m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色極細砂で縄文土器破片(95)が出土した。

## (3)Ⅲ区の調査

尾根西側谷部の平地に5トレンチ(第8図)を設定し、尾根裾を流れる自然流路NR89を検出していた。拡張調査を行ったところ新たに素掘り溝とピット2基を検出した。素掘り溝 S D 194は南北6.9m、幅0.3m、深さ0.05~0.15mである。埋土は褐灰色粘質砂である。出土遺物は無いが、埋土から時期は近・現代とみられる。単独検出である状況からⅡ区の耕作溝群とは異なり、耕作地を分ける境界溝とみられる。南に拡張検出したNR89では、埋土中から染付と棧瓦の破片が出土した。



第16図 新町遺跡出土遺物 1

## 2) 出土遺物(第16～19図)

I区とII区から縄文時代前期～中・近世の土器を中心に、少数の石器・鉄器遺物が出土した。検出遺構と出土遺物状況から、新町遺跡の主要を占める時代は、縄文(前期・後期)・弥生(後期)～古墳(前期・後期)・中世(鎌倉)の3時代である。

第16図は弥生時代～中世に属する遺構に伴う土器を中心とし、包含層出土遺物のなかで特徴的なものを図化した。

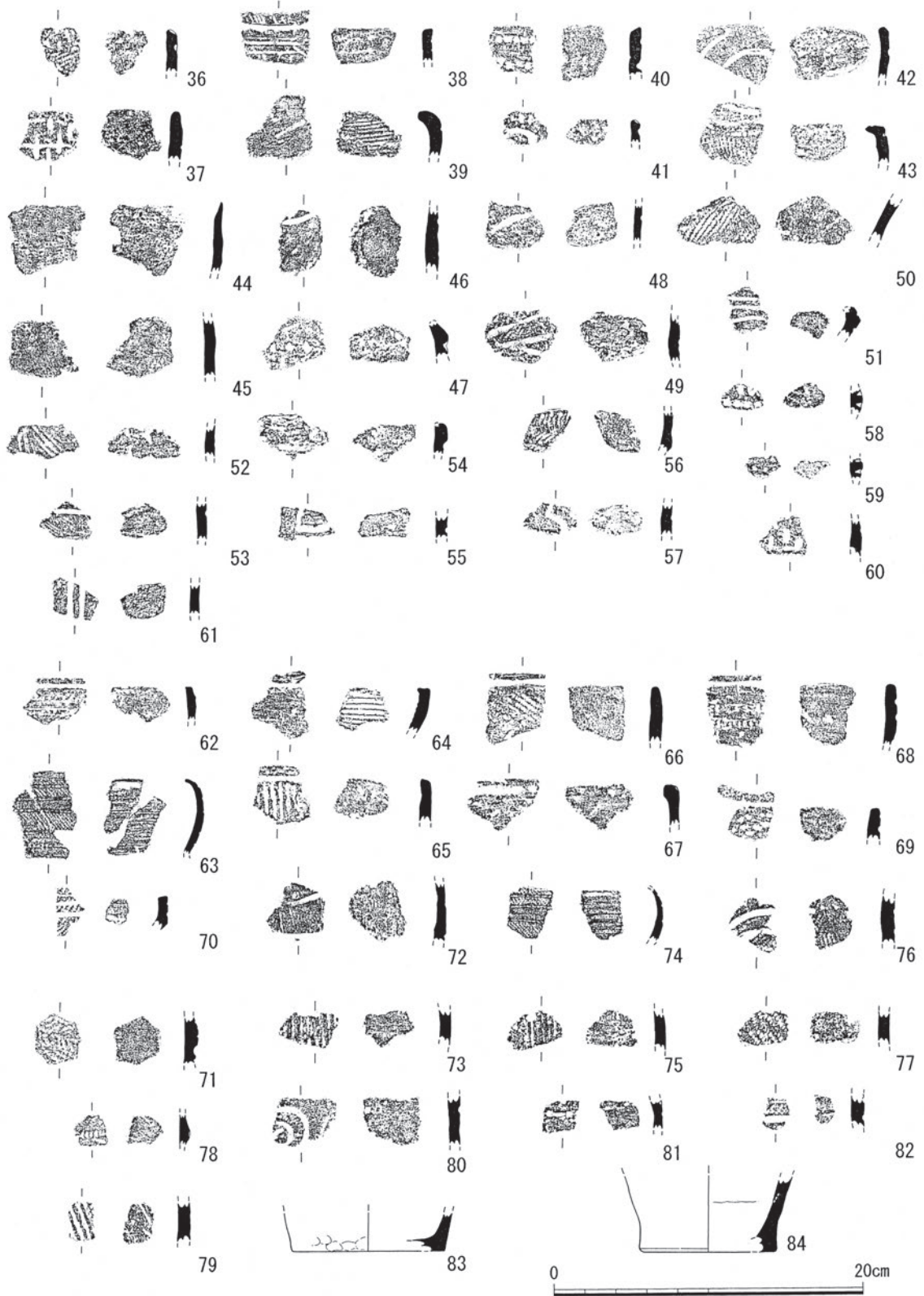
1～7は、竪穴建物SH70の埋土から出土した古墳時代前期の壺・甕・高杯である。また、縄文時代の打製石鏃(121)も埋土中から出土した。8・9は土坑SK232出土の小型丸底壺である。10～12・14～17は、土坑SK266から出土した小型丸底壺と高杯である。13の小型丸底壺、22・23の疑凹線文甕と高杯は、4トレンチ遺構検出作業で出土した。18～21は、I区南西部検出の個別のピットから出土した、22～28は4トレンチ包含層出土の弥生土器である。29～34はSE91の第6層から出土した。29～32は土師器皿、33は黒色土器椀である。34は景德鎮製の白磁製合子蓋である。35はSP215の柱痕跡埋土出土の須恵器杯蓋である。

第17図はNR42から出土した縄文土器破片である。このうち36～63が第18層の出土である。64～83は第32層、84が第29層出土で後期に属するものである。外面の文様には縄文・無文・条痕文・沈線文・爪形文・刺突文・刻目文・磨消縄文など、多様な文様が施されている。これらは、中期中葉の船元IV式(70)を除き、概ね中期末の平CⅢ式・平KI式・北白川C式から後期初頭の中津式に比定される。

第18図はNR42以外の遺構と包含層出土の縄文土器である。85はSX205から出土した中津式深鉢(後期初頭)で完形品である。緩やかな波状口縁の波頂は4か所である。底部は平底で、緩やかに外反しながら立ち上がる砲弾形の体部は中央でやや内湾し、底から上方3分の2付近から口縁にかけて緩やかに外反する。外面に明瞭な炭化物は確認できないが、内部の下半には暗灰黄色の変色(炭化物付着痕)が認められる。

86～96はI～II区検出のピットから出土した縄文土器である。86～89はSP83、91はSP87、95はSP211から出土した磨消縄文土器である。100～108はI区の包含層出土である。特に99は外面に粗い楕円形文を施した土器であり、縄文時代早期の下菅生B式に比定される。

第19図は遺構と遺物包含層から出土した土器以外の鉄器(109～111)・石器類(112～125)である。109はNR42上面を切り込む耕作溝群の埋土から出土した大型の鉄製刀子である。全長14.1cm、刃渡り9.5cm、厚さ0.6cmを測る。110・111は小型の刀子である。110はII区SH70から、111はI区SP109から出土した。111は包含層遺物の可能性が高い。112はNR42第22層出土の緑色凝灰岩の剥片である。113はSH70から出土した。113は先端部と基部を欠損した磨製石斧、114はサヌカイトの剥片、115は軽石である。116・117は包含層から出土した磨製石斧破片と判断する。ともに前後両端を欠損する。116は側面に丁寧な打撃を加え、細かな剥離痕が残る。117は4トレンチ包含層出土である。定角式磨製石斧の再加工品とみられる。前後の破断面を細かい打撃で凹凸をつぶしている。118・119は礫石錘である。扁平な川原石の長軸両端を打ち欠く。118はII区、119



第17図 新町遺跡出土遺物 2

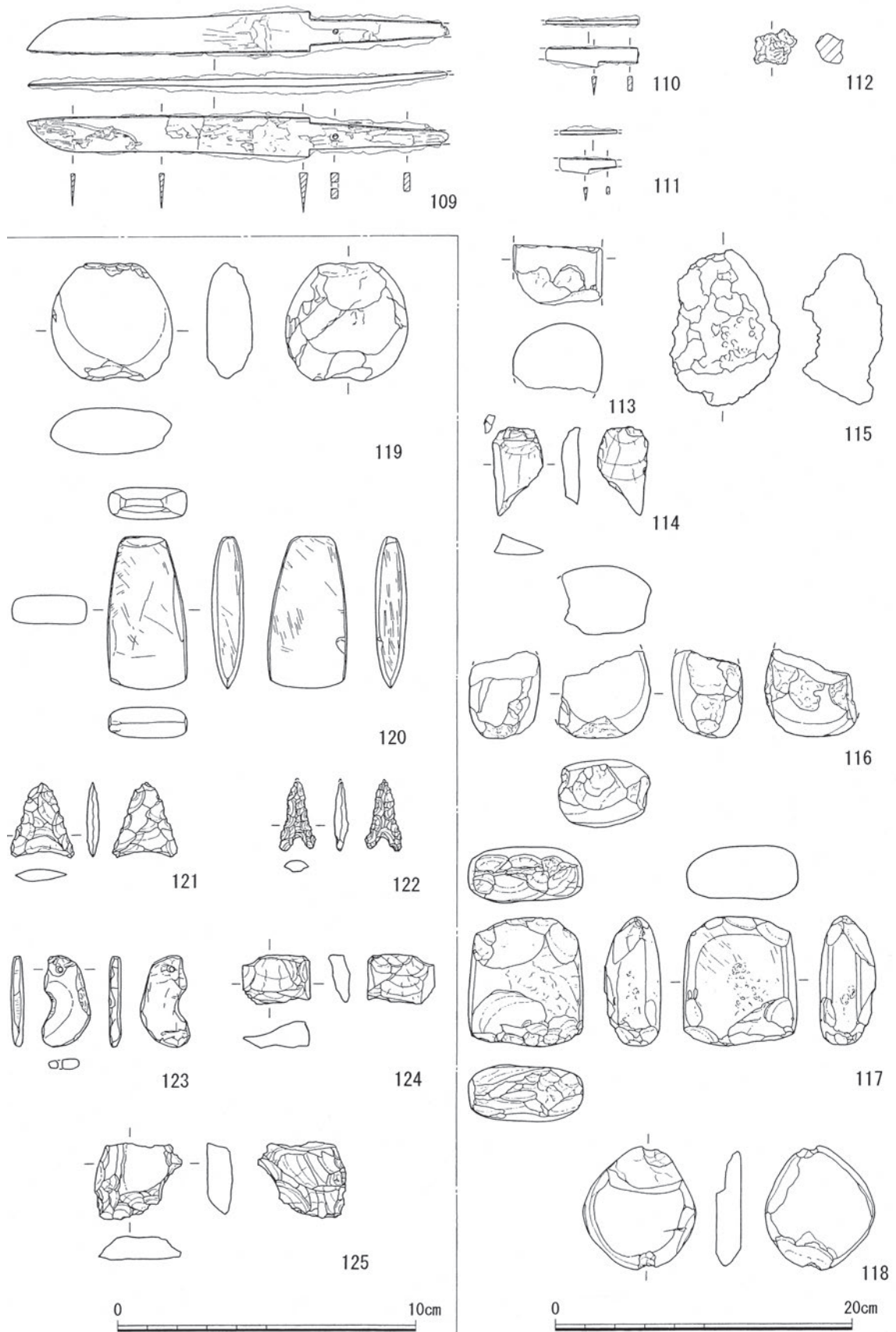


第18図 新町遺跡出土遺物 3

は3トレンチの包含層から出土した。120はNR42第18層から出土した小型の定角式磨製石斧である。121・122は打製石鏃であり、121がS H70、122は2トレンチ包含層から出土した。123は滑石製勾玉で、2トレンチ包含層出土である。124・125は玉や石器などの素材にもなる緑色凝灰岩とチャートの剥片である。124はS E91第4層、125が4トレンチ包含層の出土である。

#### 4. まとめ

新町遺跡は弥生時代中期～中世にかけての集落遺跡と認識されていた。今回の調査では、遺物包含層出土の押型文土器破片1点のみの出土であるが、新町遺跡の年代が縄文時代早期にまで遡る成果を得た。縄文時代の遺構としては、土器埋納土坑S X205と自然河川跡NR42を検出した。これまで丹後半島地域では縄文時代土器埋納例として平遺跡(晩期)1例であったが、新町遺跡S X205が2例目となった。S X205の埋納に使用した完形品の深鉢は、後期初頭の年代観を示す。



第19図 新町遺跡出土遺物 4 (鉄製品、石器・石製品)

近畿北部における縄文時代後期の土器埋納例として、貴重な調査成果を得ることができた。

NR42の河川幅は不明ながら右岸から東へ約8m分を検出した。堆積土の第18層は緩やかな流れを示す堆積層である。第18層は特に中央部が弧状に深く、両岸に向かって次第に高さを増していく。この中央部から右岸までの距離は約7mを測る。単純に東方向に同距離を求めれば、NR42の河川幅は14m前後と推測される。河川の深さは西岸から2.6mまで調査したが底には至らず、出土遺物も縄文後期でとどまる。今後、周辺部での調査の機会が得られれば、NR42の時代がさらに遡る可能性が高い。

NR42は新町遺跡の東を南流する田久谷川の旧流路跡と判断される。NR42の西岸部標高は41.4mである。隣接する南側谷部水田の標高は38.6mで2.8mの比高差である。縄文時代のNR42が完全に埋没する状況が確認できたことは、当時の遺跡周辺は尾根や谷など起伏に富んだ環境ではないことを物語る。おそらく周辺部は平坦に近い峰山盆地に含まれ遺跡範囲も広がっていた可能性もある。

弥生時代後期～古墳時代では、竪穴建物S H70とS K232・266など前期の遺構を検出した。縄文時代以降、田久谷川は次第に東に流れを移し、新町遺跡集落は尾根筋上に残り中世頃までは生活が営まれていたとみられる。尾根上は後世の削平が著しく、他の遺構も存在したとみられるが多数の遺構が失われたものと判断する。時期不明の柱穴・ピットの存在は削平を免れた遺構と判断される。ただし遺構の分布密度が高く、個々の遺構分布に規則性・法則性がみられず、特定の建物の復元には至っていない。土坑S K232とS K266は完形品の小型丸底壺と、破片化した高杯が複数存在する共通性がみて取れる。他の多くの遺構の中であって異質なこの2基の土坑は、集落内の何らかの祭祀に関連した遺構と判断されるが詳細は不明である。また、柱穴S P215は柱痕跡の埋土内から完形の須恵器杯蓋(6世紀)が単独出土した。柱抜き取り穴からの出土であり、土器を納める行為を意識した祭祀が行われた可能性が高い。

中世では井戸S E91の出土をみた。時代は鎌倉期と判断するが、他の同時期遺構が確認できない。集落に伴う井戸とみられる。

新町遺跡の位置する尾根南側は、幅広で緩やかな傾斜が峰山盆地に向かって広がる。盆地と周

付表1 新町遺跡出土土器観察表

( )現存値、- 計測不能

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
1	土師器	壺口縁	I・II区	SH70	13	(2.5)	-	6分の1	にぶい黄褐色 10YR6/4		
2	土師器	小型丸底壺	I・II区	SH70	8.1	8.2	-	5/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	内外面：ナデ	
3	弥生土器	甕	I・II区	SH70	13.4	(6.1)	-	6分の1	にぶい橙色 7.5YR7/4	体部外面タタキ、体部内面ヘラケズリ	
4	弥生土器	甕	I・II区	SH70	16.0	3.7	-	1/4	にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁部ヨコナデ	複合口縁
5	弥生土器	甕	I・II区	SH70	18.5	(3.4)	-	6分の1	朝黄色 2.5Y7/3	口縁部ヨコナデ	
6	弥生土器	甕	I・II区	SH70	20.4	(3.4)	-	6分の1	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁部ヨコナデ	
7	土師器	高杯	I・II区	SH70	18.2		(6.1)	1/4	明赤褐色 2.5YR5/6		丹塗りか

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
8	土師器	小型丸底壺	I 区	SP232	7.6	8.7	—	完存	明褐色 7.5YR5/6	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	粘土紐整形痕
9	土師器	小型丸底壺	I 区	SP232	7.1	7.1	—	完存	にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ	
10	土師器	小型丸底壺	I 区	SK266	7.6	8.7	—	完存	にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ、体部外面ユビオサエ	
11	土師器	小型丸底壺	I 区	SK266	7.4	8.6	—	11/12	にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	外面にユビオサエ
12	土師器	小型丸底壺	I 区	SK266	7.9	9.3	—	完存	橙色 7.5YR6/6	体部外面ハケ後ナデ	複合口縁
13	土師器	小型丸底壺	I 区	包含層	10.3	(5.2)	—	1/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ユビオサエ・ナデ	
14	土師器	高杯	I 区	SK266	14.2	(4.6)	—	5/6	橙色 5YR6/6	杯部外面ハケ	
15	土師器	高杯	I 区	SK266	14.9	12.3	11.0	1/3	にぶい黄橙色 10YR6/4	外面ハケ後ナデ、内面ナデ	
16	土師器	高杯	I 区	SK266	—	(6.7)	—	—	にぶい橙色 7.5YR5/4	外面ナデ、内面ヘラケズリ	脚部
17	土師器	高杯	I 区	SK266	—	(5.7)	—	—	灰黄褐色 10YR4・2	外面ナデ、内面ヘラケズリ	脚部
18	土師器	鉢	I 区	SP188	7.8	6.2	2.9	1/4	にぶい橙色 7.5YR6/4	内外面ケズリ後ナデ	凹底
19	土師器	鉢	I 区	SP188	9.3	5.8	3.9	1/3	にぶい橙色 7.5YR6/4	内外面ナデ	
20	弥生土器	甕	I 区	SP160	—	(3.6)	—	1/12 以下	にぶい褐 7.5YR6/3	口縁部擬凹線文	複合口縁
21	弥生土器	甕	I 区	包含層	13.9	(3.6)	—	1/12	褐灰色 7.5YR4/1	口縁部擬凹線文	複合口縁
22	弥生土器	甕	I 区	SK100	13.6	(1.6)	—	1/12	にぶい褐 7.5YR7/3	口縁部下端擬凹線文	
23	弥生土器	高杯	I 区	包含層	21.6	(5.2)	—	1/12 以下	にぶい赤橙色 5YR4/4	外面ヘラミガキ後口縁部擬凹線文縁、内面ゲラミガキ	
24	弥生土器	甕	I 区	包含層	15.5	(10.8)	—	1/3	にぶい褐 7.5YR6/3	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ	
25	弥生土器	鉢	I 区	包含層	14.6	(4.4)	—	1/12 以下	にぶい褐 7.5YR5/4	内外面ヘラミガキ	
26	弥生土器	壺	I 区	包含層	—	(5.2)	—	1/12	にぶい黄橙色 10YR7/3	外面ハケ後ミガキ、内面ナデ	底部
27	弥生土器	甕	I 区	SH70 埋土	15.8	4.9	—	6分の1	にぶい褐 7.5YR6/3	体部外面タタキ、内面ヘラケズリ	
28	弥生土器	(脚部)	I 区	SK95	—	(6.2)	12.4	1/12 以下	にぶい黄褐色 10YR6/	外：ヘラケズリ・端部回転ナデ、内：ヘラケズリ・ナデ	
29	土師器	皿	I 区	SE91	8.6	1.4	5.1	1/4	にぶい褐 7.5YR7/4	口縁部ヨコナデ	
30	土師器	皿	I 区	SE91	7.6	1.5	—	1/4	にぶい橙 5YR7/4	口縁部ヨコナデ、底部外面ユビオサエ未調整	
31	土師器	皿	I 区	SE91	15.2	2.3	—	6分の1	橙色 7.5YR7/6	口縁：ヨコナデ	
32	土師器	皿	I 区	SE91	(11.6)	(2.7)	—	1/12 以下	にぶい褐 7.5YR7/4	口縁部回転ナデ、見込みナデ	
33	黒色土器	椀	I 区	SE91	(15.0)	(2.7)	—	1/12 以下	外：浅黄褐色 .5YR8/3 内：黒色 N1.5/0	内外面ヘラミガキ	
34	白磁	合子蓋	I 区	SE91 第6層	4.8 ~ 5.0	1.6	—	1/3	外：明緑灰色 7.5GY8/0 内：灰白色 5Y8/1	型作り。外：側面は多角形に面取り。外面に施釉	
35	須恵器	杯蓋	II 区	SP215	12.3	4.8	—	一部欠	灰色 5Y5/	天井部外面回転ヘラケズリ	

付表2 新町遺跡出土縄文土器観察表

( )現存値、- 計測不能

番号	出土地	器種	径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
36	NR42 第18層	深鉢	-	(2.8)	小破片	内・外：灰白色 7.5YR8/2	(やや粗)径1~2mmの白色・半透明・茶色の粒を含む	外：縄文	
37	NR42 第18層	深鉢口縁	-	(3.2)	小破片	(内)灰白色 10YR8/2 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	(やや粗)径1~2mmの白色粒半透明の粒を含む	水平口縁深鉢 外：口縁文様帯に2条の沈線、沈線上に縦長の交互刺突文を規則的に施す	平CⅢ式・KⅠ式か
38	NR42 第18層	深鉢口縁	-	(3.0)	小破片	内・外：灰白色 7.5YR7/1	(やや粗)径1~2mmの白色・半透明・茶色の粒を含む	口縁端：細い浅い沈線 外：ナデ	
39	NR42 第18層	深鉢口縁	-	(3.0)	小破片	内・外：灰白色 10YR9/2	(やや粗)径1~2mm大の白色・半透明の粒を含む	外：無文 内：条痕文調整	
40	NR42 第18層	深鉢口縁	-	(3.1)	小破片	内・外：浅黄橙 10YR8/4	(やや粗)	外：太い沈線文の中に刺突文	
41	NR42 第18層	深鉢	-	(1.5)	小破片	内：浅黄橙色 10YR7/1 外：にぶい橙色 5YR7/4	(やや粗)径0.5~2mm以下の白色・半透明の粒を含む	外：太い沈線文と縦長の刺突文	
42	NR42 第18層	深鉢	-	(3.5)	小破片	内：灰白色 7.5YR8/2 外：灰黄褐色 7.5YR6/1	(やや粗)径0.5~2mm以下の白色・半透明の粒を含む	外：磨消縄文	
43	NR42 第18層	深鉢口縁	-	(2.1)	小破片	内外：明褐灰色 7.5YR7/2	(やや粗)径1~3mm以下の白色・半透明の粒を含む	口縁端に太い沈線文 外：縄文地に沈線文、沈線内に刺突文	
44	NR42 第18層	深鉢	-	(4.4)	小破片	内：明赤褐色 5YR5/6 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	(粗)径1~2.5mmの白色・半透明の粒を多く含む	外：無文	
45	NR42 第18層	深鉢	-	(4.0)	小破片	内：白灰色 7.5YR8/2 外浅黄橙色 7.5YR8/3	(粗)径1~2.5mmの白色・半透明の粒を多く含む	外：無文	
46	NR42 第18層	深鉢	-	(4.4)	小破片	内・外：にぶい橙色 7.5YR7/3	(粗)径1~2mmの白色・半透明・茶色の粒を含む	外：太い沈線文内に刺突文	
47	NR42 第18層	深鉢	-	(2.6)	小破片	内：灰白色 10YR8/ 外：灰白色 7.5YR9/2	(粗)1.5mm以下の白色・半透明の粒を多く含む	外：太い沈線文内に刺突文	
48	NR42 第18層	深鉢	-	(2.4)	小破片	内：灰白色 7.5YR8/2 外：灰黄褐色 7.5YR6/1	(やや粗)径1~3mm以下の白色・半透明の粒を含む	外：太い曲線の沈線文	
49	NR42 第18層	深鉢	-	(3.2)	小破片	内・外：浅黄橙色 7.5YR8/3	(粗)1~2mmの白色粒・1~5mm半透明の粒を多く含む	外：縄文地に磨消縄文	
50	NR42 第18層	深鉢	-	(3.0)	小破片	(内)灰白色 10YR8/2 外：にぶい褐色 7.5YR6/3	(やや粗)径1mm程の白色・半透明の粒を含む	外：縄文	
51	NR42 第18層	深鉢口縁	-	(2.0)	小破片	内・外：剥灰色 10YR8/2	(粗)1.5mm以下の白色・半透明の粒を多く含む	外：太い沈線文	
52	NR42 第18層	深鉢	-	(2.1)	小破片	内・外：浅黄橙色 7.5YR8/3 外：浅黄褐色 7.5YR8/3	(粗)1~2mm大の白色粒・半透明粒、1mm以下雲母をを多く含む	外：貝殻条痕文	
53	NR42 第18層	深鉢口縁	-	(2.6)	小破片	内：褐灰色 7.5YR5/1 外：灰白色 10YR7/1	(やや粗)径1mm大の白色・半透明の粒を含む	外：磨消縄文	

番号	出土地	器種	径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色 調	胎 土	調 整	備考
54	NR42 第 18 層	深鉢	—	(2.1)	小破片	内：灰白色 10YR7/1 外： にぶい橙褐色 5YR7/4	(やや粗)径1mm 大 の白色・半透明の粒 含む	外：太い沈線内に小さな円形 刺突文	
55	NR42 第 18 層	深鉢	—	(2.0)	小破片	内：橙色 7.5YR7/3 外： 褐灰色 7.5YR5/1	1.5mm 以下の白色・ 半透明の粒を含む	外：屈曲する太い沈線文	
56	NR42 第 18 層	深鉢	—	(2.5)	小破片	内：にぶい橙色 7.5YR7/3 外： にぶい褐 7.5 色 7.5YR6/3	(粗)1~2mm 大の白 色粒・1mm 以下の半 透明粒を含む	外：上端に細い沈線、連続C 字型爪形文 2 段+刺突文	
57	NR42 第 18 層	深鉢	—	(1.9)	小破片	内：灰白色 7.5YR8/1 外： 明褐灰色 7.5YR7/2	(やや粗)径1mm 以 下の白色・半透明と 雲母の粒を含む	外：屈曲する太い沈線文	
58	NR42 第 18 層	深鉢	—	(1.6)	小破片	内・外：灰白 色 7.5YR8/2	(やや粗)径 1.5mm 以下の白色・半透明 の粒を含む	外：2 条の太い沈線内に刺突 文	
59	NR42 第 18 層	深鉢	—	(1.2)	小破片	内・外：灰白 色 7.5YR8/2	(やや粗)径 1.5mm 以下の白色・半透明 の粒を含む	外：幅広沈線内に刺突文	
60	NR42 第 18 層	深鉢	—	(2.4)	小破片	内・外：明褐 灰色 7.5YR7/2	(やや粗)径1mm 以 下の白色・半透明と 雲母の粒を含む	外：口縁文様帯に 2 条の沈線、 沈線上に縦長の交互刺突文を 規則的に施す	
61	NR42 第 18 層	深鉢	—	(2.0)	小破片	内：にぶい橙 色 7.5YR7/3 外： にぶい褐 色 7.5YR6/3	(やや粗)径1mm 以 下の白色・半透明と 雲母の粒を含む	外：太い並行沈線文	
62	NR42 第 18 層	深鉢 口縁	—	(2.3)	小破片	内・外：灰白 色 7.5YR7/1	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明・ 茶色の粒を含む	口縁端：細く浅い沈線 外：ナ デ 内：条痕調整	
63	NR42 第 18 層	深鉢 口縁	—	(5.0)	小破片	内・外：灰褐 色 7.5YR5/2	(やや粗)径1mm 以 下の白色・半透明と 雲母の粒を含む	口縁端：細く納める 外：磨 消縄文 内：条痕調整	
64	NR42 第 32 層	深鉢 口縁	—	(3.0)	小破片	内・外：褐灰 色 7.5YR4/1	(やや粗)径1mm 以 下の白色粒を多く含 む、半透明の粒を 少量含む	口縁端：細く浅い沈線 内：貝 殻条痕文調整 外：巻貝調整	
65	NR42 第 32 層	深鉢 口縁	—	(2.8)	小破片	内：灰褐色 7.5YR6/2 外： 明褐灰色 7.5YR7/2	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の 粒を含む	外：太い条痕文	
66	NR42 第 32 層	深鉢 口縁	—	(3.1)	小破片	内：橙色 7.5YR6/6 外： 橙色 7.5YR7/6	(やや粗)径1mm 以 下の白色・半透明の 粒を含む、3mm 大の 半透明粒を含む	外：縄文	
67	NR42 第 32 層	深鉢	—	(2.3)	小破片	内：灰褐色 7.5YR6/2 外： 褐灰色 7.5YR8/2	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の 粒を含む	外：無文	
68	NR42 第 32 層	深鉢 口縁	—	(4.0)	小破片	内・外：にぶい 褐色 7.5YR6/3	(やや粗)径1mm 以 下の白色・半透明と 雲母の粒を含む、2~ 5mm 大の白色粒を含 む	外：口縁文帯内に 2 条の幅広 沈線、沈線内に刺突文	
69	NR42 第 32 層	深鉢 口縁	—	(2.1)	小破片	内・外：灰褐 色 7.5YR6/2	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の 粒を含む	口縁端：刻目文 外：2 重曲線 の凹線文内に刺突文	
70	NR42 第 32 層	深鉢 口縁	—	(2.2)	小破片	内・外：明褐 灰色 7.5YR7/2	(やや粗)径1mm 以 下の白色粒を多く含 む	外) 縄文地に太い沈線文	船本IV
71	NR42 第 32 層	深鉢	—	(3.1)	小破片	内・外：褐色 7.5YR6/4	(やや粗)径1mm 以 下の白色粒を多く含 む	外：綾杉状縄文か	

番号	出土地	器種	径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色 調	胎 土	調 整	備考
72	NR42 第32層	深鉢	—	(3.9)	小破片	内・外：にぶい褐色 7.5YR7/3	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：太い沈線文	
73	NR42 第32層	深鉢	—	(2.3)	小破片	内・外：にぶい橙色 7.5YR6/3	(やや粗)径1~4mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：繊維の硬い撚りの縄文	
74	NR42 第32層	深鉢 口縁	—	(3.4)	小破片	内・外：灰褐色 7.5YR5/2	(やや粗)径1mm以下の白色・半透明と雲母の粒を含む	口縁端：細く納める 外：磨消縄文 内：条痕調整	63と同一個体か
75	NR42 第32層	深鉢	—	(2.6)	小破片	内：明褐色 7.5YR7/2 外：にぶい褐色 7.5YR6/3	(やや粗)径1~3mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：細く浅い条痕文	
76	NR42 第32層	深鉢	—	(3.2)	小破片	内・外：にぶい褐色 7.5YR7/3	(やや粗)径1mm 大の白色粒多く、半透明の粒を含む	外：磨消縄文：2重曲線の沈線、磨消縄文	
77	NR42 第32層	深鉢	—	(2.2)	小破片	内：灰白色 7.5YR8/2 外：褐灰色 7.5YR5/1	(粗)径2mm以下の半透明と白色砂粒を多く含む	外：縄文	
78	NR42 第32層	深鉢	—	(2.6)	小破片	内・外：にぶい褐色 7.5YR6/3	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：貝殻条痕文	
79	NR42 第32層	深鉢	—	(2.6)	小破片	内・外：にぶい褐色 7.5YR6/3	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：沈線文	
80	NR42 第32層	深鉢	—	(3.3)	小破片	内・外：にぶい褐色 7.5YR6/3	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：太い渦巻沈線の磨消縄文	
81	NR42 第32層	深鉢	—	1.9)	1/12以下	内：橙色 5YR7/6 外：灰白色 7.5YR8/2	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：太い沈線文内に粗い刺突文	
82	NR42 第32層	深鉢	—	(1.8)	小破片	内：灰褐色 7.5YR6/2 外：にぶい褐色 7.5YR7/3	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：磨消縄文	
83	NR42 第32層	深鉢 底部	9.9	(2.5)	1/12以下	内：にぶい褐色 7.5YR7/3 外) 灰白色 7.5YR8/1	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：無文	
84	NR42 第29層	深鉢 底部	8.4	(5.0)	2/12	内・外：浅黄褐色 10YR8/3	(やや粗)径1~2mm 大の白色・半透明の粒を含む	外：無文	
85	SX205	深鉢	16.1	20.7	12/12	内・外：にぶい褐色 7.5YR5/4	(粗)径3mm以下の半透明と白色砂粒を多く含む	内：ケズリ後ナデ・ユビオサエ 外：ナデ・条痕文	中津式深鉢 内：底面に焦げ、外面に煤
86	SP83	深鉢	—	(4.5)	小破片	内・外：にぶい褐色 7.5YR5/3	(粗)径3mm以下の半透明と白色砂粒・雲母を含む	外：磨消縄文	
87	SP83	深鉢	—	(2.7)	小破片	内：橙色 7.5YR7/6 外：褐灰色 7.5YR5/1	(粗)径3mm以下の半透明と白色砂粒・雲母を含む	外：磨消縄文	
88	SP 83	深鉢	—	(3.3)	小破片	内：橙色 5YR6/6 外：浅黄褐色 7.5YR7/4	(粗)径3mm以下の半透明と白色砂粒を多く含む	外：磨消縄文	
89	SP83	深鉢	—	(4.5)	小破片	内：灰白色 10YR8/2 外) 灰褐色 7.5YR5/2	(粗)径1~2mm 大の白色・茶褐色砂粒と雲母を含む	外) 無文	
90	SP103	深鉢 口縁	—	(4.7)	1/12以下	内・外) 浅黄褐色 7.5YR8/3	(粗)径1~2mm 大の白色・茶褐色砂粒と雲母を含む	口縁端：細い沈線 外：無文	

国道 312 号（大宮峰山インター線）関係遺跡発掘調査報告

番号	出土地	器種	径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色 調	胎 土	調 整	備考
91	SP87	深鉢	—	(3.2)	1/12 以下	内：褐色 7.5YR4/3 外：褐色 7.5YR4/6	(粗) 径 1～2mm 大の白色・茶褐色砂粒と雲母を含む	外：磨消縄文	
92	SP172	深鉢 口縁	—	(2.7)	1/12 以下	内：明褐色 5YR5/6 外：褐色 7.5YR4/3	(粗) 径 2mm 大の白色砂粒と雲母を含む	外：磨消縄文	
93	SP172	深鉢	—	(3.4)	1/12 以下	内・外：灰褐色 7.5YR6/2	(粗) 径 1～3mm 大の白色・褐色砂粒と雲母を含む	内：条痕文調整か 外) 無文	
94	SP103	深鉢 口縁	10.1	(2.0)	1/12 以下	内) 明褐灰色 7.5YR7/2 外) 浅黄橙色 7.5YR8/3	(粗) 径 1～2mm 大の白色・褐色砂粒と雲母を含む	外：無文	
95	3トレンチ 包含層	深鉢 口縁	—	(3.9)	1/12 以下	灰黄褐色 10YR4/2	(粗) 径 1～2mm 大の白色・褐色砂粒と雲母を含む	外：磨消縄文	
96	SP172	深鉢 底部	11.2	(1.6)	3/12	内・外) 灰褐色 7.5YR6/2	(粗) 径 1～3mm 大の白色・褐色砂粒と雲母を含む	—	
97	4トレンチ 包含層	深鉢	—	(5.3)	1/12 以下	内・外：にぶい褐色 7.5YR6/3～6・4	(粗) 径 2mm 大の白色砂粒と雲母を含む	外：繊維の硬い撚糸縄文	
98	4トレンチ 包含層	深鉢	—	(2.8)	1/12 以下	灰黄褐色 10YR5/2	(粗) 灰黄褐色 10YR5/2	外：縄文	
99	SX205	深鉢	—	(3.1)	12/12	明褐色 7.5YR5/6	(粗) 径 2mm 大の白色砂粒と雲母を含む	外：押し型文(楕円)	高山寺式
100	I 区 包含層	深鉢 口縁	—	(2.6)	1/12 以下	内：にぶい橙色 7.5YR7/3 外：にぶい褐色 7.5YR5/3	(やや粗) 径 1mm 大の白色・半透明、2～3mm 大の半透明粒を含む	水平口縁深鉢 外：口縁文様帯に 2 条の太い沈線、沈線上に縦長の交互刺突文を規則的に施す	
101	I 区 包含層	深鉢 口縁	—	(3.8)	1/12 以下	内：浅黄橙色 10YR8/3 外：にぶい褐色 7.5YR6/4	(やや粗) 径 1～2mm 大の白色・半透明の粒を含む	内・外：貝殻条痕文調整	
102	I 区 包含層	深鉢 口縁	—	(3.1)	1/12 以下	内：橙色 2.5YR6/6 外：橙色 7.5YR7/6	(粗) 径 1～2mm 大の白色・褐色砂粒と雲母を含む	外：無文 内：貝殻条痕文調整	
103	I 区 包含層	深鉢	—	(2.7)	1/12 以下	内：橙色 2.5YR6/6 外：にぶい褐色 7.5YR6/6	(粗) 径 1mm 以下の半透明と白色砂粒・雲母を含む	外：太い沈線文	
104	I 区 包含層	深鉢	—	(2.3)	1/12 以下	内・外：灰白色 7.5YR8/2	(粗) 径 1mm 以下の半透明と白色砂粒・3mm 大の白色粒を含む	外：磨消縄文)	
105	I 区 包含層	深鉢	—	(2.1)	1/12 以下	内・外：灰褐色 7.5YR4/2	(やや粗) 径 1mm 以下の白色粒を含む	外：磨消縄文	
106	I 区 包含層	深鉢	—	(2.4)	1/12 以下	内：灰白色 7.5YR8/2 外：橙色 7.5YR7/6	(粗) 径 2mm 以下の半透明と白色砂粒・雲母を含む	外：貝殻条痕文	
107	I 区 包含層	深鉢 底部	—	(2.4)	1/12 以下	内・外：にぶい褐色 7.5YR7/4	(粗) 1～2mm の白色粒・1～4mm の半透明粒を含む	外：条痕文調整か	
108	I 区 包含層	深鉢 底部	—	(2.0)	1/12 以下	内：浅黄橙色 7.5Y7/4 外：橙色 5YR6/6	(粗) 1～2mm の白色粒・1～4mm の半透明粒を含む	外：貝殻条痕文	

付表3 新町遺跡出土鉄製品・石製品観察表

( )現存値、- 計測不能

番号	種類	出土地	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
109	刀子	I区 耕作溝	鉄	(28.3)	2.8	0.4	-	刃部長18.9 茎長(9.4) 茎幅 1.8 関から1.8付近に目釘穴 刃 部に木質
110	刀子	II区 SH70	鉄	(3.9)	1.1	0.3	-	刃部長(2.0)
111	刀子	I区 SP190	鉄	(6.2)	0.3	0.3	-	刃部長(3.6)
112	剥片	NR42 第22層	碧玉	2.8	2.2	2.0	16.1	-
113	磨製石斧	SH70	-	(4.1)	6.0	4.5	168.2	刃部・基部の欠損面は人為的加工 か 丸胴
114	剥片	II区西部 包含層	サヌカ イト	5.3	3.3	1.2	26	-
115	軽石	II区 包含層	火山岩	10.6	7.4	5.3	99.8	顕著な加工痕なし 浮き材か 色) 暗褐色
116	叩石	I区 包含層	-	(6.0)	5.9	4.5	205.2	縄文地に
117	磨製石斧	I区 耕作溝	-	(8.9)	7.7	3.6	385	刃部・基部を欠損 欠損面を細調 整し四角く整形 叩石に転用。
118	礫石錘	II区西部 包含層	サヌカ イト	8.4	7.5	1.6	135.5	縦の両端部を丁寧に敲打 紐掛け
119	礫石錘	3トレン チ包含層	-	4.0	4.1	1.6	34.4	縦の両端部を丁寧に敲打 紐掛け
120	定角式磨 製石斧	NR42 第18層	緑泥岩	5.2	4.1	1.6	34.4	全面を丁寧に研ぎ整える
121	打製石鏃	SH70	-	2.6	2.1	0.4	1.6	平基
122	打製石鏃	2トレン チ包含層	サヌカ イト	2.4	1.2	0.4	0.8	凹基
123	勾玉	2トレン チ包含層	滑石	3.2	1.4	0.4	3.2	頭部先端を欠く 紐穴は両端穿孔
124	石核	SE91 第2層	碧玉	1.7	2.3	0.5	4.0	票裏面を細かく調整
125	剥片	4トレン チ包含層	チャート	2.5	2.8	0.8	7.6	側面を細かく調整

辺地域は遺跡が多数存在する。今後も周辺での発掘調査例が増加すれば、当地域の歴史がより明らかになるものと期待が寄せられる。 (竹原一彦)

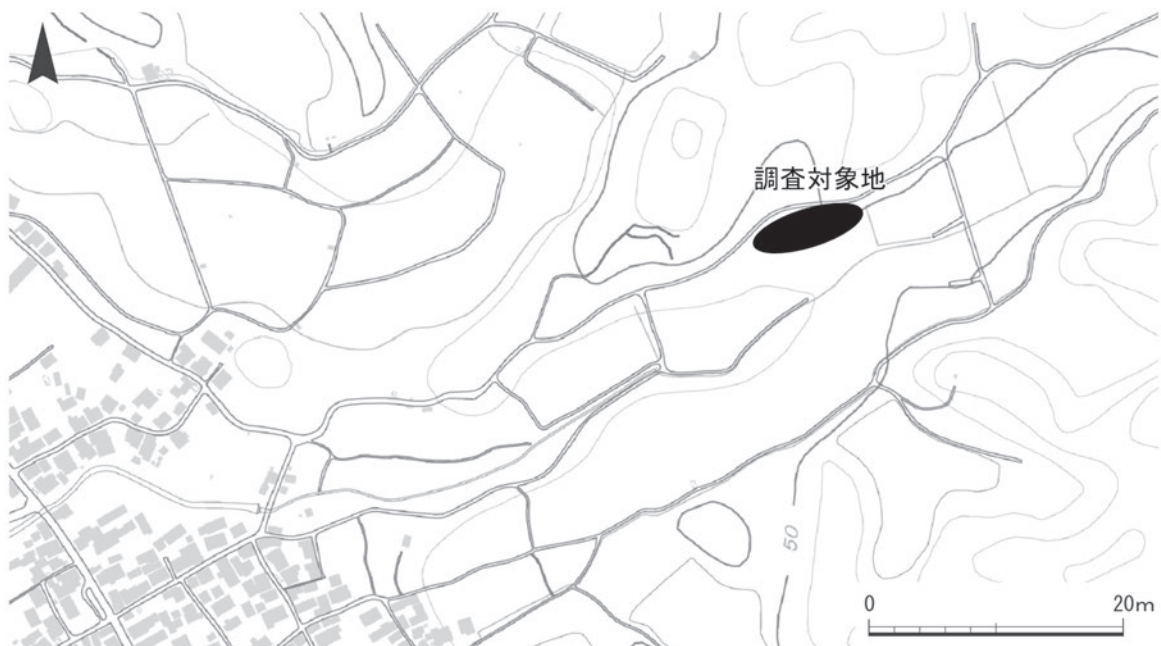
## (2) 三分井根遺跡第 2・3 次

### 1. はじめに

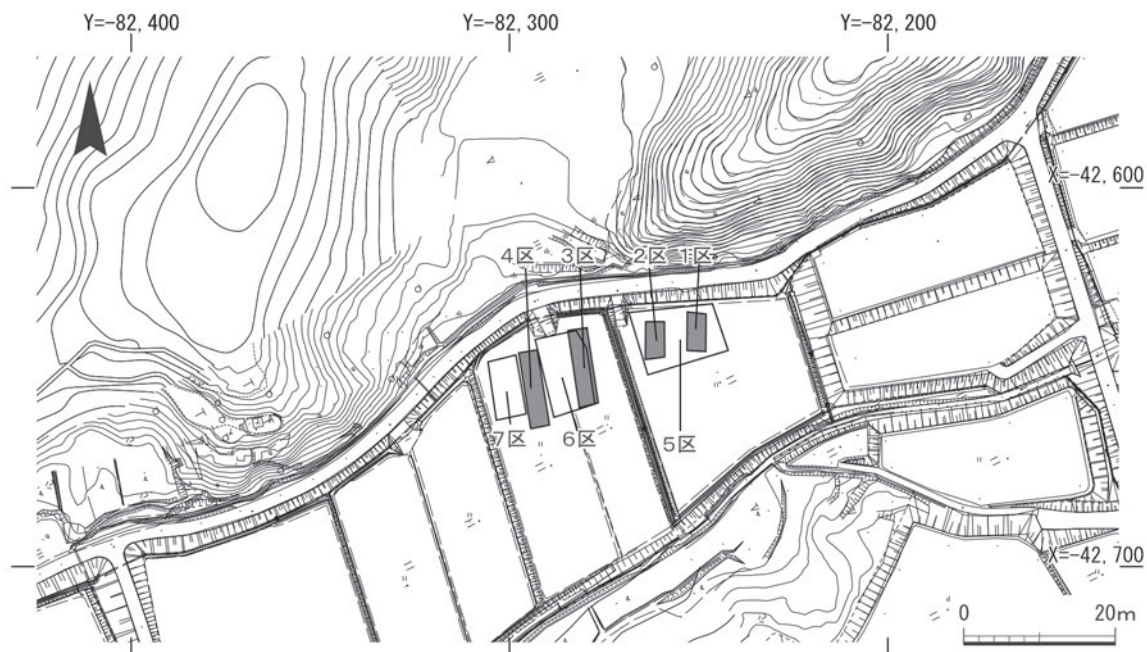
三分井根遺跡は、中郡盆地の中央東縁部、京丹後市峰山町新町地区を流下する田久谷川右岸側に位置し、標高約47mを測る緩傾斜地上に立地する。本遺跡は、谷地形の谷頭部から低地へと連続する緩傾斜面上に位置しており、現在は水田として利用されている。

本遺跡は、弥生時代から古代にかけての散布地として周知されており、過去の分布調査において当該期の土器片が採集されている。昭和61年に、土地改良総合整備事業の区画整理に伴い峰山町教育委員会が、新町遺跡として発掘調査を実施している。

周辺には、山稜部を中心として追坂古墳群・深谷古墳群・名柄古墳群などの古墳群が展開している。地形的には、調査対象地は田久谷川によって形成された谷地形の一部にあたり、周辺山地は花崗岩を基盤とする丘陵性地形から構成される。これらの花崗岩は風化を受けやすく、風雨や斜面崩壊によって生じた真砂土が厚く堆積している。調査地では、こうした堆積物が谷部を埋積することで地下水位が高まり、湧水を伴う湿潤な環境が形成されやすい状況にある。本遺跡は花崗岩を基盤とする丘陵末端部に位置し、更新世後期の段丘堆積面に連続する地形单元にあたる。この段丘面は、完新世以降の田久谷川の氾濫および堆積作用によって部分的に埋積され、現在の沖積低地が形成されたと考えられ、本遺跡は段丘面と沖積低地が接する地形変換域に位置する。



第20図 三分井根遺跡調査対象地位置図



第21図 三分井根遺跡調査区配置図

## 2. 調査概要

田久谷川の上流側から任意に7か所(1～7区)を設定して掘削を行った。いずれの調査区も地表から約2mほど掘削した時点で多量の湧水を確認し、断面観察の継続は困難となった。各区の層序および堆積状況は次のとおりである。なお、第3次調査として実施した面的調査では、1・2区を拡張して5区とし、3区と4区の間を拡張し6区とし、4区の西側の拡張区を7区とした。各調査区における層相の違いを反映して層番号を付しており、3区以西で確認された礫混じりの青灰白色粗粒砂層(4層)は、1・2区および5区で確認された黒褐色シルト混じり粗粒砂層(2層)に相当する層準である。

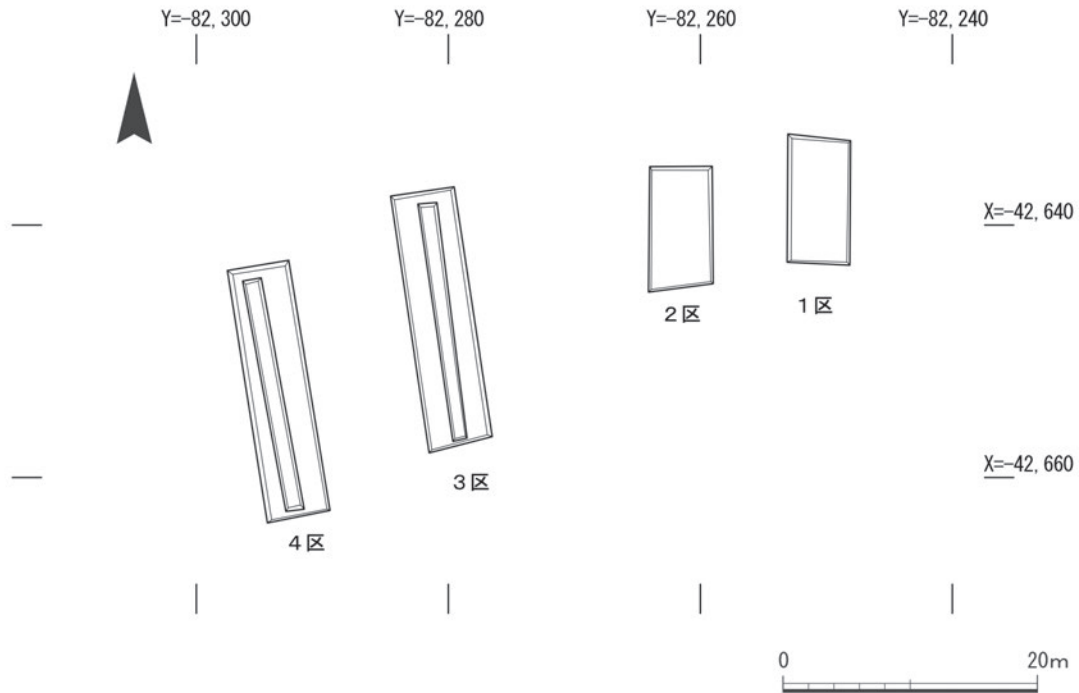
### (1) 令和2年度の調査(第2次調査)

**1区** 田久谷川上流側に位置する。調査区は長辺約9m、短辺約5.5mの長方形で、最大掘削深度は約2mを測る。1層は厚さ約0.6mの耕作土である。2層は厚さ約0.6mの黒褐色シルト混じり粗粒砂で、有機質を多く含む。3層は厚さ約0.5mの青灰白色粗粒砂で、下部で湧水を確認した。部分的な深掘りにより、基盤層と考えられる花崗岩風化土を確認した。遺物・遺構は確認されなかった。

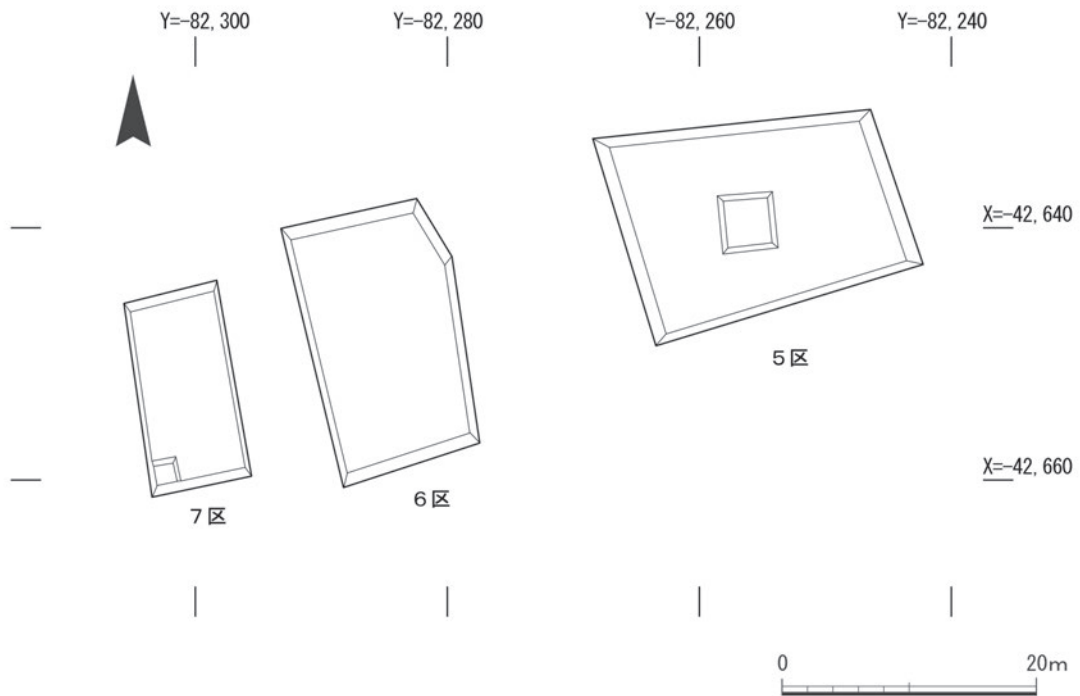
**2区** 1区の西側約6mに位置する。長辺約9.5m、短辺約4.8mの長方形の調査区で、最大掘削深度は約2mを測る。1層は厚さ約0.7mの耕作土である。2層は厚さ約0.5mの黒褐色シルト混じり粗粒砂、3層は厚さ約0.4mの青灰白色粗粒砂で構成される。3層からの湧水確認後、部分掘削により基盤層土を確認した。遺物・遺構は確認されなかった。

**3区** 2区の西側約15mに位置し、4区とともに1・2区より約2mほど低い位置にある。長辺約20m、短辺約5mの長方形の調査区で、最大掘削深度は約2mを測る。

1層は厚さ約0.9mの耕作土で、下部から摩滅した土師器・須恵器の小片が少量出土した。4



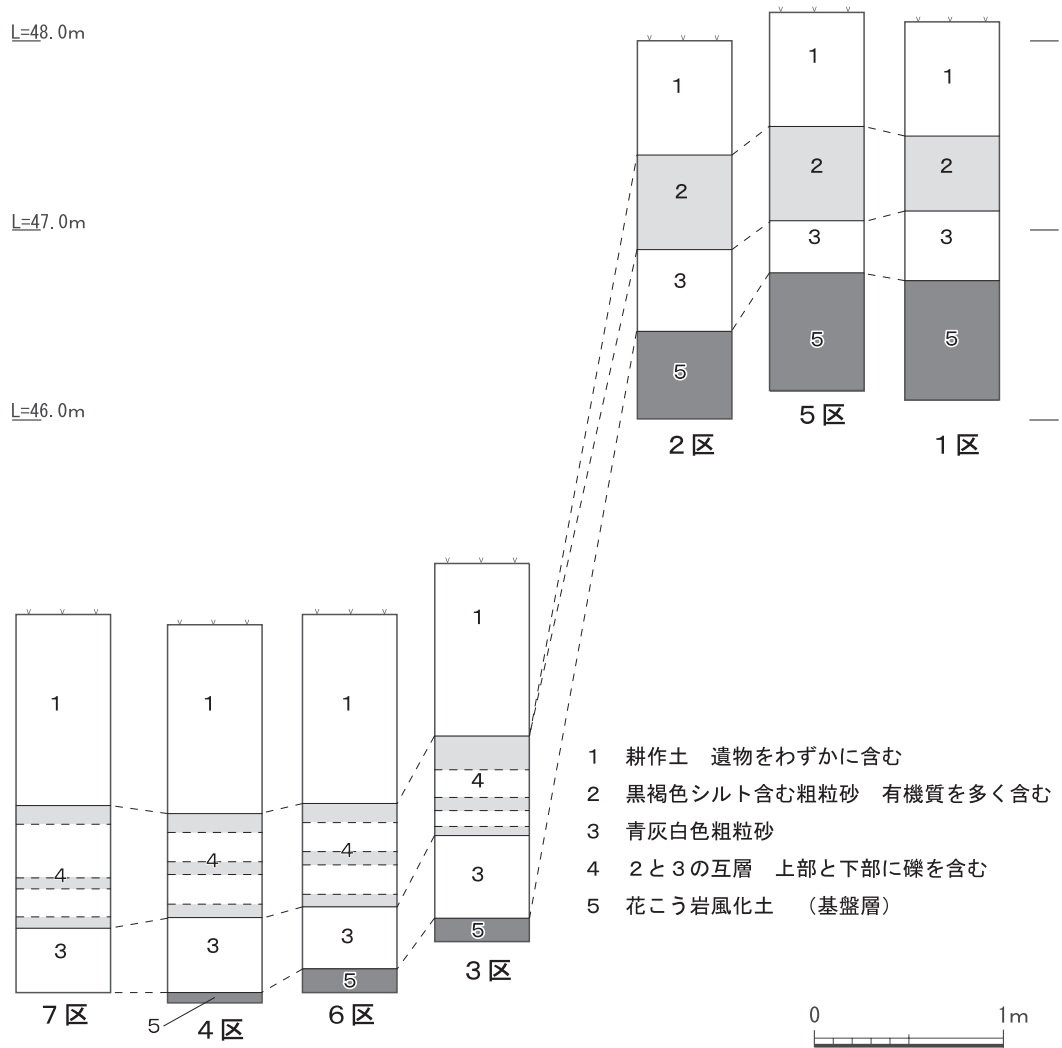
第22図 三分井根遺跡第2次調査調査区平面図(S=1/500)



第23図 三分井根遺跡第3次調査調査区平面図(S=1/500)

層は厚さ約0.5mの青灰白色粗粒砂で、上部に径5～10cmの垂角礫～角礫、下部に径2～5cmの垂円礫～垂角礫を含み、約0.2m間隔で薄い黒褐色シルト層を挟む。3層は厚さ約0.4mの青灰白色粗粒砂である。3層からの湧水確認後、部分掘削により、下位に基盤層を確認した。遺構は確認されなかった。

4区 3区の西側約8mに位置する。長辺約20m、短辺約4.9mの長方形の調査区で、最大掘削深度は約2mを測る。1層は厚さ約1mの耕作土で、下部から摩滅した土師器・須恵器の小片



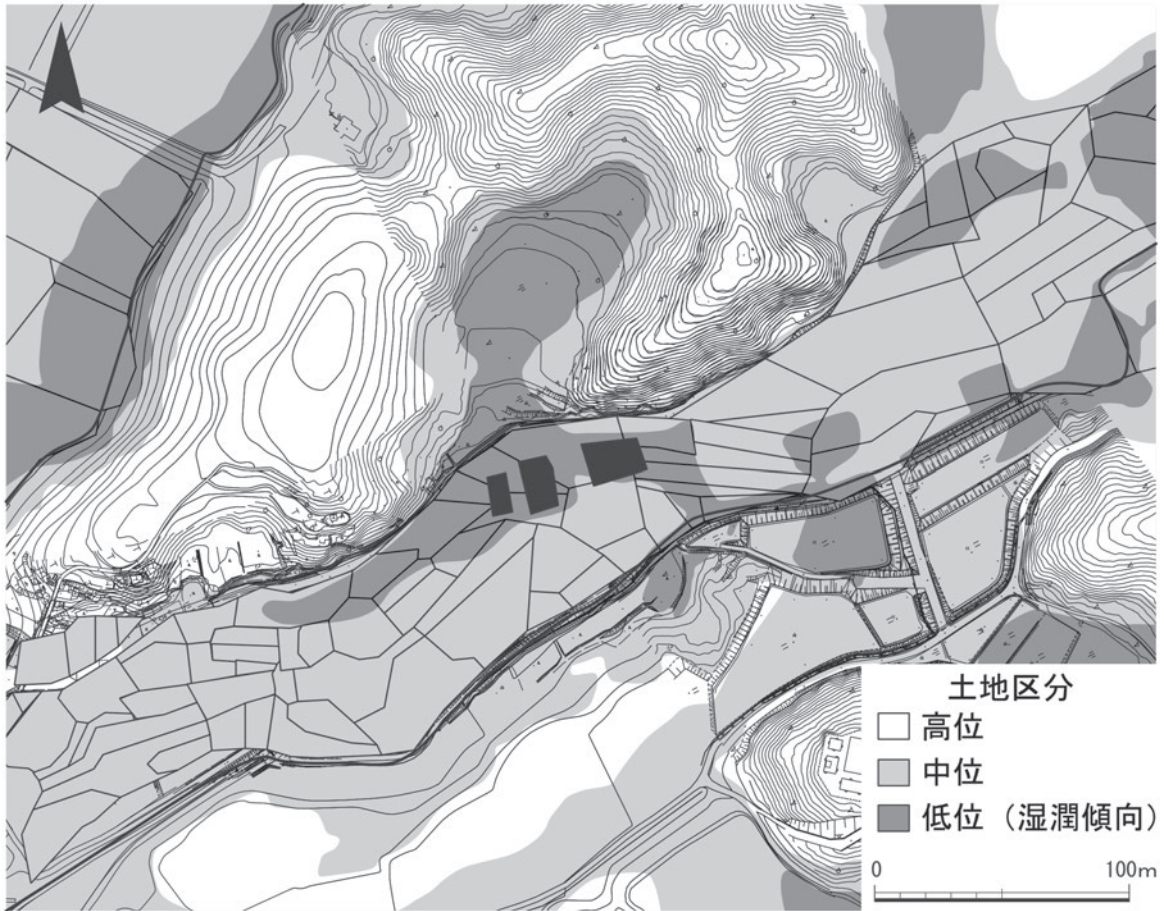
第24図 三分井根遺跡トレンチ柱状図

が出土した。4層は厚さ約54cmの青灰白色粗粒砂で、上部に径5～10cmの亜角礫～角礫層、下部に径2～5cmの亜円礫～亜角礫層を認め、20cm間隔で黒褐色シルト層を挟む。3層は厚さ約0.4mの青灰白色粗粒砂である。3層からの湧水確認後、部分掘削により、下位に基盤層を確認した。遺構は確認されなかった。

(2)令和3年度調査(第3次調査)

**5区** 1・2区を拡張した調査区である。長辺約22m、短辺約15mの東西に長い台形状の調査区で、最大掘削深度は約2mを測る。1層は厚さ約0.6mの耕作土、2層は厚さ約0.43mの黒褐色シルト混じり粗粒砂、3層は厚さ約0.4mの青灰白色粗粒砂で構成される。その下位に花崗岩風化土(基盤層)を確認した。遺物・遺構は確認されなかった。

**6区** 3区を西側に拡張した調査区で、長辺約20m、短辺約11mの東西に長い台形状で、最大掘削深度は約2mを測る。1層は厚さ約1mの耕作土、4層は厚さ約0.5mの青灰白色粗粒砂で、上部に径5～10cmの亜角礫層、中部に径2～5cmの亜円礫層、下部に細礫層を伴う。層間には約0.2m間隔で黒褐色シルト層が挟まる。3層は厚さ約0.3mの青灰白色粗粒砂で構成される。その下位に基盤層を確認した。遺構は確認されなかった。



第25図 遺跡周辺地形区分図(地割は1964年航空写真より復元 S=1/3,000)

7区 4区の西側に位置する。長辺約15.7m、短辺約7.7mの長方形の調査区で、最大掘削深度は約2mを測る。1層は厚さ約1mの耕作土、4層は厚さ約0.6mの青灰白色粗粒砂で、上部に径5～10cmの垂角礫層、中部に径2～5cmの垂円礫層、下部に細礫層を伴い、約0.2m間隔で黒褐色シルト層を挟む。3層は厚さ約0.3mの青灰白色粗粒砂で構成される。遺物・遺構は確認されなかった。

### 3. まとめ

調査の結果、調査地では耕作土層の下位に、真砂土を主体とする堆積層が厚く分布し、その下位には花崗岩風化層からなる基盤層が確認された。各調査区においては、層相の大枠に大きな差異は認められず、谷地形に沿って形成された自然堆積層が広範囲に分布する状況が明らかとなった。また、第3区以西で確認された第4層は、粗粒な砂～シルトを主体としつつ、上部および下部に礫を含む互層状の堆積構造を示しており、地下水位の高い湿潤環境下において、平常時の比較的緩やかな堆積と、一時的な増水・出水時における堆積とが反復して生じた結果を反映するものと考えられる。さらに、標高約44m前後で湧水が顕著に認められ、調査区の一部では掘削の進行が制限されるほど地下水位が高い状態にあったことから、調査地は恒常的に湿潤な環境下にあったと考えられ、少なくとも安定的な居住や生産活動の展開には適した条件ではなかったと考え

られる。出土遺物は、主として耕作土層中から少量確認されるにとどまり、摩滅が著しく、出土位置や層位的なまとまりを欠くものが大半であった。また、平成初期には場整備が実施されていることから、調査地において遺物包含層として評価できる層準は認められず、出土遺物はいずれも二次的に移動した可能性が高いと判断される。遺構についても検出されなかった。以上の成果から、三分井根遺跡の調査対象地は、田久谷川流域における段丘面と沖積低地が接する地形変換域に位置し、地下水位の高い湿潤環境が継続していた区域であることが確認された。このような自然条件を踏まえると、当該地は集落の中核的な立地とはなりにくく、田久谷川流域における土地利用は、より上流側の微高地や段丘面上を中心として展開していた可能性が高い。なお、田久谷川流域には中世集落「田久千軒」に関する伝承が知られているが、面的調査地においては、それを直接裏付ける遺構・遺物は確認されていない。ただし、面的調査によって明らかとなった低湿地的環境の存在は、当該流域における中世以降の集落立地を検討する際の基礎的資料となるものであり、今後、周辺微高地を含めた広域的な調査成果の蓄積を待って、改めて検討されるべき課題である。

### (3) 佐屋利遺跡第1～3次

#### 1. はじめに

佐屋利遺跡は京丹後市峰山町荒山・新町に所在する。古代～中世の遺物が地表面での採集がなされた散布地として知られている。令和3年度から5年度にわたり、当センターによる3次の調査を実施した。各地区の調査概要は次のとおりである。

#### (1) 第1次調査

令和3年度に1・2・3区に分けて実施した本調査である。1区では、微高地上で掘立柱建物跡・柵列を検出し、滝内川に近い低地では弥生時代～中世にかけての遺物を多量に包含する自然流路および木組遺構を検出した。2区では、中世～近世の多数のピット・土坑を検出した。3区では、弥生時代中期のピットおよび溝群を検出した。

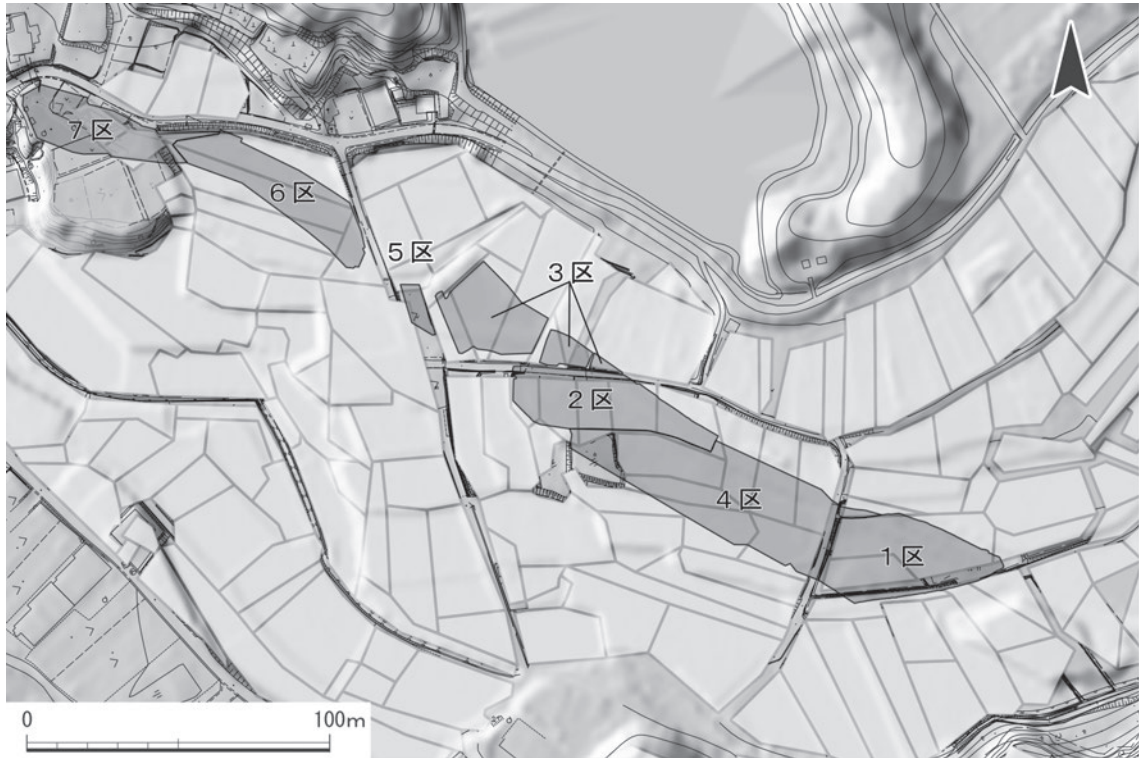
#### (2) 第2次調査

令和4年度に4・5・6区では本調査を、7区では埋蔵文化財包蔵地の広がりを確認することを目的とした小規模調査を実施した。4区では、古代末～中世初期にかけての多数のピット・溝および、井戸を検出した。5区では、遺物・遺構は検出できなかった。6区では、古代末～中世初期にかけての多数のピット・溝のほか、弥生時代中期の遺物を包含する落ち込みを検出した。7区では、中世後期の遺物および造出し状の遺構を検出した。

#### (3) 第3次調査

令和4年度の調査結果を受け、7区を拡張して本調査を実施し、中世後期の堀・溝・井戸を検出した。

#### (4) 整理報告作業



第26図 佐屋利遺跡調査区位置図(国土地理院GIS、航空写真より地割を復元)

調査終了後から令和7年度にかけて整理報告作業を実施した。出土遺物については遺物洗浄、台帳登録を経て、注記、接合作業を実施した。本作業と並行して報告書に掲載する出土遺物の選別および実測作業、写真撮影等をおこなった。本報告の遺構図は、現地で作成したもののほか、空中写真測量による平面図をもちいた。

## 2. 調査の方法

佐屋利遺跡の調査に際し、2～7区については、遺物の取り上げに対応するために平面直角座標系（VI系：EPSG6674）を利用した4mグリッドを設定し、1区のみ10mグリッドを設定した。XYの座標値のうち、整数値の下2桁が00となる点を基準とした100m四方の中グリッドを設定し、東西と南北で25等分した。VI系は北東角が起点（原点）であることから、南と西に向かって絶対値が大きくなる。この点を考慮して南北方向（Y軸）は北からa～y、東西方向（X軸）は東から1～25とし、各グリッドは起点にあたる北東隅の点から1a、2a…などと呼称している。本事業で実施した調査では、遺構の性格を示す略号の後ろに1から番号を付した。佐屋利遺跡は第1次～第3次において複数の調査区を設定して調査を実施したことから、混同を避けるため、1区では1001、1002…2区では2001、2002…のように遺構番号の前に地区番号を付している。なお、略号は調査の進展にともなって変更することがあったが、遺構番号については変更していない。本書で使用した略号は以下のとおりである。

SA：柵 SB：掘立柱建物 SD：溝・堀 SK：土坑 SP：柱穴  
 SX：不明遺構・不定形土坑 NR：自然流路

### 3. 1 区 の 調 査

#### 1) 地区の概要と検出遺構

##### (1) 調査概要

1区は谷中河川が形成した南面する段丘面にある。北側に段丘崖が迫り、上位段丘へと続く。南側は谷中河川の氾濫原となる。安定地盤は砂層で、その上に上位段丘が崩れた粗い砂や黒褐色砂土が堆積する。こうした堆積は、土砂流が形成したロープ状堆積とよばれる。粗い砂は弥生時代以降の遺物を、黒褐色砂土は12世紀を中心とする遺物を大量に包含している。北側の段丘崖からは湧水が激しく、段丘平坦面に流路を作り流れ出ている。こうした流路や谷中河川の影響もあって調査区のある段丘面は永らく湿地の状態にあったものと思われる。

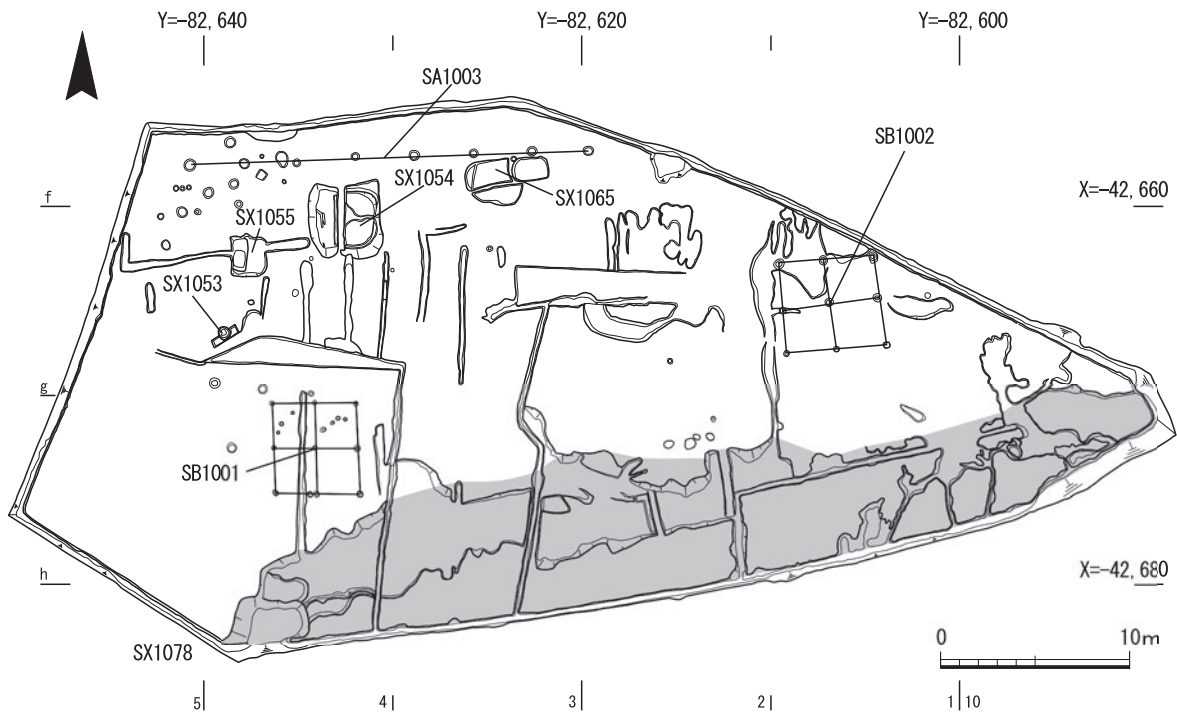
調査区内ではロープ状堆積内に3本の自然流路を確認した。自然流路NR1005とNR1006は、流路河床内に粗粒の河床堆積物が充填されていないことから活動的な流路ではなく、洪水時の侵食によって形成された氾濫流路や地形面の下刻によって形成された開析流路もしくは小規模な開析谷と解釈できる。放射性炭素年代測定の結果にもとづくと、自然流路NR1005の南に位置する自然流路NR1006は奈良時代から平安時代後期に、自然流路NR1005とNR1007は平安時代中期～鎌倉時代に埋没が進行した。調査区南西隅、自然流路NR1007の低位箇所では二重の杭列で構成された木組み遺構S X 1053を検出した。水の集まる箇所に構築されており、水利に係わる施設の可能性がある。

調査区内では、12世紀ごろから急速に黒褐色砂土が堆積し、ある程度安定した段階で建物が建てられる。黒褐色砂土上面では掘立柱建物2棟と、現状では柵列に見える柱列を検出した。掘立柱建物は総柱で、倉庫と考えられる。中世遺物のなかには黒色土器・土師器のほか白磁・青磁も多くみられる。宋銭等も出土し、一般集落とは異なる様相がみられる。なお、墨書土器や緑釉陶器が出土することから平安時代の遺構が存在する可能性が高いが調査区内では検出できていない。また、下駄・櫛・漆器・曲物・板戸・木簡など多様な木製品が出土している。これらの遺物は今回検出した建物だけでは賅いきれない分量であり、倉庫としての性格とも不釣り合いである。上位段丘に古代・中世の建物があり、洪水などによって動いてきている可能性が高い。

今回の調査ではロープ状堆積が安定化し、建物が構築された面を第1遺構面、ロープ状堆積が安定する前の面を第2遺構面として調査を行った。

##### (2) 第1遺構面の調査

厚さ約0.4mの耕作土直下に古代末～中世初期の土師器・須恵器・輸入陶磁器、櫛、下駄、曲物などの遺物を多く包含する約0.2mの土層を確認した。本層を重機および人力で除去し、第1遺構面を検出した。第1遺構面は1mmから5mmの砂粒を含む黒褐色(2.5YR3/1)砂質土が遺構面となる。この面では、総柱建物2基(S B 1001、S B 1002)、柵列(S A 1003)などの遺構と、調査区内を東から西へ横断する自然流路1条(S X 1078)を検出した。その他多くの土坑状・溝状遺構と思われる土色変化を確認したが、多くはロープ状堆積に伴う土色変化である。



第27図 1区第1遺構面遺構配置図(S=1/400)

1区は、低位段丘下部にあたる低地上に立地している。北半部において第1遺構面を検出し、掘立柱建物跡や柱穴列などからなる集落遺構を確認したが、遺構面である黒褐色砂質土層中からも、弥生時代から鎌倉時代前期の土器片や木製品が出土する状況であった。

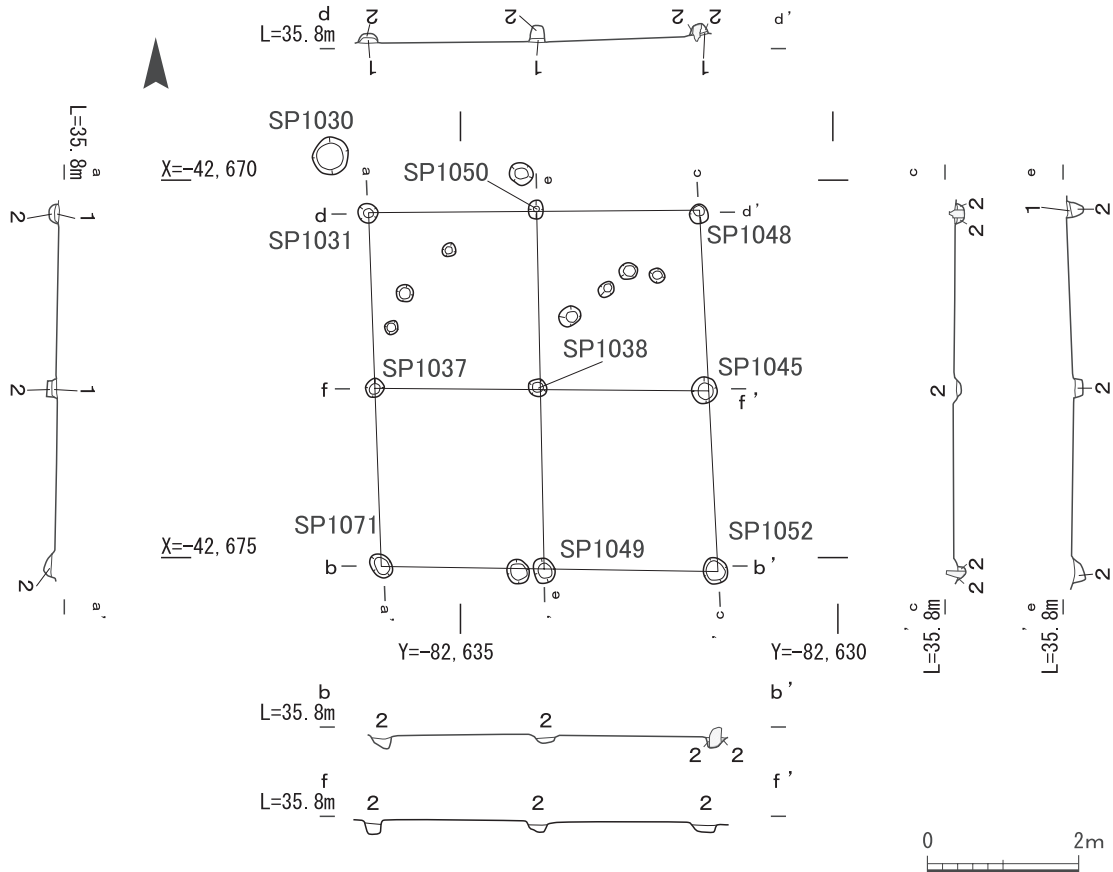
中世前期の遺構面上には粗い砂と黒褐色砂質土の包含層が形成されており、粗い砂は弥生時代以降、中世までの遺物を包含している。また黒褐色砂土は12世紀を中心とする木製品や中世前期の土器類などの遺物を大量に包含している。中世前期の遺構面は砂質土層であるが、下層からも中世の遺物が出土することから、この時期、急速に黒褐色砂質土が低位段丘平坦を埋めていき、一時期に集落が展開し、その後、再び砂質土が堆積した状況と考えられる。

中世前期の遺構面には掘立柱建物2棟、柵列と思われる柱列を検出した。掘立柱建物は2棟ともに桁行・梁行ともに2間の総柱で、倉庫と考えられる。中世の遺物には黒色土器・土師器のほか白磁・青磁、宋銭等も出土している。なお、包含層から墨書土器や緑釉陶器が出土することから平安時代の遺構が存在する可能性があるが調査区内では検出できていない。また、下駄・櫛・漆器・曲物・板戸・木簡など多様な木製品が出土している。

①掘立柱建物SB1001(第28図)

SP1031、SP1050、SP1048、SP1037、SP1038、SP1045、SP1071、SP1049、SP1052で構成される掘立柱建物である。建物規模は、北辺で(SP1031-SP1048)4.4m、南辺で4.4m(SP1071-SP1052)、東辺で4.8m(SP1048-SP1052)、西辺で4.8m(SP1031-SP1071)を測る。建物軸は座標軸北方向から約5.2度西へ振る。

SP1031 建物北西隅に位置する。径0.25m検出面からの深さ0.12mを測る円形の柱穴である。1~3mmの砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土を埋土とする。2~5mmの砂粒を含む暗灰色



1. 灰色 (7.5Y 5/1) 砂質土 (1~2mm砂粒含む) 2. 黒色 (10YR 1.7/1) 砂質土 (1~3mm砂粒含む)

第28図 掘立柱建物 S B 1001平・断面図 (S = 1/100)

(N3/0)砂質土をベースとして掘り込む。

**SP 1050** 建物北辺中央に位置し、径0.22m検出面からの深さ0.22mを測る円形の柱穴である。1~3mmの砂粒を含む黒色 (10YR1.7/1) 砂質土を埋土とする。2~5mmの砂粒を含む暗灰色 (N3/0)砂質土をベースとして掘り込む。

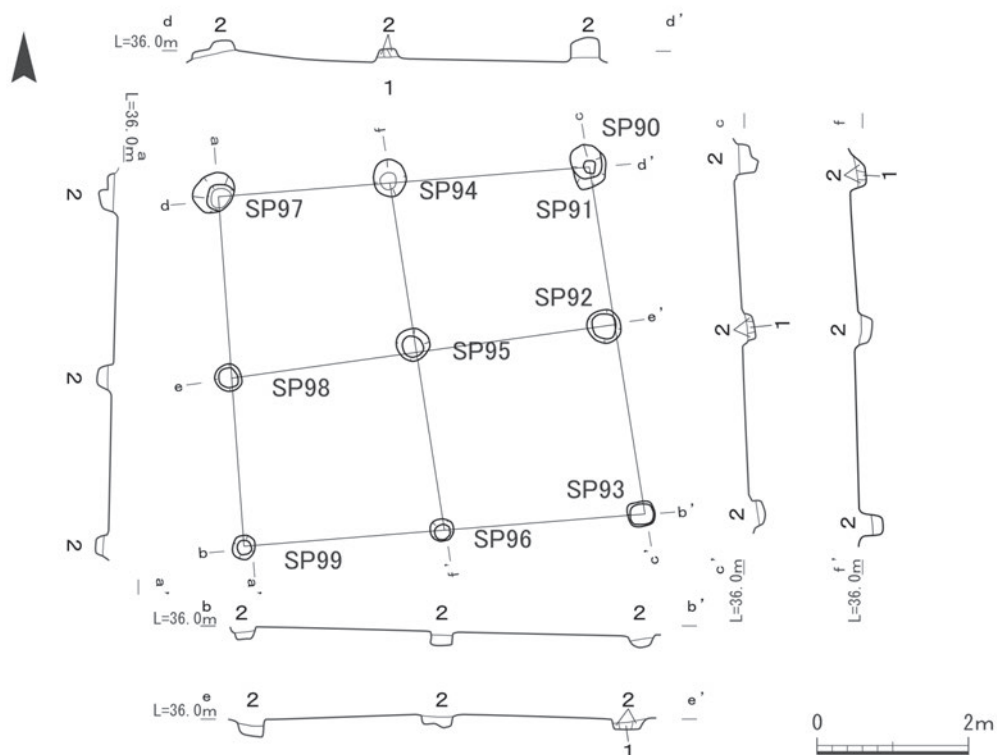
**SP 1048** 建物北東隅に位置する。径0.26m検出面からの深さ0.14mを測る円形の柱穴である。径0.1m・長さ0.2mの円柱状の柱根が残る。柱根頭部は標高35.7mから上が腐食している。1~3mmの砂粒を含む黒色 (10YR1.7/1) 砂質土を埋土とする。2~5mmの砂粒を含む暗灰色 (N3/0)砂質土をベースとして掘り込む。

**SP 1037** 建物西辺中央に位置する。径0.22m検出面からの深さ0.14mを測る円形の柱穴である。2~5mmの砂粒を含む暗灰色 (N3/0)砂質土をベースとして掘り込む。

**SP 1038** 建物中央に位置する。径0.26m検出面からの深さ0.14mを測る円形の柱穴である。2~5mmの砂粒を含む暗灰色 (N3/0)砂質土をベースとして掘り込む。

**SP 1045** 建物東辺中央に位置する。径0.22m検出面からの深さ0.1mを測る円形の柱穴である。2~5mmの砂粒を含む暗灰色 (N3/0)砂質土をベースとして掘り込む。

**SP 1071** 建物南西に位置する。径0.15m検出面からの深さ0.2mを測る円形の柱穴である。1~5mmの砂粒である赤褐色 (2.5YR4/6)真砂土をベースとして掘り込む。



1. 灰白色 (7.5Y 5/1) 砂質土 (1~2mm砂粒含む) 2. 黒褐色 (10YR 1.7/1) 砂質土 (1~3mm砂粒含む)

第29図 掘立柱建物 S B 1002平・断面図 (S = 1/100)

S P 1049 建物南西中央に位置する。径0.2m検出面からの深さ0.12mを測る円形の柱穴である。2~5mmの砂粒を含む暗灰色 (N3/0) 砂質土をベースとして掘り込む。

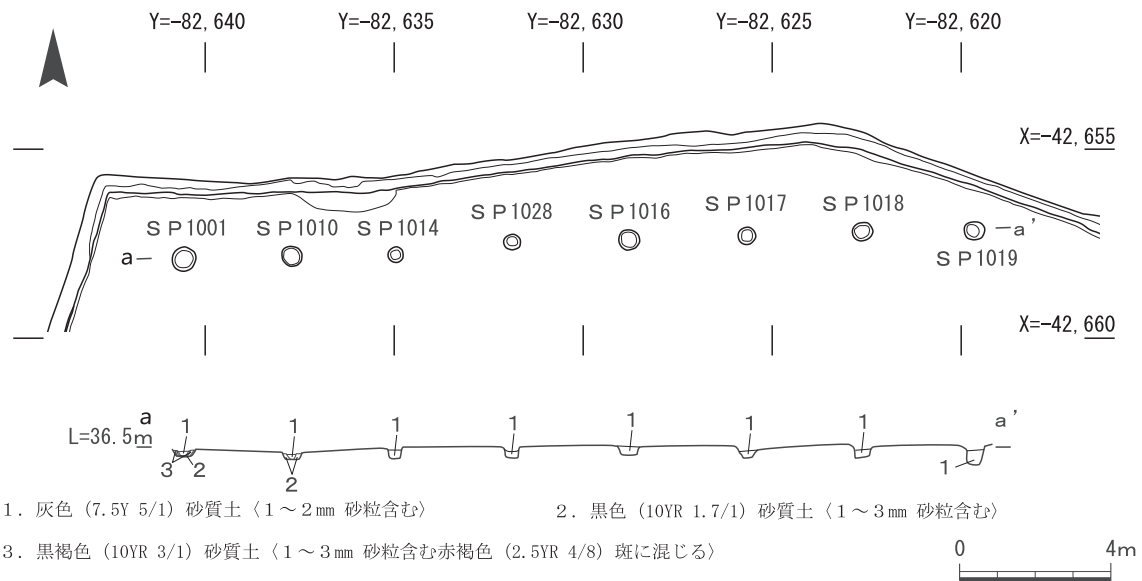
S P 1052 建物南東隅に位置する。径0.26m検出面からの深さ0.15mを測る円形の柱穴である。径0.15m・長さ0.28mの円柱状の柱根が残る。柱根頭部は標高35.8mから上が腐食している。1~5mmの砂粒である赤褐色 (2.5YR4/6) 真砂土をベースとして掘り込む。

②掘立柱建物 S B 1002 (第29図)

S P 1097、S P 1094、S P 1090、S P 1098、S P 1095、S P 1092、S P 1099、S P 1096、S P 1093で構成される掘立柱建物である。建物規模は北辺で4.8m (S P 1097 - S P 1090)、南辺で5.2m (S P 1099 - S P 1093)、西辺で4.8m (S P 1097 - S P 1099)、東辺で4.8m (S P 1090 - S P 1093)を測る。1~3mm大の砂粒を含む暗青灰色 (5PB4/1) 砂質土をベースとして柱穴を掘り込む。建物軸は座標軸北方向から約6.9度西へ振る。

S P 1097 建物北西隅に位置する。径0.34m検出面からの深さ0.25mを測る円形の柱穴である。1~3mm大の砂粒を含む黒色 (10YR1.7/1) 砂質土が埋土である。

S P 1094 建物北辺中央に位置する。径0.31m検出面からの深さ0.17mを測る円形の柱穴である。中央に径0.08mの灰白色 (7.5Y5/1) 砂質土があり、外側に1~3mmの砂粒を含む黒色 (10YR1.7/1) 砂質土が堆積する。



第30図 柵 S A 1003 平・断面図 (S = 1/100)

SP1090 建物北東隅に位置する。径0.38m検出面からの深さ0.32mを測る円形の柱穴である。1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が埋土である。

SP1098 建物西辺中央に位置する。径0.35m検出面からの深さ0.24mを測る円形の柱穴である。1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が埋土である。

SP1095 建物中央に位置する。径0.4m検出面からの深さ0.23mを測る円形の柱穴である。1～3mmの砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土を埋土とする。

SP1092 建物東辺中央に位置する。径0.36m検出面からの深さ0.17mを測る円形の柱穴である。中央に径0.16mの灰白色(7.5Y5/1)砂質土があり、外側に1～3mmの砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が堆積する。

SP1099 建物南西隅に位置する。径0.3m検出面からの深さ0.16mを測る円形の柱穴である。1～3mmの砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土を埋土とする。

SP1096 建物南辺中央に位置する。径0.25m検出面からの深さ0.19mを測る円形の柱穴である。1～3mmの砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土を埋土とする。

SP1093 建物南東隅に位置する。径0.35m検出面からの深さ0.16mを測る円形の柱穴である。1～3mmの砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土を埋土とする。

③柵 S A 1003 (第30図)

SP1001、SP1010、SP1014、SP1028、SP1016、SP1017、SP1018、SP1019で構成される柵である。それぞれの柱間は、2.9m (SP1001 - SP1010)、2.7m (SP1010 - SP1014)、3.1m (SP1014 - SP1028)、3.1m (SP1028 - SP1016)、3.1m (SP1016 - SP1017)、3.0m (SP1017 - SP1018) 3.0m、(SP1018 - SP1019) である。西側3本と東側5本の柱間にばらつきがあり、西側と東側をそれぞれ一組とみると柵列に若干のずれがあることから2組の柵とも考えられる。しかし、その差は大きくないことから一連の柵としておく。柵の角度は座標軸北方向か

ら84.7度東へ振る。

**S P 1001** 径0.62m検出面からの深さ0.2mを測る円形の柱穴である。中央に径0.26mの柱痕跡を示すと思われる1～2mm大の砂粒を含む灰色(7.5Y5/1)砂質土がすり鉢状に残り、1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が裏込めとなる。さらに外側に1～3mm大の砂粒を含み、赤褐色(2.5YR4/8)斑混じりの黒褐色(10YR3/1)砂質土、暗褐色(10YR3/4)砂質土が埋める。

**S P 1010** 径0.52m検出面からの深さ0.2mを測る円形の柱穴である。中央に径0.24cmの柱痕跡を示すと思われる1～2mm大の砂粒を含む灰色(7.5Y5/1)砂質土がすり鉢状に残り、1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が裏込めとなる。

**S P 1014** 径0.4m検出面からの深さ0.42mを測る円形の柱穴である。中央に径0.26mの柱痕跡を示すと思われる1～2mm大の砂粒を含む灰色(7.5Y5/1)砂質土が半球状に残り、1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が裏込めとなる。

**S P 1028** 径0.42m、検出面からの深さ0.22mを測る円形の柱穴である。中央に径0.26mの柱痕跡を示すと思われる1～2mm大の砂粒を含む灰色(7.5Y5/1)砂質土がすり鉢状に残り、1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が裏込めとなる。

**S P 1016** 径0.5m検出面からの深さ0.3mを測る円形の柱穴である。中央に径0.16mの柱痕跡を示すと思われる1～2mm大の砂粒を含む灰色(7.5Y5/1)砂質土が袋状に残り、1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が裏込めとなる。

**S P 1017** 径0.42m検出面からの深さ0.28mを測る円形の柱穴である。中央に径0.18mの柱痕跡を示すと思われる1～2mm大の砂粒を含む灰色(7.5Y5/1)砂質土が柱状に残り、1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が裏込めとなる。

**S P 1018** 径0.5m検出面からの深さ0.24mを測る円形の柱穴である。中央に径0.23mの柱痕跡を示すと思われる1～2mm大の砂粒を含む灰色(7.5Y5/1)砂質土が柱状に残り、1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が裏込めとなる。

**S P 1019** 径0.5m検出面からの深さ0.24mを測る円形の柱穴である。中央に径0.24mの柱痕跡を示すと思われる1～2mm大の砂粒を含む灰色(7.5Y5/1)砂質土が柱状に残り、1～3mm大の砂粒を含む黒色(10YR1.7/1)砂質土が裏込めとなる。

#### ④自然流路S X 1078

調査地南辺の低位を東から西に向けて流れる自然流路である。下層にはローブ状堆積NR1007がある。東側は幅が狭く、東側や北側からの流れが集まる。

#### ⑤不明遺構SX1053

第1遺構面までの重機掘削中に曲物の上面を検出し、周囲から水が湧き出すことから集水施設と判断し、井戸S E 1053として調査を行った。しかし、調査のなかで周囲は土砂流によるローブ状堆積で、至るところから湧水する状況であり、あちこちから木製品が出土する状態にあることがわかってきた。井戸とした曲物の周囲の土層断面を確認したところ、埋設した痕跡は認められなかった。このため、多くの木製品と同様に曲物が土砂流により運ばれ、この場所にとどまった

ものと考えられる。

#### ⑥柱穴

S P 1030 4 h 区で検出した径0.45mを測る円形ピットである。掘立柱建物 S B 1003の北西に位置する。黒色土器碗の小片が出土した。

S P 1091 1 g 区で検出した径約0.4mを測る円形ピットである。掘立柱建物 S B 1002を構成する S P 1090と重複する位置にある。黒色土器碗の小片が出土した。

#### (3)第2遺構面の調査(第31図)

第1遺構面は、北から南に向けて緩傾斜となっている。第1遺構面の下は、調査区北端では段丘崖裾部である暗茶褐色砂層が露出し、その上層に自然流路あるいは窪地の埋土である中世前期の遺物を含む黒褐色砂土が厚さ0.5m程度堆積している。

調査区南側では粗い砂層と黒褐色砂土が堆積しており、その境界から木製品が出土した。この箇所での黒褐色砂土の厚さは0.3m程度である。またトレンチ南東部のセクションを除去したところ、木組みを確認した。掘り広げたところ、長さ0.9m幅0.6mの板戸状の木組みとなる。自然流路内に弥生中期～中世初期の遺物が散漫に包含されていたことから、下層遺構の有無と自然流路の形成過程を確認するため、掘り下げを実施した。

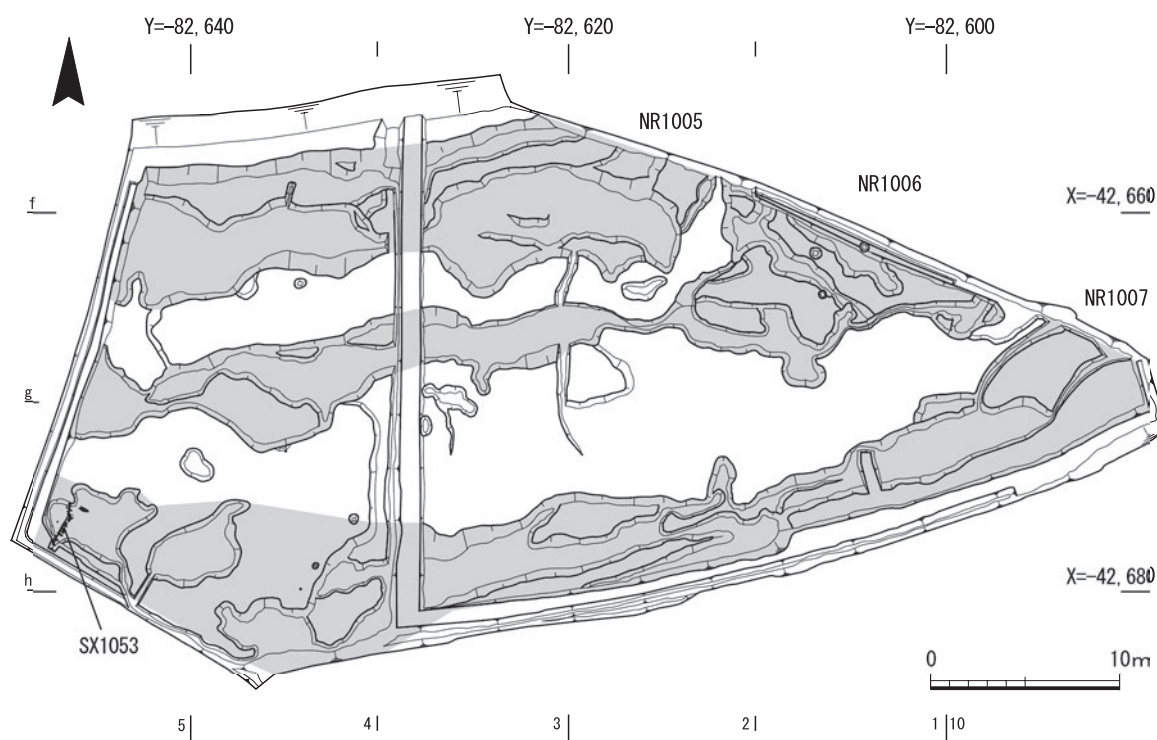
第1遺構面下層では土層の層序を確認しながら、平面的な掘り下げをおこなったが、明瞭な盛土層は存在せず、また、第1遺構面を形成する土層と自然流路内埋土に弥生時代～中世初期の遺物が包含されていた。堆積の単位等の観察の結果、北側段丘から流れ込んだ中世初期までに発生した複数回の土砂流によって第1遺構面までの土層は形成され、途中複数方向の水流が発生し、流路となっていたことが判った。また、第2遺構面では流路内で堰を検出した。帰属時期の特定は困難であった。

空撮後、同遺構面を人力で平面的に掘削し作業を進めたが、黒色砂質土と白色砂質土が互層堆積しているながらも、層序や層単位広がり把握できず、どの層からも遺物が出土する状況であった。そのため、北側段丘上に展開していた遺構面が、自然作用によって遺物を含んだまま、標高の低い1区に押し流されたため、不規則な単位での堆積層が形成されたものと考えた。

第2遺構面での重機掘削は、赤褐色粗砂層が面的に広がる高さまで行った。精査を行ったところ、黒色砂質土の堆積が南北方向に3条確認できた。北から自然流路NR1005・NR1006・NR1007とした。自然流路NR1007は第1遺構面で検出した S X 1078とほぼ合致する。自然流路とはいっても常時流れがあったわけではなく、ローブ状堆積にできた後背地に滞留した泥土が沈殿堆積したものである。

#### ①自然流路NR1005

段丘崖直下に位置する。東岸は高位段丘へと続く平坦面で、標高36.2m前後を測る。北岸から流路底までは急激に落ち込み、落差は1m程を測る。南岸は標高35.8m前後で、深さは0.5m前後となる。底部は南から北へ向けてわずかに傾きをもっている。埋土は黒褐色(2.5YR2/1)砂質土で1～5mmの砂粒を含んでいる。基盤面は一様ではなく、色味の異なる(赤褐色・灰白色・青



第31図 1区第2遺構面遺構配置図(S=1/400)

灰色・灰色・暗灰色)砂の堆積である。

#### ②自然流路NR1006

NR1005の南側、調査区を東西方向に流れる。北端はNR1005との境界が不明瞭である。北岸の標高は35.7m前後で、南岸の標高は35.5m前後である。溝底は東側で35.5m前後、西側で35.2m前後である。北岸と南岸では緩やかな段差をもつ。水流は東側から西側へとなる。埋土は黒褐色(7.5YR2/2)砂質土で1～5mmの砂粒を含んでいる。この土層はNR1005の埋土上層にも堆積することからNR1005埋没後の土砂流により形成された堆積流路である。

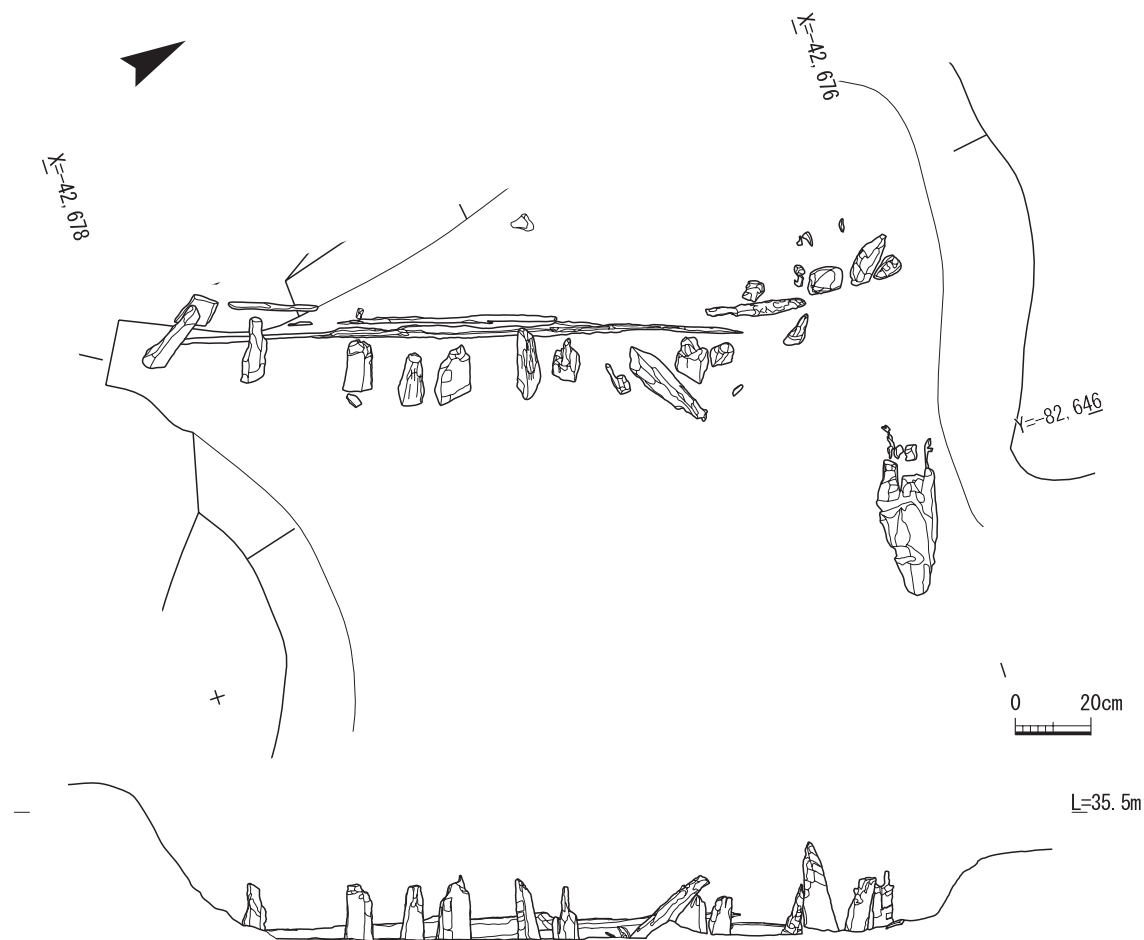
#### ③自然流路NR1007

S X 1078の下層にあたる。北岸の標高は35.4m前後から35.6m前後と中央付近が低くなる傾向をもつ。南岸は大半が調査区外となる。溝底は東側が35.5m前後、西側が35.0m前後と東側から西側へと傾斜をもつ。深さは、東側で0.3m程度、西側で0.5m程度を測る。埋土は1～5mmの砂粒を含み、下層に木質を含む黒色(7.5YR2/1)砂質土と、1～5mmの砂粒を含む黒褐色(2.5YR3/1)砂質土である。

#### ④木組み遺構 S X 1053(第32図)

1区南西隅で検出した。埋没した自然流路NR1007の川底から木杭などを用いた堰状の構造物を検出した。杭の打たれた箇所は2か所に分かれ、西側が15本、そこから東側へ約2.5m離れた箇所に6本を確認した。多くの杭の頭部が標高35.3m前後で腐食している。

西側の杭列の打たれた延長は2mで、さらに南側に続くものと思われる。北側に続く杭の痕跡は確認できず、現状の位置が北端になる。杭は長さ1.2m幅約0.1mの横木を複数枚挟むように打たれている。残存部長さ0.3m前後の木杭を根本に対して頭がやや西向きに傾いて杭列を作る。木



第32図 木組み遺構 S X1053平・断面図 (S = 1/200)

杭の大半は割り材で先端を尖らせる加工を行っている。

東側の杭列の打たれた延長は0.6mである。北側に離れた位置でも数本の杭を列をなす状態で確認しており、現状の位置が北に伸びていた可能性が高い。南側の杭の根元には薄い板材を複数枚配置している。木杭は根本に対して頭がやや西向に傾く。

杭列が全体に西に傾く傾向は、東からの水圧の影響と考えられる。

## 2) 出土遺物

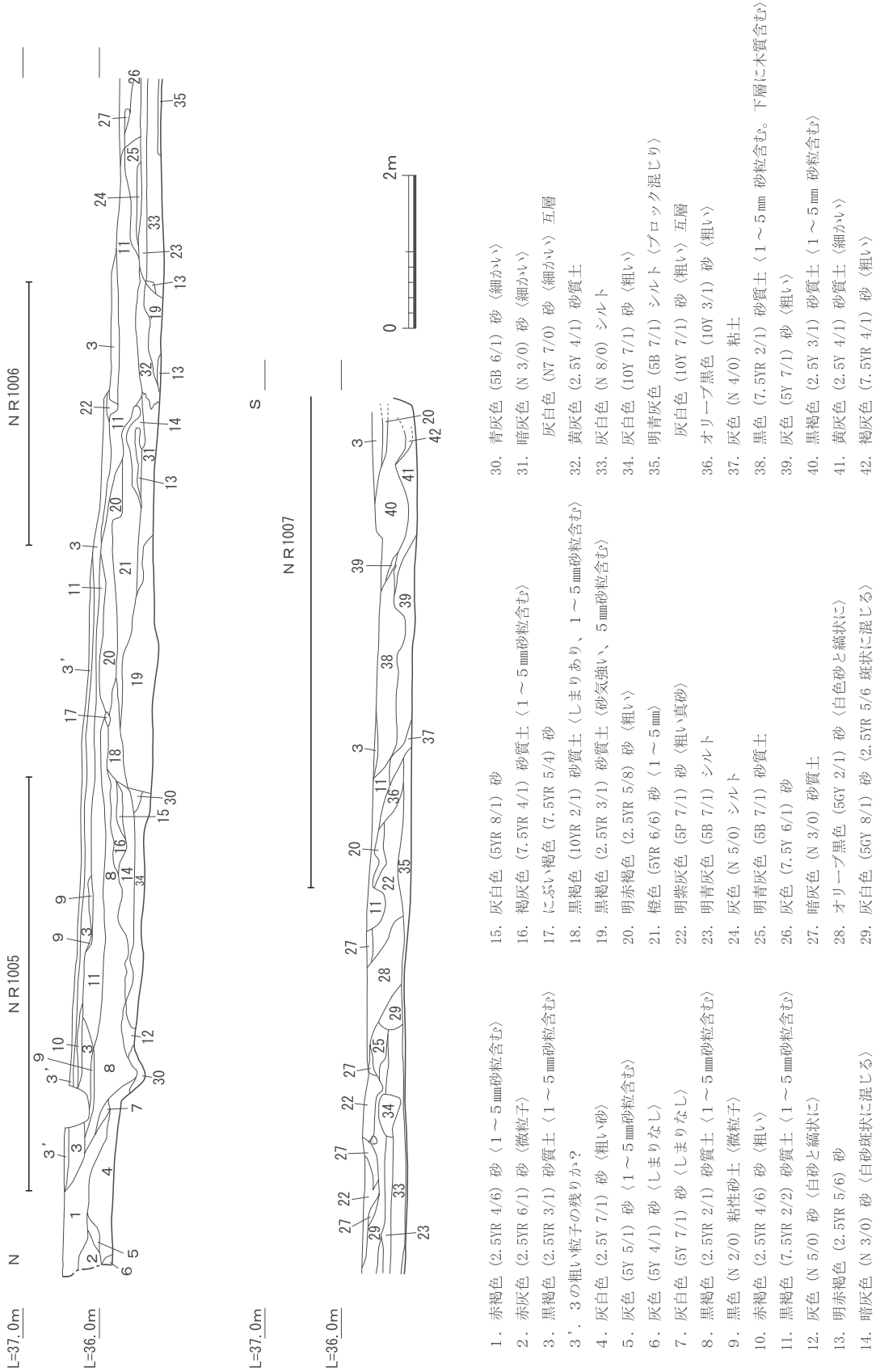
### (1) 土器・土製品(第34～39図)

#### ① S B 1002構成ピット

126～128は掘立柱建物 S B 1002構成ピットから出土した。126は S P 1094から出土した白磁碗の小片である。口縁部を玉縁にする。127は S P 1094から出土した黒色土器の碗の小片である。外面のミガキはやや粗いが内面は密に施す。体部は直線的である。128は S P 1095から出土した黒色土器の碗である。平底の底部にはケズリを施す。体部内外面にはミガキを施している。見込み部分に十字の刻線があり、外面にも複数の刻線がある。

#### ② 柱穴

129・130はピット埋土から出土した。129は S P 1030から出土した黒色土器の碗の小片である。



第33図 1区南北断面図(S=1/80)

内外面共に密なミガキを施す。外面に墨痕が残る。130はS P 1091から出土した黒色土器の椀の小片である。内外面共に粗いミガキを施す。

③土色変化(S X 1054、S X 1055、S X 1065)

131・132は土色変化S X 54から出土した。131は瓦質土器で、鍋の口縁部である。132は瓦器椀の小片である。外面口縁部に粗いミガキを施し、体部にはユビオサエ痕が残る。内面はミガキを施し、口縁部に沈線が巡る。

133は土色変化S X 1055埋土から出土した白磁椀の小片である。丸みのある体部から口縁部を僅かに外反させて収めている。

134は土色変化S X 1065から出土した。土師器皿の小片である。

④自然流路NR1005

135～164は、第2遺構面で検出した自然流路NR1005の埋土である黒褐色砂土から出土した。

135・136は弥生土器である。135は高杯の口縁部である。口縁部を円盤状に拡張し、端部を下方に大きく屈曲させる。136は小片で、甕もしくは壺の肩部と思われる。粃殻の圧痕が残る。

137～153・155は須恵器である。137～140は杯蓋である。137は有蓋高杯の蓋と考えられる。138はつまみをもたない。139にはつまみの痕跡がある。140は環状のつまみ部分である。141～144は高台部をもつ杯Bである。141は高台部が剥離しているが、その内側には「西」の墨書がある。145は皿である。146は高台をもつ壺の下半部である。147・148は甕の口縁部である。147は口縁端部を上方に拡張し、面をつくる。148は口縁端部を上下に拡張し、それぞれ面をなす。149は横瓶の口頸部である。口縁端部を下方に拡張する。150は平底の壺の底部と思われる。151は径10cm程度の円面硯で、透かし穴をあけた脚の部分が一部残存する。152・153・155は椀である。152・153は口径15cm前後を測る。いずれも底部に高台をもたず糸切り痕を残す。155は底部の破片である。155は高台をもたずに糸切り痕を残す。

154は、貼り付け高台をもつ灰釉陶器椀の底部の破片である。

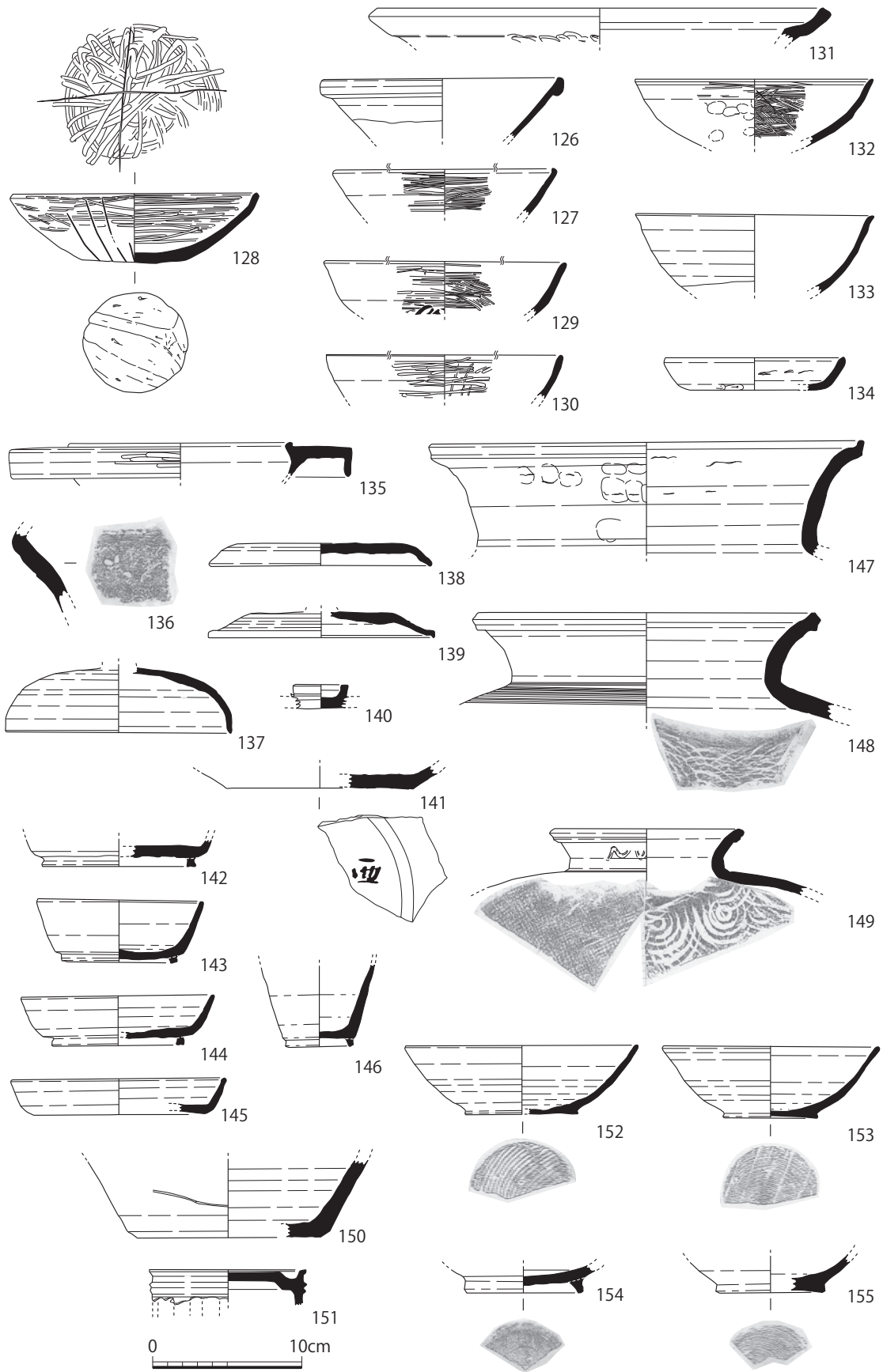
156～159は土師器である。156は皿で高台をもたず、底部に糸切り痕を残す。157は小型壺で底部を欠くが、丸底になるものと思われる。口縁部は強くなでて、くびれをなすため二重口縁となる。158・159(4g出土)は高杯で、158は杯部、159は脚部である。

160～162は黒色土器の椀である。内外面ともにミガキを施す。底部に残る161は高台をもたず、糸切り痕が残る。口径のわかる160・162は15.5cm前後を測る。163は無釉陶器である。高台を削り出し、底面外側はナデにより平滑に仕上げている。見込みには重ね焼きの痕跡が残る。164は土錘である。径3.5mmの孔をもつ。

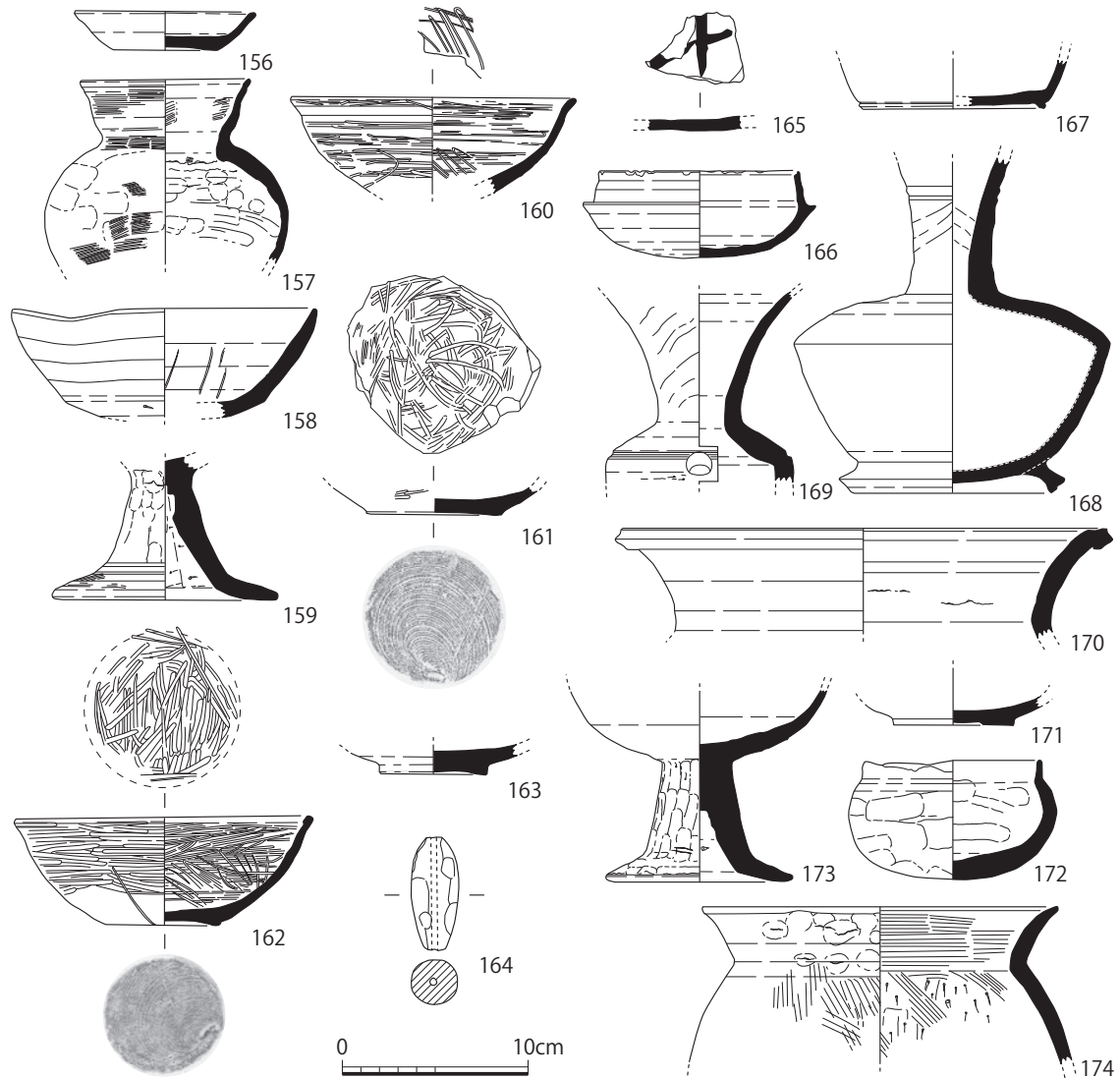
⑤自然流路NR1006

165～174は、第2遺構面で検出した自然流路NR1006の埋土である黒褐色砂土から出土した。

165～170は須恵器である。165は小片で、墨書があるが判読できない。166は杯身である。167は高台をもつ杯身(杯B)である。高台内側に沿って爪形の圧痕が巡る。168(3g出土)は長頸壺である。強く屈曲する肩部をもち、細長い口縁部が立ち上がる。169は甕である。170は甕の口縁



第34図 1区出土土器・土製品1



第35図 1区出土土器・土製品2

部である。端部を上方に若干出し、下方に折り返して拡張している。

171は緑釉陶器の底部である。蛇目高台を削り出す。釉はオリーブ灰色(2.5GY7/1)である。

172～174は土師器である。172は鉢である。体部は丸みをもち、短い口縁部を上方に立ち上げる。173は高杯である。杯部は丸みを帯びた椀形である。174は甕である。口縁は、くの字に開く。体部外面に粗いハケを施し、内面にケズリや粗いハケを施す。

⑥自然流路S X 1078

175～185は、第1遺構面で検出したS X 1078の埋土である黒褐色砂土上層から出土した。

175は弥生土器の台付き鉢もしくは高杯の脚裾部である。

176は須恵器の杯Bである。

177～180は土師器である。177～179は皿で、177は口径15cm程度、178・179は口径8cm程度を測る。180は器壁が厚いことから竈の基底部分の一部と思われる。

181～183は黒色土器である。181・182は椀で、口径16cm余り、器高5cmを測る。内外面共に

ミガキを施し、底部に糸切り痕を残す。183は小型の壺である。

184は青磁椀である。185は白磁椀である。高台を削り出し、口縁を玉縁にする。

#### ⑦自然流路NR1007

186～190は、埋土である黒褐色砂土から出土した。

186(4 h 出土)は縄文土器である。曲線的な太い沈線で模様を構成する。

187・188は須恵器である。187は杯B。188は高台をもつ壺の底部である。

189は土師器の高杯脚柱部である。

190は緑釉陶器の底部である。高台を削り出す。釉は灰白(5Y7/2)を呈する。

#### ⑧包含層

木組み遺構 S X 053北側 191～206は、S X 1053北側に堆積した真砂土から出土した。

191～193、197、198は弥生土器である。191は壺の口縁部である。上下3条の凹線文帯の間にハケを施す。192は壺の肩の部分と思われ、線刻が残る。193は壺の肩部に把手をひとつ付けた水差しである。197は壺もしくは甕の底部で、径1.5cmの孔を開けている。198は蓋である。つまみ部分は小さく中央を窪ませユビオサエで作りだしている。

194・195は土師器である。194は口縁部がくの字に開く甕である。体部外面にハケを施し、内面をヘラケズリする。195は高杯で、196は台付き鉢もしくは台付き壺の脚部である。199～203は須恵器である。199～202はいずれも立ち上がりと受部をもつ杯身である。199は口径14cmと大きく、立ち上がりも長い。体部に回転ヘラケズリを施す。200は口径12cm程度で、立ち上がりは短く内傾する。体部に回転ヘラケズリを軽く施す。201は口径11cm程度で、立ち上がりは短く内傾する。底部はヘラ切りする。202は口径9.6cmと小さく、立ち上がりはかなり短い。底部は小さく、体部は受部にかけて直線的に開く。203は瓶類の体部下半部である。底部は平底で大きく、体部下半に回転ヘラケズリを施す。204～206は土師器である。204は口径8.9cm・器高8.7cmを測る小型丸底壺である。205は口径10.5cm・器高12.7cmを測る丸底壺である。いずれも体部にハケを施す。206は手づくねの椀である。

第1遺構面 207～217は、第1遺構面精査中に出土した。

207(4 h 出土)・208(4 h 出土)は真砂土から出土した弥生土器である。口径50cmを超える大型壺の口縁である。口縁端部を上方へ長く引き上げ面を作り、凹線文を施す。

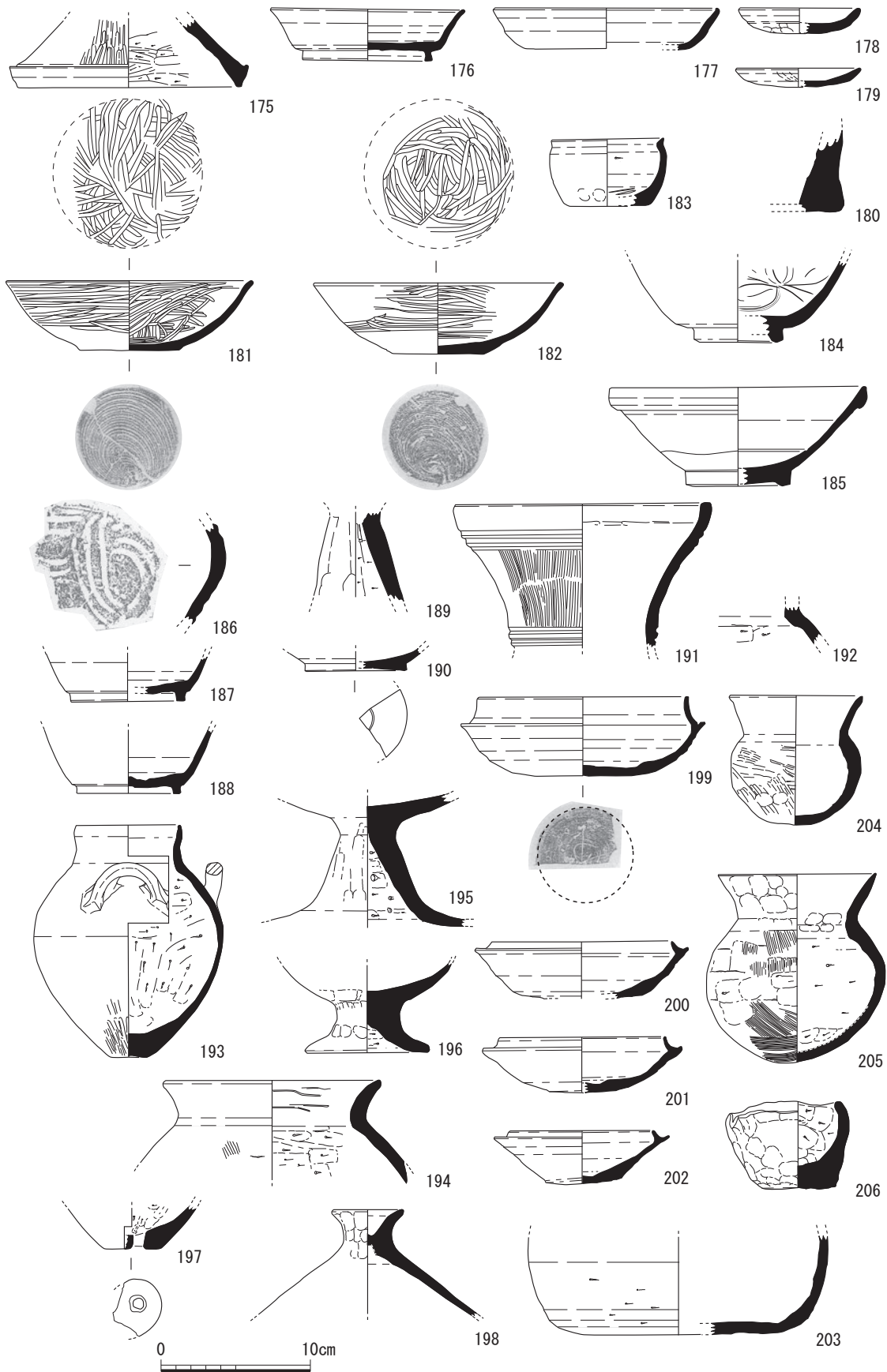
209(3 h 出土)は須恵器である。杯Bで、底部外面に墨書があるが、判読できない。

210～213は土師器である。210(4 h 出土)・211(4 h 出土)は小型丸底壺である。210は口縁部を強くなで、二重口縁とする。211はくの字状に開く。212・213(3 h 出土)は皿である。212(1 g 出土)はS P 1097検出上面で出土した。口径8.2cmを測る。213は口径14.9cmを測る。ユビオサエにより全体の形を整えている。

214(3 h 出土)は瓦器椀の小片である。外面にはユビオサエ痕が残り、内面を圏線ミガキする。

215(4 h 出土)は黒色土器の椀である。内外面共にミガキを施し、底部に糸切り痕を残す。

216(3 f 出土)は白磁の底部である。高台を削り出し、見込みに圏線をもつ。217は陶器の小片で



第36図 1区出土土器・土製品3

ある。天目茶碗の可能性が高い。

**第 2 遺構面** 218～225は、第 2 遺構面の調査中に出土した。

218・219は口縁部に擬凹線文を施す弥生土器である。

220・221は須恵器である。220は杯蓋で、かえりをもたない。221(4 f 出土)は杯Bである。底部に墨書があるが、判読できない。

222は須恵質陶器の小片で、東播系の鉢である。

223(4 h 出土)・224(4 h 出土)は土師器の甕である。225は黒色土器の碗の底部である。底部に糸切り痕を残す。墨書があるが判読できない。

**黒褐色砂土** 226～272は、第 1 遺構面下に堆積した黒褐色砂土から出土した。

226・227は古墳時代前期の土師器の二重口縁壺である。

228～236は須恵器である。228・229は杯蓋である。口径13～14cm・器高4cm前後を測り、丸みを帯びた体部をもつ。230は杯Bである。231は皿である。232は甗である。口縁部を欠く。233は甕の口縁部である。口縁端部を外側に肥厚させる。234は円面硯の小片である。235は碗の底部である。糸切り痕が残る。236は片口鉢である。

237～247は土師器である。237は碗の小片である。内外共に明赤褐色(2.5YR5/8)の赤色顔料が塗布されていた可能性が高い。238～245は皿である。238～242は口径10cmに満たない。238・241は底部に糸切り痕を残す。243～245は口径11cmを超える。243・244は強いナデによって段を成すのに対し、245は軽いヘラケズリが施される。246は器壁が厚く、粗雑な作りである。247は高杯の脚裾部である。

248はの三足付羽釜である。

249～253は黒色土器である。249～252は碗の小片である。内外面共にミガキを施す。249は外面に墨書が残るが、判読できない。253は皿である。底部に糸切り痕を残す。

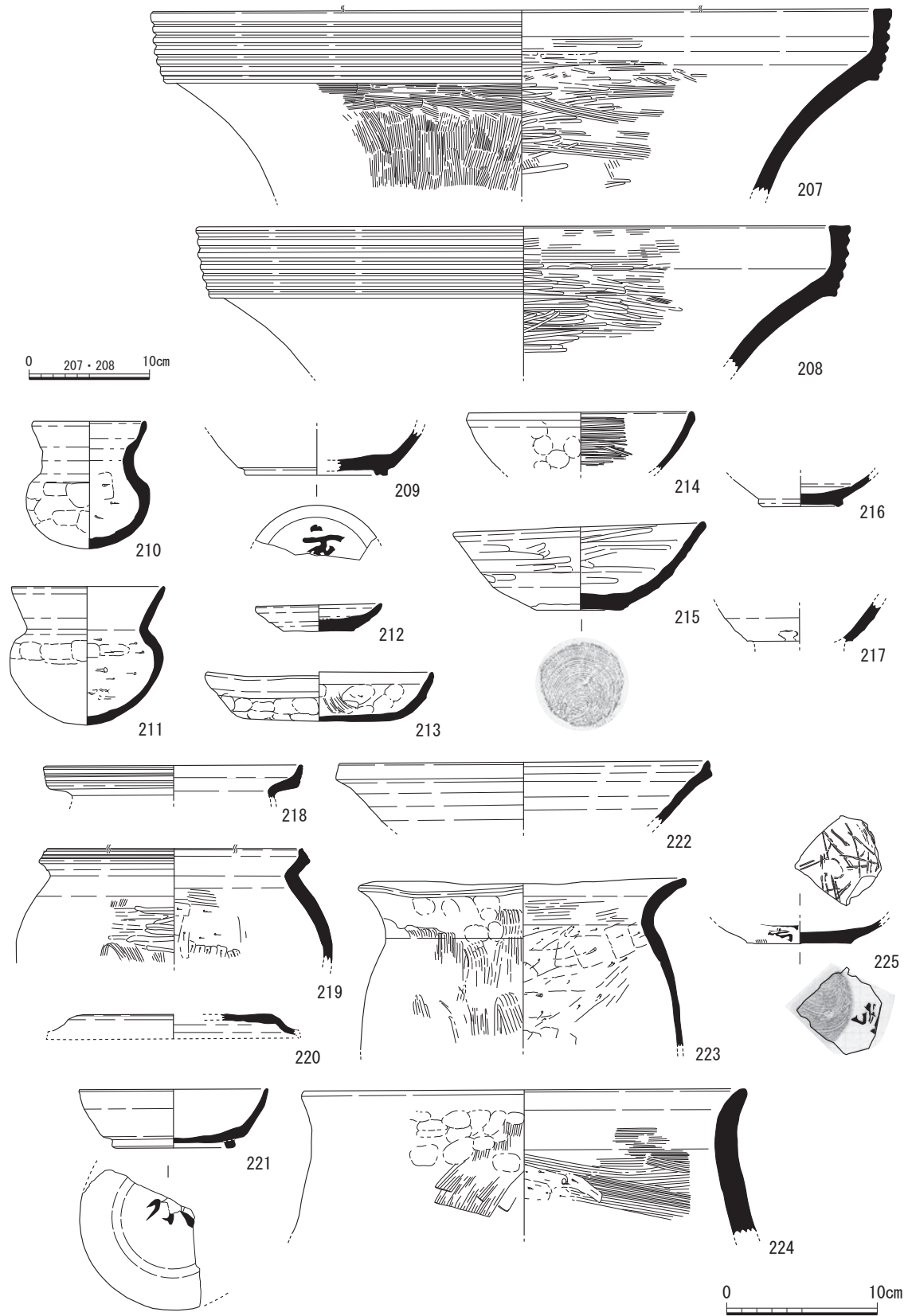
254～258は瓦質土器である。254は鉢の小片である。体部は直線的で、口縁部で段を作る。255は小片で器種の判別は難しいが、火鉢と思われる。256・257は鍋である。口縁部のみの小片である。いずれも口縁部を屈曲させて収めている。258は甕の一部と思われる。矢羽根状のタタキ痕を残す。

259・260は緑釉陶器である。259は底部で輪高台を削り出している。灰色(N5/0)である。260は耳皿の底部で、口縁部を欠く。立ち上がりにわずかな変化が確認できることから耳皿とした。底部に糸切り痕を残す。釉は暗緑灰色(10GY3/1)と灰黄色(2.5Y6/2)で、篠窯産と考えられる。

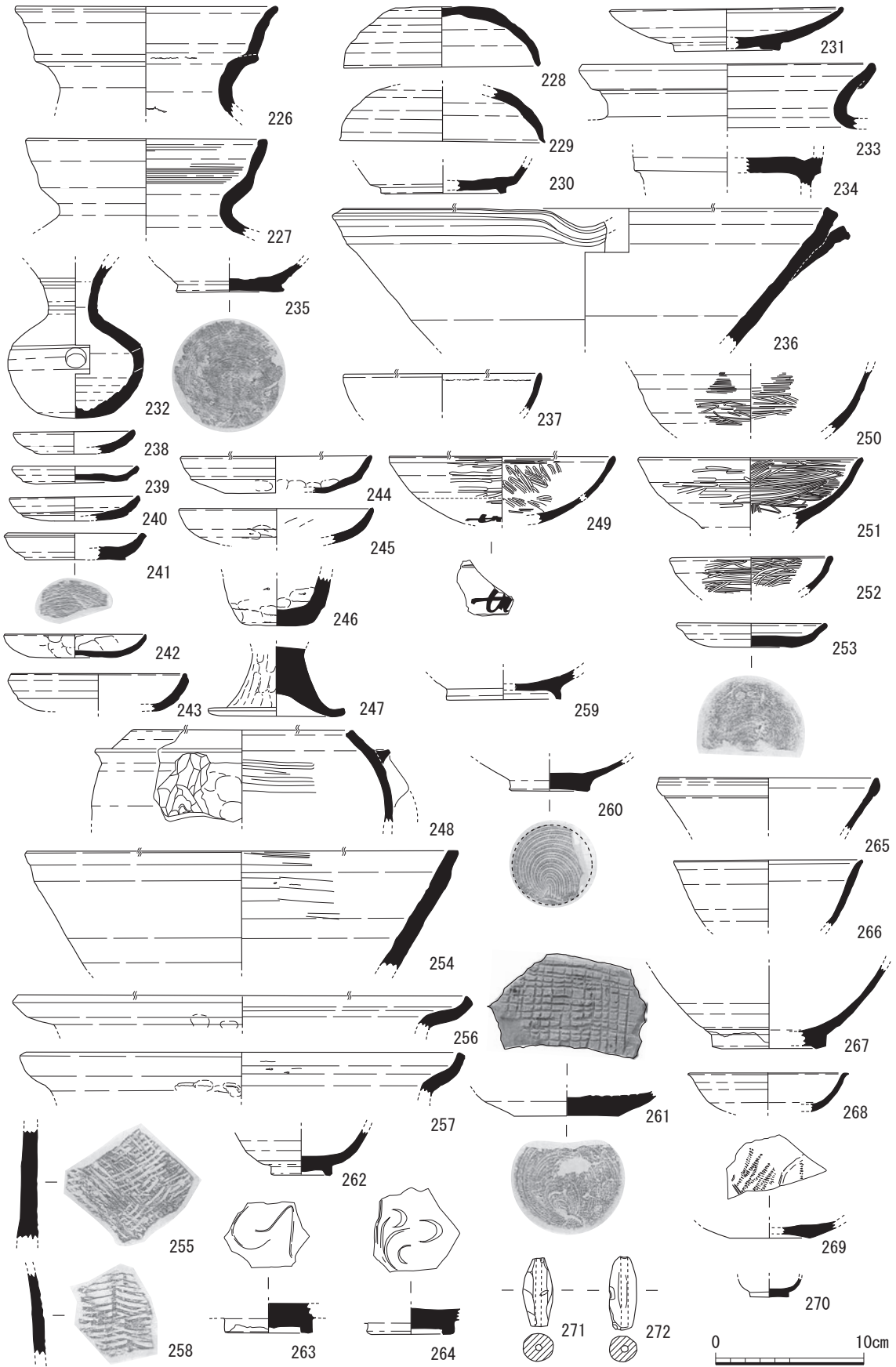
261は灰釉陶器のおろし皿である。おろし目を格子にしている。

262～264・269は青磁である。262は碗の底部で、高台は削り出しによる輪高台である。263・264は高台部の破片である。見込みに線刻が認められる。高台は削り出しによる輪高台である。269は皿である。

265～268・270は白磁である。265～280は碗である。口縁端部を265は玉縁とし、266は外側上方へ引き出し、268は外反させる。267は口縁部を欠く。269・270は底部の破片である。271・272



第37図 1区出土土器・土製品4



第38図 1区出土土器・土製品5

は土錘である。紡錘形をなし、271は径4.0mmの孔を、272は、径4.5mmの孔をもつ。

真砂土 273～305は、真砂土から出土した。

273～280・282は弥生土器である。273は、大きく外反する口縁をもつ広口壺で、口縁端部上面に1条の凹線を、頸部に3条の凹線文を施す。口縁部の4分の3が残存し、口径23.6cmを測る。274は、頸部から口縁部が短く開く短頸壺の口縁部である。口縁端部を主に上方に拡張して面を作り、凹線文を施したのち棒状浮文を貼る。275は水差しの肩部である。横位の橋状把手の痕跡が残る。276・277は壺もしくは甕の底部である。278は、高杯の杯部で、口縁部と杯部の境に1条の凹線を施す。279は高杯の脚部で、脚柱部下端に2条の凹線を施す。280は、高杯もしくは台付き鉢の脚部で、脚柱部を10条の沈線(退化凹線文)で加飾する。透かし穴を4方向に穿つ。273～280までは、弥生時代中期後葉から末に属する。282は、弥生時代後期のつまみ部が大きい蓋と考えられる。281は脚端部を拡張せず、中実の脚柱部をもつ古墳時代前期の高杯の脚部であろうか。

283～291・293は須恵器である。283・284は杯蓋である。丸みを帯びた体部をもつ。283は天井部に回転ヘラケズリを施し、284はヘラ切り痕が認められる。285～288は杯身である。285・286は受部をもつ。立ち上がりは短く内傾する。底部にはヘラ切りの痕跡が認められる。287・288は高台をもつ。289は壺の口縁部で、口径10.6cmを測り、2条の突帯の間に波状文を施す。290は甕で口径42.0cmを測る。291は高台をもつ鉢である。底部下半から外反する。293は椀で、口縁部を欠き、底部に糸切り痕を残す。

292は緑釉陶器の底部片である。輪高台を削り出し、施釉する。釉はオリーブ灰色(10Y6/2)を呈する。

298は、頸部がくの字に屈曲し、内湾する口縁の端部を上方に摘み上げる弥生時代中期後葉の甕である。大型で口径22.4cmを測り、胴部が張る。

294～297・299～305は土師器である。294・295は小型丸底壺である。296～299は甕である。296は口縁部のみで、くの字に開く。297は長胴の体部で、歪みが大きい。外面にミガキを施し、内面をヘラケズリする。口縁部は短く外反する。299は口縁部と底部を欠く。外面にハケを施し、内面をヘラケズリする。300は皿である。301は鉢である。球形の体部から短い口縁部が立ち上がる。302～304は高杯である。302は、円形透かし孔を3か所にもつ。305は手づくねによる小型の壺である。

## (2) 石製品(第40図)

306は、NR1005から、それ以外は包含層(黒褐色砂土)から出土した。

308は打製石鏃である。凹基無茎式。刃縁に三角形の小突起をもつ。両面に大剥離面を残す。

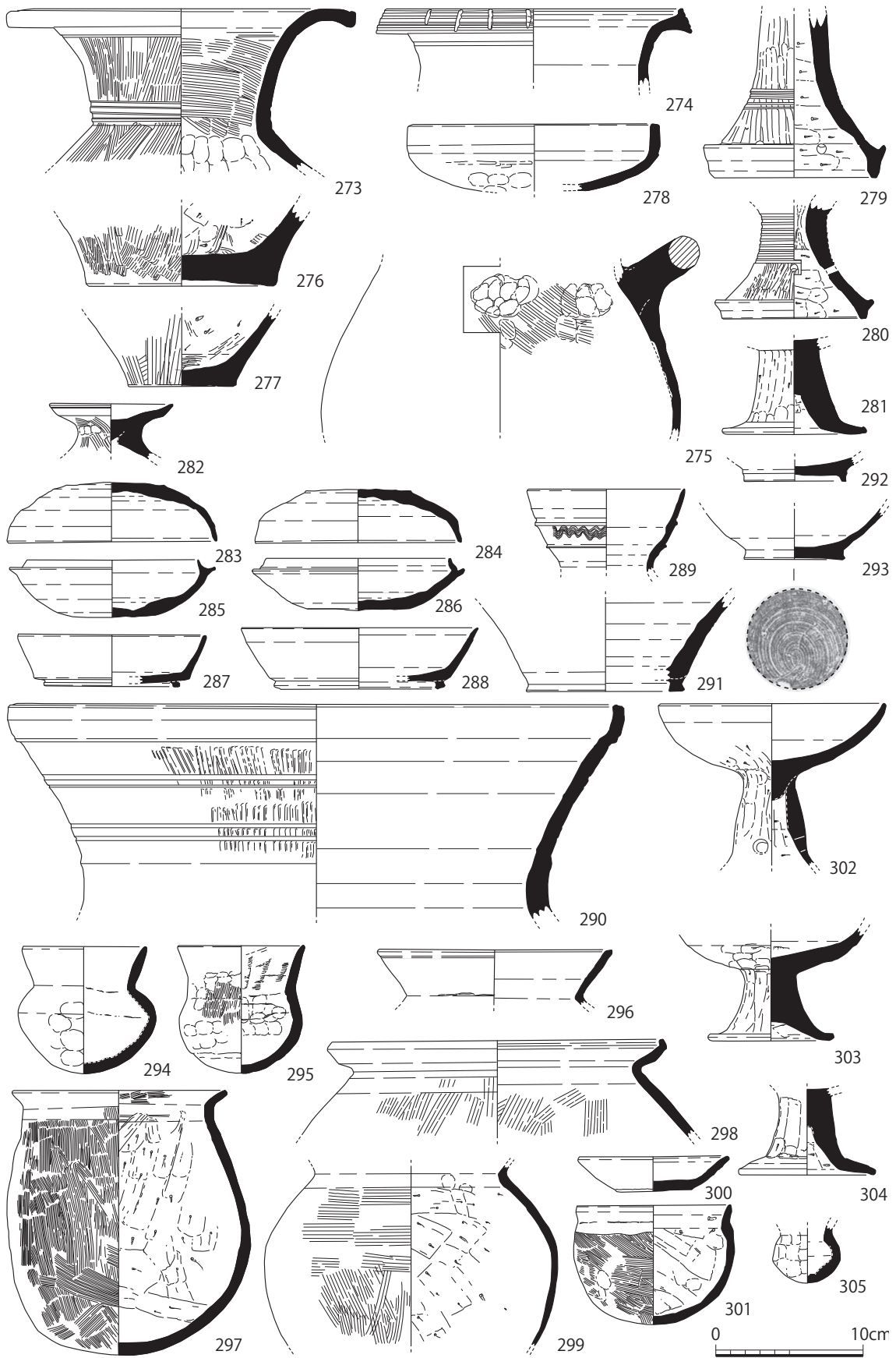
307は砥石である。6面ともに平滑で、使用感がある。

306は緑色凝灰岩である。玉製作に用いられる石材である。

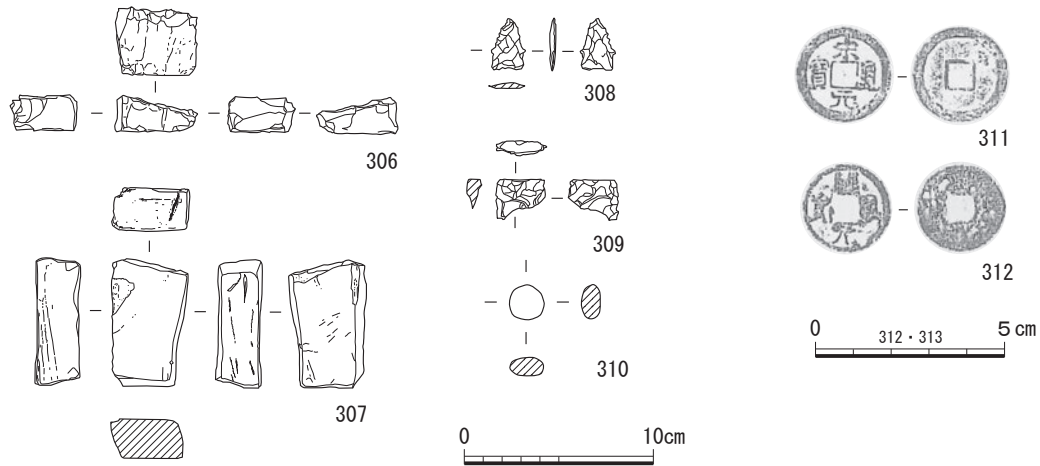
309は黒曜石を石材とする石器である。欠損するため全容は不明である。

310は丸みを帯びた白っぽい石で、基石の可能性はある。径1.8cm・厚さ1.0cmを測る。

## (3) 銭貨(第40図)



第39図 1区出土土器・土製品6



第40図 1区出土石製品、銭貨

311・312は銅銭である。包含層黒褐色砂土から出土した。311は宋通元宝(960年初鑄)である。312は開元通宝(621年初鑄)である。

#### (4)木製品(第41～48図)

ほとんどが黒褐色土層中から出土した。黒褐色土層は、土砂流由来の堆積層で、上流から流れ込んだものが埋もれたものと思われる。

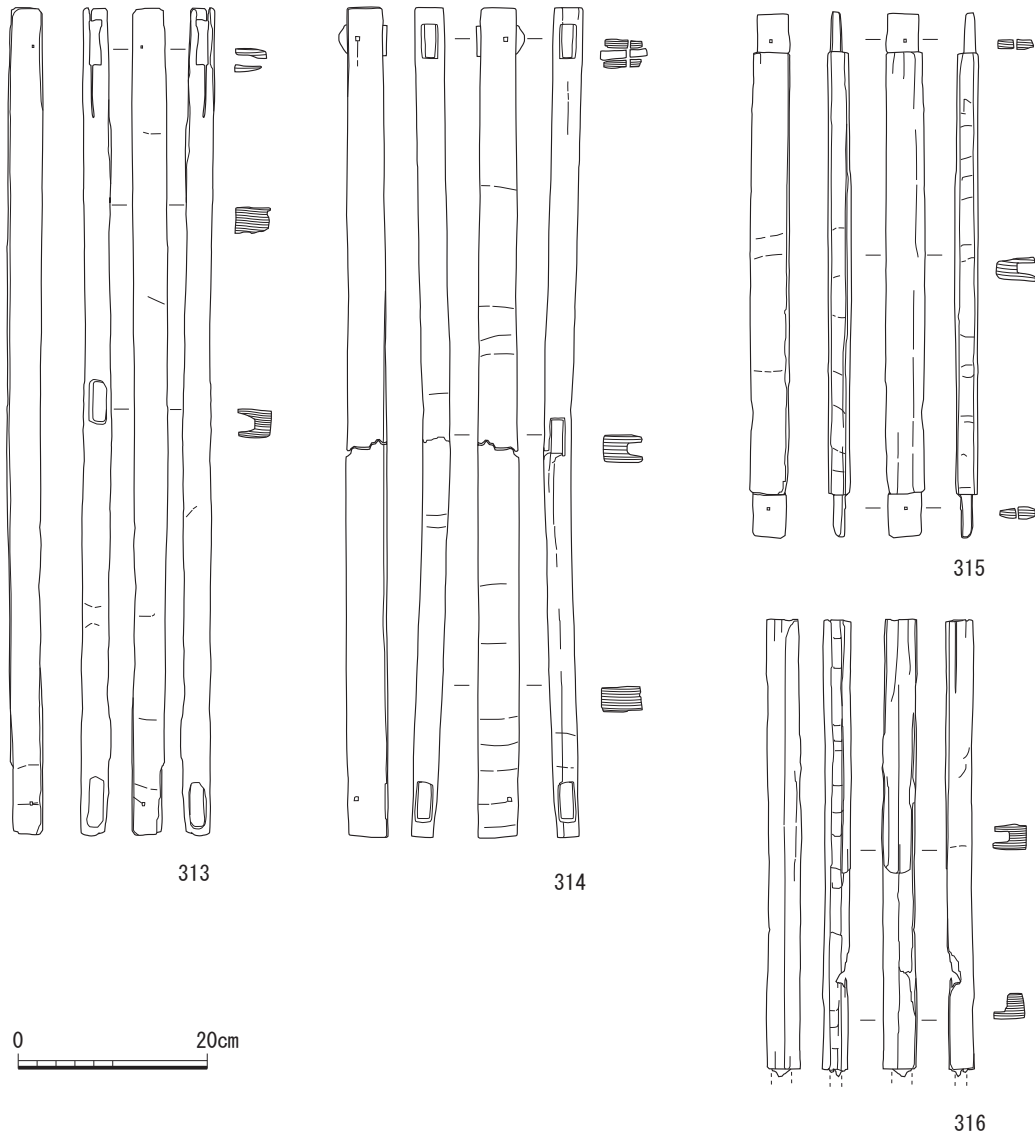
##### ①板戸

313～321は板戸(2h出土)である。S X1078から出土した。板戸の形状をほぼ保つものの、土圧のためか若干のひずみがある。推定される板戸の大きさは、縦約88cm×横約56cmである。

313・314は縦棧である。上下に通しほぞ接ぎのためのほぞ穴が穿たれる。中央には止めほぞ継ぎのための浅いほぞ穴が掘り込まれている。通しほぞ接ぎをする箇所はほぞ穴の側面に1か所穴を開け、栓を挿して固定する栓打ちほぞとしている。315・316は横棧である。両端にほぞを作り、板材を受ける溝を設ける。各ほぞには縦棧と栓で固定するための1か所穴を開ける。なお、縦棧の止めほぞ接ぎに対応する中棧の部材は残っていない。317～321は戸板の部材である。それぞれ長辺の両端を片面のみ削り、横棧の溝に落とし込み易く加工する。面は4枚の戸板でを構成する。この面を成す4枚を取り上げたところ、さらに下から317が出土した。317も横棧の溝に嵌まる状態にあったことから板戸を構成する部材である。したがって、部分的に2層になっている。317・320の板戸にはそれぞれ小さな四角の目釘穴が2か所開けられており、目釘も残る。各板戸を見ると、中央に変色する箇所が認められ、本来は中棧があったものと思われる。317・320にある目釘穴は中棧に両側から固定するために設けられたものと推測される。

##### ②下駄

322～329は下駄である。いずれも台と歯を一木で作る連歯下駄で、平面形を小判形とする。前壺の位置は中央にある。台板と歯の関係を見ると、歯が台板よりも広い323(3g出土)・325(3g出土)・327(2g出土)・328(2g出土)・329(2h出土)、歯と台板と同じ幅の322(3g出土)・324(3g出土)・326(3g出土)、の2通りのタイプがある。後ろ壺の位置は後歯の前方にあり、歯の側面観は開かない。歯の位置は独立する。

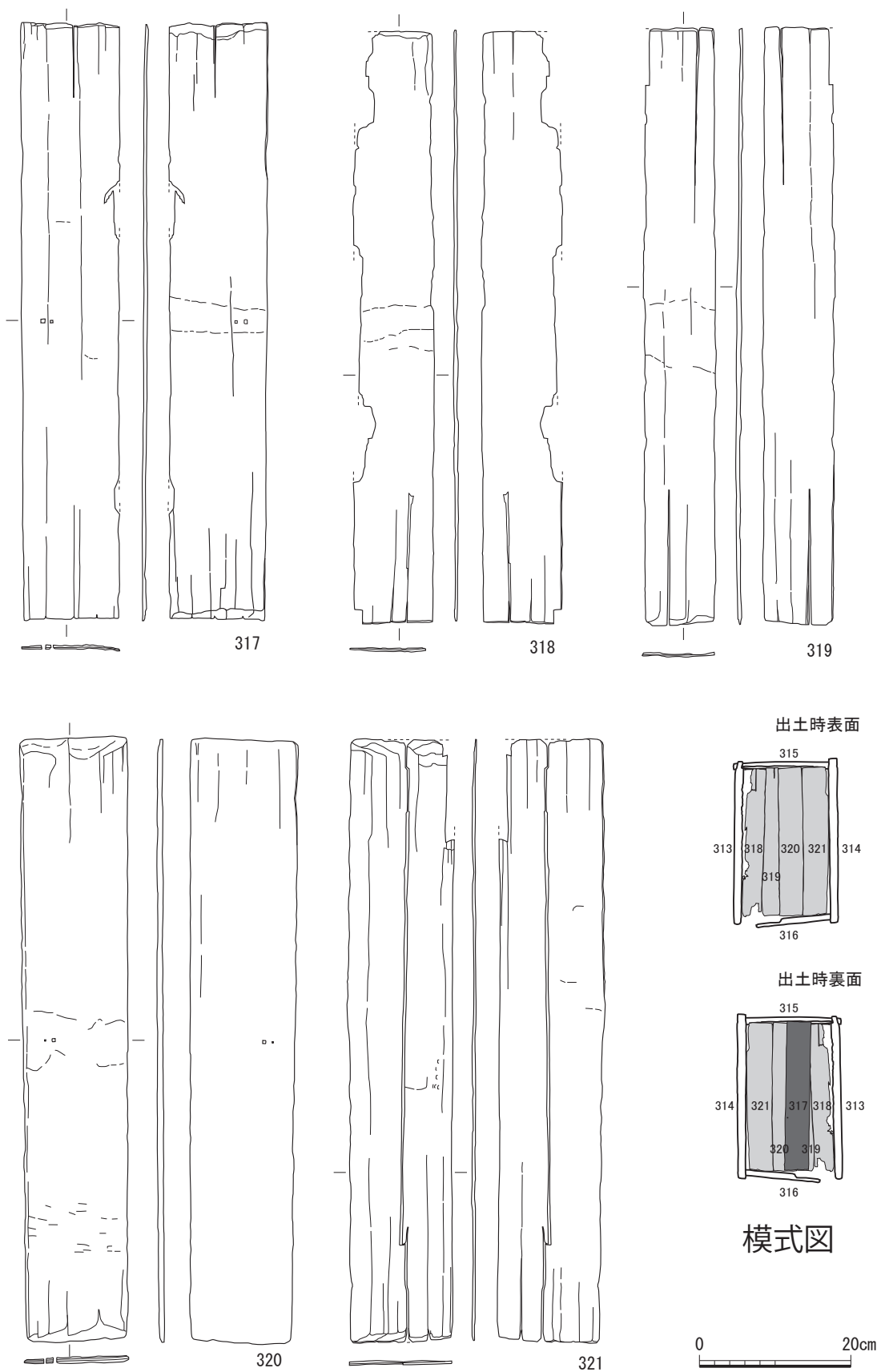


第41図 1区出土木製品 1

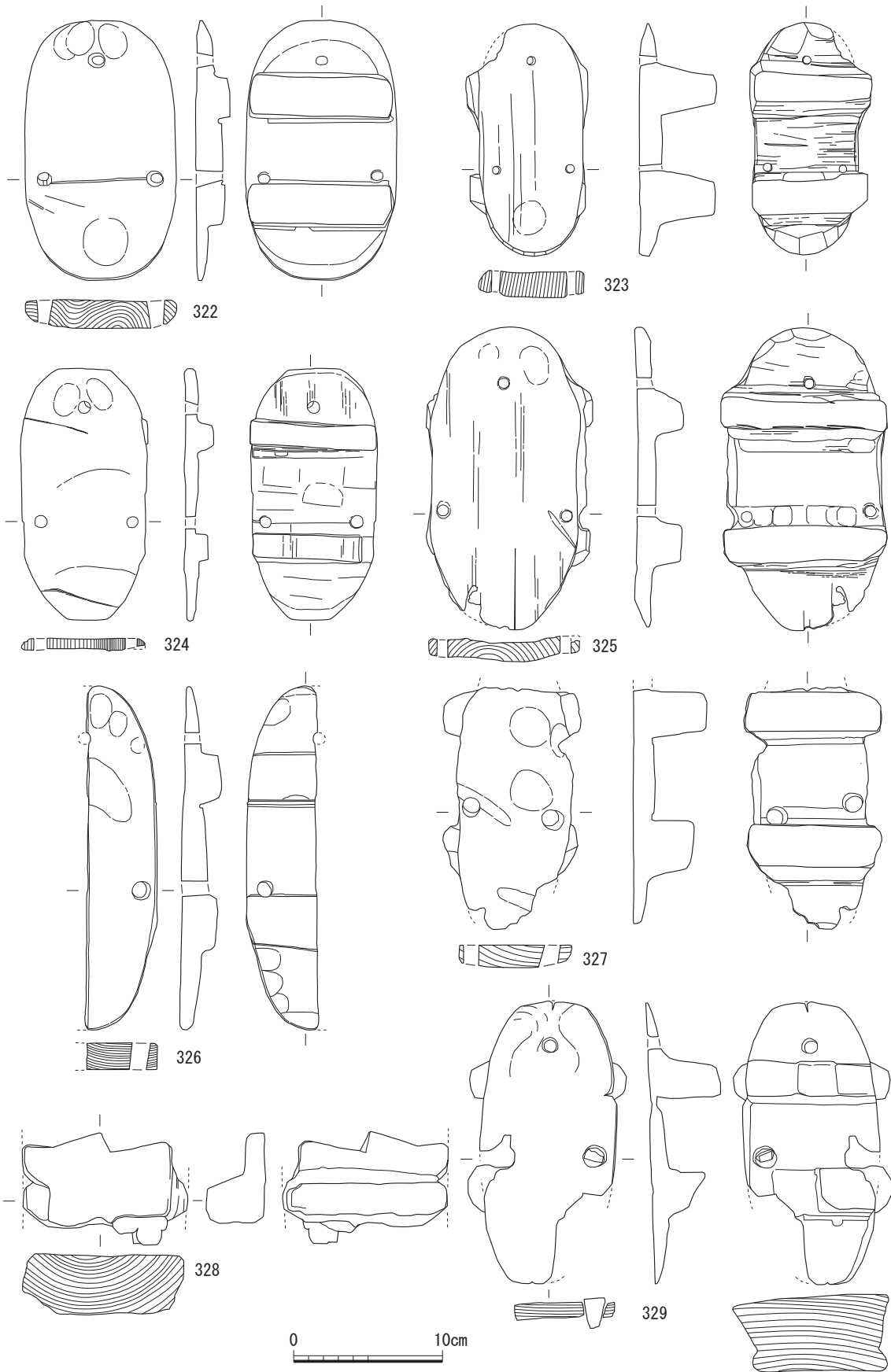
こうした観点に依る本村充保氏の分類では、322・324・326はⅢ形式、323・325・327～329はⅣ形式に該当する。いずれも古代から継続し、中世の下駄の主流となる形式である。使用のためか322・324～326は歯の摩耗が著しく、足形も明瞭に残る。なお、329の後ろ壺のひとつに栓が嵌めこまれている。

### ③折敷

330・332・334・336・337は、折敷の底板とした。330 (1g出土) は長辺58.2cm、短辺26.4cmを測る。2枚の長方形板を用い、隅切りする。側板近くに穿孔が5か所あり、側板と綴じ合わせたものと思われる。一部に目釘や桜皮が残る。332 (4fNR1005黒褐色砂土出土) は底板の一部で、長辺24.2cm、短辺7.1cmを測る長方形板である。隅切りは認められず、中央に置かれた板材であろう。短辺に穿孔があり、桜皮が残る。334 (4fNR1005黒褐色砂土出土) は底板の一部で、長辺31.8cm、短辺13.5cmを測る。隅切りが2か所認められる。3か所に穿孔があり、一部に目釘や桜皮が残る。336は底板の一部と思われる。角に隅切りがあり、1か所の穿孔がある。



第42図 1区出土木製品2



第43図 1区出土木製品3



第44図 1区出土木製品4

④曲物

338(2h出土)・339(S X 53出土)・340(2g NR1005黒褐色砂土出土)・341(4g NR1005黒褐色砂土出土)・342(第1遺構面黒褐色砂土出土)・343(第1遺構面黒褐色砂土出土)・344(3h・2h出土)は曲物で、338～342は底板、343・344は側板である。底板の338～340は正円形で、338・339は径約13cm、340は12.2cmを測る。339の側面には目釘を打ち込んだと思われる痕跡が残る。340は側面を斜めに面取りする。341・342は楕円形を呈している。341には穿孔がある。342の側面には目釘を打ち込んだ痕跡が1か所ある。344は片側辺に4か所穿孔が並ぶ。345(10g出土)・346(S X 53内出土)は曲物側板の一部である。

⑤人形、卒塔婆ほか

347・348は人形の可能性がある。347(2g東S X106黒褐色砂土出土)は頭部を表現したものである。顔に当たる位置に5か所の刺突があり、口・目・眉を表現している。348(2g出土)は縦方向に割れたものと思われ、頭部と腕部が削り出しにより表現される。349(1gNR1007出土)は卒塔婆形である。残存長32.4cm、幅3.4cmを測る。上部は頭部を尖らせ2段に切れ込みを入れる。下部は側辺を緩やかに削り、幅をもたせている。下部先端は細身になると思われる。350(2h出土)は太い胴部から左右に頭部と尾羽を側面から見て表現する。351(2h出土)・352(10g黒褐色土出土)は欠損部分があり、本来の形状は不明である。幅のある箇所から細く柄がのびる形状を成す。

⑥目釘付板材

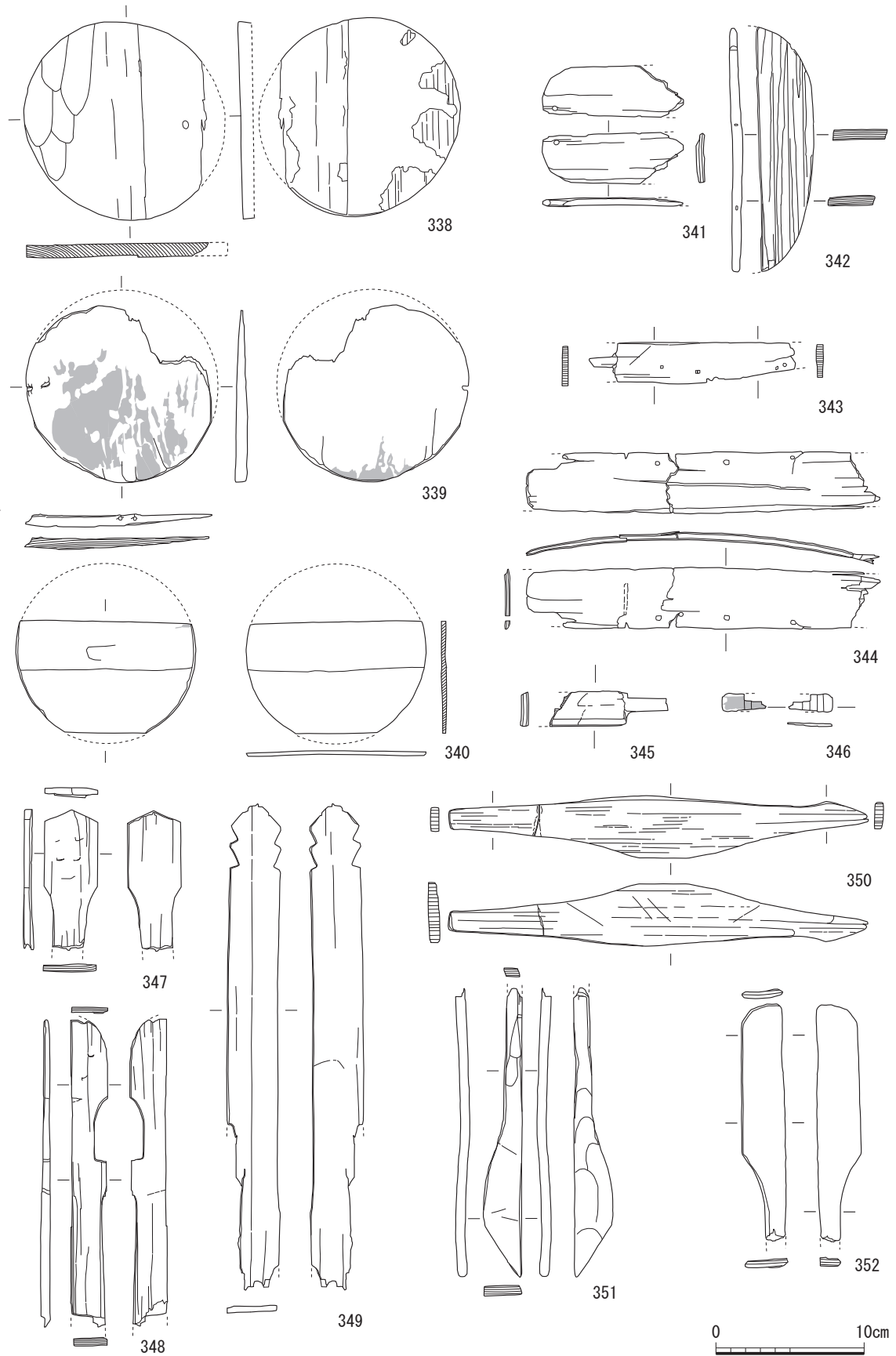
353～361は、目釘穴を連続させて開けた板材である。353(4g黒褐色砂土出土)は残存長53cm・幅3.2cm・厚さ1.2cmを測る。9か所の目釘穴が等間隔に並び、7か所に目釘が残る。片端は四角く終わる。片端は削りを入れて細身とするが、端部を欠損するため形状は不明である。354(3f・3g黒褐色砂土出土)は残存長50.9cm・幅3.4cm・厚さ1.0cmを測る。9か所の目釘穴が等間隔に並び、8か所に目釘が残る。片端は欠損のため形状は不明である。片側は一部欠損するものの、両側辺を削り、細くして終わる。355(3h黒褐色砂土出土)は残存長40.4cm・幅3.3cm・厚さ0.6cmを測る。5か所の目釘穴が等間隔に並ぶ。目釘は残らない。片端は四角く終わる。片側は欠損するため形状は不明。356(3gS X78出土)は残存長40.7cm・幅4.0cm・厚さ0.4cmを測る。目釘穴が2か所あるが目釘は残らない。両端との欠損のため形状は不明である。357・358(3f・3g黒褐色砂土出土)は同じ部材と思われる。幅2.3cm・厚さ1.0cmを測る。目釘穴が357に5か所と2か所にあり、目釘が4か所残る。片端は四角く終わり、片側は両側辺を削り、細くして終わる。359(5gNR1005黒褐色砂土出土)は残存長21.0cm・幅2.9cm・厚さ約0.4cmを測る。目釘穴が4か所あり、目釘が2か所に残る。両端とも欠損のため形状は不明である。片側は両側辺を削り、細くして終わる。片側は欠損するため形状は不明。361(3h出土)は現存長13.2cm・幅約2.3cm・厚さ0.4cmを測る。目釘穴が3か所あるが目釘は残らない。両端とも欠損のため形状は不明である。

この部材の共通点は、①帯状の板材である、②中央に連続して目釘穴を設ける、③木口側縁を削り幅を狭めることにある。こうした特徴から他の部材を連結や補強のための止め板として用いられた可能性が高い。

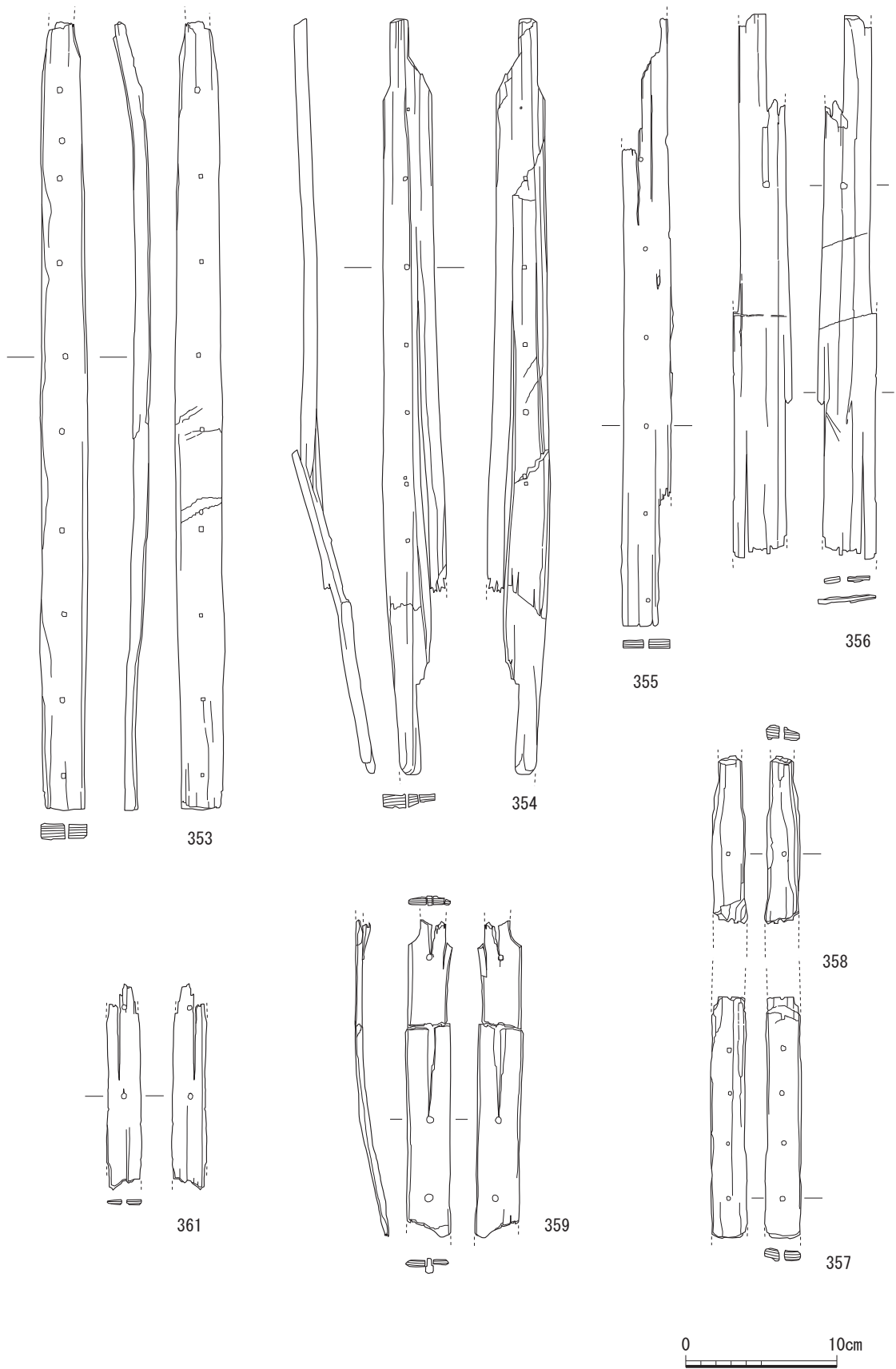
⑦先端加工木

362～369は、先端部に加工痕がある。

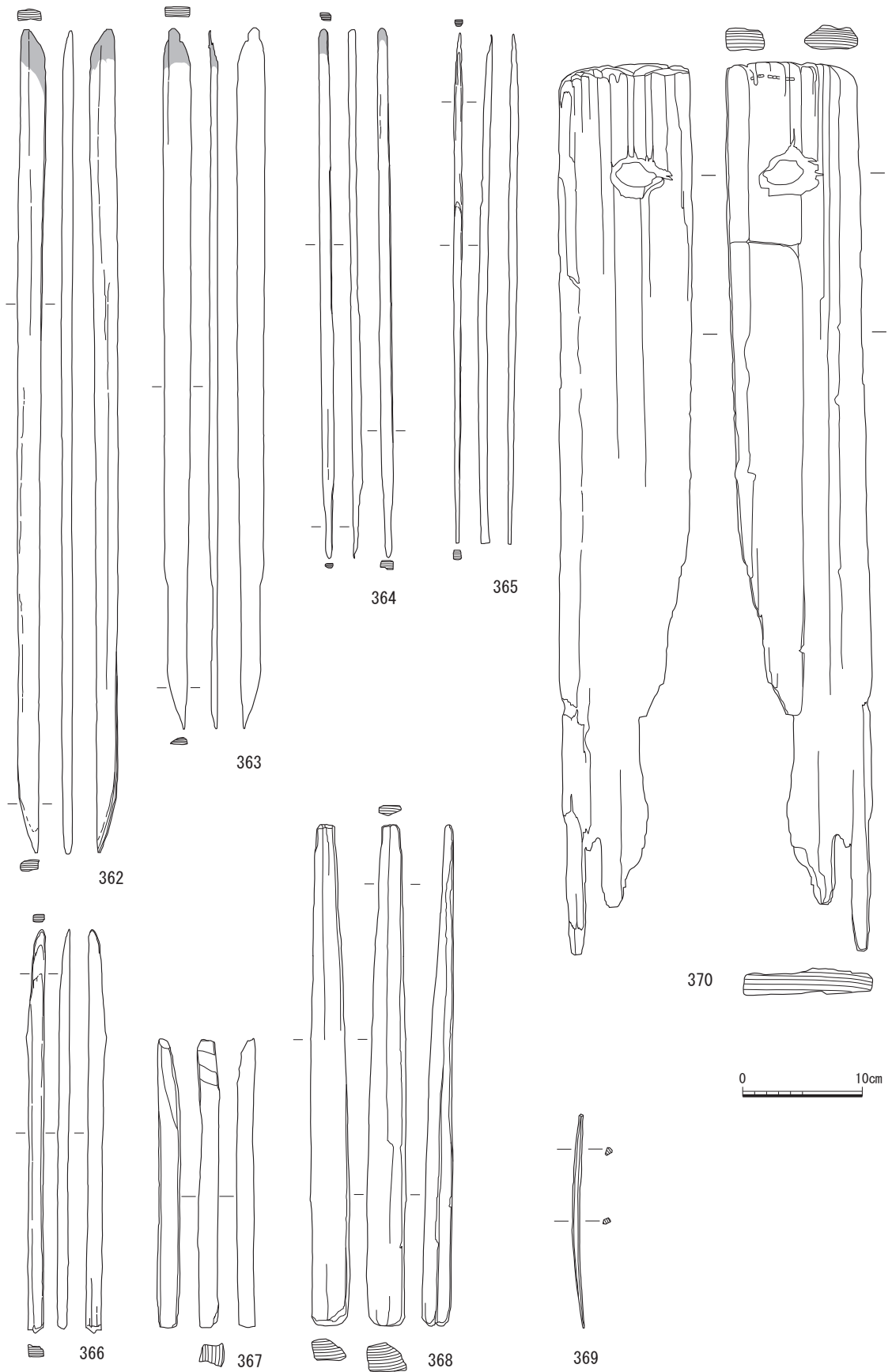
362～366は、2fNR1005黒褐色砂土から出土した。362は残存長69.1cm・幅1.9cm・厚さ0.5cmを測る。片端を鋭く尖らせる。片側に焼け焦げがある。363は残存長59.1cm・幅2.3cm・厚さ0.8cmを測る。片端を鋭く尖らせる。片側に焼け焦げがある。364は残存長約43.6cm・幅1.0cm・厚さ0.8cmを測る。片端を鋭く尖らせる。片側に焼け焦げがある。365は残存長42.8cm・幅0.7cm・厚さ0.8cmを測る。片端を鋭く尖らせる。片側は欠損する。366は残存長33.8cm・幅1.5cm・厚さ0.9cmを測る。片端を鋭く尖らせる。片側は欠損する。367(3g出土)は残存長24.2cm・幅1.9cm・



第45図 1区出土木製品5



第46図 1区出土木製品6



第47図 1区出土木製品7

厚さ1.7cmを測る。片端は、四角柱の一面をけずり尖らせる。片側に焼け焦げがある。368(NR1005出土)は残存長42.0cm・幅3.3cm・厚さ2.6cmを測る。四角柱のひとつの角が面取りされ、断面五角形となる。片面は丸みをもち、片面は全体に削り込み、尖らせる。369(2h出土)は残存長18.0cm・幅0.7cm・厚さ0.7cmを測る。片端3分の1程は削り込んで鋭く尖らせる。片面は四角く終わる。

#### ⑧有孔木材

370(4h出土)は残存長75.4・幅11.1cm・厚さ2.3cmを測る。NR1007から出土した。片側に乱雑な孔を両面から穿った長方形木材である。

#### ⑨不明木材

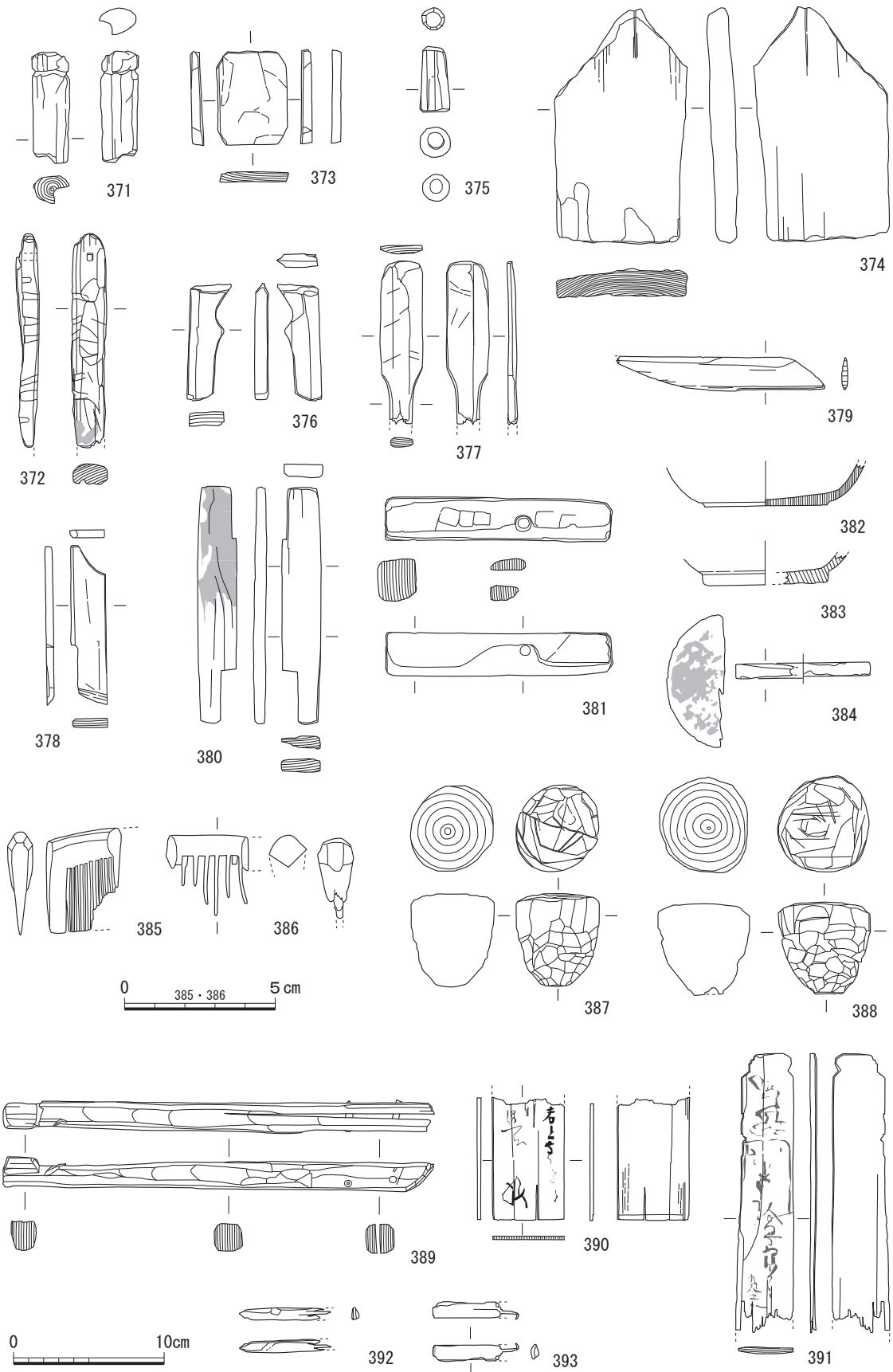
371(3f黒褐色砂土出土)は棒状の木材の端部に溝を掘り、頭部を作り出す有頭棒状製品である。反対端を割損する。372(4g出土)は扁平な棒状の木材の両端を丸く加工し、一方に穿孔した木製品である。373(第1遺構面出土)は長さ6.3cm・幅4.6cm・厚さ0.7cmの板材の四つの角に隅切りを施した木製品である。374(5g出土)は長さ15.5cm・幅8.5cm・厚さ1.5cmの板材の2つの角を落とし、山形に加工した木製品である。375(1g黒褐色砂土出土)は長さ4.4cm・径2.0cmの棒材を円錐台形に加工し、径1.2cm・深さ2.1cmの窪みを設けた石突状の木製品である。376(NR1005黒褐色砂土出土)は長さ8.0cm・幅3.0cm・厚さ0.8cmの板材に切り込みを入れ、成形した木製品である。広く残した木口部は両面から面取りを行い、断面山形にする。377(2gNR1005黒褐色砂土出土)は現存長10.7cm・幅2.4cm・厚さ0.7cmを測る。欠損箇所があり、全体は不明である。裏面は扁平で、表面に加工痕が残る。片側に8.0cmの頭部を削り出す。378(1g出土)は長さ10.6cm・幅2.4cm・厚さ0.5cmを測る板材に加工を加えた木製品である。欠損箇所はないものと思われる。片端に弧状の切り込みを入れたり、側面に切れ込みをいれたり、片端を面取りするなど、複雑な加工を施す。379(2gS X82出土)は長さ13.8cm・幅2.3cm・厚さ0.4cmの木材に加工を加えた木製品である。両木口を斜めに切り落とす。一方は角度が大きく、一方は小さい。木口を含め、四方を面取りする。側辺2か所に小さな窪みがある。380(3gS X78出土)は長さ15.8cm・幅2.7cm・厚さ0.9cmの板材を加工した木製品である。一方の木口に切れ込みを入れる。一方の片面には焼け焦げが残る。長側辺の一方は緩い弧状をなす。381(2gNR1005黒褐色砂土出土)は長さ15.1cm・幅3.0cm・厚さ2.6cmの柱状木材に径1.0cmの孔を穿った木製品である。

#### ⑩漆椀

382(1h黒褐色砂土出土)は木材を削り出して成形した椀である。高台は径8cmで、ロクロ成形時の固定爪とみられる痕跡が残る。器壁は0.6cmを測る。内面には漆が全面に塗布される。外面は漆が部分的に残る。383(2h黒褐色砂土出土)・384(第1遺構面黒褐色砂土出土)は椀の底部片である。内外面に漆が塗布される。

#### ⑪櫛

385(2f黒褐色砂土出土)は櫛の端部である。櫛歯は細かく、1cmあたり11本程度刻まれる。386(3g黒褐色砂土出土)は櫛の一部である。櫛歯は粗く、1cmあたり28本程度刻まれる。



第48図 1区出土木製品8

⑫球

387 (1g出土)・388 (1g出土) は高さ6.0cm・径6.0～6.4cmの砲弾形の木製品である。頭部先端に欠損がある。

⑬鎌柄

389 (4 g 出土) は鎌柄である。長さ28.7cm・幅2.0cm・厚さ2.0cmの棒状の木材を加工した木製品である。一方の小口付近を削りだし、滑り止めを設けている。一方の木口は斜めに削り、14cm程度の切れ込みを入れて、刃部の装着部分を設ける。刃部装着箇所には固定するための目釘穴を2か所に設ける。2か所の目釘穴には目釘が残る。

⑭木簡

390 (2 g 出土) は残存長8.2cm・幅4.8cm・厚さ約0.3cmの板材である。両端を欠損する。文字は2行にわたり、左下に花押らしき表現が認められる。判読できない。

391 (1 g 出土) は残存長18.6cm・幅3.7cm・厚さ0.5cmの板材である。頭部に切り欠きを入れる。「咄天罡急急如律令(記号)九九八十一」とあり、呪符木簡であることが分かる。

⑮燃えさし

392(第1遺構面黒褐色砂土)・393(4g出土)は先端に焦げ跡のある燃えさしである。

3) 1区の土砂流堆積と地形変化の考察

①土砂流堆積物の分布と構造

佐屋利遺跡では、小規模な土砂流堆積物がローブ状(舌状・耳たぶ状)に分布している。これらの微高地の間に形成された低地には、有機質を含む汎濫原性の砂質泥層が複数層にわたって堆積していることが確認された。特に1区では、土質および土色の変化が顕著である。自然流路であれば礫が存在する底部に礫が認められないことから、土砂流による堆積と判断される。したがって、調査地における地形及び土層の変化は、自然流路によるものではなく、主に土砂流によって形成されたローブ状地形に起因するものである。

北方の高位段丘から流入した花崗岩質の砂質土は、複数の小規模な微高地(ローブ状地形)を形成し、その後、さらに軽量の黒褐色砂土が周囲の凹地に流入・堆積することで地形が埋め立てられている。

これらの堆積過程は、流れに巻き込まれた木片や小枝の方向から土砂流の流向を復元することが可能である。土砂流は北側の斜面や谷からだけでなく、北西の内沿いからも流入しており、堆積後には堆積面の上部が改変され、複雑なパッチ状の岩相分布を呈している。これは、堆積後の表面流や微地形変化による再堆積・侵食作用を示唆するものである。

②堆積構造と環境変遷

土砂流堆積物の基底には青灰色の粘土層が認められ、その上方に向かって砂層へと連続的に変化する逆級化構造及び上方粗粒化層が観察された。これらの構造は、谷間での大雨による出水汎濫に伴う堆積過程をよく示しており、急激な流速変化と粒径選別の結果と考えられる。

1区西側では、北あるいは北北西から流入した土砂流が最も規模が大きく、堆積物の厚さや広

がりからも顕著なイベントであったことが推定される。その下位には、滞水域に堆積した清澄な粘土層が存在しており、常時水域(沼地)のような環境が先行していたことが示唆される。

土砂流の流入によってこの沼環境が氾濫原環境へと急激に変化したことが、両者の境界面から読み取れる。土砂流以前の地盤は、砂質土の下層に部分的に認められる青灰色粘土であり、土砂流によってこの基盤層が破壊され、粘土がブロック状となって散在している。土砂流は粘土層の上面を侵食し、粘土塊として取り込み、それをローブ状堆積体の先端に円弧状に堆積させていた。これは、土砂流が流入した時点で沼が浅くなっていたか、すでに消失していた可能性を示唆するものであり、環境変遷のタイミングを探る上で重要な指標となる。

土砂流の主な流れは、北側台地上から北西方向に向かって3条以上、谷奥の東側からも1条が確認されており、広範囲にわたる流動が推定される。

黒褐色砂質土や白褐色の真砂に含まれる遺物は、丘陵上位から運ばれてきたものであり、堆積物の由来を示す重要な指標となる。第1区北部に見られる鹿の子模様の土色変化は、人や動物が軟弱地盤に踏み入れた痕跡である可能性があり、土砂流発生後の活動を示唆する。

地盤の性質として、風化花崗岩(バイラン土)は雨水による侵食に極めて脆弱であり、傾斜が5%程度の緩斜面であっても土砂流が発生することが確認されている。豪雨などの気象条件によって、比較的容易に土砂流が誘発される環境である。

### ③遺物の出土と流動痕

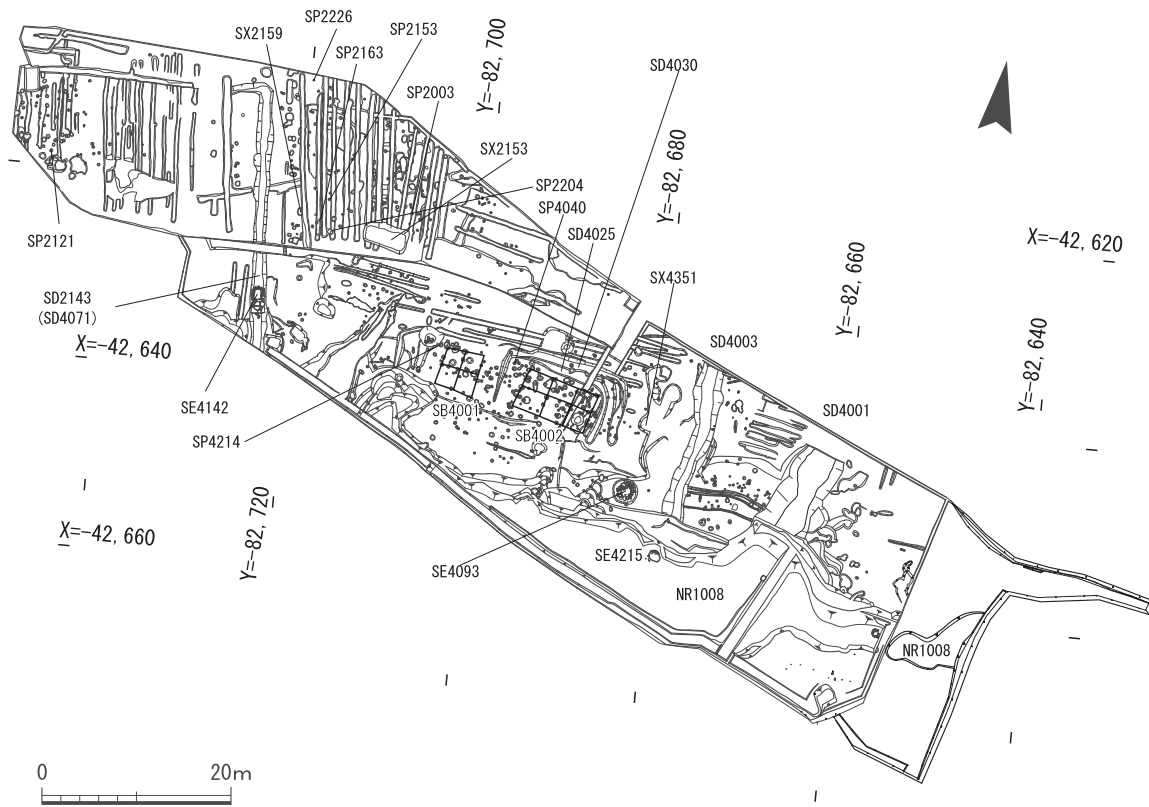
資料に含まれる木製品は、土砂流の縁辺から出土しており、大雨などによって浮遊し、流されてきたものであると考えられる。これは、土砂流の運搬力と流動性を示す直接的な証拠である。したがって、ローブ状堆積中から出土した土器類も土砂流によって運ばれたものと判断している。

### ④空中写真解析による地形解釈

第1区の空中写真は地形解析において非常に有用であり、土砂流による谷埋め後に表面を氾濫流または小流路が流れた可能性が高いと考えられる。自然流路NR1005は、土砂流ローブ間低地を土砂流堆積直後に流れた流路跡と見られ、自然流路NR1005及びNR1007は、ローブ間低地やローブを切って一時的に流れた流路と解釈される。ただし、これらは定常的な河川流路ではなく、イベント的な流動によるものであることは現地観察からも明らかである。空中写真上で確認できる土砂流ローブは3つであるが、NR1005とNR1006は同一の大きな堆積体である可能性もある。

### ⑤遺構面の形成

ローブ状堆積が安定し、構築されたのが掘立柱建物S B1001・S B1002・柵S A1003である。ピット内から出土した遺物から12世紀前半までには廃絶した可能性が高い。一連の建物群は磁北方向に建物軸をほぼ揃えており、同時期に存在したと考えられる。周囲から出土する緑釉陶器・円面硯・墨書土器などからは近辺に官衙的施設が存在したことを示唆している。1区で検出した掘立柱建物は総柱建物であることから倉庫であった可能性が高い。柵の北側は段丘崖となっており、段丘上に施設本体が存在するものと思われる。(三好博喜)



第49図 2区・4区遺構配置図(S=1/800)

#### 4. 2区・4区の調査

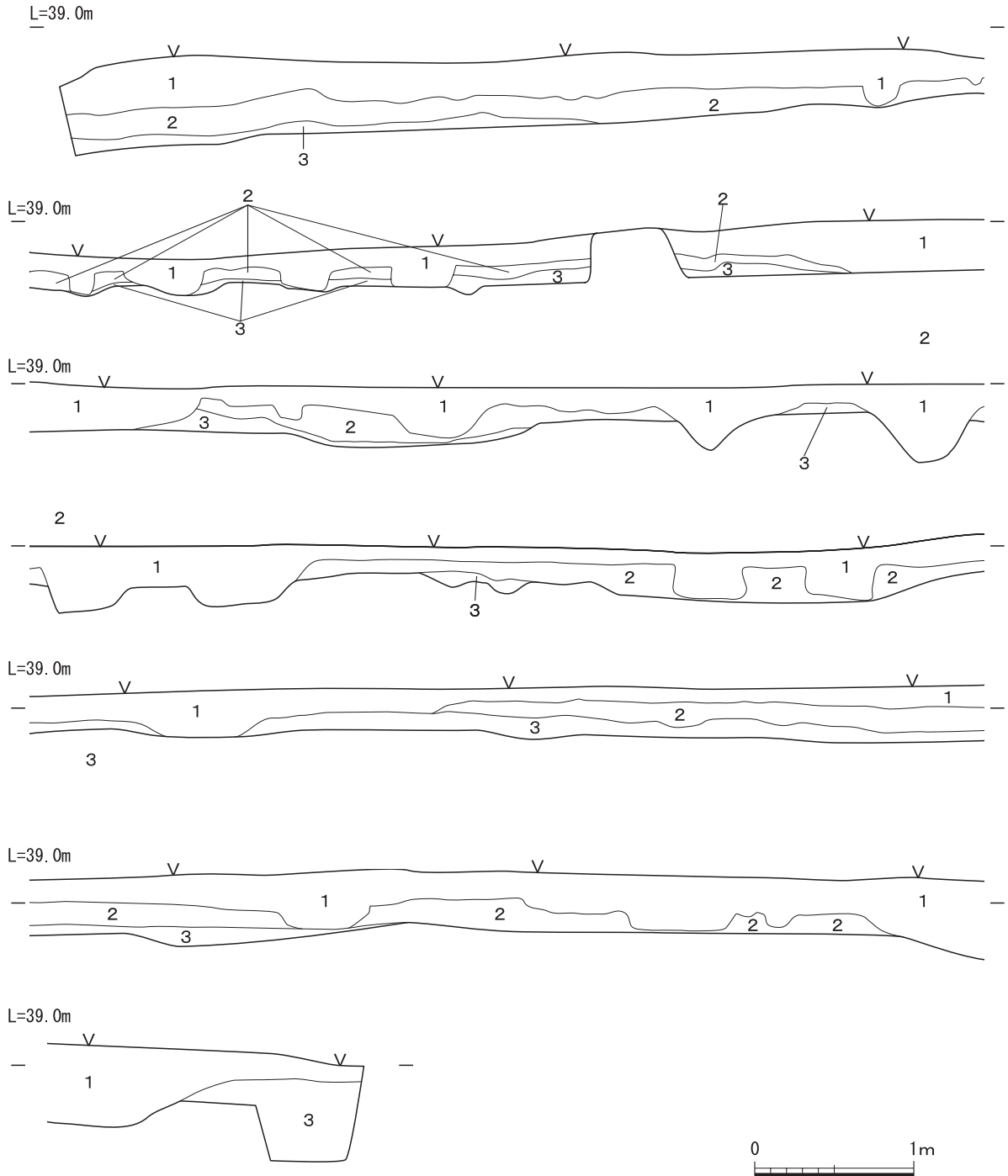
##### 1) 地区の概要と検出遺構

2区(令和3年度調査)と4区(令和4年度調査)が同一地形面上に位置することから、検出遺構および出土遺物の時期的関連性も考慮し、遺跡全体の理解を目的としてあわせて報告する。

##### (1) 各地区の概要(第49・53図)

**2区** 調査対象地のほぼ中央に位置し、緩斜面の頂部にあたる。調査区は東西に約69m、南北に約19mで、東西方向に細長い台形を呈する。掘削深度は平均で約0.5mを測る。近現代の耕作に伴う地形改変により削平され、特に西側では基盤層まで削平されていた。表土を約0.4mほど重機で掘削したところ、近世初頭～中世前期の遺物が出土したため、以降は人力による掘削に切り替えた。遺物包含層は調査区中央部および西端ではごく薄く、中央部から南へ続く緩斜部でわずかに残存していた。包含層の下部では、古代末～中世後期の土師器・瓦質土器・輸入陶磁器・石製品などを伴う溝(S D2143)、土師器皿が出土した土坑状遺構(S X2153)、緋銭が出土した柱穴(S P2003)のほか、時期不明の柱穴群を確認した。近現代の耕作溝による攪乱の影響で遺構同士の関係、特に建物構造の復元は困難であった。

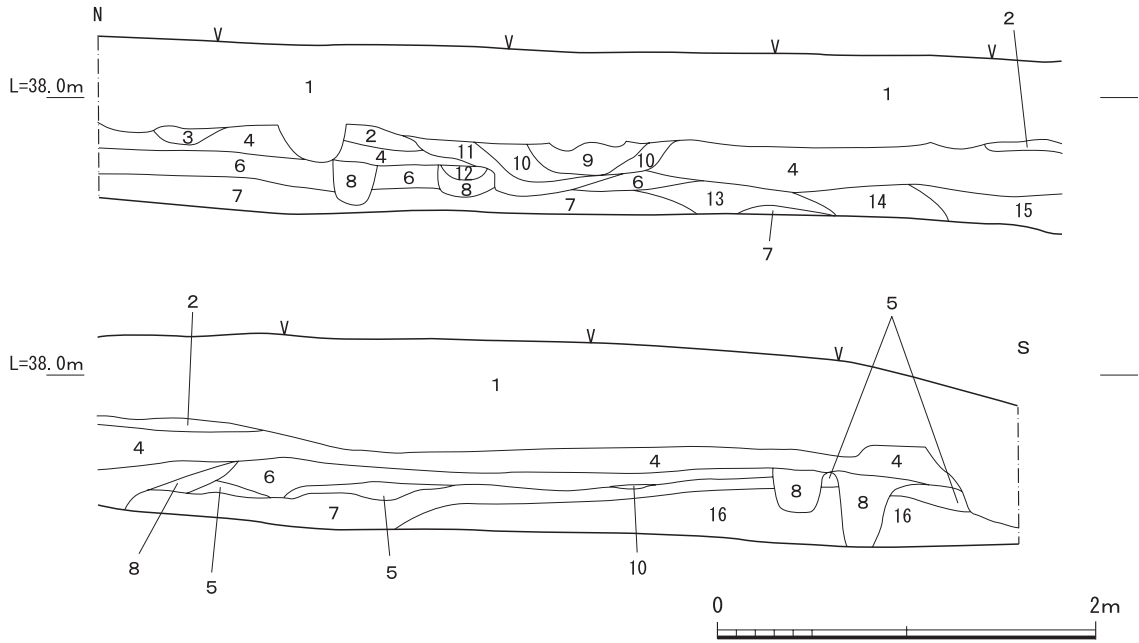
**4区** 2区の南側に接し、同一斜面上のやや低位の肩部に位置する。南東に1区から続く自然流路を検出し、南西へと延伸することを確認した。調査区は最大長約84m、最大幅約27mで、北西辺で狭まり南東辺で張り出す台形状を呈する。近現代の耕作に伴う攪乱の影響は、2区に比べて軽微であった。重機をもちいて表土を掘削した時点で遺物包含層を認めたため、人力による掘



- 1 耕作土 東側は2層由来の基質で、3層の偽礫を部分的によく含む
- 2 黒褐色 (2.5YR3/1) 中粒砂含む粗粒砂
- 3 褐灰色 (7.5YR 4/1) 中粒砂含む粗粒砂

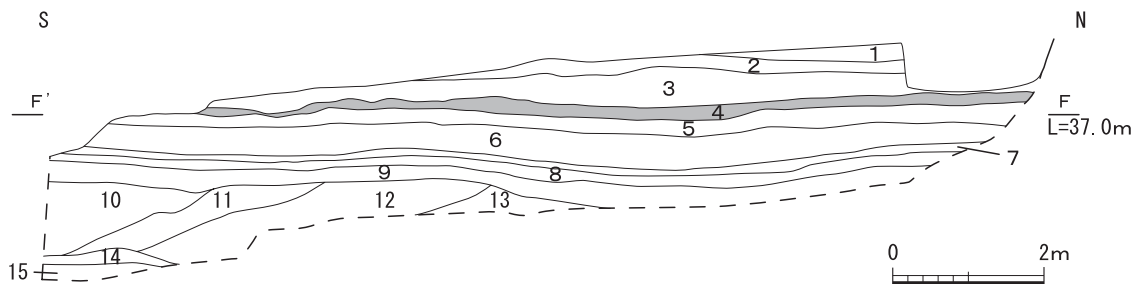
第50図 2区北壁断面図(S=1/40)

削に切り替えた。包含層は北西から南東に向かって緩く傾斜する地形上に分布し、北西ではやや厚く、南東の崖部に向かって薄化する傾向を確認した。包含層下部では、古代末～中世の遺物を含む柱穴群、溝群を検出し、掘立柱建物2棟(S B 4001、S B 4002)をはじめ、建物に付随する溝2条(S D 4025、S D 4030)、区画溝2条(S D 4071、S D 4003)、石組井戸1基(S E 4093)、石組遺構(S D 4142)を確認した。また、自然流路内では、木組井戸1基(S E 4215)を検出した。これ



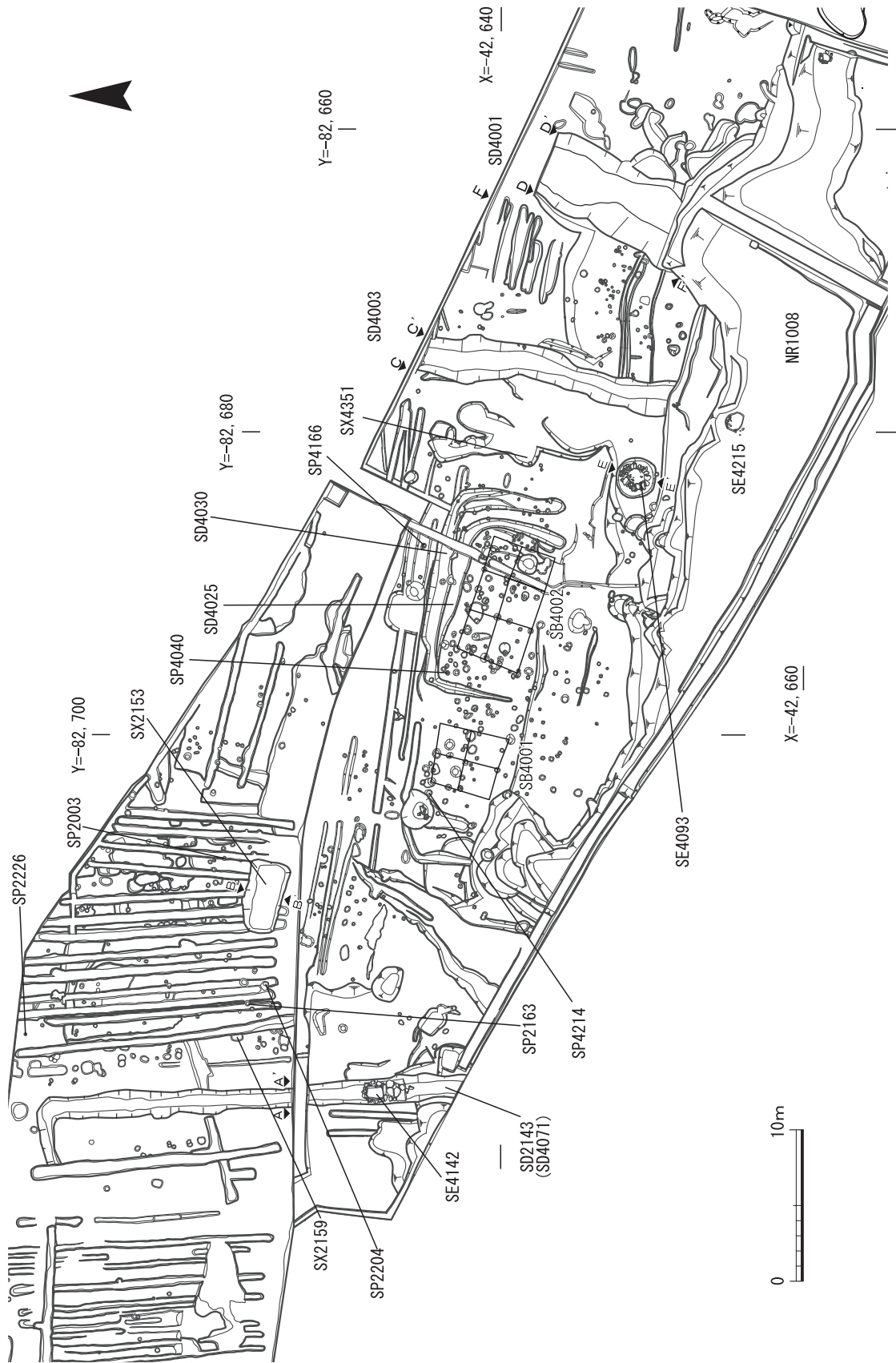
- |   |   |
|---|---|
| 1. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂含む粗粒砂 (耕作土)                        | 13. 灰褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂含む中粒砂 (土器片少量含む)                  |
| 2. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂含む粗粒砂                                | 14. にぶい黒褐色 (10YR 7/3) 極細粒砂 (褐色 (10YR 4/1) 極細粒砂ブロック多く含む) |
| 3. 黒褐色 (10YR 2/2) 中粒砂含む粗粒砂                                | 16. 明褐色 (7.5YR 5/6) 極細粒砂含む粗粒砂 (地山)                      |
| 4. 褐色 (7.5YR 4/4) 粗粒砂含む極細粒砂 (土器片少量含む)                     |   |
| 5. 褐灰色 (7.5YR 4/1) 細粒砂含む粗粒砂                               |   |
| 6. 明褐色 (7.5YR 5/6) 粗粒砂含む中粒砂                               |   |
| 7. にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 極細粒砂 (地山か)                           |   |
| 9. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂含む中粒砂                              |   |
| 10. 明褐色 (10YR 3/3) 細粒砂含む中粒砂                               |   |
| 11. 黒褐色 (7.5YR 2/2) 極細粒砂含む粗粒砂                             |   |
| 12. 黒褐色 (10YR 2/2) 極細粒砂含む粗粒砂 (明褐色 (7.5YR 5/6) 極細粒砂ブロック含む) |   |

第51図 4区中央断面図(S=1/40)



- |   |                                |
|---|--------------------------------|
| 1. 暗褐色 (10YR 3/3) 細粒砂含む粗粒砂                                | 9. にぶい赤褐色 (5YR 5/3) 細粒砂        |
| 2. 黒褐色 (7.5YR 3/3) 細粒砂                                    | 10. にぶい褐色 (7.5YR 5/4) 中粒砂含む荒粒砂 |
| 3. 黒褐色 (7.5YR 3/2) 細粒砂わずかにシルト含む                           | 11. にぶい褐色 (7.5YR 5/3) 細粒砂含む中粒砂 |
| 4. 褐色 (7.5YR 4/3) 細粒砂含むシルト 黄褐色ブロック多く含む 隠岐鬱陵テフラ (約1万年前) 検出 | 12. にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 細粒砂含む中粒砂 |
| 5. 褐色 (10YR 4/4) 中粒砂含むシルト                                 | 13. にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 中粒砂      |
| 6. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 中粒砂                                  | 14. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 中粒砂含む細粒砂 |
| 7. 黒褐色 (7.5YR 3/2) 細粒砂                                    | 15. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 中粒砂含む粗粒砂   |
| 8. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 中粒砂含むシルト                               |                                |

第52図 4区中央部断ち割り部断面図(S=1/100)



第53図 2区・4区主要遺構配置図(S=1/400)

らの遺構は調査区の西側に集中し、S D4001 以東では遺構密度・遺物出土量は急減する。2 区の様相とあわせると、斜面頂部から肩部にかけてが主な生活および作業域であり、特に北西側の高位部が活動の中心であったと判断される。

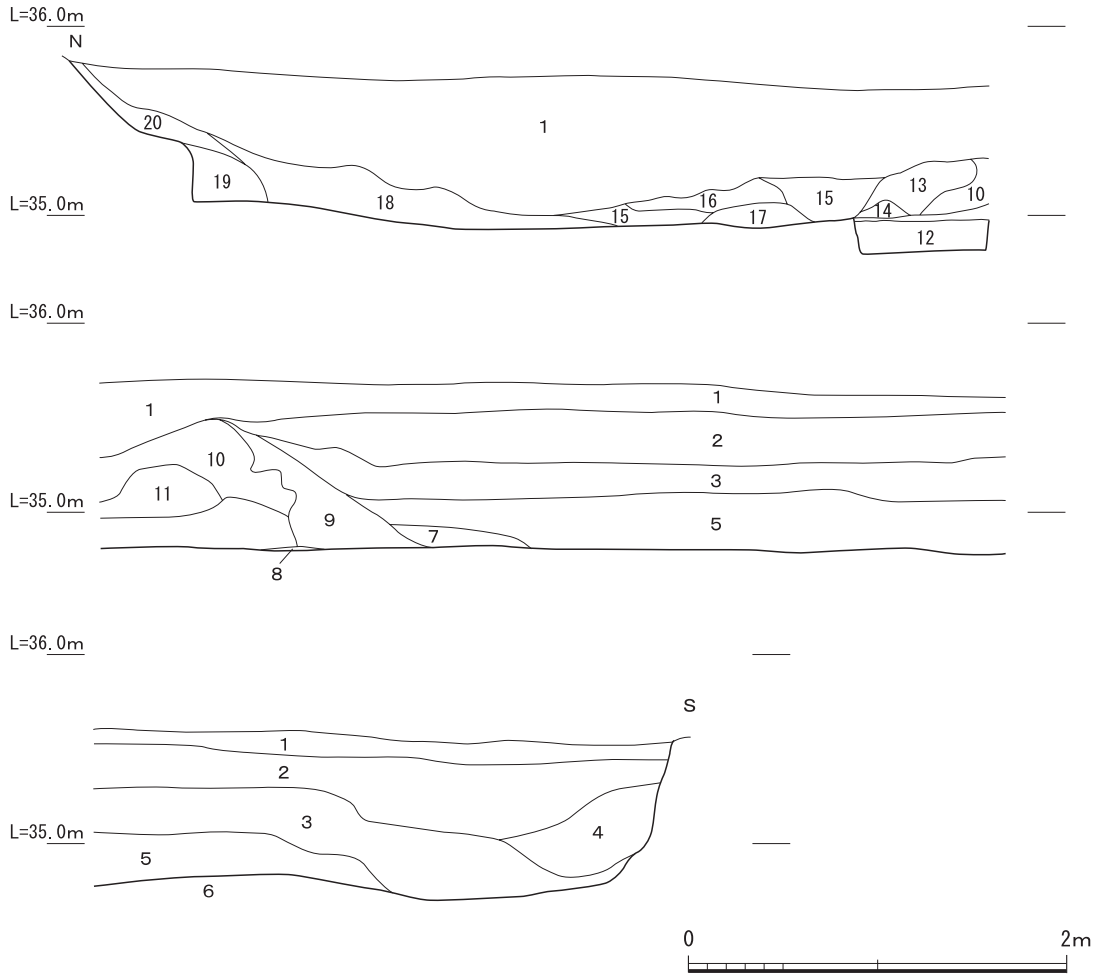
(2) 基本層序 (第50～52図)

両地区は同一地形面に位置し、極めて近接していることから、緩斜面上部(2区周辺)・緩斜面下部(4区中央部以北)・自然流路(4区南端)の3つに分類し、特徴について述べる。

**緩斜面上部(第50図)** 2区の全面および4区の北辺に相当する。表土の下には、遺物包含層である黒褐色中粒砂を含む粗粒砂があり、さらに遺構面にあたる褐灰色中粒砂を含む粗粒砂が続く。包含層は北西に高く、南東へ向かって低くなる斜面上の低位側にのみ残存していた。近現代の耕作等に伴う削平および耕作溝の掘削により、溝など比較的深く掘り込まれた遺構は良好に残存するが、掘り込みの浅い柱穴などは攪乱により削平を受け、残存は不良であった。出土遺物の大多数は古代末～中世前期であり、古代以前の遺物は定量的に出土せず、溝から破片資料がわずかに出土するにとどまった。遺構の残存状況と遺物構成から判断すると、本区域は古代末段階に地表削平を受けたと判断される。また、遺物包含層の直上から近世初頭の遺物が出土していることから、少なくとも近世初頭の時期にも地形改変があったとみられる。

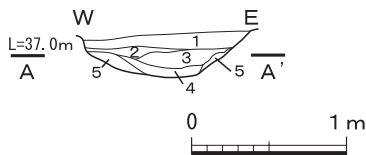
**緩斜面下部(第51図)** 4区のほぼ全域にあたる。表土の下には、遺物包含層である黒褐色系砂質土(4・5層)が続き、斜面頂部の包含層に符合する。続いて遺物の出土量が少ない褐色粗粒砂を含む極細粒砂(6層)、流路に接する低い場所に残存する黒褐色系土壌(5層)、にぶい黄褐色極細粒砂(7・16層)が続く。斜面頂部から続く遺物包含層はよく残存し、肩部の広い範囲に確認することができた。6層は遺構集中部を中心に分布するため中世の盛土層の可能性はある。6層下部に確認できる黒褐色系土壌は古代以前の包含層と考えられるが、肩部では遺構に伴うような現位置性の高い遺物は出土しなかった。斜面頂部と同時期の地形改変、あるいは6層に伴う整地により古代以前の遺構はほぼ失われたとみられる。また、崖部付近の断ち割り(第52図)では、下部に自然流路状の堆積構造と砂質土と粘質土の水平な互層を確認した。これらは遺跡周辺の堆積環境の遷移を示す可能性が高いため、地形の形成年代を確かめるため火山灰分析を実施した。第4層から鬱陵隠岐テフラを検出したことから約1万年前に湿地状の環境であったことが指摘できる。

**自然流路NR1008(第54図)** 4区の南西部に位置し、1区で確認できたNR1005の下流部にあたる。1～5層は流路が閉塞する直前の最終堆積物と考えられる。6～20層は河床形態の不連続や側方移動を示す堆積構造が観察されることから、流路の蛇行や氾濫に伴う側方移動が生じたとみられる。流路内からは縄文時代～中世までの土器、須恵器、木製品、石製品などが出土しており、終堆積物にはおおむね古墳時代～中世の遺物が含まれる。一方、流路底部に近い堆積層には主に弥生時代～縄文時代の遺物が含まれる。この様相は流路の長期的変遷と周辺斜面からの土砂流入を反映したものと考えられる。また、自然流路内では時期不明の石組井戸1基、中世の遺物を伴う木枠井戸1基を検出したことから、当時の流路幅は検出幅よりも狭く、中世以降に北岸が



- |  |  |
|--|--|
| 1. 黒色 (10YR 1.7/1) 砂質土 (5mm~10mm砂粒多く含む。木質・遺物多く含む)    | 16. 灰色 (N 6/0) 砂土 (微細)                       |
| 2. 黒褐色 (10YR 3/1) (5mm~10mm砂粒多く含む)                   | 17. 赤褐色 (5YR 4/6) 砂 (粗い)                     |
| 3. 灰色 (N 5/0) 砂土 (微細) と明褐色 (5YR 7/1) 砂の互層            | 18. 黒色 (10YR 1.7/1) 砂質土に灰色 (N 6/0) 砂が帯状に混じる。 |
| 4. 褐色 (10YR 4/1) 砂質土 (粘性あり)                          | 19. 灰色 (N 5/0) 砂と明褐色 (5YR 7/1) 砂の互層          |
| 5. 灰色 (N 4/0) 砂土 (微細)                                | 20. 暗赤褐色 (5YR 3/6) 砂 (粗い)                    |
| 6. 赤褐色 (5YR 4/6) 砂土 (微細、有機物含む)                       |  |
| 7. 暗灰色 (N 3/0) 砂土 (微細)                               |  |
| 8. 赤褐色 (5YR 4/6) 砂 (しまりあり)                           |  |
| 9. 暗青灰色 (5PB 4/1) 砂土 (微細、しまりなし)                      |  |
| 10. 明緑灰色 (10GY 8/1) 粘性砂質土に橙色 (5YR 7/6) が混じる (やや砂っぽい) |  |
| 11. 灰色 (N 5/0) 砂に明褐色 (5YR 7/1) が輪状に重なる               |  |
| 12. 灰色 (N 4/0) 粘土                                    |  |
| 13. 黒褐色 (2.5YR 3/1) 砂質土 (5mm砂粒含む)                    |  |
| 14. 明緑色 (10GY 7/1) 砂質土 (微細、しまりない)                    |  |
| 15. 黒色 (10YR 1.7/1) 砂質土 (5mm~10mm砂粒含む、有機質多く含む)       |  |

第54図 自然流路NR1008南北断面図(S=1/40)



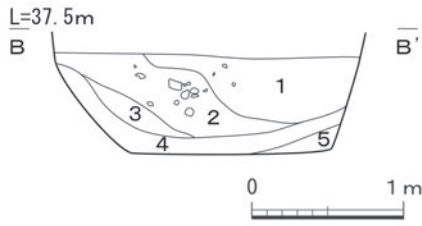
1. 褐色 (5YR 4/1) 砂質土  
(5mm砂粒含む、樹木根入り込む)
2. 明褐色 (5YR 7/2) 砂質土
3. 黒褐色 (5YR 3/1) 粘質土
4. 黒褐色 (5YR 3/1) 粘質土  
(湿っぽい、1~2mm砂粒含む)
5. 黒褐色 (5YR 2/2) 砂質土

第55図 溝S D2143断面図(1/50)

浸食されたと推定される。

### (3) 2区の遺構

**溝S D2143** 調査区中央の西側に位置し、4区のS D4071と同一遺構であることから、あわせて記載する。検出長28m、最大幅1.5m、深さ0.4mを測り、南北方向に軸をもつ溝である。遺構埋土からは青磁碗や瓦質土器すり鉢など中世後期の遺物のほか、古代の土師器高杯も出土している。最下部の5層では流水堆積を示すラミナ構造が認められ、本遺構の機能時にある程度の流水があったと推定される。また、東側に地山由来の礫が



1. 褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土  
〈黄褐色粘土ブロック少量含む〉
2. にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 砂質土  
〈黄褐色粘土ブロック多く含む〉
3. 黒褐色 (10YR 3/1) 粘質土
4. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土
5. 暗褐色 (10YR 3/3) 砂質土

第56図 土坑状遺構 S X 2153 断面図 (S=1/50)

混入していることから、5層堆積後に近傍で小規模な地山崩落があったと考えられる。4層は5層を切り込んでおり、小規模な崩落で溝が一時的に埋没した後に浚渫された痕跡と判断される。下層のラミナ構造が上位層には見られないことから、この段階で水量は著しく減少していた可能性がある。3層では溝中央部のみに礫が含まれ、部分的な側壁崩壊が複数回生じ、雨水による一時的な流水で崩落土が流入したと考えられる。1～2層には基質に偽礫が含まれず流水の痕跡も見られないことから、比較的安定した堆積環境となっていたと判断できる。屋敷地を区画する溝であったと考えられる。

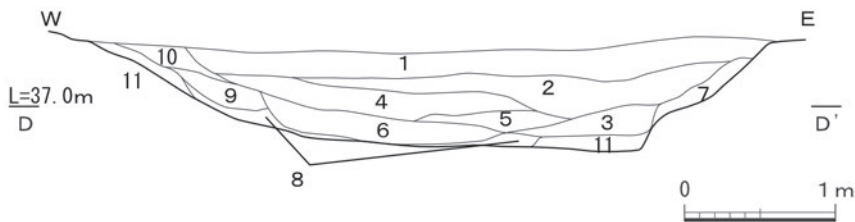
**土坑状遺構 S X 2153 (第56図)** 調査区中央南側に位置し、長軸4.7m、短軸2.5m、深さ0.4mの方形をなす。中世初期の黒色土器碗1点、土師器皿が6点出土したことから墓坑の可能性も検討したが、副葬品に相当する遺物の出土が確認できず、また棺痕跡なども観察できなかったため、土坑と判断した。

**土坑状遺構 S X 2159 (第53図)** 調査区中央南側に位置し、検出長約0.8m、検出幅約0.5m、深さ約0.2mの方形をなす。耕作溝による攪乱のため全容は不明であるが、土坑の可能性が高い。

**柱穴 S P 2003** 調査区中央に位置し、長軸0.3m、短軸0.2m、深さ0.2mの楕円形を呈する。柱痕跡は認められない。遺構の3分の2は近現代の耕作溝により削平を受けているが、遺構埋土から輸入銭8枚が出土している。縷に通された状態で銭が埋納されていたことから、地鎮儀礼に関連する遺物と考えられる。

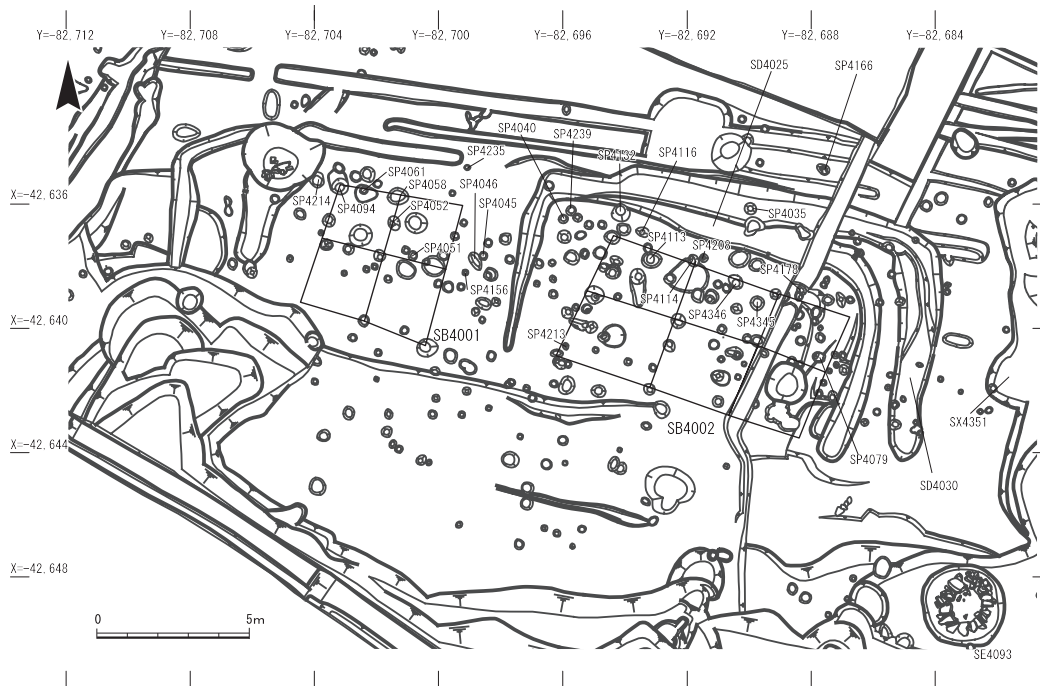
#### (4) 4区の遺構

**溝 S D 4001 (第57図)** 調査区東端に位置し、検出長約12.5m、検出幅約4.6m、深さ約0.6mを



- |   |         |     |               |    |          |        |           |
|---|---------|-----|---------------|----|----------|--------|-----------|
| 1 | 10YR3/1 | 黒褐色 | 中粒砂含む極細粒砂     | 7  | 10YR5/3  | にぶい黄褐色 | 細粒砂含む中粒砂  |
| 2 | 10YR2/1 | 黒色  | 粗粒砂含む細粒砂      | 8  | 1.5YR4/6 | 赤褐色    | 中粒砂       |
| 3 | 10YR2/1 | 黒色  | 中粒砂含む極細粒砂     | 9  | 5Y4/1    | 灰色     | 細粒砂含む中粒砂  |
| 4 | 10YR4/1 | 褐灰色 | 中粒砂含む極細粒砂     | 10 | 5Y7/2    | 灰白色    | 細粒砂含む中粒砂  |
| 5 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 細粒砂極含む細粒砂     | 11 | 2.5YR5/6 | 明赤褐色   | 極細粒砂含むシルト |
| 6 | 5YR4/2  | 灰褐色 | 中粒砂含む極細粒砂     |    |          |        |           |
|   | 2.5Y8/2 | 灰白色 | 細粒砂含む中粒砂の偽礫含む |    |          |        |           |

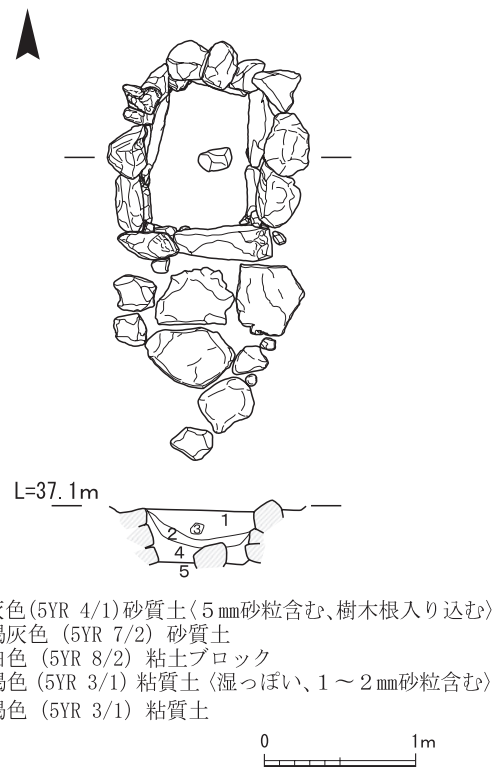
第57図 溝 S D 4001 断面図 (S = 1/50)



第58図 掘立柱建物S B4001、S B4002平面図(S=1/250)

測る南北方向の溝であり、東西に延びる肩部を縦断する。出土遺物と堆積構造の相違から、おおむね古代末から中世にかけての遺物を主体とする上層(1層～6層)と、縄文時代から古代までの遺物を伴う下層(7層～11層)に区分できる。上層の基質は細粒～中粒砂からなり、比較的淘汰は良好であるが、水成堆積を示唆する構造は認められない。一方、下層は極細粒砂～中粒砂を主体とし、局所的にラミナ構造を呈する。これらの特徴から、下層は自然流路の堆積物とみられる。底面から弥生土器が多数出土したことから、この段階で自然流路が形成されていたと推定される。また、上層の堆積物が下層を切り込むことから、古代末から中世の段階で、地形を分断するための溝として掘削されたものと考えられる。

**溝S D4003** 溝S D4001の西に隣接して位置する。検出長約16m、最大幅約3.1m、深さ約0.4mを測る、東に8°傾いた南北方向の溝であり、東西に延びる肩部を縦断する。遺構の状況は不良で、溝底のみが残存する。古代末から中世の土師器皿が出土することから、屋敷を区画するため



第59図 石組遺構S E4142平・段面図(S=1/50)

の溝として掘削されたものと判断される。

**雨落溝 S D 4025** 検出長約22m、最大幅約1.2m、深さ0.1mを測る。SB4002を取り囲むコの字状の溝である。S D 4030に切り込まれる。

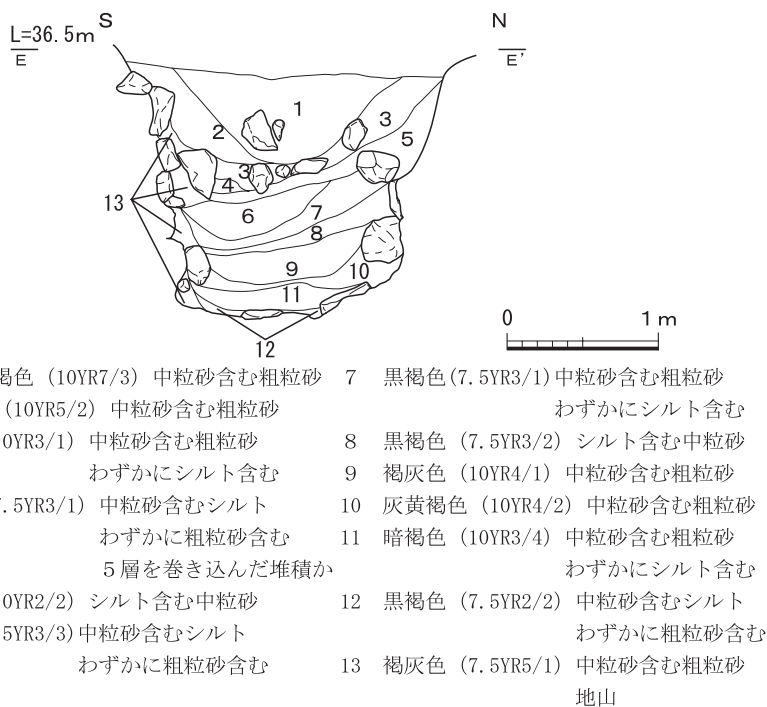
**雨落溝 S D 4030** 検出長約16.8m、最大幅約1.5m、深さ0.1mを測る。SB4002の東側に位置するL字状の溝で、S D 4025を切り込む。切り合い関係から、SB4002の改変段階に伴って掘削された可能性が高い。

**掘立柱建物 S B 4001、S B 4002** (第58図) 調査区中央に位置し、「コ」の字状の雨落溝状遺構(S D 4025、溝 S D 4030)に取り囲まれた柱穴群で構成される掘立柱建物跡である。この2棟は東西に並列し、梁間2間・桁行2間を測る S B 4001が西側、梁間3間・桁行4間を測る S B 4002が東側に位置すると考えられる。建物規模と配置関係から、後者が主屋、前者がそれに付属する施設であったと推定される。掘立柱建物を構成する柱穴は重複して切り合っているため、正確な平面での建物構造の把握は困難である。また、柱穴に伴って出土した遺物に目立った型式差は見られず、ごく短期間に繰り返し建て替えられた可能性が高い。また、S B 4002周辺に確認される雨落溝が東に拡幅しており、S B 4002も桁行が延長された可能性が高い。

**石組遺構 S E 4142** (第59図) 調査区西側に位置し、S D 2143 (4073) 内に設けられている。長軸約3.3m、短軸約1.2m、深さ約0.6mを測り、角礫を用いて構築されている。白磁碗や黒色土器が出土し、溝内の埋土を切り込まない点から、溝 S D 2143と同時期の遺構であると考えられる。南側では足場状に平らな石材が配置されており、水汲みを意図した施設であったと推察される。

**石組井戸 S E 4073** (第60図) S B 4002の南東側、崖部に近い位置に設けられている。直径約2.5m、深さ約2.0mを測り、0.3~0.8m大の角礫を用いて円形に石組が構成されている。5層より

上位層に井戸側面を構成していた石が堆積していることから、この段階で井戸が完全に埋没し機能を失ったものと考えられる。井戸底からは現在も湧水が確認されることから、湧水層を意図して掘削されたものと考えられる。黒色土器および輸入陶磁が出土したこと



第60図 井戸 S E 4073断面図(S=1/50)

から、建物群と同時期の遺構と考えられる。また、井戸に堆積していた土壌の一部を採取し、土壌分析を実施した結果、ソバなどの栽培植物の花粉を検出した。このことから、本遺構にごく近い場所での営農がなされていたことが指摘できる。

**木組井戸 S E 4215** 石組井戸 S E 4093の南東側、自然流路内の崖部直下に位置する。井戸底の木枠のみが残存し、長軸約1.4m、短軸約1m、深さ0.1mを測る。上部構造は自然流路の侵食により失われたと考えられる。底部埋土から中世前期の黒色土器、青磁碗の破片が出土することから、建物群と同時期に構築されたと判断する。調査時は侵食により上部が失われていたが、周辺までが屋敷地であった可能性が極めて高い。

**土坑状遺構 S X 2159** (第53図) 調査区中央南側に位置し、検出長約0.8m、検出幅約0.5m、深さ約0.2mの方形をなす。耕作溝による攪乱のため全容は不明であるが、土坑の可能性が高い。

**落ち込み状遺構 S X 4351** (第53図) S B 4002の西に位置し、検出長約2.4m、検出幅約1.3m、深さ約0.1mを測る。当初は土坑と判断したが、不定形に南北へ落ち込みながら延伸したため、自然流路の一部の可能性が高い。

**柱穴群** 本地区で検出した S B 4001、4002を構成する柱穴群である。S B 4001を構成すると考えられる柱穴群を柱穴群(西)、S B 4002を構成すると考えられる柱穴群を柱穴群(東)とした。

## 2). 出土遺物

### (1) 2区出土土器(第61図)

#### ①溝 S D 2143 (394~399)

古墳時代の土師器高杯と中世の青磁碗が出土した。

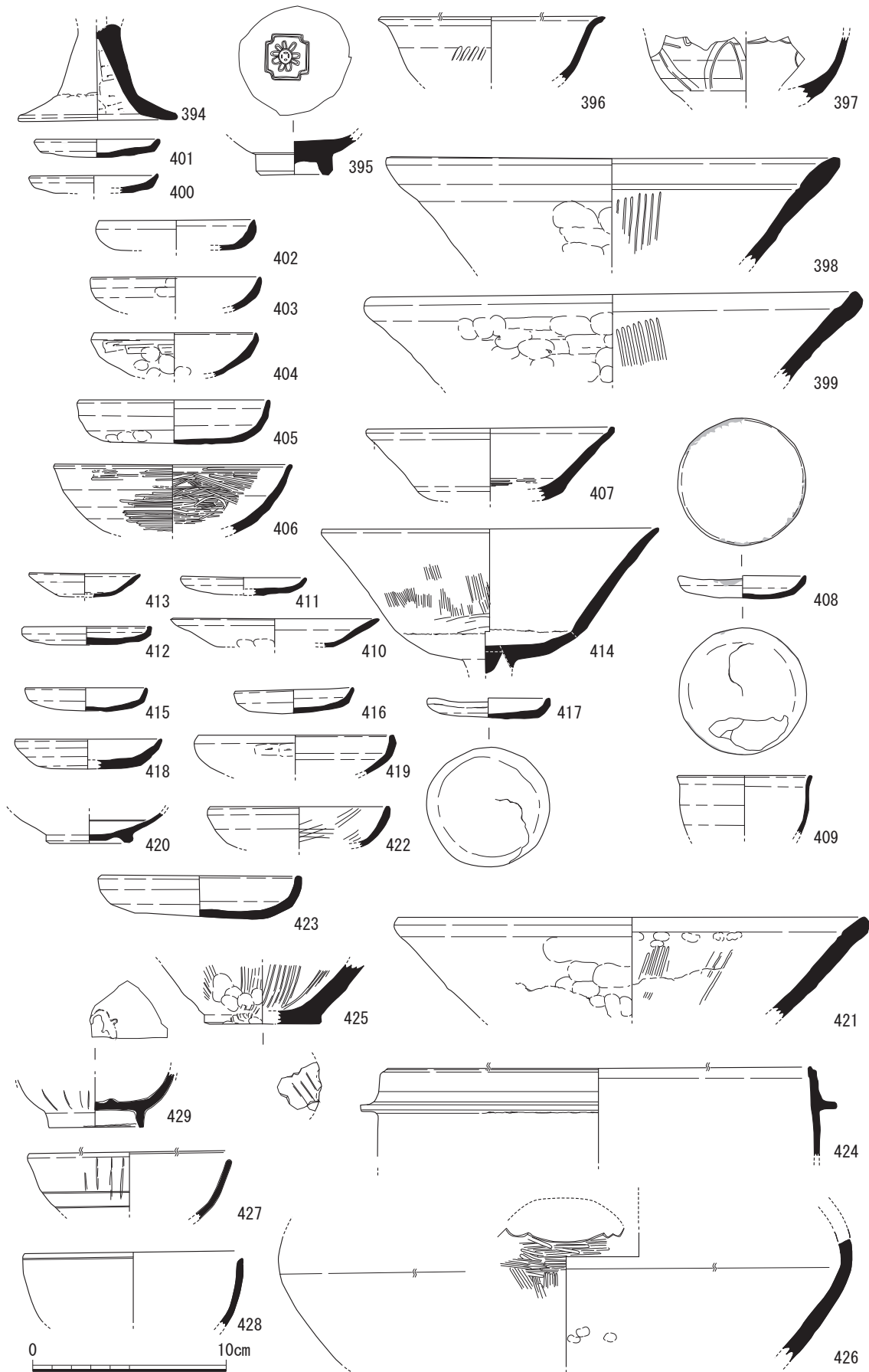
394は土師器の高杯の脚部である。4分の1が残存する。脚部径10.4cm、残存高6.5cmを測る。胎土はやや密で、1mm以下の白色鉱物および雲母を多く含む。裾部は外反して直線的に伸びる。内面はヘラケズリ、脚部外面および裾部内外面にはヨコナデを施す。古墳時代中期に属する。

395~397は、龍泉窯系青磁の碗である。395は、高台のみが完存する。高台径5.2cm、残存高2.7cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は胎土が灰白色、釉調はオリーブ灰色である。やや高い角高台で、高台内部の削りは粗く、中央が凸状となる。中世後半期に属する。396は口縁部が12分の1残存する。口径は復元値で15cm、残存高4.4cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は胎土が灰白色、釉調はオリーブ灰色である。中世後半期に属する。397は体部の破片で、残存高4.4cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は胎土が灰白色、釉調は灰オリーブ色である。体部外面に片彫蓮弁文が確認できることから、中世後半期に属する。

398・399は、瓦質土器のすり鉢である。398は、口縁部が12分の1残存する。復元値で口径31cm、残存高7.6cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。中世前期に属する。399は口縁部が6分の1が残存する。口径33.0cm、残存高6.0cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。中世前期に属する。

#### ② S X 2153 (400~406)

土師器皿と黒色土器碗が出土した。



第61図 2区出土土器

400～405は土師器皿である。400は12分の1が残存する。口径8.6cm、器高1.2cmを測る。胎土は密で、0.5mm以下の白色鉱物を少量含む。内外面ともにヨコナデを施し、底部にユビオサエが残る。中世前半期に属する。401は土師器の皿である。器形は2分の1が残存する。口径8.4cm、器高1.4cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鉱物および雲母を少量含む。内外面ともにヨコナデを施し、底部は未調整に近い。中世前半期に属する。402は、口縁の8分の1が残存する。口径10.6cm、残存高2.0cmを測る。胎土は密で。内外面とも摩滅が著しく、調整は不明瞭である。403は土師器の皿である。器形は12分の1が残存する。口径11.5cm、器高2.3cmを測る。胎土は密である。内外面ともにヨコナデを施し、底部にユビオサエが残る。中世前半期に属する。404は、口縁部が4分の1が残存する。口径11.0cm、器高3.0cmを測る。胎土は密で、1mm以下の赤色鉱物および雲母を含む。内外面ともにヨコナデを施し、底部にユビオサエが残る。中世前半期に属する。405は土師器の皿である。器形はほぼ完存する。口径13.0cm、器高2.9cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鉱物および雲母を含む。内外面ともにヨコナデを施し、底部にユビオサエが残る。中世前半期に属する。

406は黒色土器の椀である。口縁部が6分の1が残存する。口径16.1cm、残存高4.7cmを測る。胎土はやや粗く、1mm以下の白色鉱物を含む。体部から口縁にかけて開き気味になること、内外面のミガキは粗い。中世前半期に属する。

③ S X 2159 (407・408)

古墳時代の土師器の高杯と中世の土師器皿が出土した。

407は土師器の高杯の杯部である。口縁部が4分の1が残存する。口径16.7cm、残存高5.0cmを測る。胎土はやや粗く、4mm以下の赤色鉱物を多く含み、1mm以下の白色鉱物および雲母を少量含む。体部は外反して直線的に立ち上がる。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明瞭である。古墳時代中期に属する。

408は土師器の皿である。口縁部および見込みの一部に煤が付着することから、灯明皿と考えられる。器形は完存する。口径8.5cm、器高1.6cmを測る。胎土は密で、1mm以下の赤色鉱物および雲母を含む。内外面ともにヨコナデを施し、底部は未調整に近い。中世前半期に属する。

④ 柱穴 (409～421)

柱穴 S P 2121 409は唐津焼の小鉢である。口縁部が8分の1が残存する。口径9.0cm、残存高4.0cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は胎土が橙色、釉調は鈍い褐色である。近世初頭に属する。

柱穴 S P 2153 土師器皿が出土した。410は4分の1が残存する。口径14.0cm、残存高2.0cmを測る。胎土は密で、0.5mm以下の赤色鉱物および2mm以下の白色鉱物を含む。内外面にヨコナデ、底部に軽いユビオサエを施す。中世後半期に属する。411は2分の1が残存する。復元値で口径8.4cm、器高1.2cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鉱物および雲母を含む。内外面にヨコナデ、底部に軽いユビオサエを施す。中世前半期に属する。412は4分の1が残存する。口径8.6cm、器高1.2cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鉱物および雲母を含む。内外面に

ヨコナデ、底部に軽いユビオサエを施す。戦国期末に属する。413は3分の1が残存する。口径7.5cm、器高1.6cmを測る。胎土は密である。内外面にヨコナデ、体部下半にユビオサエを施す。中世前半期に属する。

**柱穴 S P 2163** 414は土師器の高杯の杯部である。2分の1が残存する。口径22.8cm、残存高9.9cmを測る。胎土はやや粗く、2mm以下の赤色鉱物、1mm以下の白色鉱物を含む。杯部から体部が外反して直線的に立ち上がる。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明瞭である。古墳時代中期に属する。

**柱穴 S P 2204** 土師器皿と白磁碗が出土した。415～419は土師器の皿である。415はほぼ完存する。口径8.2cm、器高1.6cmを測る。胎土はやや粗く、3mm以下の白色鉱物および雲母を多く含む。内面はヨコナデおよび一方向ヨコナデ、外面は底部を未調整で残し、ヨコナデを施す。戦国期末に属する。416はほぼ完存する。口径8.0cm、器高1.8cmを測る。胎土はやや粗く、3mm以下の白色鉱物および雲母を多く含む。内面はヨコナデおよび一方向ヨコナデ、外面は底部を未調整で残し、ヨコナデを施す。戦国期末に属する。417は土師器の皿である。器形は完存する。口径8.2cm、器高1.4cmを測る。胎土は密で、0.5mm以下の白色鉱物を含む。内面はヨコナデ、外面は粗いヘラケズリおよびヨコナデを施す。中世前期に属する。418は12分の1が残存する。口径10.0cm、残存高2.0cmを測る。胎土は密で、0.5mm以下の白色鉱物および雲母を含む。内面は不定方向のヨコナデ、外面は口縁部に強いヨコナデ、底部に軽いヨコナデを施す。戦国期末に属する。419は12分の1が残存する。復元値で口径13.2cm、残存高2.6cmを測る。胎土は密で、1mm以下の赤色鉱物および雲母を含む。内面はヨコナデ、外面はヘラケズリおよびヨコナデを施す。中世前期に属する。

420は白磁の碗である。底部のみが完存する。高台径5.9cm、残存高2.1cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。高台まで全面施釉され、内面見込みに高台径より広い圏線をもつことから、Ⅸ類と考えられる。中世前半期に属する。

**柱穴 S P 2226** 421は瓦質土器すり鉢である。被熱の影響により器面が剥落し、胎土が赤色化している。口縁部が12分の1残存する。口径31.8cm、残存高6.8cmを測る。胎土はやや粗く、2mm以下の白色鉱物および1mm以下の雲母を含む。口縁部は外反し、体部は直線的に立ち上がる。中世後半期に属する。

#### ⑤包含層

土師器皿、瓦質土器羽釜、瓦質土器すり鉢・風炉、青磁碗などが出土した。

422・423は土師器の皿である。422は、3分の1が残存する。口径12.1cm、残存高2.8cmを測る。胎土は密で、1mm以下の赤色鉱物および雲母を含む。外面はヘラケズリおよびヨコナデ、内面はヨコナデを施す。中世前期に属する。423はほぼ完存する。口径13.4cm、器高3.1cmを測る。胎土は密で、極小の雲母を含む。内外面ともにヨコナデを施す。中世前半期に属する。

424は瓦質土器の羽釜である。口縁部が12分の1残存する。復元値で口径28.7cm、残存高6.0cmを測る。胎土はやや粗く、2mm以下の白色鉱物および1mm以下の雲母を含む。口縁部はわず

かに内傾して立ち上がり、端部に微弱な段をもつ。鏝部より下半に煤が付着する。中世前半期に属する。

425は瓦質土器のすり鉢である。底部が12分の1残存する。底径8.0cm、残存高4.1cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。中世後半期に属する。

426は瓦質土器の風炉である。残存率は不明であるが、体最大径39.0cm、残存高8.3cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鈹物を少量含む。内面は強いヨコナデ、外面は不定方向のミガキ、火窓にはヘラケズリを施す。中世後半期に属する。

427～429は、龍泉窯系青磁の椀である。429は、龍泉窯系青磁の椀底部である。高台部が約6分の1残る。高台径6.4cm、残存高3.7cmである。外面に連弁文、内面見込みに浮文がみられる。素地は灰白色、釉調は明オリーブ灰色である。427は、口縁部が12分の1残存する。口径は復元値で13.7cm、残存高4.0cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は胎土が灰白色、釉調はオリーブ灰色である。内外面全面に細かい貫入が認められ、体部に線刻、底部付近に沈線が確認できる。I類と考えられる。中世後半期に属する。428は口縁部が12分の1残存する。口径は14.8cm、残存高4.7cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は胎土が灰白色、釉調はオリーブ灰色である。口縁端部外面に沈線が確認できる。IV類と考えられる。中世後半期に属する。

## (2) 4区出土土器(第62～67図)

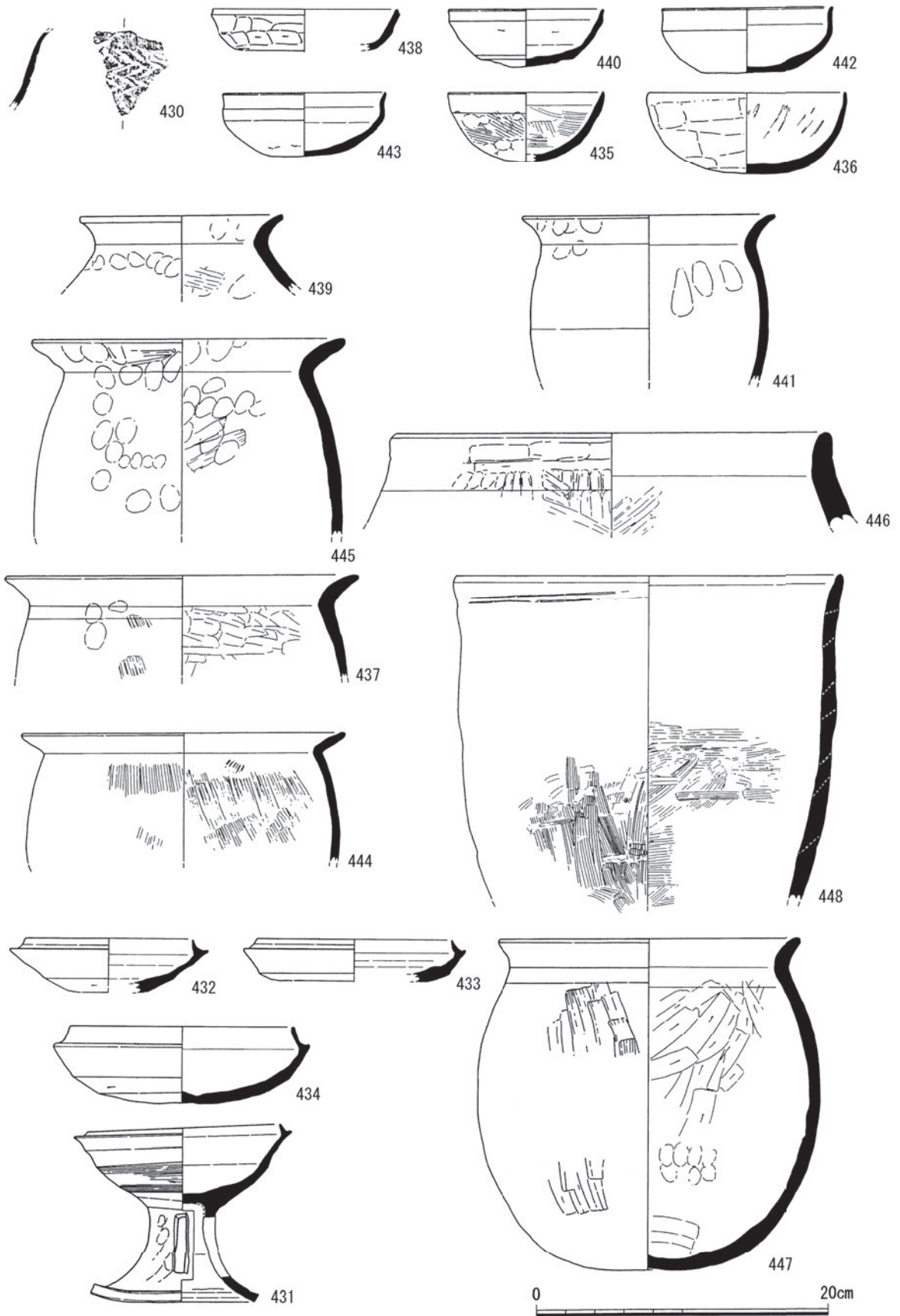
### ①溝S D 4001(第62図430～448)

430は縄文後期土器片である。器面には貝殻腹縁による羽状文が施され、内面には貝殻条痕が観察できる。細片のため、器形は不明であるが、縄文時代後・晩期に属するか。

431は須恵器の高杯である。残存率は4分の3で胎土は荒く、0.5～5mmの白色鈹物を多く含む。杯部の口径が13.1cm、脚部径は12.3cm、脚部を含めた器高は11.1cmを測る。脚部は1段2方透かしで、杯部外面にカキ目をよく残す。透かしは一段であるが杯部の形状から、古墳時代終末期に属するか。

432は須恵器の杯身である。残存率は3分の1で胎土はやや荒く、1mm以下の白色鈹物を含む。口径11.4cm、残存高3.8cmを測る。底部外面にケズリ痕跡がある。飛鳥時代に属する。433は須恵器の杯身である。口径13.3cm、残存高2.9cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鈹物、0.5mm以下の黒色鈹物を少量含む。底部外面にケズリ痕跡がある。飛鳥時代に属する。434は須恵器の杯身である。残存率は12分の11で、胎土は1～4mmの白色鈹物を含むものの、密である。口径15.2cm、器高5.4cmを測る。底部外面に回転ヘラケズリがある。古墳時代終末期に属する。

435は土師器の椀である。残存率は口径の4分の1で、胎土は密で1～2mmの白色や半透明の鈹物がある。口径10.6cm、残存高4.1cmを測る。内外面ともにハケが施される。飛鳥時代に属する。436は土師器の椀である。残存率は3分の2で、胎土は1mm以下の白色や半透明の鈹物がある。口径13.4cm、器高5.7cmを測る。内面はミガキ、外面はケズリの痕跡が施される。飛鳥時代中期に属する。437は土師器の甕で、口縁部は肥厚して外反する。残存率は2分の1で、胎土は密で0.5～5mmの白色・透明な鈹物を含む。口径24.0cm、残存高7.1cmを測る。内面はヘラ



第62図 4区出土土器 1

ケズリ、ヨコナデ、外面はヨコナデ、ハケのちナデが施され、ユビオサエが確認できる。古代末～中世初期に属する。438は土師器の杯である。残存率は口径の2分の1で、胎土は密で1mm以下の白色鉍物を含む。口径12.6cm、残存高2.9cmを測る。外面はケズリの痕跡がある。飛鳥時代に属する。439は土師器の壺で、口縁部が外反する。口縁部のみが2分の1残存する。口径が13.9cm、残存高5.4cmを測る。胎土は密で、1～5mmの半透明の鉍物をまばらに含む。内面はナデとハケ、外面はヨコナデが施され、ユビオサエが確認できる。古墳時代終末期に属するであろうか。

440は遺構上部より出土した須恵器の無蓋の杯身である。残存率は2分の1で、口径は10.6cm、器高は4.0cmを測る。胎土は密で1～3mm大の白色鉍物を含む。飛鳥時代前半期に属する。

441は土師器の甕である。残存率は口縁部が2分の1、体部が4分の1である。口径は17.2cm、残存高11.5cmを測り、胎土は密で0.5～4mm大きい粒と半透明の粒をやや多く含む。内面、外面にナデ、ヨコナデが施される。古墳時代終末期に属するであろうか。

442は完形の土師器の椀である。口径は11.6cm、器高は4.5cmである。胎土は密で雲母のほか有色鉍物、透明鉍物を含む。飛鳥時代前半期に属する。443は土師器の椀である。残存率は口径の4分の1である。胎土は密で1mm以下の白色鉍物を含む。口径11.1cm、器高4.4cmを測る。飛鳥時代に属する。

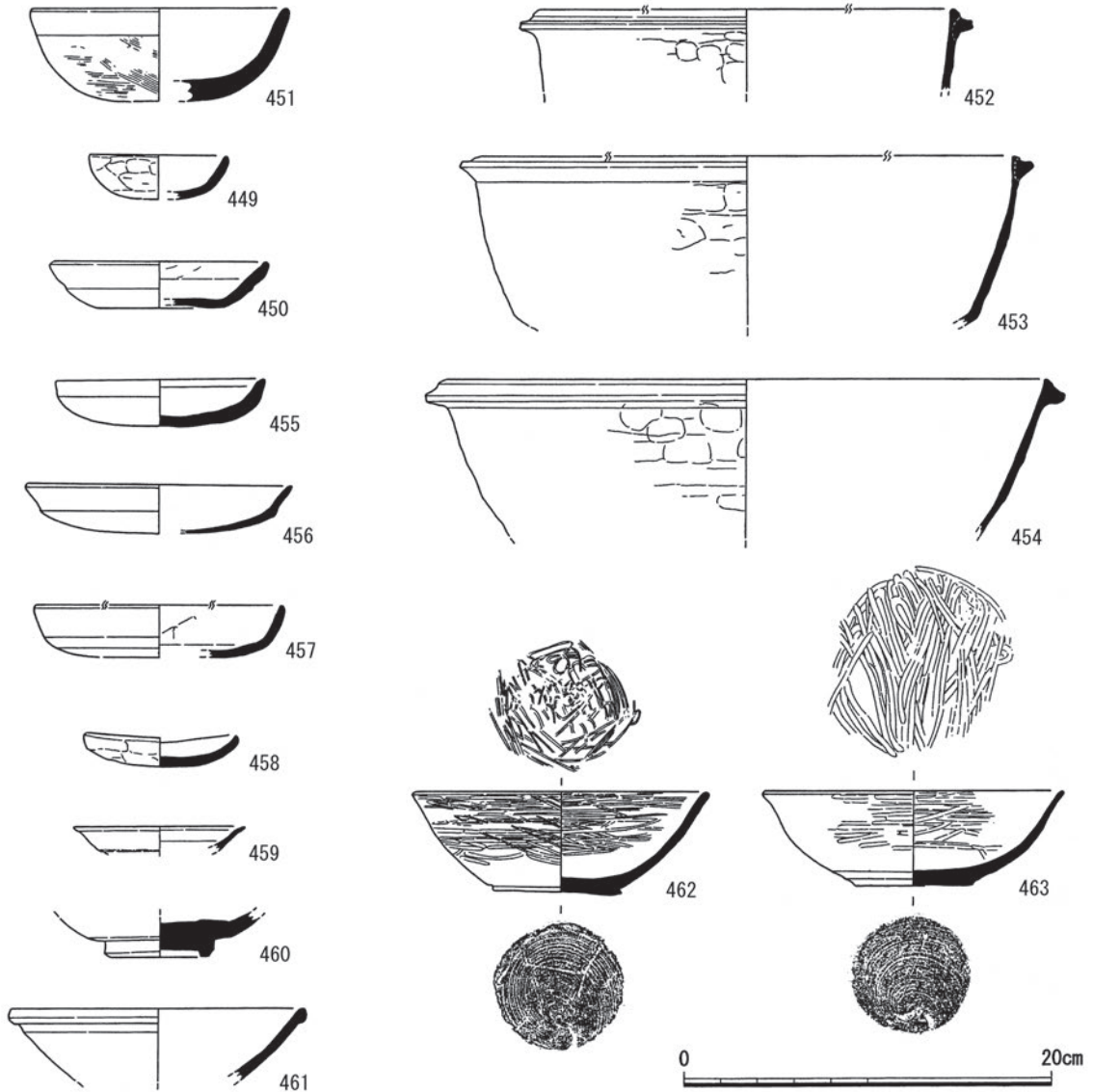
444は土師器の甕で口縁部は外反し、端部がわずかに立ち上がる。残存率は12分の1で、胎土は密で1～4mm大の黒・白・半透明の鉍物を多く含む。口径22.0cm、残存高9.0cmである。内面、外面ともに1.1cm幅の5条のハケ、ヨコナデが施される。一部に煤が付着している。古代末～中世初期に属する。445は土師器の甕である。口縁部は肥厚して外反する。口縁部のみが3分の1残存する。口径は21.1cm、残存高13.6cmを測る。胎土は密で1～5mm大の白・半透明鉍物を多く含む。内面はヘラケズリ、ユビオサエ、ヨコナデ、外面はユビオサエ、ヨコナデ、ナデが施される。古代に属する。446は土師器の甕である。口縁部は短く立ち上がり、わずかに内反する。12分の1のみ残存し、口径は29.4cm、残存高6.5cmを測る。胎土は密で0.1～1cm程度の白色鉍物を多く含む。内面・外面ともにヘラケズリのちナデが施され、部分的にヨコナデがみられる。古墳時代終末期に属するであろうか。

447は土師器の甕で、口縁部は短く肥厚して外反する。12分の7が残存し、口径20.4cm、器高23.0cmを測る。胎土は密で0.5～6mm大の白色鉍物を多く含む。内面・外面にヨコナデが施され、外面の一部に粗いハケが残る。古墳時代後期か。

448は土師器で甗かと思われる。口縁部はまっすぐ立ち上がり、わずかに外反する。4分の1程度残存し、口径26.4cm、残存高22.4cmを測る。胎土は密で1～3mm大の白色鉍物をまばらに含む。内面はヨコハケもしくは不定方向のハケのちナデ、外面はハケ、ナデが施される。古墳時代終末期に属するであろうか。

## ②溝SD4003

449は土師器の椀である。4分の1ほど残存し、口径7.3cm、残存高2.5cmである。焼成は良好、



第63図 4区出土土器 2

胎土は密で1～3mm程度の白色鉱物を少量含む。口縁上端部の断面は丸みを帯び、わずかに内傾する。内面はヨコナデ、外面はユビオサエ、ケズリが施される。古代に属する。450は土師器の皿である。4分の1ほど残存し、口径11.5cm、残存高は2.6cmを測る。焼成は良好、口縁端部に内傾する外端面をもち、体部に稜をもつ。内面はヨコナデ、ナデアゲ、外面の口縁部付近はやや強めのヨコナデ、底部付近は軽いケズリが施される。中世前半期に属する。451は土師器の椀である。6分の1ほど残存し、口径が13.8cm、残存高5.1cmを測る。焼成は良い、口縁端部に内傾する狭い外端面をもつ。内面はナデ、口縁部にヨコナデ、体部以下にハケを施す。古代末に属する。

③溝SD4025

452は瓦質土器の羽釜である。口縁部が12分の1ほど残存し、口径22.4cm、残存高4.5cmを測る。胎土は密で1mm以下の白色鉱物、極小の有色鉱物をわずかに含む。内面は軽いケズリ、ナデ、

外面はやや強いヨコナデが施される。外面の鏝部より下方に煤が付着する。中世前半期に属する。453は瓦質土器の羽釜である。口縁部付近が12分の1程度残存し、口径29.0cm、残存高9.4cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鉱物を少量含む。内面はヨコナデ、外面は軽いケズリを施す。外面の鏝部より下方に煤が付着する。中世前半期に属する。454は瓦質土器の羽釜である。口縁部付近が8分の1ほど残存し、口径32.6cm、残存高8.7cmを測る。焼成はやや軟質、胎土は密で1～2mm大の白色鉱物を含む。口縁部の内外面にやや強めのヨコナデ、内面はヨコナデ、縦方向のナデ、外面はナデを施す。器面の内外に粘土接合痕が観察できる。中世前半期に属する。

④溝SD4030

455は土師器の皿である。口径10.6～11.2cm、器高2.7cmを測る。焼成は良好、胎土は密で1mm以下の微小な鉱物を含む。上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。器形は楕円形である。内面は時計回りの一方向ナデ、外面はヨコナデが施される。中世前半期に属する。456は土師器の皿である。3分の1ほど残存し、口径14.4cm、残存高2.7cmを測る。胎土は密で0.5～2.5mm程度の白色鉱物がわずかに含まれ、雲母を多く含む。口縁端部に内傾する外端面をもち、体部に稜をもつ。内面は時計回りの一方向ナデ、外面はヨコナデが施される。中世前半期に属する。457は土師器の皿である。8分の1のみ残存し、口径13.4cm、残存高は2.9cmを測る。胎土は密で1～2mm程度の白色鉱物と極小の雲母を含む。上端部が上に突出し、断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。口縁部および内外面の大部分はヨコナデ、外面の一部にナデを施す。中世前半期に属する。

⑤S X 4351

458は土師器の皿である。完形で残存し、焼成は良好である。口径8.2cm、器高1.8cmを測る。胎土は密で1mm以下の白色鉱物と極小の雲母を含む。上端部が短く立ち上がる。口縁部にはヨコナデ、底部にユビオサエを施す。中世前半期に属する。

⑥井戸SE4093

459は白磁皿である。器形の6分の1が残存し、焼成は良好である。口径9.2cm、残存高1.5cmを測る。胎土は密で、色調は素地が灰白色、釉調は灰黄色である。体部中位でわずかに屈曲し、内面に圏線が巡る。中世前半期に属する。

460は龍泉窯系の青磁碗である。器形の2分の1、外端を広く斜めに面取りしたやや高い角高台部が残存する。焼成は良好で、高台径5.4cm、残存高3.0cmを測る。胎土は密で精良、色調は素地が灰色、釉調は暗オリーブ色である。中世後半期に属する。

⑦井戸SE4142

461は白磁碗である。器形の6分の1が残存する。焼成は良好で、口径16.0cm、残存高4.0cmを測る。胎土は密で精良、色調は素地が灰白色、釉調は灰白色である。口縁部に肉厚な玉縁があることから、碗Ⅳ類と考える。中世前半期に属する。

462は黒色土器の碗である。器形は2分の1が残存する。焼成は良好で、口径15.8cm、器高5.8cmを測る。胎土は密で1mm以下の白色鉱物、雲母が含まれる。回転糸切痕を残す低い高台

をもち、内外面のミガキはやや粗。中世前半期に属する。463は黒色土器の椀である。器形は底部が完存するが、口縁部は12分の1以下で残存する。焼成は良好で、口径16.3cm、器高5.3cm、底径6.5cmを測る。胎土はやや粗く、2mm以下の有色鉱物が含まれる。回転糸切痕を残す平高台をもち、内外面に幅広のミガキが施される。中世前半期に属する。

⑧柱穴群(西)

**柱穴 S P 4045** 464は土師器の皿である。器形は12分の1のみ残存する。口径11.7cm、残存高は2.2cmを測る。焼成は良く、胎土は密で1mm以下の白色鉱物と極小の雲母を含む。上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内面に不定方向のナデ、外面にナデ、ユビオサエが施される。内面底部付近にハケの痕跡が部分的に認められ、地域色の強い個体と考える。中世前半期に属する。

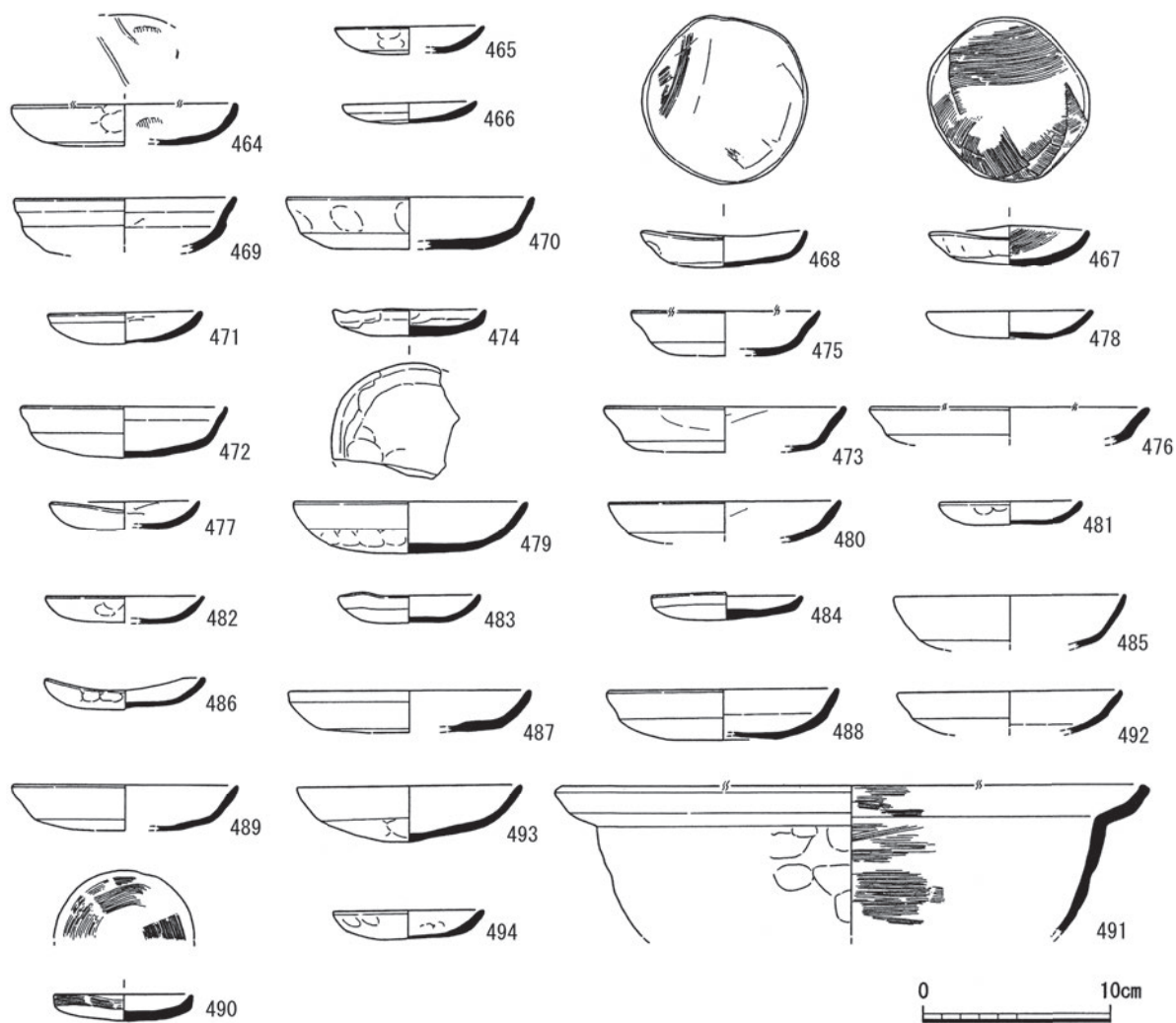
**柱穴 S P 4046** 465は土師器の皿である。469の器形は4分の1が残存する。口径7.8cm、残存高1.5cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、1mm以下の白色鉱物、極小の雲母を含む。口縁立ち上がり部は屈曲しない。口縁部にヨコナデ、内面にヘラ状工具によるナデ、外面にナデが施される。

**柱穴 S P 4051** 466は土師器の皿である。器形は2分の1が残存する。口径7.8cm、器高1.5cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、1mm以下の白色鉱物、極小の雲母を含む。口縁立ち上がり部は屈曲せず、内面に一方向ナデ、外面にヨコナデが施される。

**柱穴 S P 4052** 467、468は土師器の皿である。467は、器形は完存するがよく歪んでいる。口径8.3cm、器高2.2cmを測り、焼成は良好である。胎土はやや粗く、1mm以下の白色鉱物と雲母を含む。口縁の立ち上がり部は屈曲しない。内面に不定方向のハケ、外面にナデを施すことから、地域色の強い個体と考える。468は器形は完存するがよく歪んでいる。口径8.7cm、器高2.0cmを測り、焼成は良好である。胎土はやや粗く、1mm以下の白色鉱物と雲母を含む。口縁の立ち上がり部は屈曲しない。内面に不定方向のハケ、外面にユビオサエ、底部にナデを施すことから、地域色の強い個体と考える。

**柱穴 S P 4058** 469、470は土師器の皿である。469は、器形は4分の1が残存する。口径11.6cm、残存高3.0cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、1mm以下の白色鉱物、極小の雲母を含む。口縁立ち上がり部が強く屈曲し、口縁部に強いヨコナデ、内外にヘラ状工具によるナデ、外面にナデが施される。中世前半期に属する。470は器形の2分の1が残存する。口径13.2cm、残存高2.8cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、1mm以下の透明鉱物、2mm以下の細礫を含む。上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。口縁部にヨコナデ、内外面にナデが施される。中世前半期に属する。

**柱穴 S P 4094** 471は土師器の皿である。器形は2分の1が残存し、口径8.0cm、器高1.7cmを測る。胎土はやや粗く、2mm以下の白色鉱物、極小の雲母を含む。口縁立ち上がり部は屈曲しない。内面に一方向ナデ、外面の口縁部にのみヨコナデが施され、底部外面に掌痕が残る。472は土師器の皿である。器形は8分の1が残存する。口径10.8cm、器高2.8cmを測り、焼成は



第64図 4区出土土器3

良好である。胎土はやや密で、0.5mm以下の白色鉱物と極小の雲母を含む。口縁の上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形状を呈する。内面にヘラ状工具による回転ナデ、外面にやや強いヨコナデを施す。中世前半期に属する。473は土師器の皿である。器形は6分の1が残存する。口径12.7cm、残存高2.5cmを測り、焼成は良好である。胎土はやや粗く、1mm以下の白色鉱物と極小の雲母を含む。口縁の上端部の断面形状が、丸みを帯びた三角形状を呈する。内外面にヘラ状工具によるヨコナデを施す。中世前半期に属する。474は土師器の皿である。器形は3分の1が残存する。口径8.0cm、器高1.5cmを測り、焼成は良好である。胎土は密で、0.5mm以下の白色鉱物と極小の雲母を含む。口縁の上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形状を呈する。内外面にヨコナデ、外面底部にユビオサエを施す。粘土継目痕が残る。中世前半期に属する。475は土師器の皿である。器形は6分の1が残存する。口径10.0cm、残存高2.4cmを測り、焼成は良好である。胎土はやや粗く、1mm以下の白色鉱物と極小の雲母を含む。口縁の上端部の断面形状が、丸みを帯びた三角形状を呈する。内外面にヨコナデを施す。中世前半期に属する。

柱穴 S P 4156 476は土師器の皿である。器形は12分の1残存する。口径14.7cm、残存高

2.0cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、1 mm以下の白色鈳物、極小の雲母を含む。口縁立ち上がり部は屈曲しない。口縁部にヨコナデ、内面にヨコナデ、外面にヨコナデが施される。477は土師器の皿である。器形は2分の1が残存する。口径7.8cm、残存高1.5cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、極小の白色鈳物、雲母を含む。口縁部は屈曲せず、内面にハケによる一方向ナデ、外面にヨコナデが施される。

柱穴 S P 4214 478は土師器の皿である。器形は完存し、口径8.1～8.6cm、器高1.5cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、3 mm以下の白色鈳物、1 mm以下の雲母を含む。口縁部は屈曲しない。内面に一方向ナデ、外面にナデが施される。戦国期末から近世初頭に属する。479は土師器の皿である。器形は完存し、口径12.4cm、器高2.8cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、2 mm以下の白色鈳物、1 mm以下の雲母を含む。口縁部は屈曲しない。内面に一方向ナデ、外面にヨコナデ、ユビオサエが施される。

柱穴 S P 4235 480は土師器の皿である。器形は8分の1が残存し、口径12.2cm、残存高2.2cmを測る。焼成は良い。胎土はやや粗く、1 mm以下の白色鈳物と雲母を含む。口縁の上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内外面にヨコナデ、外面底部にナデを施す。中世前半期に属する。

#### ⑨柱穴群(東)

柱穴 S P 4035 481は土師器の皿である。器形は3分の1が残存する。口径7.4cm、器高1.3cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、0.5mm以下の白色鈳物を含む。口縁部は屈曲せず、内面のみに一方向ナデ、外面に調整はみられず、口縁部にユビオサエのみ施される。戦国期末から近世初頭に属する。482は土師器の皿である。器形は2分の1強が残存する。口径8.2cm、残存高1.5cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、0.5mm以下の白色鈳物、2 mm以下の細礫を含む。口縁立ち上がり部は屈曲せず、内面のみにヘラ状工具による不定方向のナデが施され、外面に掌痕が残る。

柱穴 S P 4039 483は土師器の皿である。器形は2分の1が残存する。口径8.2cm、器高1.5cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、0.5mm以下の白色鈳物、極小の雲母を含む。口縁部は屈曲せず、ヨコナデや内面にヘラ状工具によるナデ、外面にナデが施される。

柱穴 S P 4061 484は土師器の皿である。口縁の一部に煤が付着することから、灯明皿と考える。器形は2分の1が残存し、口径8.0cm、器高1.5cmを測る。胎土は密で、1 mm以下の白色鈳物、極小の雲母を含む。口縁の上端部が丸く立ち上がり、内面に一方向ナデ、外面にやや強めのヨコナデが施される。中世前半期に属する。

柱穴 S P 4079 485は土師器の皿である。器形は12分の1が残存する。口径12.2cm、残存高2.9cmを測る。焼成は良く、胎土は密で、1 mm以下の白色鈳物、極小の雲母を含む。口縁部が丸く立ち上がり、内面に一方向ナデ、外面にヨコナデが施される。中世前半期に属する。

柱穴 S P 4113 486は土師器の皿である。器形はほぼ完存する。口径8.4cm、器高1.9cmを測る。焼成は良く、胎土はやや粗く、1 mm以下の白色鈳物、3 mm以下の細礫、極小の雲母を含む。口縁立ち上がり部は屈曲せず、内外面にナデ、外面口縁部にユビオサエが施される。

柱穴 S P 4114 487は土師器の皿である。器形は6分の1が残存し、口径12.7cm、残存高2.3cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鈹物、極小の雲母を含む。口縁の上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内面に一方向ナデ、外面にヨコナデが施される。中世前半期に属する。

柱穴 S P 4116 488は土師器の皿である。器形は完存し、口径12.2cm、残存高2.7cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鈹物、極小の雲母を含む。口縁の上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内面に一方向ナデ、外面にヨコナデが施される。中世前半期に属する。

柱穴 S P 4132 489は土師器の皿である。器形は6分の1が残存し、口径11.8cm、残存高2.5cmを測る。胎土はやや粗く、3mm以下の白色鈹物、極小の雲母を含む。口縁の上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内外面にヨコナデが施される。中世前半期に属する。490は土師器の皿である。器形は2分の1残存する。口径7.2cm、器高1.5cmを測り、焼成は良好である。胎土は密で、2mm以下の白色鈹物と極小の雲母を含む。口縁部は屈曲しない。内面に一方向のハケ、口縁部の外面にハケを施すことから、地域色の強い個体と考える。

柱穴 S P 4198 491は土師質の鍋である。器形は12分の1が残存する。口径31.0cm、残存高14.3cmを測り、焼成は良い。胎土はやや粗く、1mm以下の白色鈹物と極小の雲母を含む。口縁は外反して立ち上がる。内面に細かいハケのちナデ、外面はユビオサエ、ナデを施す。中世前半期に属する。

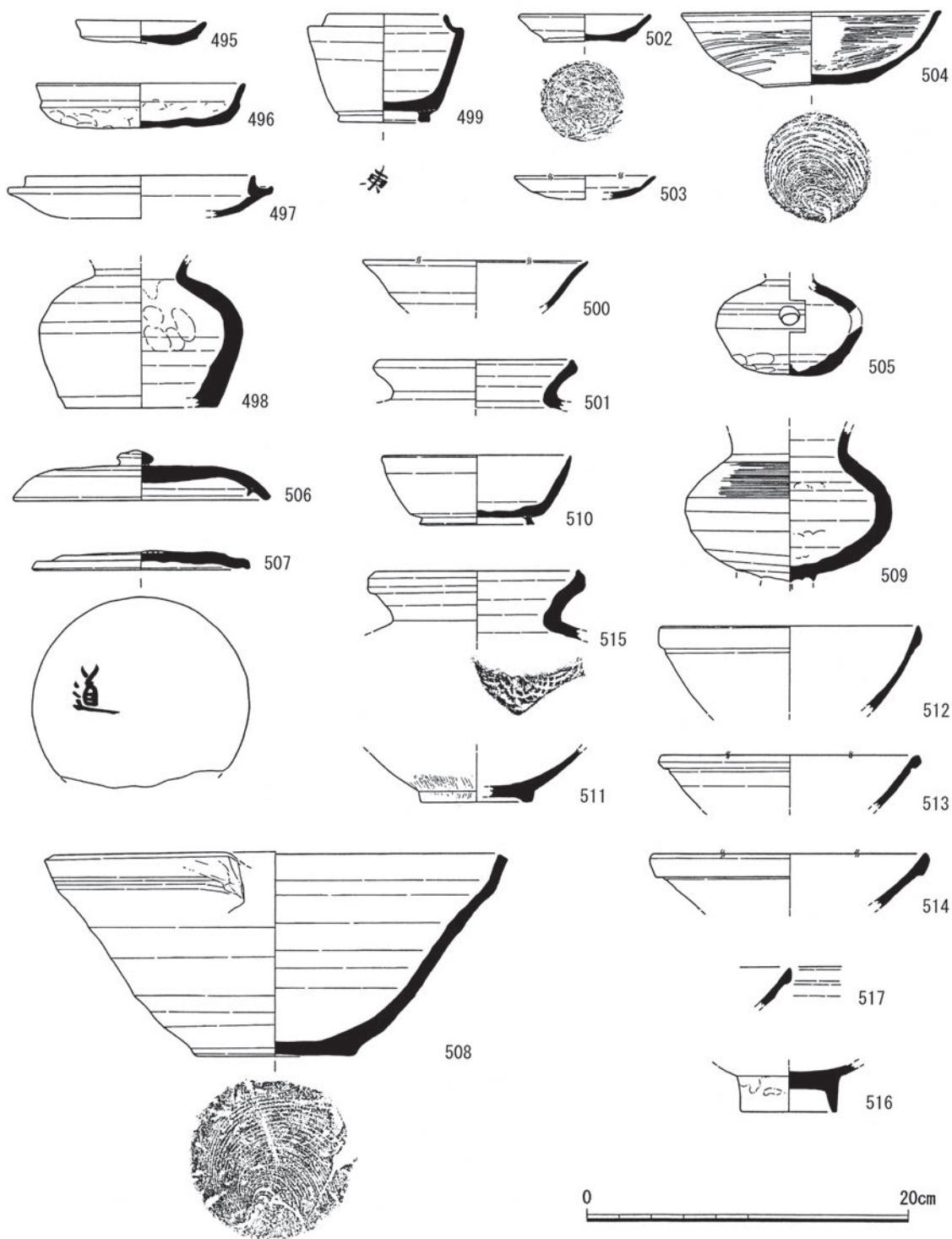
柱穴 S P 4208 492は土師器の皿である。器形は6分の1が残存し、口径11.8cm、残存高2.3cmを測る。焼成は良い。胎土はやや粗く、1mm以下の白色鈹物と雲母を含む。口縁の上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内外面にヨコナデ、外面底部にナデを施す。中世前半期に属する。

柱穴 S P 4213 493は土師器の皿である。器形は完存し、口径11.9cm、器高3.1cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、1mm以下の白色鈹物と雲母を含む。体部が直線的で口縁部が開く。内面にヨコナデ、見込みに一方向ナデ、外面にやや強いヨコナデが施され、外面底部は未調整である。

柱穴 S P 4346 494は土師器の皿である。器形は完存し、口径8.0cm、器高1.5cm、底径4.0cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鈹物、極小の雲母を含む。口縁立ち上がり部が強く屈曲する。内面にヨコナデ、ハケ痕、外面にヨコナデが施される。中世後半期に属する。

⑩自然流路NR1008(第65図495～517)

495は土師器の皿である。口縁部に煤がよく付着することから、灯明皿と考える。器形は完存する。口径が8.1cm、器高は1.5cmを測る。焼成は良く、胎土は密で0.5mm以下の白色鈹物と極小の雲母を含む。上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内外面にヨコナデが施される。中世前半期に属する。496は土師器の皿である。器形はほぼ完存する。口径が12.8cm、器高は2.8cmを測る。焼成は良く、胎土は密で1mm以下の白色鈹物を含む。上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内外面の口縁部にヨコナデが施され、体部以下は不調整である。中世



第65図 4区出土土器4

前半期に属する。

497は須恵器の杯身である。器形は12分の1のみ残存する。口径が14.2cm、残存高は2.7cmを測る。胎土は密で、3mm以下の細礫を含む。古墳時代終末期に属する。

498は須恵器の壺である。器形は6分の1が残存する。底径が9.3cm、最大径12.6cm、残存高は9.4cmを測る。胎土はやや粗く、1mm以下の白色鉱物を含む。525の須恵器壺とよく似る。飛鳥時代に属するか。499は須恵器の壺である。器形は完存する。口径が7.3cm、器高6.8cm、底径

5.7cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鈳物を含む。底部に「東」の墨書が残る。奈良時代の土器(壺E)である。

500は白磁椀である。器形は12分の1のみ残存する。口径14.0cm、残存高3.1cmを測る。胎土は精良で、素地は灰白色、釉調は灰白色である。中世前半期に属する。

501は灰釉陶器の甕もしくは壺の口縁部である。器形は6分の1が残存する。口径12.0cm、残存高3.2cmを測る。胎土は密で、0.5mm以下の白色鈳物、黒色鈳物を少量含む。

502は黒色土器の皿である。器形は4分の3が残存する。口径8.0cm、器高が復元値で1.8cmを測る。胎土は密で2mm以下の白色鈳物、黒色鈳物を少量含む。体部下端に強いヨコナデによるなだらかな平高台をもつ。中世前半期に属する。

503は白磁皿である。器形は12分の1のみ残存する。口径8.8cm、残存高1.5cmを測る。焼成は堅緻で胎土は精良。色調は素地が灰白色、釉調は灰黄色である。体部内面中位に段があることから、皿Ⅱ類と考える。中世前半期に属する。

504は黒色土器の椀である。器形は2分の1が残存する。口径16.0cm、器高が4.8cmを測る。胎土は密で3mm以下の細礫を含む。回転糸切り痕を残す平底である。中世前半期に属する。

505は須恵器の甗である。器形は体部がほぼ完存する。体部最大径が9.1cm、残存高6.2cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鈳物、0.5mm以下の黒色鈳物を含む。古墳時代後期に属する。

506はつまみをもち、口縁端部内面にかえりのある須恵器の蓋である。器形は完存する。口径15.8cm、器高3.2cmを測る。胎土は密で、5mm以下の白色鈳物を含む。杯B蓋と考える。8世紀初頭に属する。507はつまみのない須恵器の蓋である。器形は完存する。口径13.6cm、器高1.2cmを測る。胎土は密で、1.5mm以下の白色等の鈳物を含む。杯B蓋と考える。平安時代初頭か。内面に「道」の墨書が残る。

508は東播系須恵器の片口鉢である。器形は4分の1が残存する。口径が27.7cm、器高が12.7cm、底径が10.1cmを測る。胎土はやや粗く、1mm以下の白色鈳物、5mm以下の灰色の鈳物を含む。口縁端部が外反・拡張しない。底部は糸切痕跡あり。中世前半期に属する。

509は須恵器の脚付壺である。壺体部のみが残存する。体部の最大径が12.9cm、残存高9.8cmを測る。胎土はやや粗く、1.5mm以下の白色鈳物を含む。

510は須恵器の杯である。器形は2分の1が残存する。口径11.8cm、器高4.4cm、高台径7.2cmを測る。胎土は密で、4mm以下の白色鈳物を含む。杯Bと考える。8世紀初頭頃か。

511～514、516・517は白磁の椀である。511は、器形は2分の1が残存する。高台径7.0cm、残存高3.2cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が灰白色、釉調は灰白色である。体部下半に施釉がないこと、高台内部の削りが浅いことから、椀Ⅳ類と考える。中世前半期に属する。512は、器形は12分の1が残存する。口径16.0cm、残存高は5.5cmである。胎土は精良で、焼成は堅緻、色調は素地が白色、施釉は灰白色である。肉厚な玉縁をもつこと、体部下半に施釉がないことから、椀Ⅳ類と考える。中世前半期に属する。513の器形は12分の1が残存する。口径16.0cm、残存高は3.4cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻、色調は素地が灰白色、釉調は灰白

色である。やや肉厚な玉縁をもつことから、椀Ⅳ類と考える。中世前半期に属する。514は、器形は12分の1が残存する。口径17.0cm、残存高は3.5cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻、色調は素地が灰白色、釉調は灰白色である。肉厚な玉縁をもつことから、椀Ⅳ類と考える。中世前半期に属する。516は白磁椀の高台部であり、3分の1が残存する。高台径6.1cm、残存高が2.8cmを測る。胎土は精良で焼成は堅緻、色調は素地が灰白色、釉調は灰白色である。高台が細く高いこと、高台部に施釉されることから、椀Ⅴ類と考える。中世前半期に属する。517は器形の12分の1が残存する。口径は不明、残存高が2.5cmである。胎土は精良で焼成は堅緻、色調は素地が灰白色、釉調は灰白色である。玉縁直下の外面に幅広のヨコナデが認められる。古代末～中世初頭に属する。

515は東播系須恵器の甕である。口縁部の2分の1が残存する。口径12.6cm、残存高が4.5cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鉱物を少量含む。中世前半期に属する。

#### ⑪包含層西側(第66図518～535)

包含層は2区から連続して広範囲に確認される。層序上は一体的であるが、自然流路との位置関係および遺構・遺物の分布傾向を踏まえ、検討上東西に区分した。

518、519は土師器の皿である。518は、器形の4分の3が残存する。口径8.0cm、器高1.6cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。上端部の断面形状は丸みを帯びた三角形を呈する。内外面にヨコナデを施す。中世前半期に属する。519は、器形は4分の3が残存する。口径7.8cm、器高1.5cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。上端部の断面形状は丸みを帯びた三角形を呈する。内外面にヨコナデを施す。中央から端部にかけて直線的な粘土接合痕が確認できる。中世前半期に属する。

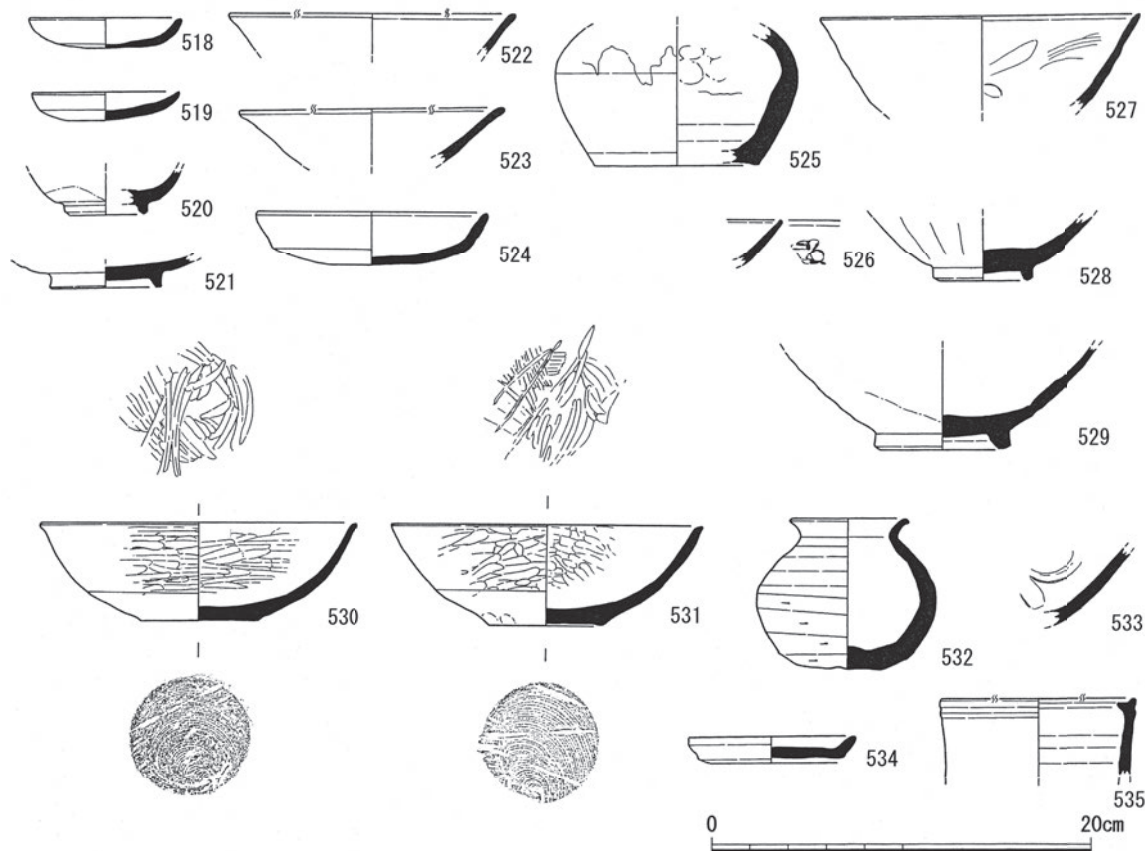
520は白磁の椀の底部である。器形は6分の1が残存する。高台径4.2cm、残存高2.3cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白色、釉調は灰白色である。Ⅳ類と考えられる。古代末～中世初頭に属する。

521は緑釉陶器の椀の底部である。底部は完存する。高台径3.8cm、残存高1.4cmを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。削り出し高台をもつ。色調は胎土が灰白色、釉調はオリーブ黄色である。古代後期に属する。

522は青磁の椀である。器形は12分の1が残存する。口径15.0cm、残存高2.3cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白色、釉調は灰白色である。古代末～中世初頭に属する。

523は白磁の椀である。器形は12分の1ほどが残存する。口径14.0cm、残存高2.9cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白色、釉調は灰白色である。中世前半期に属する。

524は土師器の皿である。器形は2分の1が残存する。口径12.1cm、器高2.9cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。上端部の断面形状は丸みを帯びた三角形を呈する。内外面にヨコナデを施す。中世前半期に属する。



第66図 4区出土土器5

525は須恵器の壺である。底部の6分の1が残る。底径が8.6cm、体部最大径12.8cm、残存高が7.3cmを測る。胎土は密で0.5mm以下の白色鉍物を含む。498の須恵器壺とよく似る。

526は染付の碗の口縁部片である。残存高2.5cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白色、釉調は灰白色である。近世初頭に属する可能性がある。

527は青磁の碗の口縁部片である。器形は6分の1が残存する。口径16.8cm、残存高5.0cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白色、釉調は灰色である。内面に片彫蓮花文が確認できることから、龍泉窯I類と考えられる。中世初頭に属する。528は青磁の碗の底部片である。高台はほぼ完存する。高台径5.2cm、残存高3.4cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白色、釉調は灰オリーブ色である。

529は白磁の碗の底部である。底部は完存する。高台径7.2cm、残存高3.7cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白色、釉調は灰白色である。中世前半期に属する。

530、531は黒色土器の碗である。530の器形は2分の1が残存する。口径16.6cm、器高5.2cm、底径6.0cmを測る。胎土は密で、4mm以下の白色鉍物および半透明鉍物をわずかに含む。回転糸切痕を残す低い高台をもち、内外面のミガキはやや粗い。中世前半期に属する。531の器形は3分の1が残存する。口径16.3cm、器高5.4cm、底径6.0cmを測る。回転糸切痕を残す低い高台をもち、内外面のミガキはやや粗い。中世前半期に属する。

532は須恵器の小型の短頸壺である。器形は完存する。胎土は密で、4mm以下の白色鉍物お

よび半透明鉍物を少量含み、焼成は堅緻である。口径5.8cm、器高8.0cmを測る。内外面に回転ナデ、外面体部下半～底部にかけて回転ヘラケズリを施す。古代前期に属する可能性がある。

533は青磁の椀の体部片である。残存高3.9cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白色、釉調は灰オリーブ色である。内面見込み部分に花文が確認できることから、龍泉窯Ⅰ類と考えられる。中世後半期に属する。

534は土師器の皿である。器形はほぼ完存する。口径8.8cm、器高1.4cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。上端部の断面形状は丸みを帯びた三角形を呈する。内外面にヨコナデを施す。中央から端部にかけて直線的な粘土接合痕が確認できる。中世前半期に属する。

535は青磁の香炉の口縁部である。口径10.2cm、残存高4.2cmを測る。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白色、釉調はオリーブ色である。中世後期初頭に属する。

#### ⑫包含層東側(第67図536～549)

包含層の東半からは磁器、土師器、黒色土器、白磁、青磁、弥生土器が出土している。

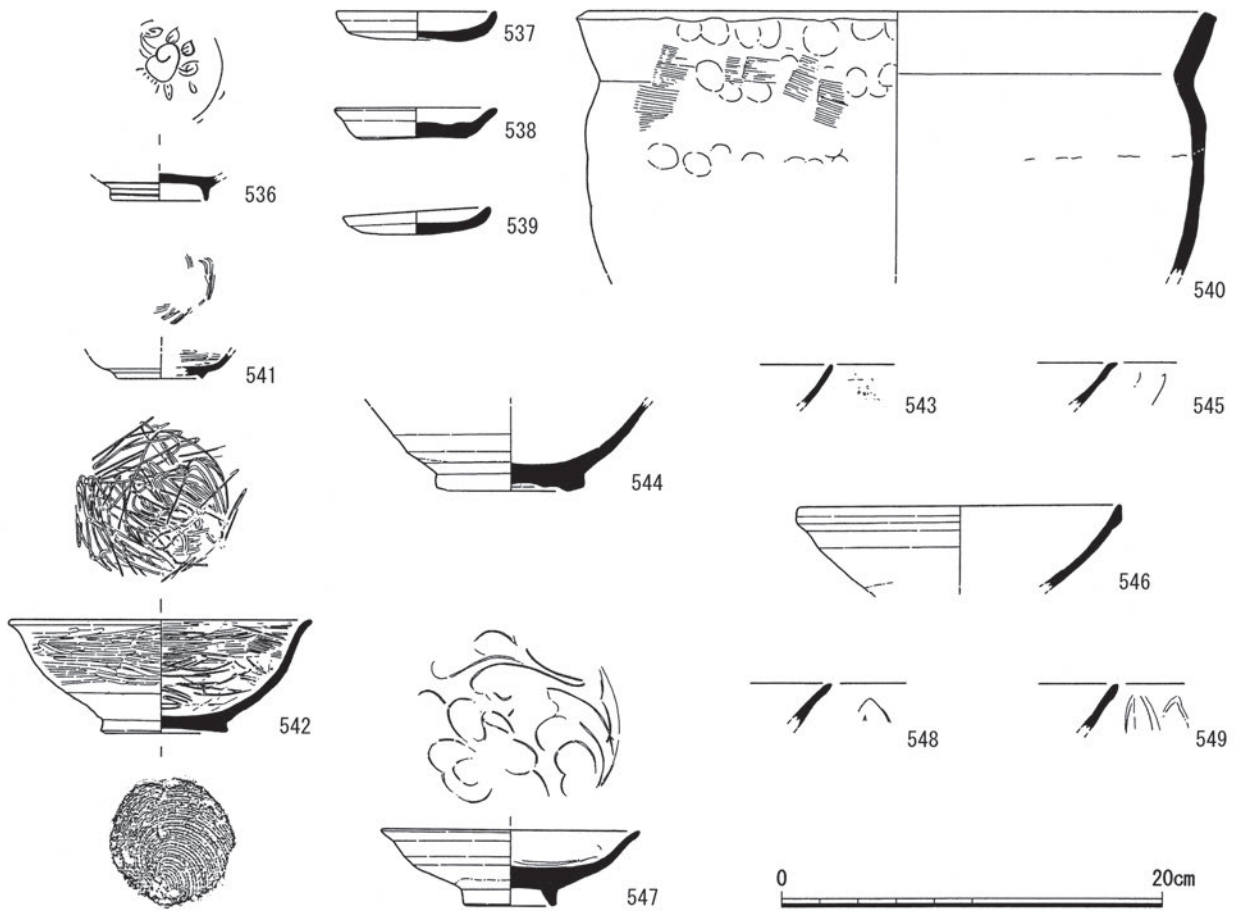
536は磁器の椀である。削り出し高台の底部が2分の1残存する。残存高1.5cm、底径は4.9cmである。胎土は精良である。施釉の色調は明緑灰色を呈する。近世初頭に属する。

537～540は土師器である。537～539は皿である。537は器形がほぼ完存し、口径8.4cm、器高1.6cmを測り、胎土は密である。上端部が突出し、断面形状が三角形を呈する。内外面はヨコナデを施す。中世前半期に属する。538は、器形はほぼ完存し、口径8.5cm、器高1.7cm、底径5.6cmを測る。胎土は密で、1mm以下の白色鉍物と雲母を含む。上端部の断面形状が丸い三角形状を呈する。内外面はヨコナデを施す。中世前半期に属する。539の器形はほぼ完存する。口径7.8cm、器高1.5cmを測り、胎土は密である。上端部の断面形状が丸い三角形状を呈する。内外面はヨコナデを施す。中世前半期に属する。

540は土師器の甕で、口縁部の6分の1が残存する。口径33.0cm、残存高14.0cmを測る。胎土はやや密で、5mm以下の白色鉍物を多く含む。口縁部が外反し直線的に立ち上がり、端部に面をもつ。古代前半期に属するか。

541、542は黒色土器の椀である。541は底部の4分の1が残存する。高台径4.6cm、残存高1.2cmを測り、胎土は密である。高台が低く直立すること、体部が底部から丸く立ち上がる。中世前半期に属する。542の器形は2分の1が残存する。口径15.7cm、器高は6.0cm、高台径6.7cmを測る。胎土はやや粗く、1.5mm以下の白色鉍物、6mm以下の細礫を含む。口縁端部が小さく外反し丸く終わる。

543～547は白磁である。543～546は椀である。543は口縁部の破片で、残存高2.2cmを除き不明である。胎土は精良、焼成は堅緻で、色調は素地が灰白色、施釉が灰白色である。外面に縦篋が認められる。中世前半期に属する。544の器形は口縁部を除いてほぼ残存する。高台径7.8cm、残存高4.5cmを測る。胎土は密で、焼成は良好、色調は素地が灰白色、釉調は灰白色である。545は口縁部の破片であり、残存高2.4cmを除き不明である。胎土は精良、焼成は堅緻で、色調は素地が灰白色、施釉が灰白色である。Ⅴ類と考える。中世前半期に属する。546の器形は4分の1が



第67図 4区出土土器6

残存する。口径16.8cm、残存高4.6cmを測る。胎土は精良で、色調は素地が灰白色、釉調は灰白色である。やや肉厚の玉縁をもつことから、Ⅳ類と考える。中世前期に属する。

547は浅形椀である。器形は2分の1が残存する。口径12.5cm、器高4.1cm、高台径5.0cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が灰白色、釉調が灰白色である。口縁部が外反し、内面見込みに草花文が施されることから、ⅩⅢ類と考える。中世前半期に属する。

548、549は龍泉窯系青磁の椀である。548は口縁部の12分の1が残存する。残存高2.4cmを測り、胎土は精良で焼成は堅緻である。体部外面に鎬蓮弁文が施されることから、Ⅱ類と考える。中世後半期に属する。549は口縁部の12分の1が残存する。残存高2.6cmを測り、胎土は精良で焼成は堅緻である。体部外面に鎬蓮弁文が施されることから、Ⅱ類と考える。中世後半期に属する。

(3) 4区出土石製品、鉄製品

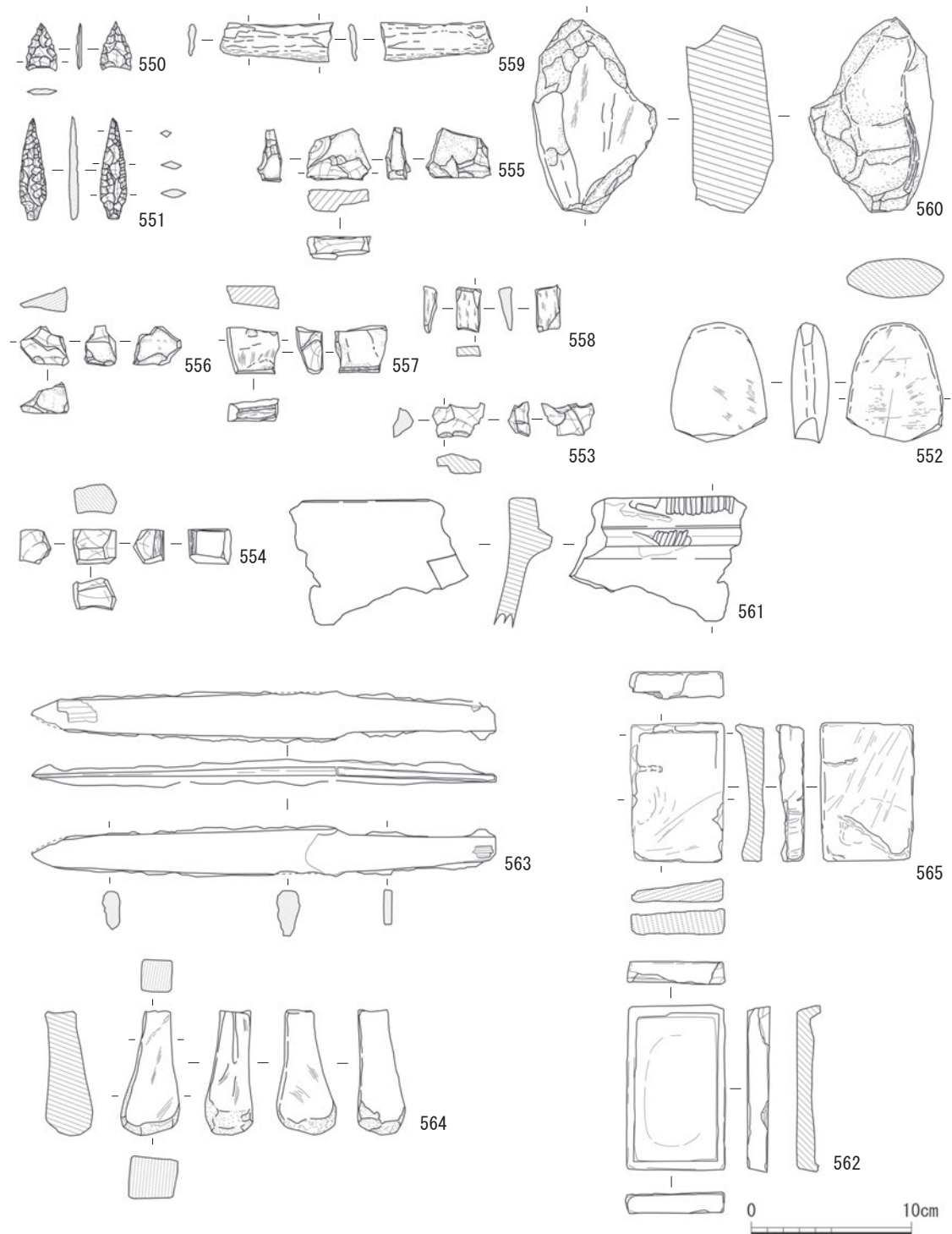
①溝S D4001

550はサヌカイト製の石鏃である。

②自然流路NR1008

有舌尖頭器、磨製石斧、石核、分割礫、石鋸、砥石、石鍋、硯が出土している。

551はサヌカイト製の有舌尖頭器である。基部が一部欠損する。



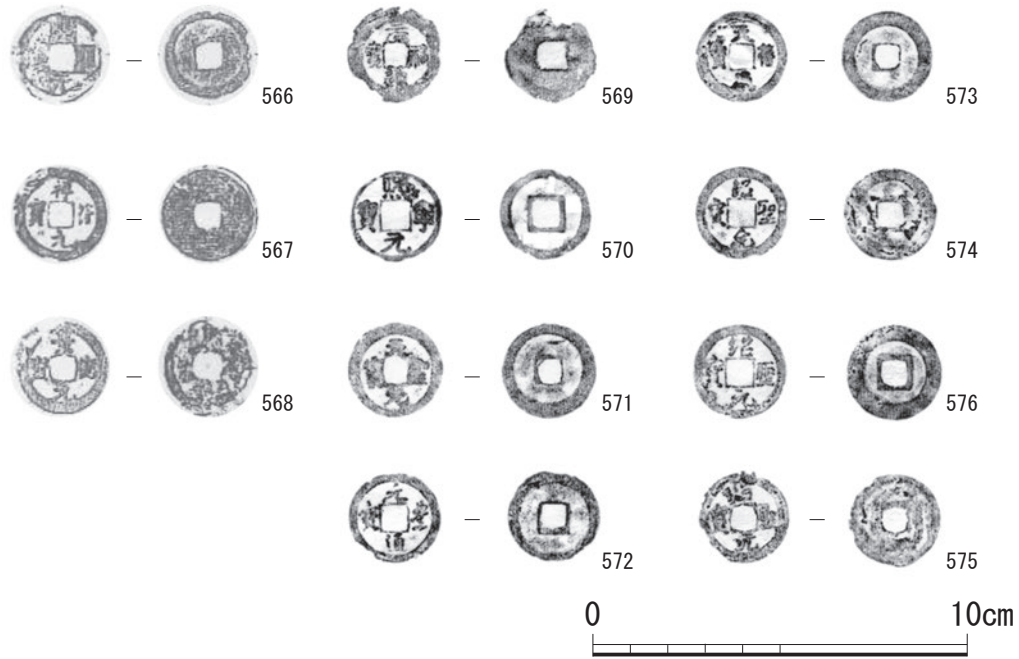
第68図 4区出土石製品、鉄製品

552は砂岩製の磨製石斧の刃部片である。

553は黒曜石の石核である。

554～558は碧玉製の玉作り関連資料の分割礫である。559は紅簾片岩製の石鋸である。こらは、弥生時代中期の玉作りに伴うものと考えられる。

560は砂岩製の砥石である。



第69図 4区出土銭貨

561は滑石製石鍋の破片である。残存長8.1cm、最大幅9.6cm、厚さ2.6cm、重量272.5gを測る。器面の一部に擦痕が認められることから、石鍋からの転用を意図したものか。

562は粘板岩製の硯である。

③柱穴SP4214

563は鉄製の刀子である。

④包含層

564は砂岩製の砥石である。

565は粘板岩製の硯である。

(4) 4区出土銭貨

①SP2003

SP2003からは6枚の輸入銅銭が出土した。

566は開元通寶(唐代、初鑄621年)である。2枚が固着した状態で出土した。1枚あたり直径2.4cm、厚さ0.3cmで、総重量3.8gを測る。567は祥符元寶(宋代、初鑄1008年)である。2枚が固着した状態で出土した。1枚あたり直径2.4cm、厚さ0.3cmで、総重量3.8gを測る。568は景德元寶(宋代、初鑄1004年)である。2枚が固着した状態で出土した。1枚あたり直径2.4cm、厚さ0.3cmで、総重量3.8gを測る。

②SP4040

SP4040からは11枚の輸入銅銭(宋銭)が出土した。

569は4枚が鑄で固着している。非常に脆弱であったため、固着した状態で報告する。直径2.5cm、厚さ0.5cmで、総重量8.8gを測る。確認できる銘は篆書体で元祐通寶(初鑄960年)である。570は直径2.5cm、厚さ0.1cm、重さ2.5gを測る。真書で記された熙寧元寶(初鑄1068年)である。

571は直径2.5cm、厚さ0.1cm、重さ2.1 gを測る。真書で記された天聖元寶（初鑄1023年）である。572は直径2.4cm、厚さ0.1cm、重さ2.9 gを測る。行書で記された元豊通寶（初鑄1078年）である。573は直径2.4cm、厚さ0.1cm、重さ2.9 gを測る。行書で記された天禧通寶（初鑄1017年）である。574は直径2.5cm、厚さ0.1cm、重さ2.7 gを測る。575は直径2.5cm、厚さ0.1cm、重さ2.7 gを測る。576は直径2.5cm、厚さ0.1cm、重さ2.9 gを測る。574～576は行書で記された紹聖通寶（初鑄1094年）である。

#### （5）4区出土木製品

##### ①井戸 S E 4215

603（第72図）は井戸 S E 4215から出土した長さ17.3cm、幅5 cm、厚さ1.9cmを測る板材である。井戸枠の部材の可能性はある。

##### ②柱穴 S P 4166

577（第72図）は柱穴 S P 4166から出土した長さ18.6cm、幅5.1cm、厚さ7.3cmを測る芯持ち材をもちいた杭である。

##### ③自然流路 NR1008（第70～73図）

木製品は577を除き、NR1008から出土した。

578～580は棒状の部材である。いずれも加工痕が認められることから、建築部材であると考えられる。578は長さ31.1cm、幅1.2cm、厚さ1.1cmを測る。長軸方向に切削痕が認められる。579は長さ16.4cm、幅2.0cm、厚さ0.9cmを測る。割肌の板を用い、一端を切削している。580は長さ16.2cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmを測る。

581は長さ13.6cm、幅8.5cm、厚さ1.1cmを測る。縁辺が折損した折敷の底板と考える。

582は板径が復元値で12.0cm、厚さ1.0cmを測る。曲物の底と考える。両面に柿渋とみられる黒色の塗料が塗布される。

583、584は不明板材である。583は長さ7.3cm、幅3.6cm、厚さ0.6cmを測る。割肌の板をもちい、一端を尖らせるように切削される。584は長さ14.3cm、幅2.8cm、厚さ0.7cmを測る。割肌の板をもちい、片面のみに筋状の工具痕が認められる。

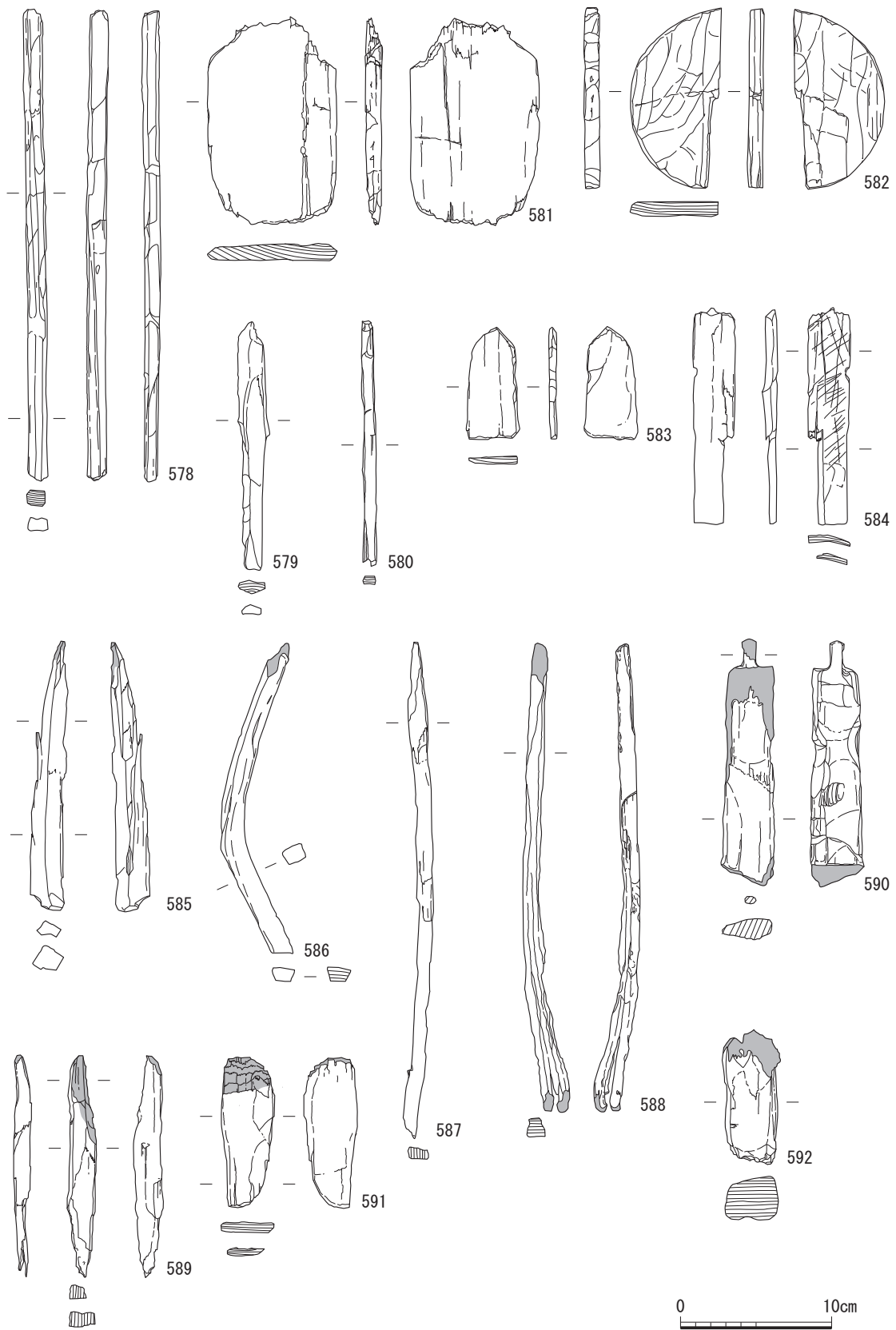
585～592は一部が炭化した木製品である。585、586、588、589は棒状の部材を使用した燃えさしと考える。590～592は形態特徴から、建築部材などを転用した燃えさしと考える。ただし、590は柄加工がなされていることから、炭化については火災による可能性が考えられる。

593～598は板状の建築部材と考える。593、594、598は全面に工具による加工痕がよく残存する。596は、中央をくぼませるように加工されている。

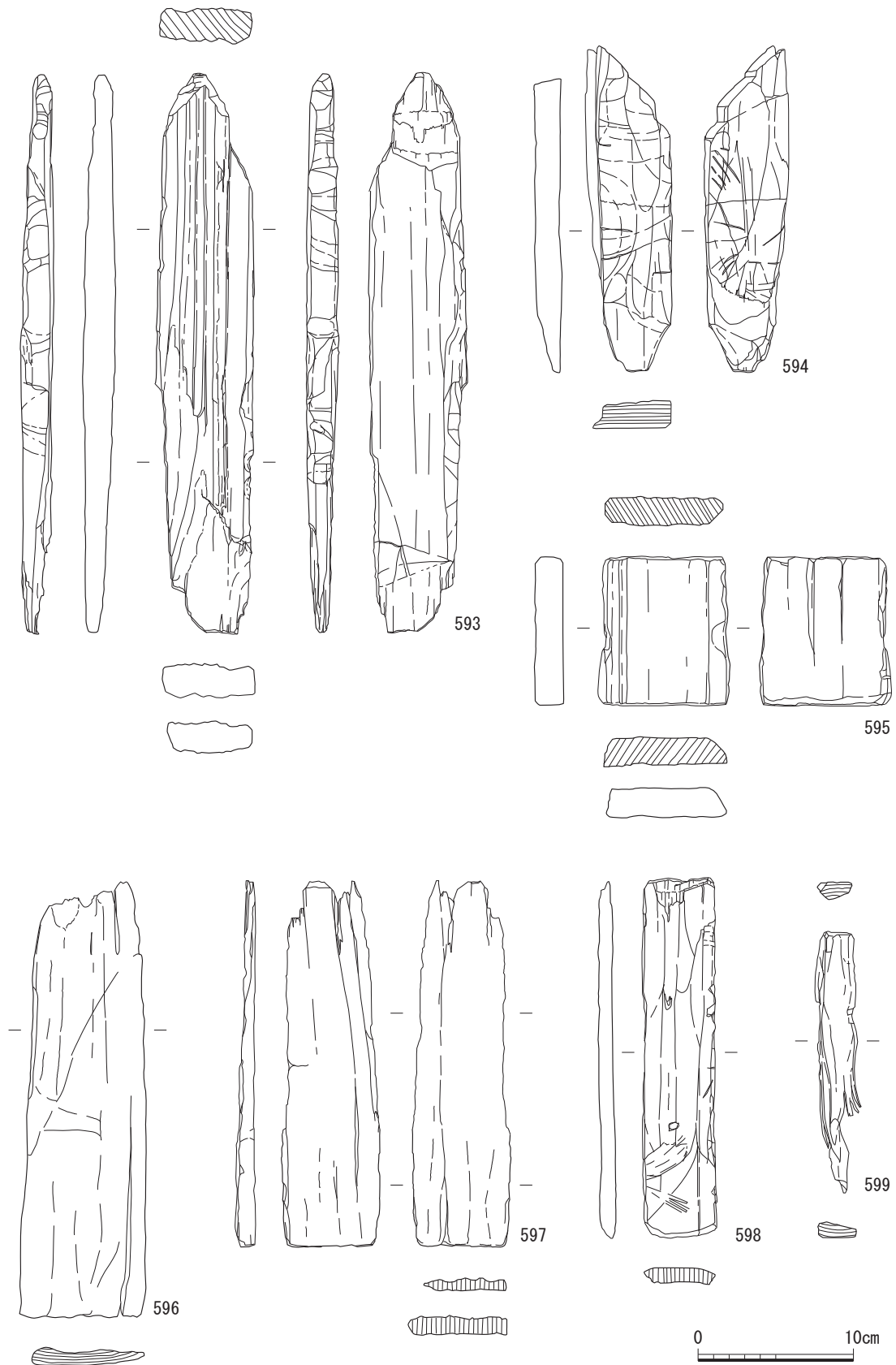
599は長さ16.5m、幅2.6cm、厚さ1.2cmを測る棒状の木製品である。縁辺中央付近に切削による段差が認められることから、建築部材の未成品と考える。

600、601は板状の木製品である。600は全面に刻み痕が認められることから、曲物の部材と考える。601は手斧による加工痕がよく残存することから、建築部材と考える。

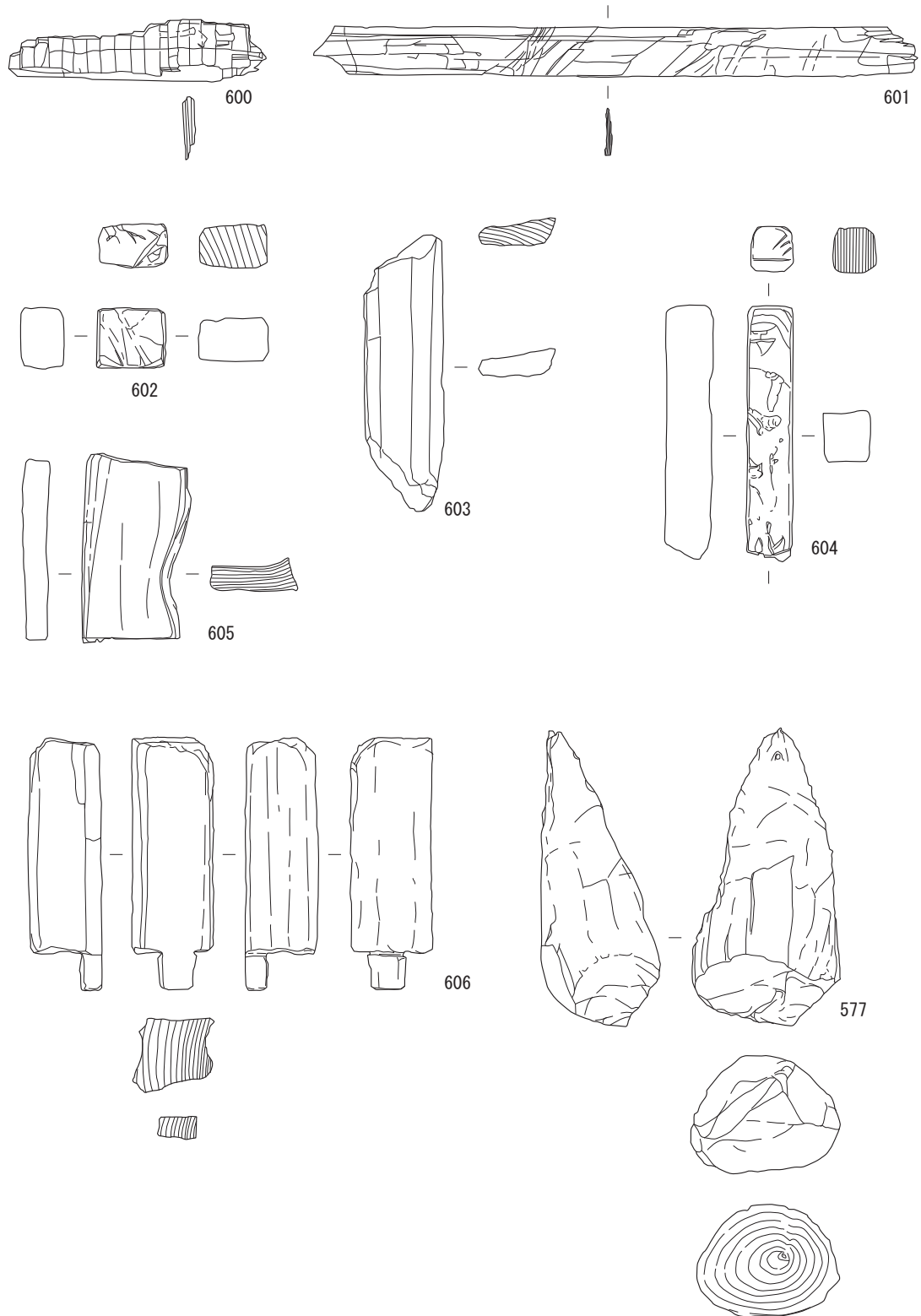
602はサイコロ状の木製品である。建築部材の柄の破片の可能性はある。



第70図 4区出土木製品1



第71図 4区出土木製品2

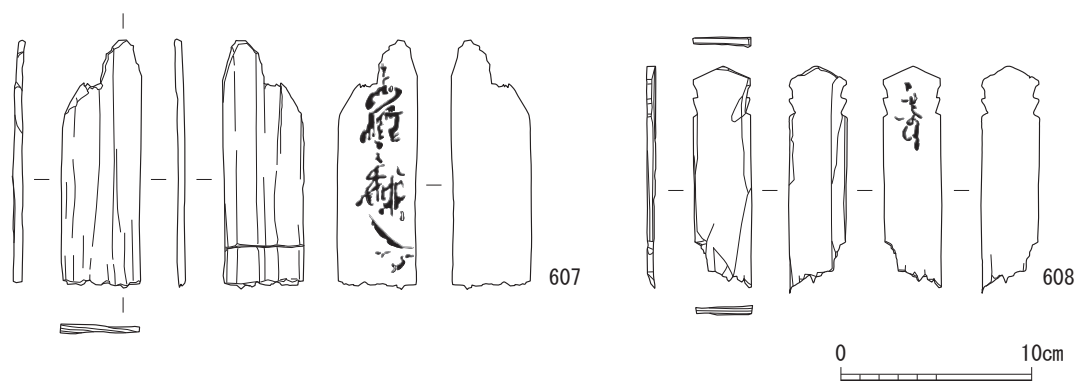


第72図 4区出土木製品3

604は長さ16.0cm、幅3.0cm、厚さ3.3cmを測る棒状の木製品である。全体的に腐食が進んでいるため、加工痕は不明である。

605は長さ11.8cm、幅6.8cm、厚さ2.1cmを測る割肌の板材である。

606は長さ15.9cm、幅5.1cm、厚さ4.6cmを測る割肌の板をもちいた、柄加工が施された建築部



第73図 4区出土木製品4

材である。

607は長さ13.0cm、幅4.2cm、厚さ0.5cmを測る墨書がされた木筒である。

608は長さ11.0cm、幅2.9cm、厚さ0.5cmを測る卒塔婆である。

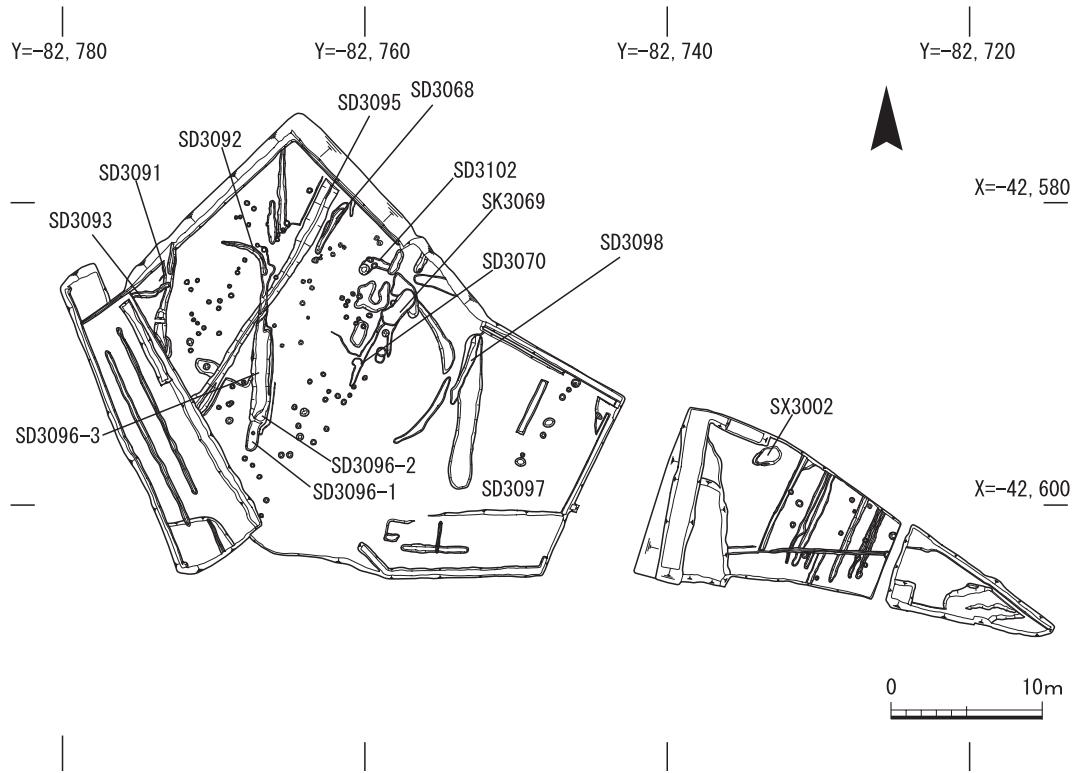
### 3) 小結

2区・4区は同一の地形面上に位置し、頂部・肩部ともに近現代の耕作による削平が著しかった。特に2区は、溝や土坑状遺構、柱穴の一部など比較的掘削の深いものしか残存しない状況であった。一方、4区は2区に比べて削平の影響は少なく、遺構が良好な状態で検出できた。堆積状況は両区ともおおむね一致し、黒褐色砂質土(古代末期～中世)、基盤層の順であることを確認した。あわせて4区では遺構群周辺に盛土層とみなしうる土層を確認している。自然流路内に縄文～中世の遺物が混在し、緩斜面では古代末以前の遺物を伴う遺構が確認できないことから、緩斜面の建物群の築造にともなう大規模な地形改変がなされたと考えられる。北西部で近世初頭の遺物が柱穴にともなって出土していることから、この時期にもある程度の利用がなされた可能性が指摘できる。遺構の残存状況が良好な4区をみると、区画溝(溝S D 4003)、主屋と付属棟と考えられる掘立柱建物2棟(S B 4001・S B 4002)、石組井戸(S E 4093)が確認でき、居住空間であったとみなしうる。この空間は区画溝、自然流路で区切られている。区画溝の東に隣接する自然流路は東へと続く緩斜面を区切る溝(S D 4001)として利用し、居住空間を区画したと考えられる。区画溝が、条里に基づいて設定されたことを想定したが、現在の周辺の畦畔や土地区画から読み取ることはできなかった。ただし、近現代の耕作溝が区画溝に並行することから、畑地の構造に一定の規制は与えていたものと考ええる。また、自然流路内の木枠井戸(S E 4215)も屋敷地にあったものが、中世以降に自然流路によって侵食されたと想定できる。出土遺物をみると、輸入陶磁や手捏ねのいわゆる京都系土師器皿があること、地鎮儀礼と想定できる土坑あるいは柱穴に緡銭や刀子を埋納する様相が確認できることから、一定の社会的地位を有する人物が生活していた可能性がうかがえる。

## 5. 3 区 の 調 査

### 1) 地区の概要と検出遺構

#### (1) 調査の概要



第74図 3区遺構配置図(S=1/500)

3区は調査対象地の北辺に位置し、後背山地の谷筋をせき止めて形成された福井谷池の下流側にあたり、谷口部から緩斜面へと連続する微高地に立地する。調査区は現代の用水路を挟んで東西に分かれ、東部は標高約38mの2区に隣接する地点に、西部は標高約37mの地点に設定した。

東部は2区と同様に近現代の削平の影響を強く受けており、遺構の残存状況は不良で、弥生時代中期の土坑状遺構(S X 3002) 1基を検出するにとどまった。

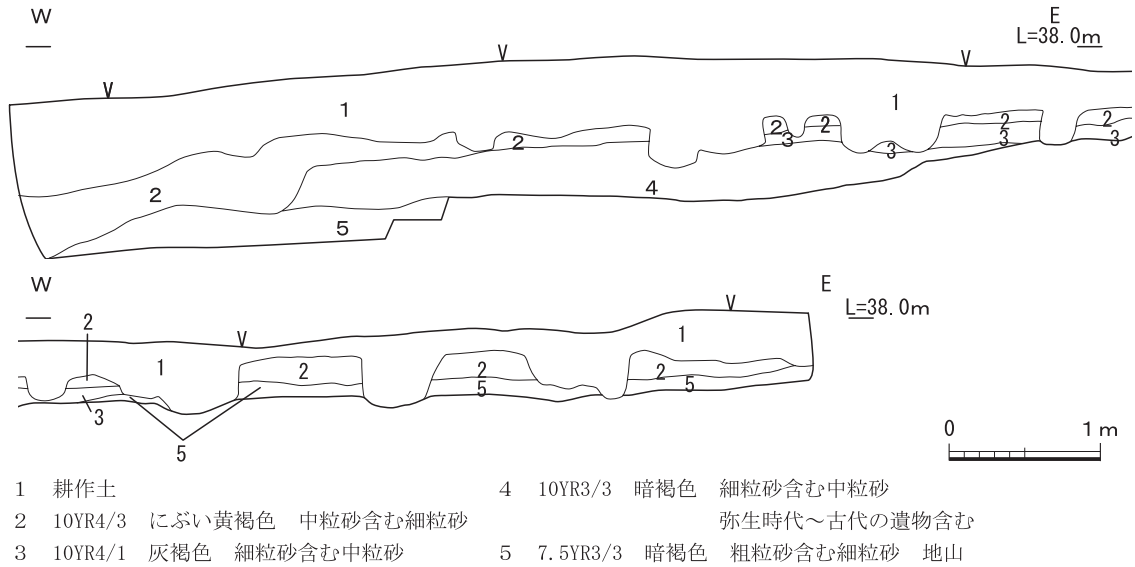
西部では耕作土直下に弥生時代中期の遺物包含層が残存していた。包含層除去後、地山面上に弥生時代中期の溝(S D 3068、S D 3070、S D 3091、S D 3095、S D 3096、S D 3097)および土坑(SK3069) 1基、弥生時代中期以降のL字溝(S D 3092、S D 3093、S D 3102) 3条を検出した。

## (2)基本層序

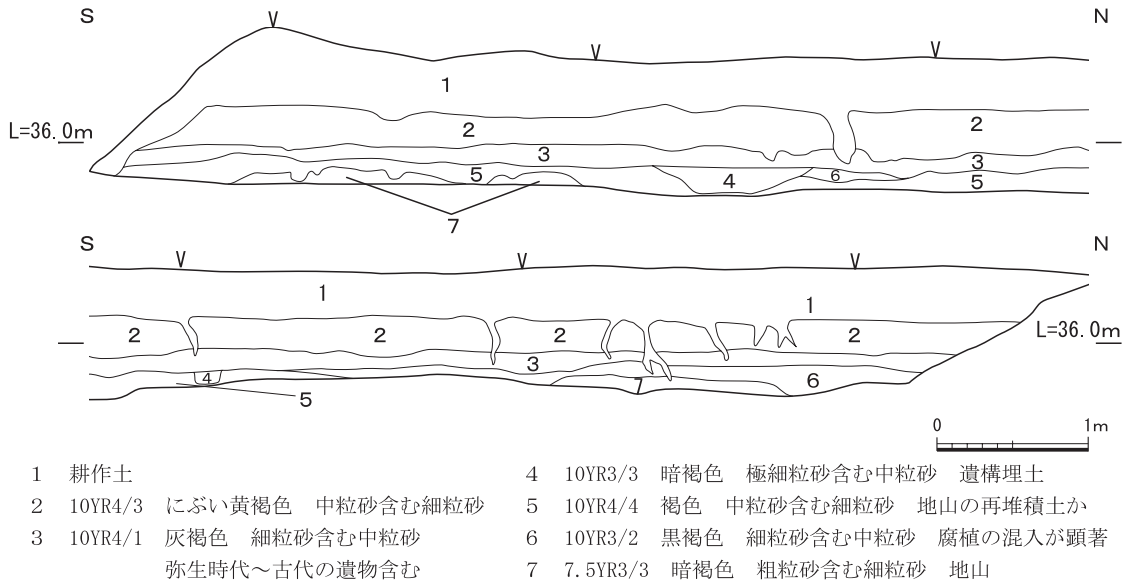
本地区の基本層序は、地形条件および近現代の改変の影響を考慮し、調査区を東部と西部に分けて記載する。

東部では、厚さ約0.5mの近現代の耕作土(第1層)の直下に、遺物包含層と地山が混和した土層(第2層・第3層)が分布する。これらは近代以前の耕作土に相当すると考えられるが、遺物を含むため細分した。第2層はやや粗粒で、遺物包含層の土壌をわずかに含む層であり、とくに西側において下位層に対して不整形に切り込む部分が認められる。これらの切り込みは局所的で連続性に乏しく、耕作等に伴う掘り返しや攪乱の影響によって形成された可能性が高い。一方、第3層は細粒で、遺物包含層の土壌を多く含み、第2層の下位に連続的に分布する。

地山面(第5層)は全体として西から東に向かって標高を増すが、西側では急激に低下する。これに対応して、遺物包含層に相当する第4層は東部中央より西側に分布し、地山面の低下に伴っ



第75図 3区東部北壁断面図(S=1/50)

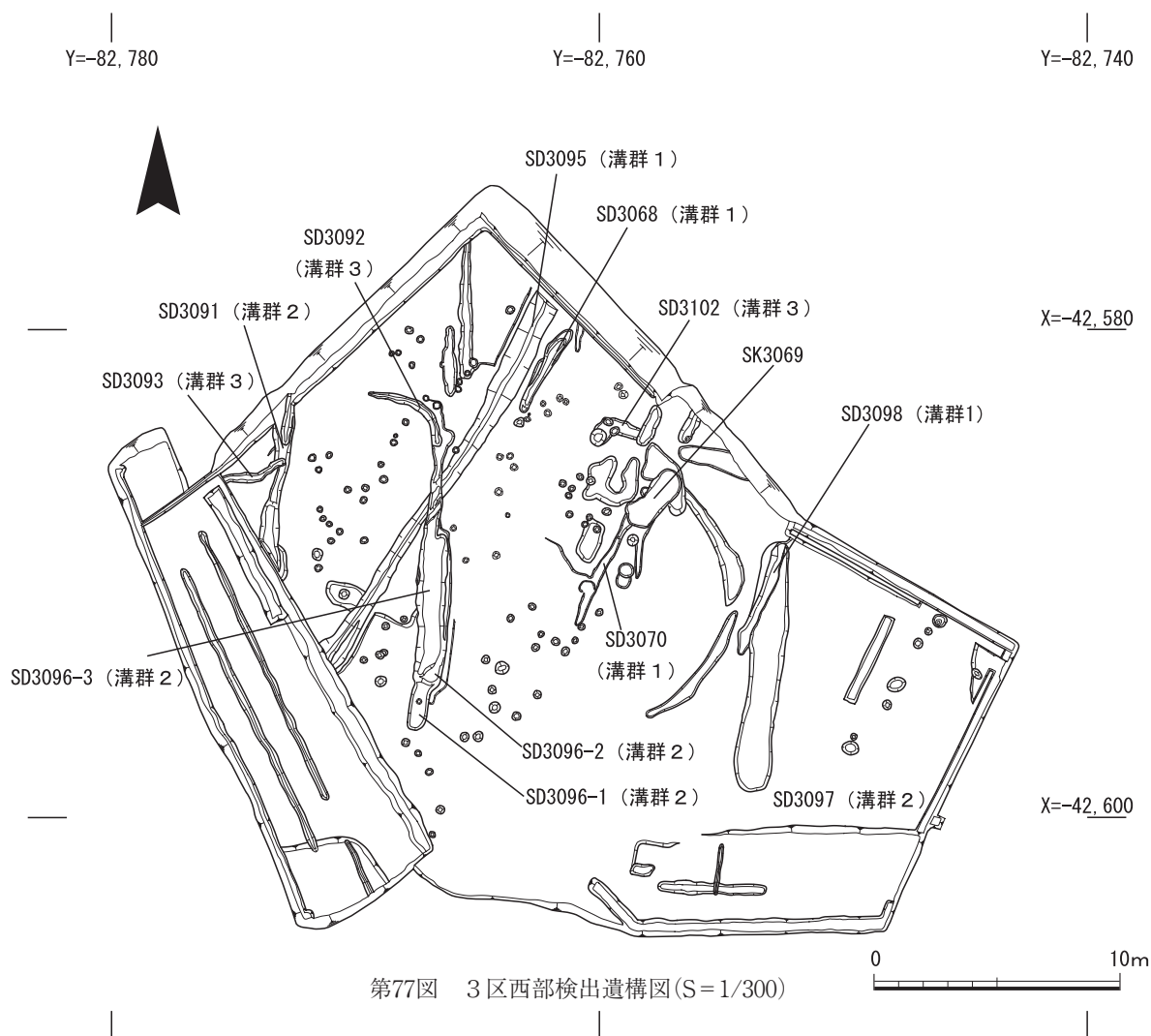


第76図 3区西部西壁断面図(S=1/50)

て著しく厚みを増す。第2層は西側に向かうにつれて下位層へ大きく切り込む傾向が認められ、これらの層序関係は地山面の起伏に強く影響を受けて形成されたものと考えられる。

西部では、第1層から第2層までの堆積状況は東部と共通しており、近代以降に広範かつ大規模な地形改変が加えられたことが読み取れる。遺物包含層に相当する第3層は厚さ約0.1mで広く分布する。また、第3層の下部に粘性の強い黒色土(第6層)が部分的に認められる。本層の分布範囲では現在も湧水が確認されることから、この堆積物は緩やかな水流の影響を受けて形成されたものと考えられる。地山面は全体として南から北に向かって緩やかに標高を増す。

東部および西部にみられる層序は、谷口部に近い地形条件と近現代の改変の影響を反映したものといえる。



### (3) 検出遺構

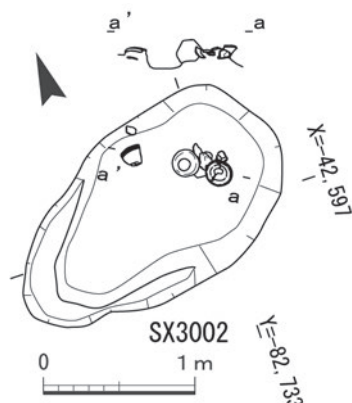
調査区の東部と西部で検出遺構の様相は大きく異なる。東部では遺構の残存状況が不良で、弥生時代中期の不定形土坑1基のみを検出した。一方、西部では弥生時代中期に属する複数の溝が検出された。これらの溝は、いずれも谷側に向かって延伸し、走向や規模に一定の共通性が認められるため、その違いに基づいて3つの群に区分し、それぞれを溝群として扱う。

①不定形土坑 S X 3002 S X 3002は3区の東部、遺物包含層の厚みが増す地形変換点に位置し、長軸約2.0m、短軸1.1m、深さ0.2mを測る楕円形を呈する不定形土坑である。便宜上、不定形土坑としたが、検出時の掘形は不明瞭である。倒置した状態の弥生時代中期に属する完形の小型壺、大型の壺の口縁部が出土している。

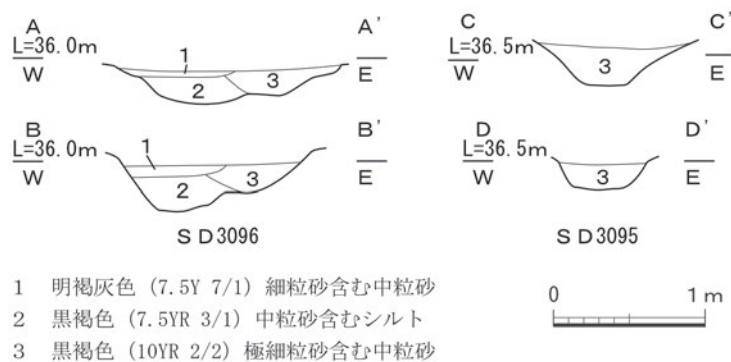
②土坑SK3069 SK3069は3区の西部中央に位置し、最大長約2.8m、最大幅約1.3m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する土坑である。S D 3070に切り込まれる。埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。

③溝群1 (S D 3065、S D 3070、S D 3095、S D 3098)

溝群1は、走向がおおむね北東—南西方向を示し、平均して約24°東偏する群である。また、



第78図 不定形土坑 S X3002  
平・断面図(S=1/50)



第79図 溝 S D3096・S D3095断面図(S=1/50)

構成する各溝は互いに並行して配置され、溝間の間隔は S D3068 を除くと概ね約 6m で揃う。

**溝 S D3068** S D3068 は 3 区西部の北西に位置し、最大長約 3.8m、最大幅約 0.5m、深さ約 0.1m を測る。埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。S D3095 に隣接することから、同一の遺構である可能性がある。

**溝 S D3095** S D3095 は 3 区西部の北西に位置し、検出長約 19.4m、最大幅約 0.5m、深さ約 0.3m を測る。北東方向へ延伸するとみられるが、調査区外に及ぶため全体の規模は確認できない。また、南側は攪乱によって失われている。さらに、S D3096 によって切り込まれている。埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。

**溝 S D3070** S D3070 は 3 区西部の中央に位置し、検出長約 4.8m、最大幅約 0.5m、深さ約 0.1m を測る。SK3069 を切る。埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。

**溝 S D3098** S D3098 は 3 区西部の東に位置し、最大長約 2.0m、検出幅約 0.5m、深さ約 0.1m を測る。S D3097 を切り込んでいる。埋土からは弥生時代中期の土器、大型石包丁が出土している。

#### ④溝群 2 (溝3091、溝3096-1、溝3096-2、溝3096-3、溝3097)

溝群 2 は、走向がおおむね南北方向で平均して約 7° 東偏する溝群である。構成溝の規模には差がみられ、S D3091・S D3096-1 に代表される細幅溝型と、3096-3 に代表される幅広溝型に区分される。いずれも同一走向を共有し、同系統の施設として位置づけられる。

**溝 S D3091** S D3091 は 3 区の西部に位置し、検出長約 6.9m、最大幅約 0.4m、深さ約 0.1m を測る。北東方向へ延伸するとみられるが、調査区外に及ぶため全体の規模は確認できない。また、南側は攪乱によって失われている。さらに、S D3093 によって切り込まれている。埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。

**溝 S D3096-1** S D3096-1 は 3 区の西部に位置し、検出長約 13.6m、検出幅約 0.5m、深さ約 0.1m を測る。S D3096-3 を切り込む。埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。

**溝 S D3096-2** S D3096-2 は 3 区の西部に位置し、最大長約 6.7m、検出幅約 1.3m、深さ約 0.1m を測る。S D3096-1 と並行し、S D3096-3 を切り込む。埋土からは弥生時代中期の

土器が出土している。

溝 S D 3096-3 S D 3096-3 は3区の西部に位置し、最大長約6.7m、検出幅約1.3m、深さ約0.2mを測る。S D 3096-1、S D 3069-2に切り込まれる。埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。

溝 S D 3097 S D 3097は3区の西部に位置し、最大長約12.4m、最大幅約1.4m、深さ約0.1mを測る。南北方向へ延伸するとみられるが、調査区外に及ぶため全体の規模は確認できない。埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。

### ⑤溝群3

まとまりのない、L字に曲がる溝群である。

L字溝 S D 3093 S D 3093は調査区の西端に位置し、検出長約4.8m、最大幅0.3m、深さ約0.1mを測る。本調査区で検出したL字溝のうち、最も残存状況が良好である。溝内から遺物の出土は認められなかったが、包含層より古墳時代の遺物が出土していることから、当該期の竪穴建物の周壁溝の可能性が高いと考える。

L字溝 S D 3092 S D 3092は調査区の西側に位置し、最大長約3.8m、最大幅0.3m、深さ約0.1mを測る。L字の屈曲部だけが残存し、S D 3096を切り込む。溝内から遺物の出土は認められなかったが、包含層より古墳時代の遺物が出土していることから、当該期の竪穴建物の周壁溝の可能性が高いと考える。

L字溝 S D 3102 S D 3102は調査区の北側に位置し、検出長約3m、最大幅0.4m、深さ約0.1mを測る。L字の屈曲部を調査区内で確認し、北側に延伸すると考えられるが、調査区外に及ぶため全体の規模は確認できない。溝内から遺物の出土は認められなかったが、包含層より古墳時代の遺物が出土していることから、当該期の竪穴建物の周壁溝の可能性が高いと考える。

## 2) 出土遺物

### (1) 弥生土器

#### ①不定形土坑 S X 3002(第80図)

弥生時代中期の鉢と高杯が出土した。いずれも弥生時代中期後葉に属する。

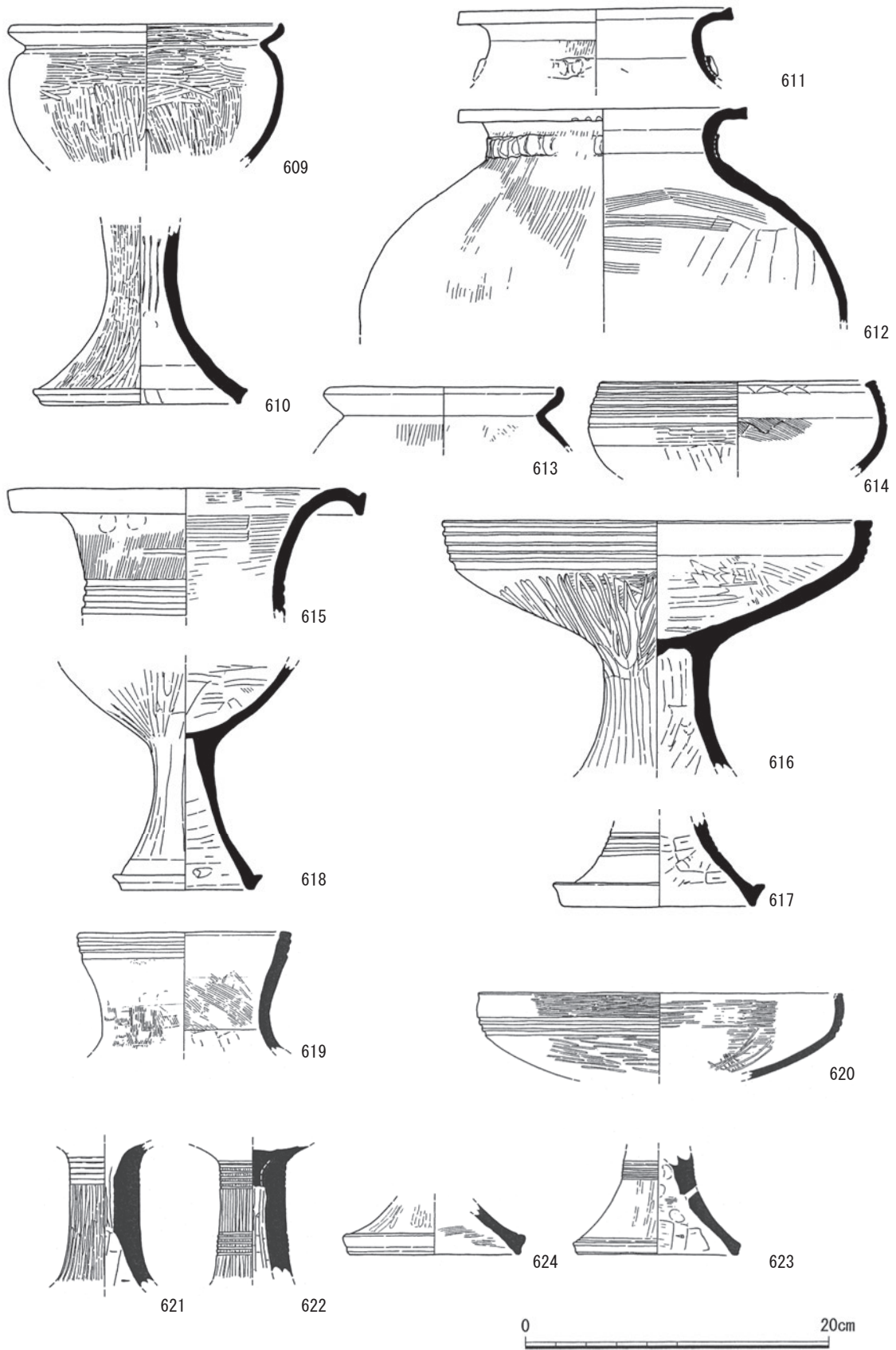
609は内外面をヘラミガキで調整する鉢である。口縁部は6分の1が残存する。口径17.7cm、残存高9.3cmを測る。口縁部が内湾気味に立ち上がり、頸部がくの字に屈曲する。胎土は密で、焼成は良好である。

610は高杯である。脚部がほぼ完存する。脚部径12.8cm、残存高12cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好である。脚部内面にシボリ痕があり、脚部内面に荒いヘラケズリ、脚部外面に荒いヘラミガキを施す。裾部はやや広く立ち上がるが脚端部の拡張は小さい。

#### ②土坑 S K 3069(第80図)

弥生時代中期後葉の壺、甕、高杯が出土した。

611・612は、頸部を指頭圧痕文突帯で加飾した短頸壺である。611は、口縁部12分の1の小破片で、口径約17.8cmを測る。612は、体部外面をハケで、内面下半をヘラケズリで、上半を横方



第80図 3区出土土器 1

向のハケで調整する。口径19.0cm残存高14.5cmを測る。

613は、口縁端部を上方につまみあげるくの字の頸部をもつ甕である。口縁部が6分の1程度残る破片で、口径は15.0cm、残存高3.9cmを測る。口縁部に噴きこぼれによる付着物がつく。体部外面はハケ調整である。

614は、口縁部外面に6条の凹線文を施す高杯である。口縁端部をわずかに内側下方に拡張する。杯部下半をヘラケズリで調整した上、凹線文を施したのち、丁寧に横方向のヘラミガキを行う。内面はハケののちヘラミガキを行う。が確認できる。外面は荒い。口縁は「く」の字状に外反し、端部は丸みを帯びる。高杯としたが、台付き鉢などの可能性もある。

### ③溝S D 3068(第80図)

弥生時代中期後葉の壺と高杯が出土した。

615は、直立した頸部から口縁部が大きく外反する広口壺である。口縁部の3分の1が残存し、口径23.6cm、残存高8.5cmを測る。口縁端部を上方に拡張し、頸部には3条の幅広の凹線文が施される。頸部外面をハケで、頸部から口縁部にかけての内面をハケのちヘラミガキで調整する。中期後葉に属する。

616～618は弥生土器の高杯である。616は口縁部外面を5条の凹線文で飾った高杯の杯部である。凹線文はヘラ状の硬い工具で1本ずつ施している。口縁部3分の1ほどの破片で、口径28.2cm、残存高17.0cmを測る。杯部と脚部の外面をヘラミガキする。杯部内面は、ハケで調整したのちヘラミガキする。中期後葉の所産である。617は、高杯の脚部で、脚部径14.0cm、残存高5.8cmを測る。脚柱部直下に3条のヘラ状工具による退化凹線文が施される。脚端部は斜め上方に大きく拡張される。中期後葉の所産である。618は、高杯の杯部から脚部にかけての破片である。深い杯部と円柱部をもたない脚部からなり中期中葉にさかのぼる可能性がある。脚部径9.8cm、残存高15.0cmを測る。脚端部を斜め情報に拡張し、杯部と脚部の外面をヘラミガキし、杯部内面をハケのちヘラミガキする。脚部内面には絞り痕跡はなく、全面をヘラケズリする。

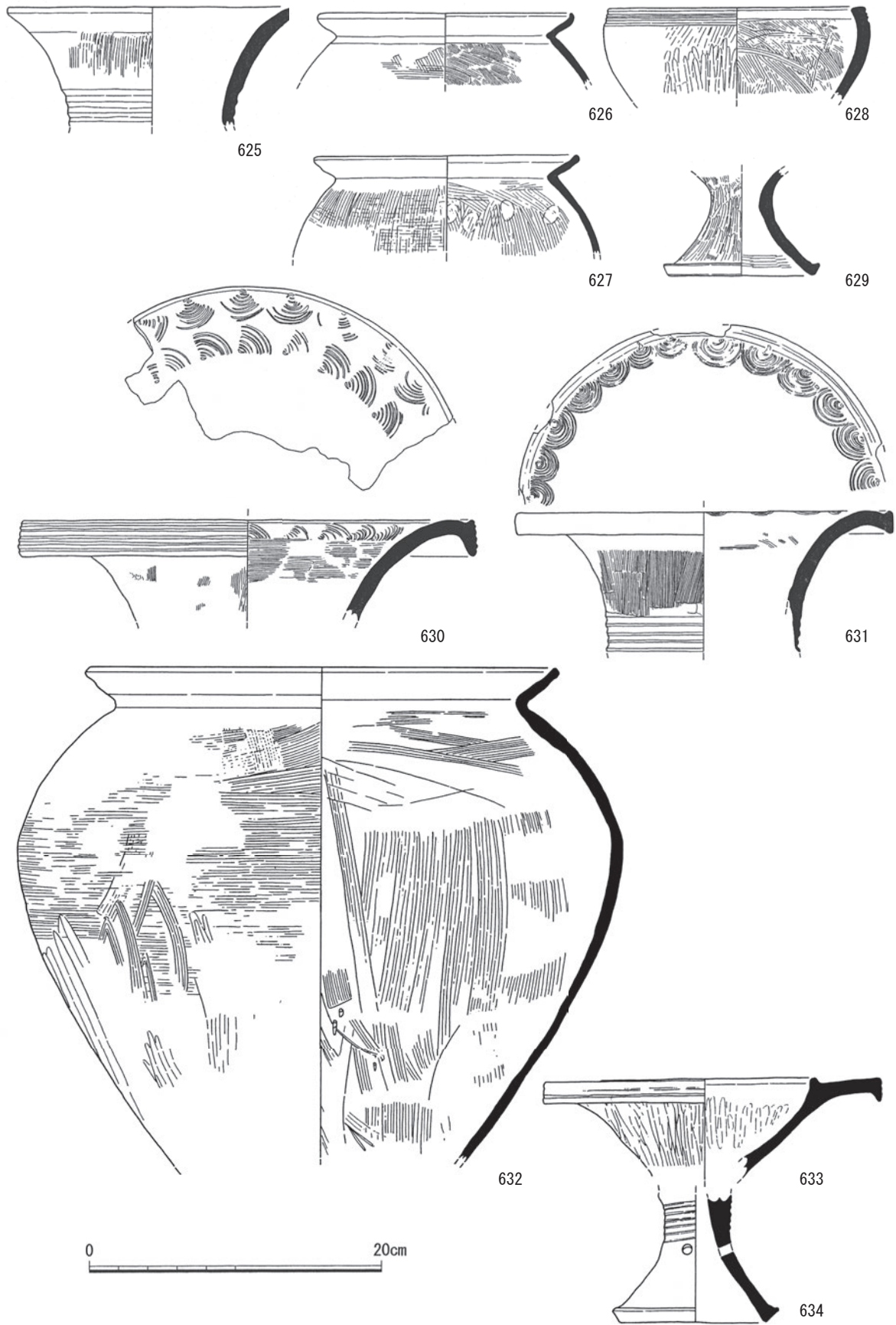
### ④溝S D 3091(第80図)

弥生時代中期後葉の壺、甕、高杯が出土した。

619は、口縁部外面に3条の凹線文を施す短頸壺もしくは水差しである。頸部から上は完存する。口径13.6cm、残存高7.9cmを測る。口縁部は直立気味に開き口縁端部は拡張しない。体部外面は弥生土器の壺である。体部外面をハケ調整し、内面は頸部下半をヘラケズリ、頸部をハケで調整する。器形は口縁部から頸部にかけて完存する。

620～624は高杯である。620は、高杯の杯部で、杯部の屈曲部に3条の凹線文を施す。口縁部はほぼ直立して立ち上がる。口径は大きく23.8cmを測る。残存高は5.7cmで、杯部の高さはおおむね6cmほどである。内外面を丁寧にヘラミガキする。は弥生土器の高杯の杯である。

621・622は高杯の脚柱部である。621は、脚柱部は縦方向のヘラミガキで丁寧に調整されたのち、上半に5条の退化凹線文(沈線文)が施されている。脚柱部径2.3cm、残存高9.6cmを測る。脚部内面はヘラケズリののち未調整である。622は、丁寧にヘラミガキしたのち、上下2か所にそれ



第81図 3区出土土器2

ぞれ5条の退化凹線文(沈線文)が施している。

623・624は高杯の脚裾部である。623は、脚部径10.5cm、残存高6.9cmを測る。脚裾部には3方向もしくは4方向の透かし穴が穿たれ、脚端部はあまり拡張しない。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリののち一部ハケで調整する。624は、脚部径11.2cm、残存高3.5cmを測る。脚端部を上下に少し拡張する。外面はヘラミガキで、内面はヘラケズリののちハケで調整している。

⑤溝 S D 3095(第81図)

弥生時代中期後葉の壺、甕、鉢が出土した。

625は頸部下半に三条の幅広の凹線文もつ広口壺である。口縁部から頸部にかけての4分の1ほどの破片である。口径19.7cm・残存高8.3cmを測る。頸部から口縁部にかけてはラッパ状に大きく開き、口縁端部は拡張しない。

626・627は甕である。626は、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁部8分の1程度の破片で、口径17.0cm、残存高5.0cmを測る。頸部はくの字に直角気味に折れ曲がる。体部内外面をハケで調整する。

627は、口縁部が4分の1ほど残存し、口径17.9cm、残存高6.9cmを測る。頸部がくの字に屈曲し、口縁部はわずかに内湾する。体部外面上部に横方向のタタキ痕跡が見られ、タタキののち縦方向のハケで調整する。内面は頸部までハケで調整する。

628・629は、鉢である。628は、台付き鉢の上半部で、口縁部外面をヘラミガキしたのち、2条の凹線文を施す。口縁端部の拡張は顕著ではない。体部内面はハケで調整する。口径17.6cm、残存高6.5cmを測る。629は、台付き鉢の脚部である。脚部径9.7cm、残存高7.4cmを測り、脚端部を上方に拡張する。外面を縦方向のヘラミガキで調整し、内面は横方向のハケで調整している。杯部の円盤充填の痕跡は観察できない。

⑥溝 S D 3096(第81図)

弥生時代中期後葉の壺、甕、高杯が出土した。

630・631は壺である。630は、口縁部がラッパ状に広がり口縁端部が垂下する広口壺である。口縁部の4分の1が残存し、口径30.6cm、残存高7.0cmを測る。垂下する口縁端部に5条の凹線文を施し、口縁部内面に楡描き扇形文を2段重ねる。631は直立する頸部から口縁部がラッパ状に広がる広口壺で、頸部に3条以上の凹線文を施す。口縁部の2分の1が残存し、口径25.4cm、残存高9.7cmを測る。口縁端部は上方に少し拡張する。口縁部内面には、楡描きによる半円が口縁部に沿って連続して施されている。

632は大型の甕である。口縁部は3分の1が残存し、口径32cm、器高34.6cm、胴部最大径42.2cmを測る。くの字に屈曲する頸部から口縁部は直線的に開く。体部外面はハケで調整したのち、下半部をヘラによる粗いミガキを底部側から施している。内面下半は底から削り上げるようにハケで調整し、胴部上半部を横方向のハケで調整する。

633・634は高杯である。633は高杯の杯部で、椀状の杯部の上端から水平に開く口縁部が伸び、口縁端部をわずかに下方に拡張する。杯部の4分の3が残存し、口径14.4cm、水平部径24.0cm、

残存高6.9cmを測る。水平部の端面には、2条の浅い凹線文を施し、杯部内外面をヘラミガキする。634は、高杯の脚部で脚柱部に5条の凹線文を施す。脚端部は完存し、脚部径11.4cm、残存高9.0cmを測る。脚端部は斜め情報に拡張し、裾部上端付近に円孔を穿孔する。脚部内面をナデで仕上げる。

なお、同溝内からは中世の土師器の小皿が出土しているが、混入と判断し割愛した。

⑨溝 S D 3097 (第82図)

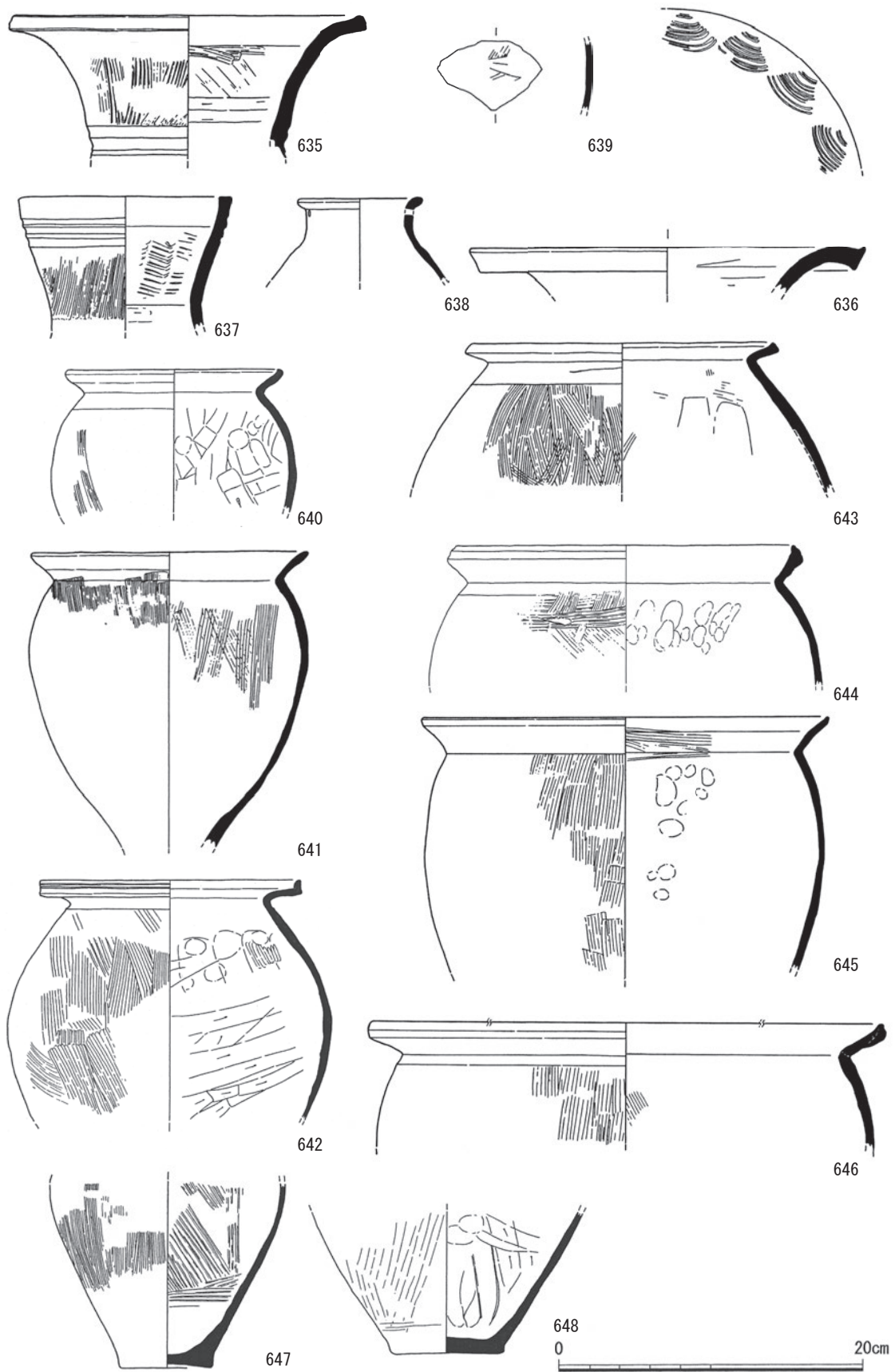
弥生時代中期後葉から末にかけての壺、甕、鉢、高杯が出土した。

635～639は、壺である。635は、口縁部がラッパ状に開く広口壺で、口縁部の4分の1が残存する。口径22.6cm、残存高9.5cmを測る。内外面をハケで調整し、その後ナデ調整を行っている。頸部に3条以上の幅広の凹線文を施す。636は、口縁部が大きく外反する広口壺である。口縁端部を斜め上方に拡張する。口縁部内面に櫛描扇形文を施す。637は、口縁部下方に3条の凹線文を施す短頸壺もしくは水差しの頸部から上の部分である。口縁部で3分の2が残存し、口径12.5cm、残存高8.9cmを測る。638は、口縁端部を丸く肥厚させ、その下に紐穴をあける小型の壺である。胎土は精良で、表面は丁寧なヘラミガキが施されていたと考えられる。639は、壺の肩部もしくは胴部の小破片で、鹿と考えられる線刻が施されている絵画土器である。

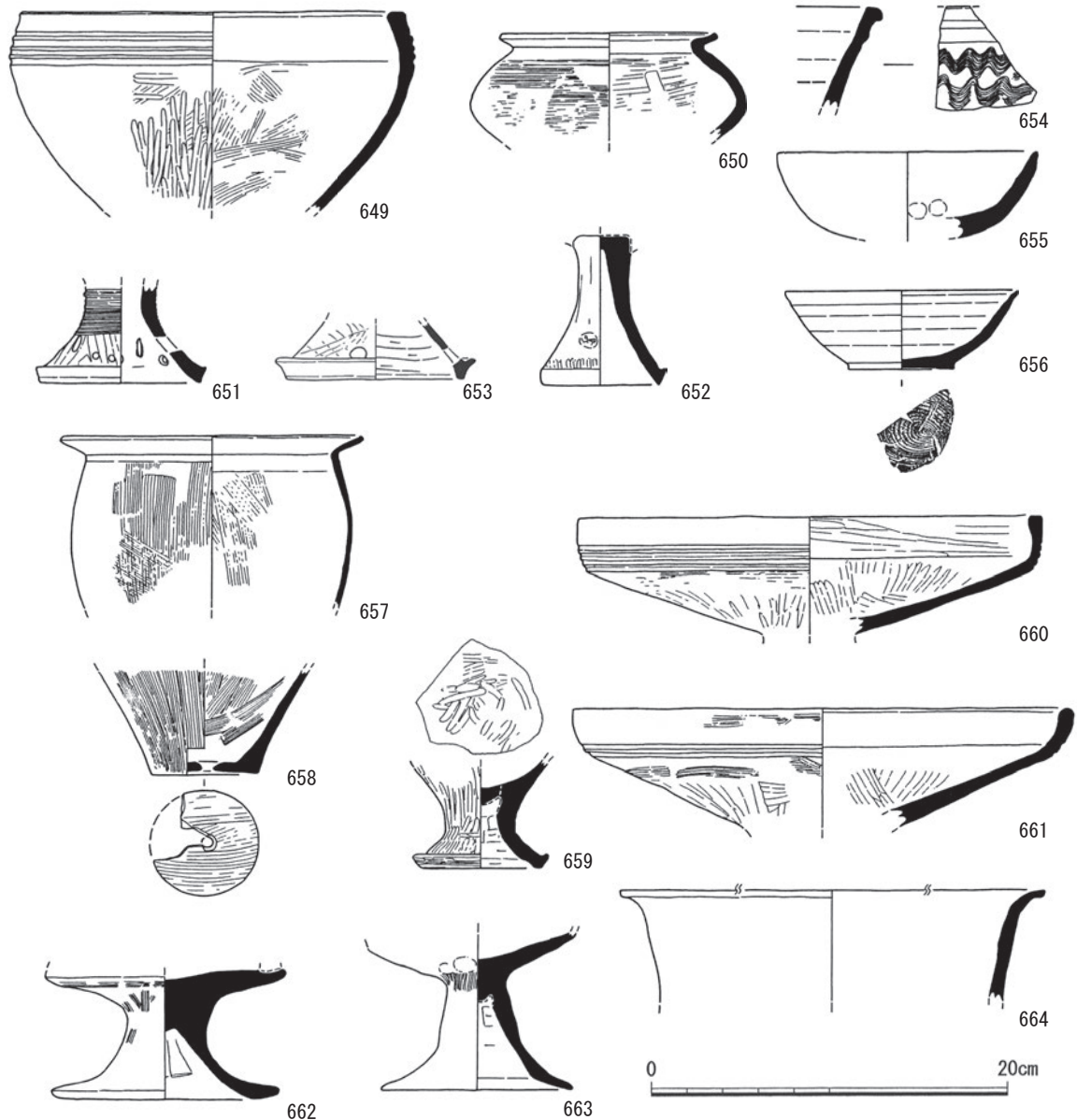
640～646は、甕である。640は、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる頸部がくの字状に屈曲する。口縁部の6分の1ほどが残存し、口径14.0cm、残存高9.7cmを測る。体部外面にハケ調整が確認でき、体部内面を頸部近くまでヘラケズリで調整する。641は、内外面をハケで調整する頸部がくの字に屈曲する甕である。ほぼ、底部に近いところまで残存し、口径18.0cm、残存高19.7cmを測る。器高は21cmほどであろう。642は、口縁端部を上方に拡張し、側面に浅い1条の凹線を施す。口縁部の6分の1が残存し、口径17.0cm、残存高16.0cmを測る。体部外面はハケで、内面は上半をハケで調整したのち、底部から頸部に向かってケズリ上げている。いわゆる瀬戸内系の甕である。643は、口縁端部をわずかに上方に拡張する胴部の張った甕である。口縁部が12分の1程度残存しており、口径19.7cm、残存高10.1cmを測る。体部最大径は、27cm以上を測る。体部内面は、642同様ハケ調整ののち、下から削り上げている。644は、口縁端部を上下に拡張し、端面に浅い1条の凹線文を施す大型の甕である。口縁部の12分の1が残存し、口径35.2cm、残存高11.2cmを測る。体部内面はナデで仕上げられており、ユビオサエが残る。645は、屈曲したくの字の頸部から口縁部が直線的に開く大型の甕である。口縁部の12分の1が残存し、口径26.6cm、残存高17.0cmを測る。体部外面と口縁部内面をハケで調整する。646は、口縁部が内湾気味に立ち上がる口縁部を肥厚させた大型の甕である。口縁部12分の1以下の破片であり、復元口径33.4cmを測る。体部内外面をハケで調整する。

647・648は、壺もしくは甕の底部である。647は、内外面ハケで調整する。648は、外面をハケで調整したのち、底部から上に向けて粗いヘラミガキを行う。内面は下半をヘラケズリしたのちナデで搔き上げている。

649・650は鉢である。649は、口縁部下方に4条の凹線文を施す鉢である。凹線文は、外面下



第82図 3区出土土器3



第83図 3区出土土器4

半を縦方向、上半を横方向にヘラミガキを行ったのちに施されている。口縁部の12分の1ほどしか残存しておらず、口径21.2cm、残存高11.3cmを測る。650は、内湾する体部から短く開く口縁部をもつ台付き鉢の杯部である。杯部の8分の1ほどの破片で、口径11.8cm、残存高6.2cmを測る。体部の内外面を横方向にヘラミガキする。651もしくは652のような脚部がつくことが予想される。

651・652は、脚付き鉢の脚部である。651は、脚部上半に12条以上のヘラ状工具による沈線文(退化凹線文)が施される。脚部は完存する。脚端部は上方に拡張し、裾部に3方向の透かし穴を施す。652は、高い脚部をもつ裾部が広がらない。脚部径6.6cmを測り脚端部を短く斜め上方に拡張する。外面に縦方向のヘラミガキが残り、内面はナデで仕上げる。

653は、高杯の脚裾部である。脚部内面をヘラミガキで調整し、透かし穴をもち、脚端部を上下に拡張する。

S D 3097には、少量ながら、古墳時代中期と中世の遺物が混入していた。654は須恵器の甕の

口縁部破片である。残存率は12分の1以下である。胎土は密で、焼成は良好である。口縁部外面下部に櫛描波状文が確認できる。TK208型式と考えられる。655は、古墳時代中期を前後する土師器の高杯の杯部である。口径11.6cm、残存高4.9cmを測る。656は、約4分の1が残存する糸霧底をもつ平安時代の在産の須恵器椀である。口径13.0cm、底径6.0cm、器高5.5cmを測る。

#### ⑩包含層(第83図)

弥生時代中期の弥生土器、古墳時代中頃の土師器、中世の瓦質土器などが出土した。

657～661は弥生時代中期後葉の弥生土器である。

657は、頸部がくの字に屈曲し口縁が開く甕である。口縁部の12分の1が残存し、口径16.7cmを測る。体部内外面をハケ調整する。

658は、弥生土器の壺または甕の底部片である。器形は底部から3/4が残存する。底径7.6cm、残存高6.0cmを測る。底部に焼成後穿孔している。底部を粗いハケで調整する。

659は、台付き鉢の脚部である。脚部の3分の1が残存し、脚部径7.6cm、残存高6.2cmを測る。脚端部をわずかに上方に拡張する。鉢底部を円板充填し、鉢部内面および外面を丁寧にヘラミガキし、脚部内面はヘラケズリで調整する。

660・661は、高杯の杯部である。660は、口縁部の8分の1が残存し、口径26.0cm、残存高6.6cmを測る。杯部から口縁部は直立し、口縁端部を内側に肥厚させる。内外面をヘラミガキしたのち、口縁部下端にヘラによる4条の凹線文を施す。661は、口縁部の6分の1が残存し、口径27.8cm、残存高6.6cmを測る。口縁部と浅い杯部から口縁部が内湾気味に立ち上がる。内外面をヘラミガキしたのち、杯部と口縁部の境に2条の凹線文を施す。

662・663は古墳時代中期～後期にかけての高杯の脚部である。662は、低脚で、底の平らな杯部をもつ。脚部の約半分が残存し、脚部径12.9cm、残存高7.4cmを測る。663は、脚部内面をヘラケズリで調整し、裾部が屈曲するもので椀状の杯部をもつ。脚部の4分の3が残存し、脚部径10.7cm、残存高8.8cmを測る。

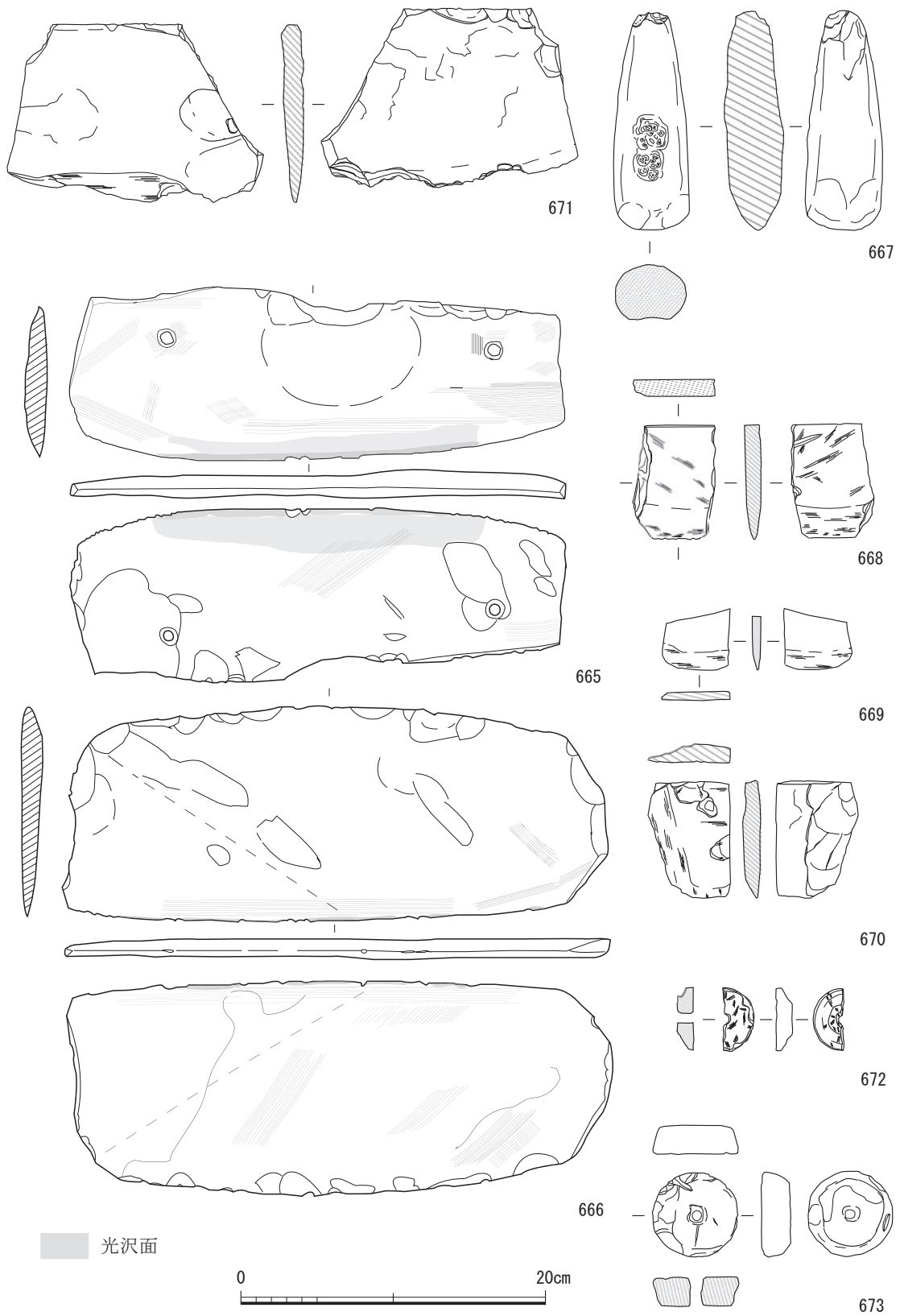
664は、中世前期の瓦質土器の鍋である。口縁部の12分の1が残存し、口径はおよそ24cm、残存高6.3cmを測る。被熱のためか内面は剥離しており、外面は回転ナデで調整されている。

#### (2)石器・石製品(第84図)

##### ①溝S D 3098

凝灰岩製の大型石包丁2点が重なった状況で出土した。665は、長さ32.2cm、幅11.4cm、厚さ1.6cm、重量717gを測る。刃部は鋭利に研磨されており、刃こぼれも観察できる。刃こぼれは、先端部と刃部手前に多く観察できる。刃部の両面に幅3mmほどの光沢面が明瞭に観察できる。また、刃部よりも薄い光沢面が内側に広がっている。2個の紐孔があるが、紐ずれの痕跡は観察できない。666は、665の下側から出土した。長さ35.6cm、幅14.2cm、厚さ1.3cm、重量950gを測る。刃部は非常によく研磨されており、刃部中央に数か所、刃部左端部(に多数の刃こぼれが観察できる。使用後研磨されたのか、光沢面が観察できるのは刃の先端部のみである。

##### ②包含層



第84図 3区出土石器・石製品

包含層内から、縄文時代の石斧、大型石包丁の破片、紡錘車が出土している。

667は3区西部の黒褐色砂掘り下げ時に出土した緑色片岩製の磨製石斧である。体部の片面に敲打によるくぼみをもつ。

668～670は3区東部の黒褐色砂掘り下げ時に出土した凝灰岩製の石包丁の破片である。いずれも刃部が残存するが、器形の全容は不明である。

672、673は3区西部の黒褐色砂掘り下げ時に出土した紡錘車である。672は滑石製で器形は1/2が残存する。673は玄武岩製で器形は完存する。

### 3)小結

本地区の東部では、近現代の削平・攪乱の影響により遺構の残存状況は不良で、弥生時代中期に属する不定形土坑1基のみが確認された。一方、西部では、耕作土直下に弥生時代中期の遺物包含層が残存し、その下位の地山面上に、同時期に属する複数の溝および土坑が分布することが明らかとなった。

これらの溝は、走向や規模の差異に基づいて溝群1・溝群2に区分され、それぞれに属する溝同士は方向・配置に一定の共通性を示す。一部には切り合い関係が認められるものの、いずれの溝からも弥生時代中期に属する遺物が出土し、埋土に大きな差異を見いだせないことから、両溝群は大きく時期を隔てた施設というよりも、短期間における利用・埋没・再掘削の過程を反映した、一連の溝群として理解できる。

特に、溝群1に属する溝SD3098では、大型石包丁2枚が重なった状態で出土している。出土位置は溝底に近く、施設の利用終末期あるいは廃絶段階において、一定の意図をもって埋納された可能性が高いと考えられる。また、本遺構の近傍からは鹿の意匠を施した絵画土器片が出土しており、本溝群の性格を考える上で示唆的な資料といえる。ただし当該土器片の出土位置は遺構との対応関係が必ずしも明瞭ではなく、大型石包丁の埋納との関連については断定し難い。

一方で、溝群全体の形態および配置的特徴は、排水・導水機能に関与した施設とみられ、積極的に象徴的・儀礼的性格を有すると断定することはできない。

本地区西部は、谷口部から緩斜面へ移行する微高地に位置し、真砂土で構成される脆弱な地山と、湧水・表流水の影響を受けやすい立地である。これらの地形・地質条件と溝の配置や性状を勘案すると、当該溝群は、谷口周辺で生じる湧水や斜面からの流出水を低位側へ導くための集水・排水機能を担い、その維持・調整の過程において、一部で方向や規模を異にする溝が段階的に再編・更新された結果を示すものと考えられる。

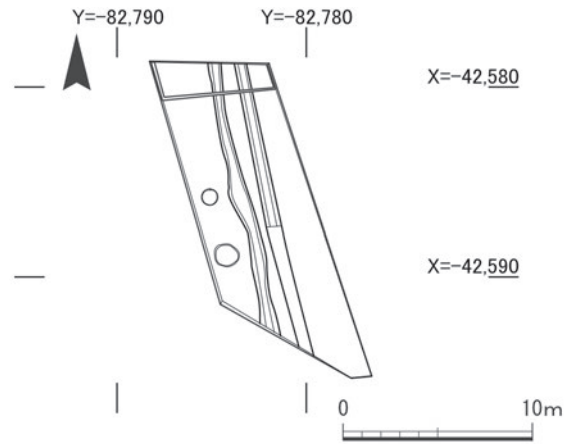
また、西部で確認されたL字溝3条は、いずれも包含層から古墳時代の遺物が出土していることから、弥生時代中期の溝群とは性格を異にし、平面形態の特徴から、当該期の竪穴建物に伴う周壁溝として位置づけたい。本地区西部は、弥生時代中期には湿潤環境に対応した排水的利用が展開し、その過程において象徴性を帯びた行為が局所的に介在した可能性を含みつつも、その後、古墳時代以降には建築活動を伴う新たな土地利用が重層した区域であったと推定される。

## 6. 5 区 の 調 査

### 1) 地区の概要と検出遺構

#### (1) 調査の概要

5区は調査対象地の北辺に位置し、3区の西側にあたる。標高は約35.7mで、3区と比較してわずかに低い。調査区の範囲は東西約16m、南北約18mで、南北方向に長い台形状を呈する。掘削深度は約1.2mである。調査区全体は近現代の耕作に伴う攪乱を受けており、全面が削平されていた。このため、下層の状況を確認する目的で重機による断ち割りを実施したが、遺構および遺物は確認されなかった。



第85図 5区検出遺構図(S=1/400)

#### (2) 基本層序

本地区では遺構・遺物は確認できなかったが、下層確認のために実施した断ち割り調査により、本区における層序構成を把握することができた。

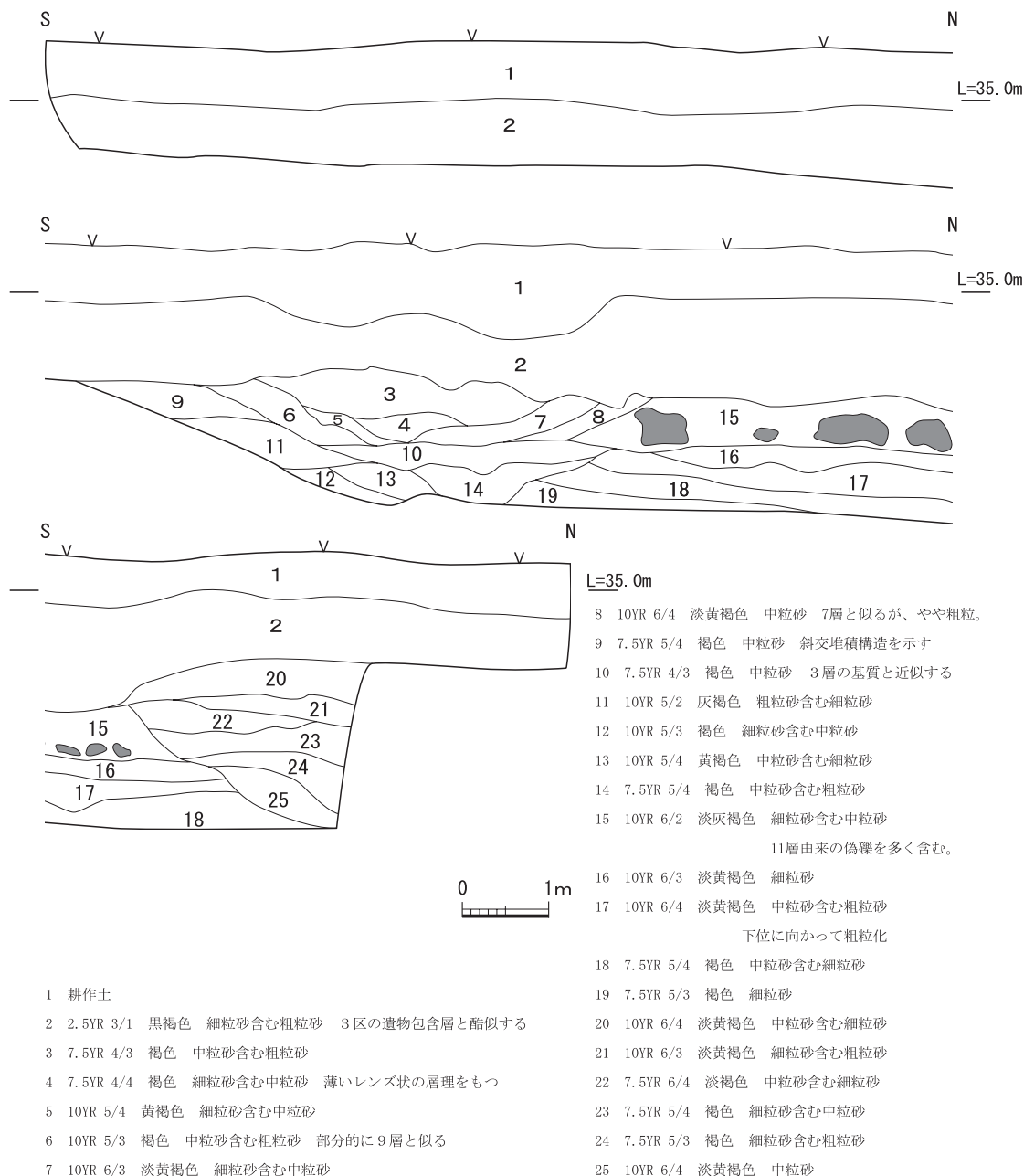
調査区全体は近現代の耕作に伴う攪乱を受けており、表層には厚さ約0.5mの近現代の耕作土が分布していた。この耕作土の下位には、3区で確認された黒褐色細粒砂を含むシルト質土壌からなる遺物包含層に類似した、厚さ約0.7mの土層が分布していた。本層は3区と比較して層厚が厚く、広く分布していたが、掘削中に弥生土器などの遺物の混入は認められなかった。このため本層は、3区で確認された遺物包含層とは成因を異にする可能性が高い。

本層の下位には褐色粗粒砂が分布しており、当初これを地山と判断して遺構検出を試みたが、遺構は確認されなかった。調査区北西隅において下層の状況を断ち割りによって部分的に確認したところ、平行層理の発達した砂質堆積層を確認した。本層中には偽礫を含む部分やレンズ状の堆積単位が認められることから、水成堆積層である可能性が高い。

#### 2) 小 結

本区では遺構・遺物の検出には至らなかったが、断割によって、近現代の耕作土の下位に、3区で確認された遺物包含層に類似する土層が厚く分布することを確認した。一方で、本層からは弥生土器など、人類活動を明瞭に担保する遺物の混入は認められず、3区で確認された遺物包含層とは成因を異にする可能性が高い。

また、本層の下位には粗粒砂層の下面に、平行層理(ラミナ)を示す砂質堆積層が認められ、層内には偽礫を含む部分やレンズ状の堆積単位が確認された。これらの層相は水の作用による侵食・再堆積を示唆し、本区が3区と比較してより低位に位置し、水の影響を受けやすい環境にあったことを支持する。以上の層序的特徴は、3区との立地差および利用形態の相違を検討するうえで重要な資料となる。



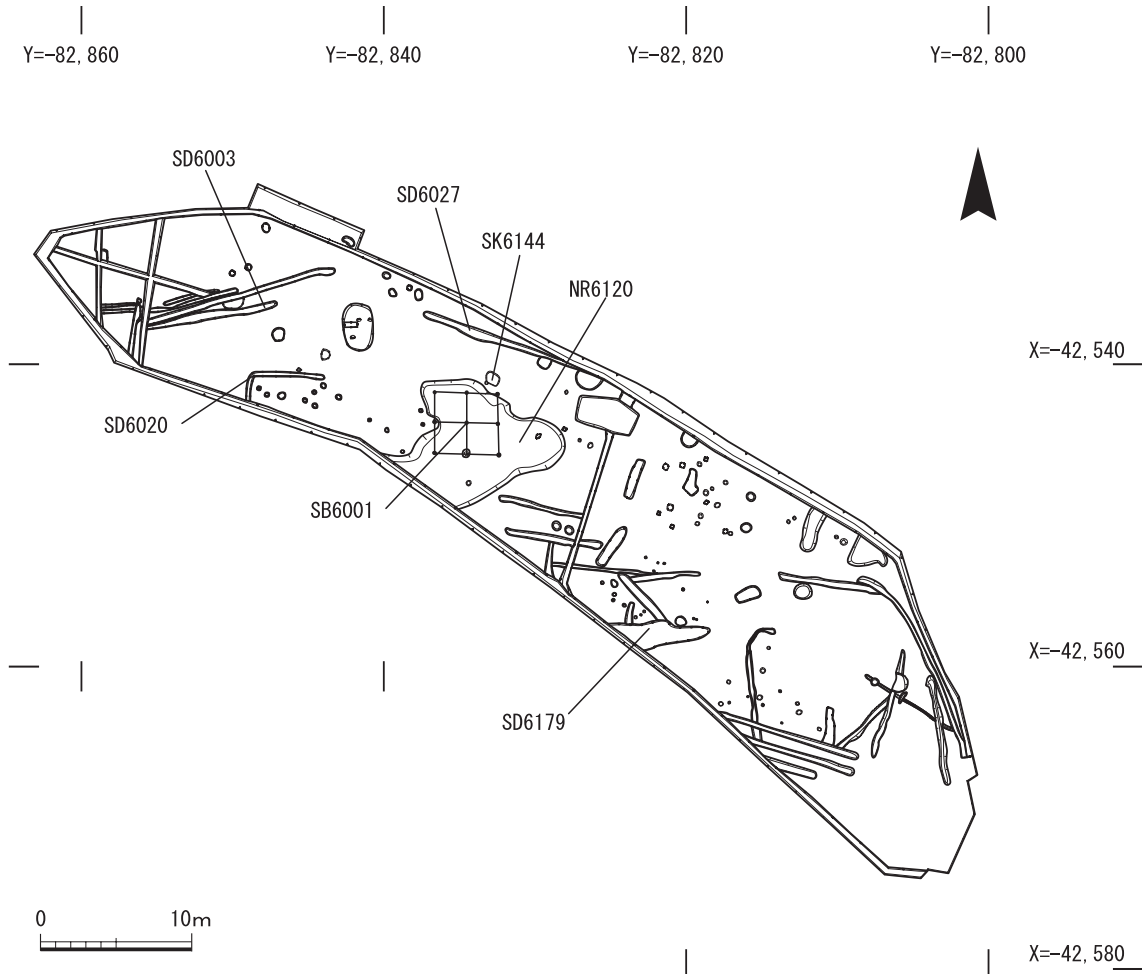
第86図 5区西壁断面図(S=1/80)

## 7. 6区 の 調 査

### 1) 地区の概要と検出遺構

#### (1) 調査の概要

本地区は調査対象地北西部に位置し、西側で7区、東側で里道を挟んで5区に接する。調査区は東西約16m、南北約18mの範囲を占め、南北方向に細長い台形状を呈する。掘削深度は約1.0mで、表土を約0.5m重機により除去した段階で北西部より古代末～中世の遺物が出土したため、以後は人力掘削へ移行した。地形は北西から南東へ緩く傾斜しており、当初は南東側で包含層の良好な残存が想定された。しかし、近現代の耕作に伴う攪乱により、南東側では包含層の大部分が失われていた。包含層が明瞭に確認されたのは中央部から北西の限られた範囲である。包含層

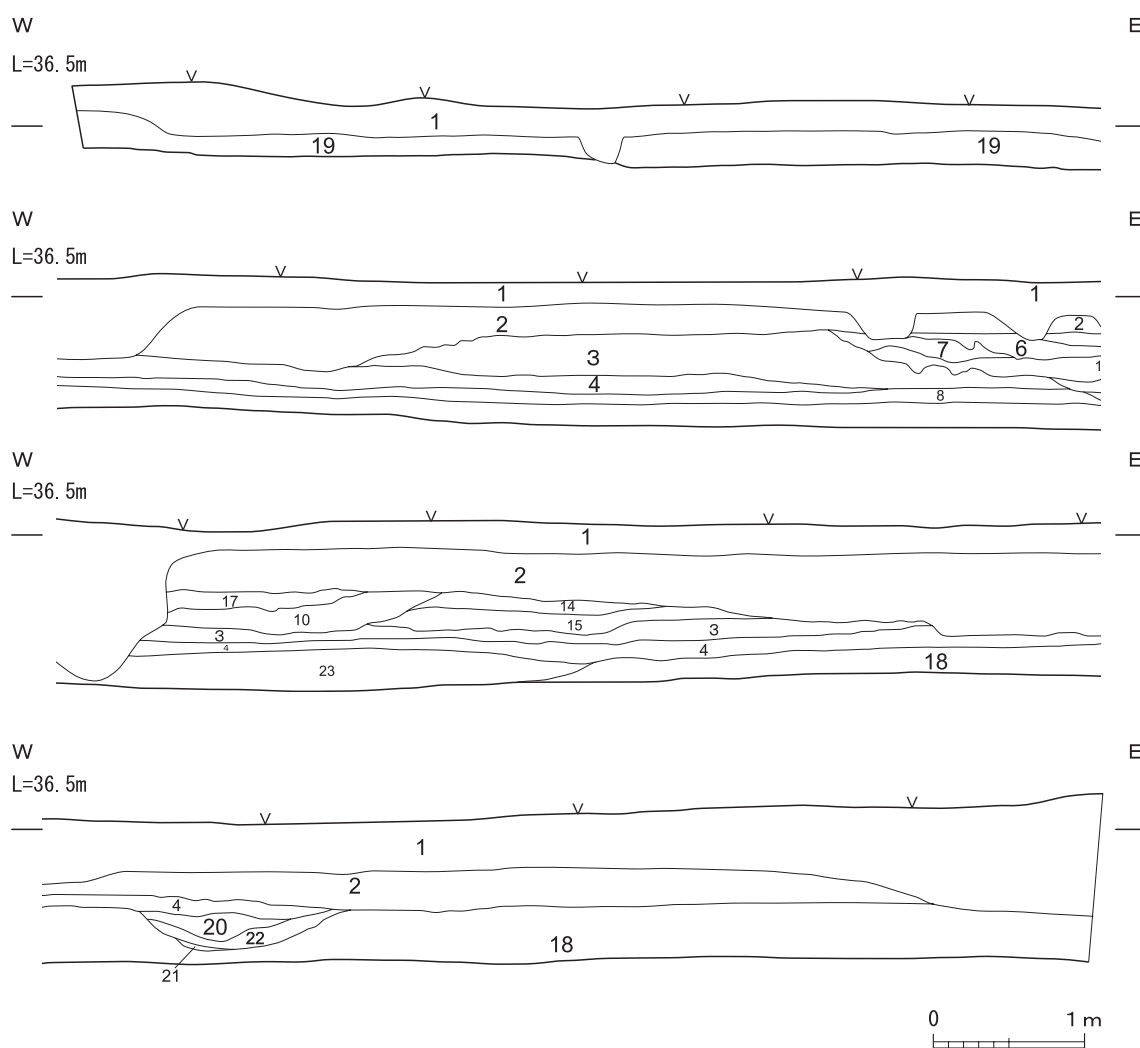


第87図 6区検出遺構図(S=1/500)

直下からは古代末～中世初期の溝1条(S D6020)と掘立柱建物1棟(S B6001)を検出した。また、これらの遺構面には弥生土器片が混在していたため、さらに約50cm掘り下げた結果、中央部の地山面直上に弥生時代の土坑1基(SK6144)と、自然流路とみられる落ち込み(NR6120)を確認した。これらはいずれも中央部～北西部で明瞭に認められた。

## (2)基本層序

本地区は調査地北部の山麓裾部に位置し、2区～4区に比べて低地に立地する。北西がやや高く、南東に向かって緩やかに低下する地形を示す。北西部では古土壌とみられる黄褐色粘土層が安定した地山を構成し、南東部では鈍い褐色の粗粒砂が基盤となる。中央部には、古代～中世の遺構面に埋没した自然流路の痕跡を確認した。厚さ約0.5mの表土(攪乱土)直下には、古代後期～中世の土器片を伴う黒褐色粗粒砂混じりシルト層が広がり、その下位に遺構面に相当する黒色粗粒砂混じりシルト層が分布する。これらは近現代の耕作による削平の影響を強く受け、遺構の残存状態は総じて不良であった。出土遺物の多くは古代後期～中世前期に属するが、排水のための側溝を掘削した際、遺構面の下層から弥生土器が出土したため、遺構面相当層を除去して確認した結果、中央部において弥生時代の土坑1基および自然流路とみなしうる不定形の落ち込みが認められた。



第88図 6区北壁断面図1 (S=1/50)

### (3) 検出遺構

#### ① 掘立柱建物 S B 6001

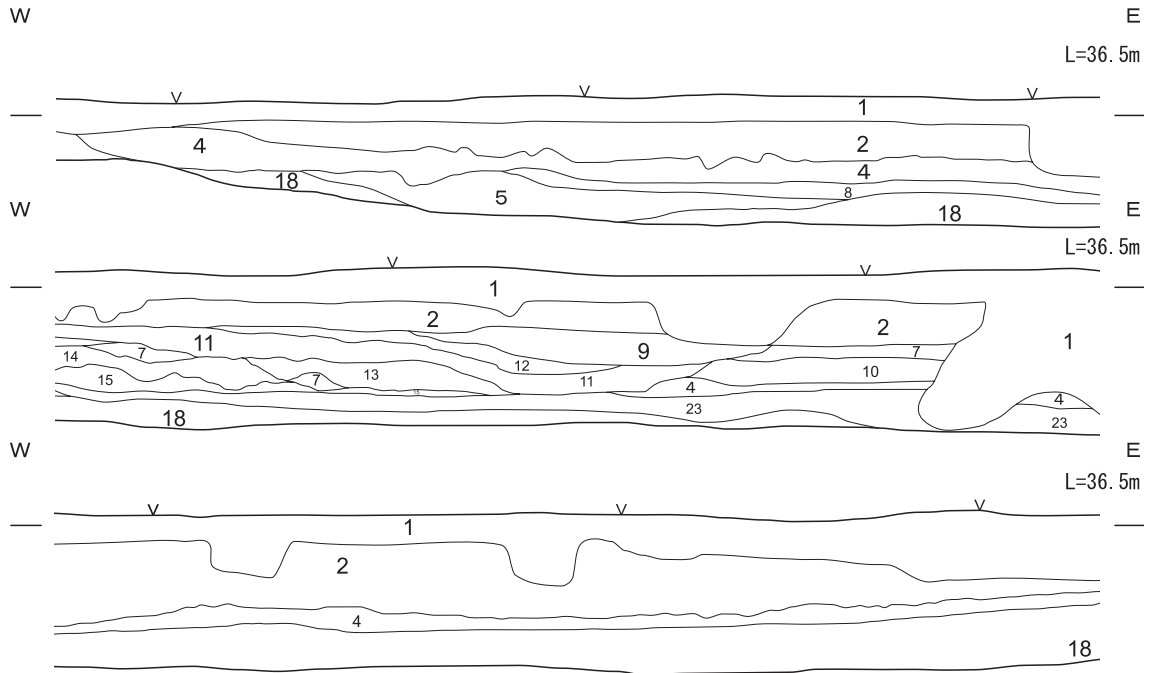
S B 6001は調査区の中央に位置し、柱間2間の主軸が約0.2°西に偏する総柱建物跡である。柱穴からの遺物出土は認められなかったものの、本遺構の遺構面から古代末に属する遺物が多く出土したことに加え、構造の一体性が確認され、真北を意識した主軸をもつことが認められる。以上の点から、本遺構は古代末に属する建物跡と判断される。

#### ② 土坑 S K 6144

土坑 S K 6144は調査区の中央に位置し、最大幅約0.7m、最大長約1.0m、最大深約0.2mを測る。弥生土器の破片がまとまって出土したことから、廃棄土坑と考える。

#### ③ 溝 S D 6020

S D 6020は6区中央の南端に位置し、検出長約6.5m、最大幅約0.3m、最大深約0.1mを測る、L字状を呈する溝である。南へと延伸するが調査区外になるため、全体像は不明である。中世の



- |    |                                      |    |                        |
|----|--------------------------------------|----|------------------------|
| 1  | かく乱土（現代）                             | 13 | 10YR6/3 にぶい黄褐色 粗粒砂     |
| 2  | かく乱土（～近代）                            | 14 | 10YR2/2 黒褐色 中粒砂含むシルト   |
| 3  | 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂含むシルト 土器片含む（中世～古代包含層） | 15 | 10YR2/3 暗褐色 中粒砂含むシルト   |
| 4  | 10YR2/1 黒色 粗粒砂含むシルト 土器片含む（中世～古代遺構面か） | 16 | 10YR2/1 暗褐色 中粒砂含むシルト   |
| 5  | 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗粒砂                   | 17 | 7.5YR4/2 灰褐色 中粒砂含むシルト  |
| 6  | 10YR4/1 褐灰色 粗粒砂含む細粒砂 黒色に細いラミナをもつ     | 18 | 7.5YR5/4 にぶい褐色 粗粒砂（地山） |
| 7  | 2.5Y2/1 シルト含む中粒砂                     | 19 | 10YR7/4 ローム（地山）        |
| 8  | 10YR7/4 にぶい黄褐色 中粒砂含む粗粒砂 土器細片わずかに含む   | 20 | 10YR2/3 黒褐色 粗粒砂含むシルト   |
| 9  | 10YR6/1 褐灰色 中粒砂含む粗粒砂                 | 21 | 5YR5/2 暗赤褐色 粗粒砂含むシルト   |
| 10 | 7.5YR3/1 黒褐色 中粒砂含む粗粒砂                | 22 | 5YR3/1 黒褐色 粗粒砂含むシルト    |
| 11 | 7.5YR6/2 灰黄色 中粒砂含む粗粒砂                | 23 | 5YR2/2 黒褐色 シルト含む粗粒砂    |
| 12 | 5Y4/1 灰色 シルト含む粗粒砂                    |    |                        |

第89図 6区北壁断面図2 (S=1/50)

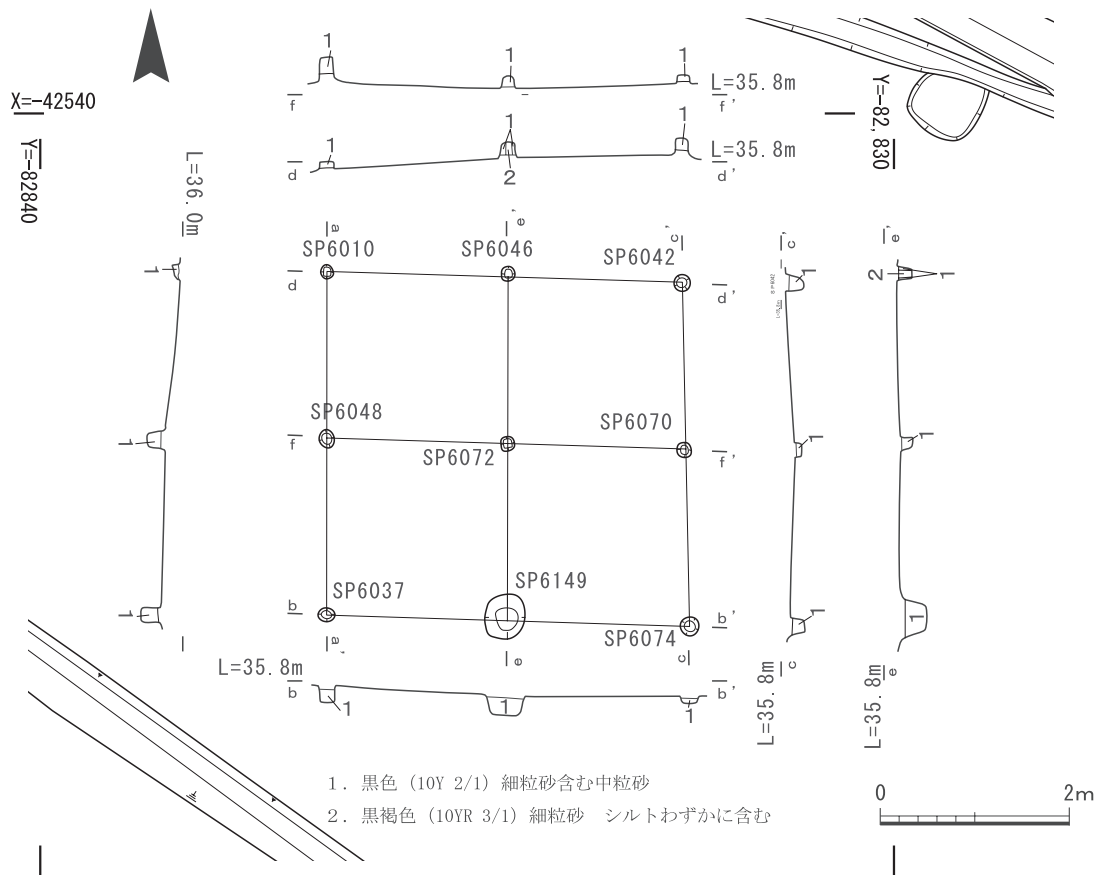
土器類のほか、木器が出土した。4区で検出した雨落溝に類すると考えられ、その内側には、後述のS B 6001とは別系統とみられる規格性のない柱穴群が分布する。

④溝 S D 6027

S D 6027は調査区中央の北側に位置し、検出長10.7m、最大幅約0.7m、最大深約0.1mを測る。西へ延伸するが、調査区外になるため、全体像は不明である。中世の土器類が出土したが、性格は不明である。

⑤自然流路NR6120

NR6150は調査区の中央に位置し、最大長約10.6m、最大幅約7.4m、最大深約0.2mを測る。弥生時代の土器、石器類が出土したことから、当初は不定形土坑と考えたが、平面形状が不定形かつ規模が大きいこと、さらに本調査区の立地条件を踏まえると、自然流路の一部であると判断した。



第90図 掘立柱建物 S B 6001平・断面図(S=1/80)

## 2) 出土遺物

### (1) 土器・土製品

#### ① 掘立柱建物 S B 6001 (第91図)

674は、掘立柱建物 S B 6001を構成する柱穴 S P 6072から出土した須恵器の杯高台部である。高台の6分の1が残存し、高台径9.0cm、残存高1.7cmを測る。奈良時代後期から平安時代初頭頃か。

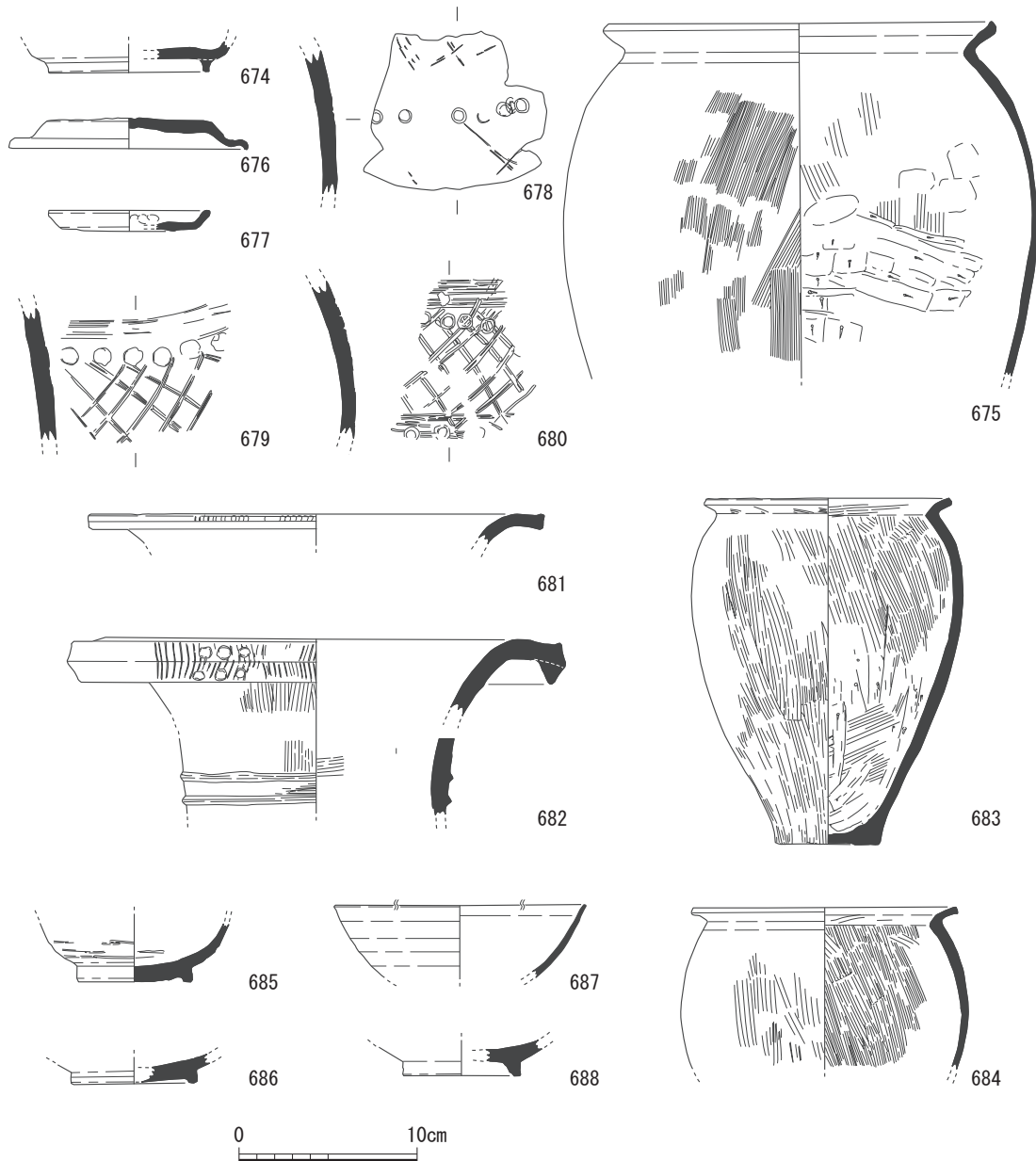
#### ② 土坑 S K 6144 (第91図)

675は、くの字に屈曲する頸部から口縁部が斜め上方に立ち上がり、口縁端部をわずかに上方につまみあげる弥生時代中期後葉の甕である。約2分の1が残存しており、口径21.4cm、残存高20.0cmを測る。口縁部がくの字状に外反し、端部に広い面をもち、腹部にユビオサエが確認できる。内外面にハケを施す。

#### ③ SD6003 (第91図)

676は須恵器のつまみをもたない蓋である。口縁部は約12分の1が残存し、口径13.2cm、器高2.3cmを測る。平安時代初頭頃であろうか。

677は、土師器の皿である。底部に糸切り痕を残し、その部分がわずかに高台状になっている。約4分の1の破片で、口径9.0cm、器高1.2cmを測る。



第91図 6区出土土器 1

④自然流路NR6120(第91図)

自然流路NR6120の上層からは平安時代後期の緑釉椀、白磁椀などが、下層からは弥生土器の壺と甕が出土した。

678～682は弥生土器壺である。678～680は、肩部から胴部にかけての破片である。直線文、斜格子文で加飾した上に円形浮文を貼り付ける。弥生時代中期後葉によくみられる文様帯である。同一個体も含まれると思うが判別ができない。681は口縁部が水平方向に開く広口壺の口縁部片である。口縁の8分の1の破片で、口径25.3cm、残存高1.7cmを測る。口縁端部をわずかに肥厚させ、口縁端面に刻み目文を施す。弥生時代中期後葉に属する。682は口縁部が水平方向に開く広口壺の頸部から口縁部である。口縁部の3分の1ほどの破片と4分の1ほどの頸部が残存している。両者に接合点はないが、出土位置が近いことを含めて同一個体と判断した。口径28.0cm、

頸部から口縁部までの高さ約10cmを測る。水平に開く口縁端部を下方に拡張し、口縁端面に刻み目文を施した上に部分的に円形浮文を貼り付ける。頸部に断面三角の突帯を2条以上貼り付けている。中期中葉から後葉に属する。

683・684は、弥生土器の甕である。683は、頸部がくの字に屈曲する小型の甕で、口径13.6cm、体部最大径15.2cm、底径5.9cmを測る。残存率は60パーセントほどである。口縁部は短く収まり、体部内面をヘラケズリで調整したのち、体部から口縁部の内外面をハケで調整する。弥生時代中期後葉に属する。684は、頸部がくの字に屈曲し短い口縁が外反気味に開く甕の上半部である。口径14.8cm、体部最大径16.2cm、残存高9.1cmを測る。内外面をハケで調整する。中期中葉から後葉に属する。

685・686は緑釉陶器である。685は底部片で高台が完存する。高台径6.3cm、残存高3.3cmを測る。胎土はやや密で焼成は良好、色調は胎土が灰白色、釉調は浅黄色である。見込み部に重ね焼き痕を認める。平安時代中期から後期に属する。686は内面に明瞭に重ね焼きの痕跡を残す底部片である。高台径6.6cm、残存高1.6cmを測る。胎土は密で焼成は軟質、色調は胎土が浅黄橙色、釉調は明黄褐色である。削り出し高台をもつ。

687・688は白磁椀である。687は、口径14.0cm、残存高4.1cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。中世前半期に属する。688は底部片で底径6.5cm、残存高2cmを測る。胎土は密で焼成は堅緻、色調は胎土が灰白色、釉調は灰白色である。Ⅱ類と考える。中世前半期に属する。

#### ⑤包含層(第92・93図)

流路内の堆積物の可能性もあるが、土器溜まりとして取り上げたものも含めて包含層遺物として取り扱う。縄文時代から中世後期までの遺物が含まれる。

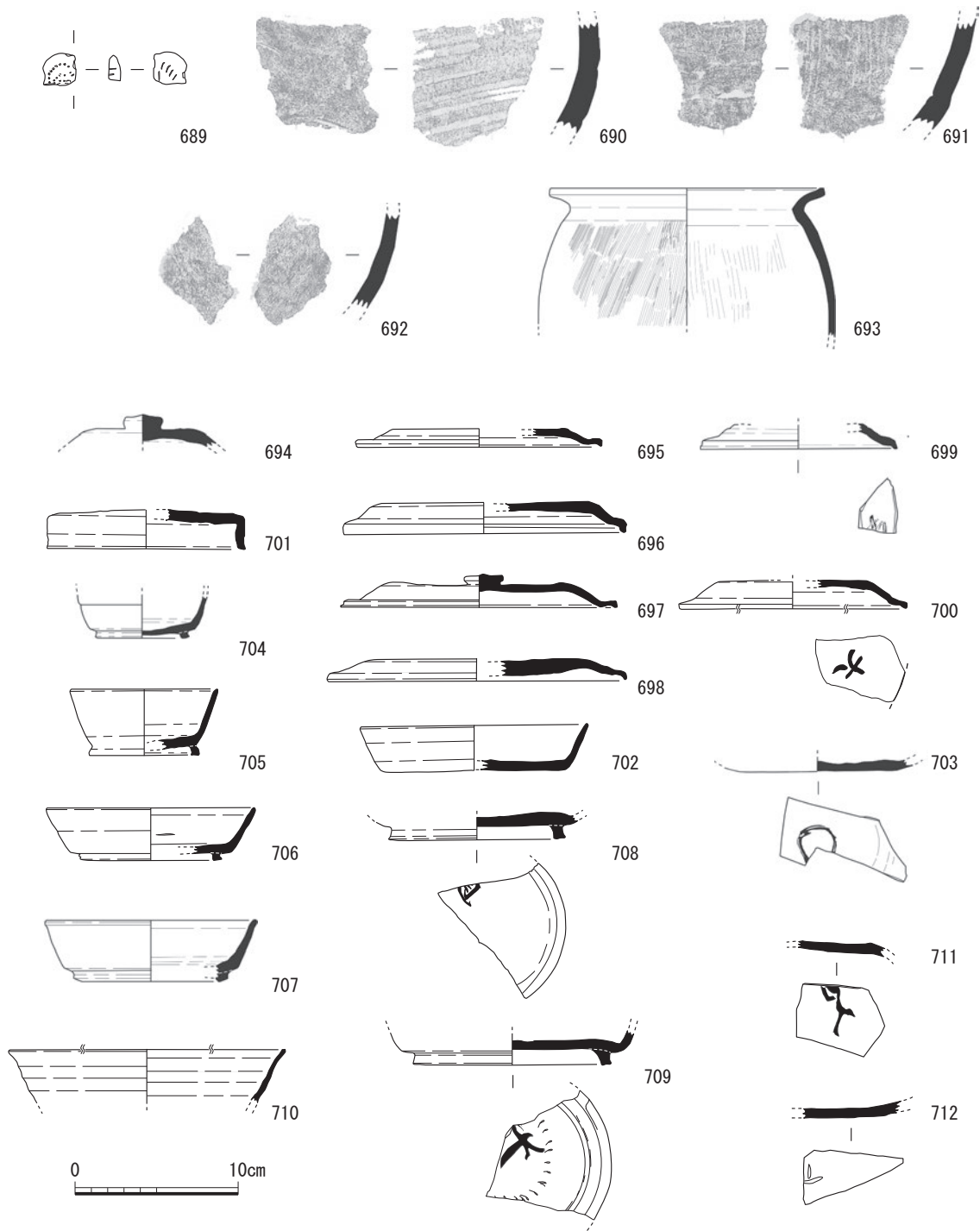
689は、復元径3cmほどの平面円形の土製品である。表面に細かい刺突が、裏面に爪状の刺突が観察できる。縄文時代の所産と考えられる。

690～692は縄文土器の破片である。690は、残存高6.7cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好、色調は胎土が褐灰色、内面が黒色、外面は灰褐色である。外面に巻貝条痕を施す。691は残存高6.5cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好、色調は胎土が褐灰色、内面が黒色、外面は黒褐色である。外面に巻貝条痕を施す。692は残存高6.5cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好、色調は胎土が褐灰色、内面が黒褐色、外面は灰褐色である。外面にナデを施す。いずれも条痕文系の土器で、後期もしくは晩期に属するものであろう。

693は、口縁の2分の1ほどが残存する弥生時代中期後半の甕である。くの字に屈曲した頸部から短い口縁が外反気味に伸び、体部内外面と口縁部内面をハケで調整する。口径16.5cm、体部最大径18.2cm、残存高9.1cmを測る。

694～712は、須恵器である。おおむね奈良時代後期から平安時代初頭に属する。

694～700は、須恵器の杯や皿の蓋である。口縁部の形状がさまざまで、大きさにもまとまりがない。墨書があるものが2点含まれるがいずれも内面に記される。694はややつぶれた宝珠状の



第92図 6区出土土器2

摘みをもつ。695は口縁部の9分の1が残存する。天井部から口縁部が水平に折れて端部を短く下方に拡張する。口径14.9cm、残存器高2.1cmを測る。摘みが失われている。696は口縁部の3分の1が残存する。天井部が平らで、口径17.1cm、残存高1.9cmを測る。697は扁平な宝珠状つまみをもつ須恵器の蓋片である。2分の1が残存する。口径は17.0cm、残存高2.1cmを測る。内外面に墨痕が確認でき、転用硯の可能性がある。698は12分の1が残存する。口径18.2cm、残存高1.4cmを測る。699は小片で口径がおおよそ12cm、残存高1.5cmを測る。内面に墨書があるが判読

できない。700も小片で、口径はおよそ14cmほどである。内面に「大」の墨書がある。

701は須恵器の薬壺の蓋である。4分の1が残存し、口径12.0cm、残存高2.4cmを測る。硬質で色調が灰色で特徴的である。

702は須恵器の杯Aである。器形は2分の1が残存する。口径13.8cm、器高2.8cmを測る。内外面にナデが施される。

703は、須恵器の杯もしくは皿の底部である。外面に墨書で記号のようなものが記されている。

704～709は貼り付け高台をもつ杯Bである。704・705は口径の小さなもので、705は、口径の12分の1が残存し、口径9.0cm、高台径6.7cm、器高4.1cmを測る。706は12分の1が残存する。口径12.7cm、器高3.3cmを測る。707は6分の1が残存する。口径12.8cm、器高3.7cm、高台径8.4cmを測る。708は、高台部から底部の破片である。高台径10.8cmを測る。底部の3分の1が残存し、外面に墨書があるが判読できない。709は高台から底部にかけての破片である。高台径12.2cmを測る。底部の4分の1ほどが残存し、外面に「大」の墨書がある。底部外面には爪状の圧痕が円弧を描く。

710は、杯もしくは碗の口縁部である。口縁の12分の1以下の小片で、復元径16.8cmを測る。

711は、蓋の天井部である。内面に墨書があり、「首」とも読める。712は、墨書のある須恵器片であるが判読できない。

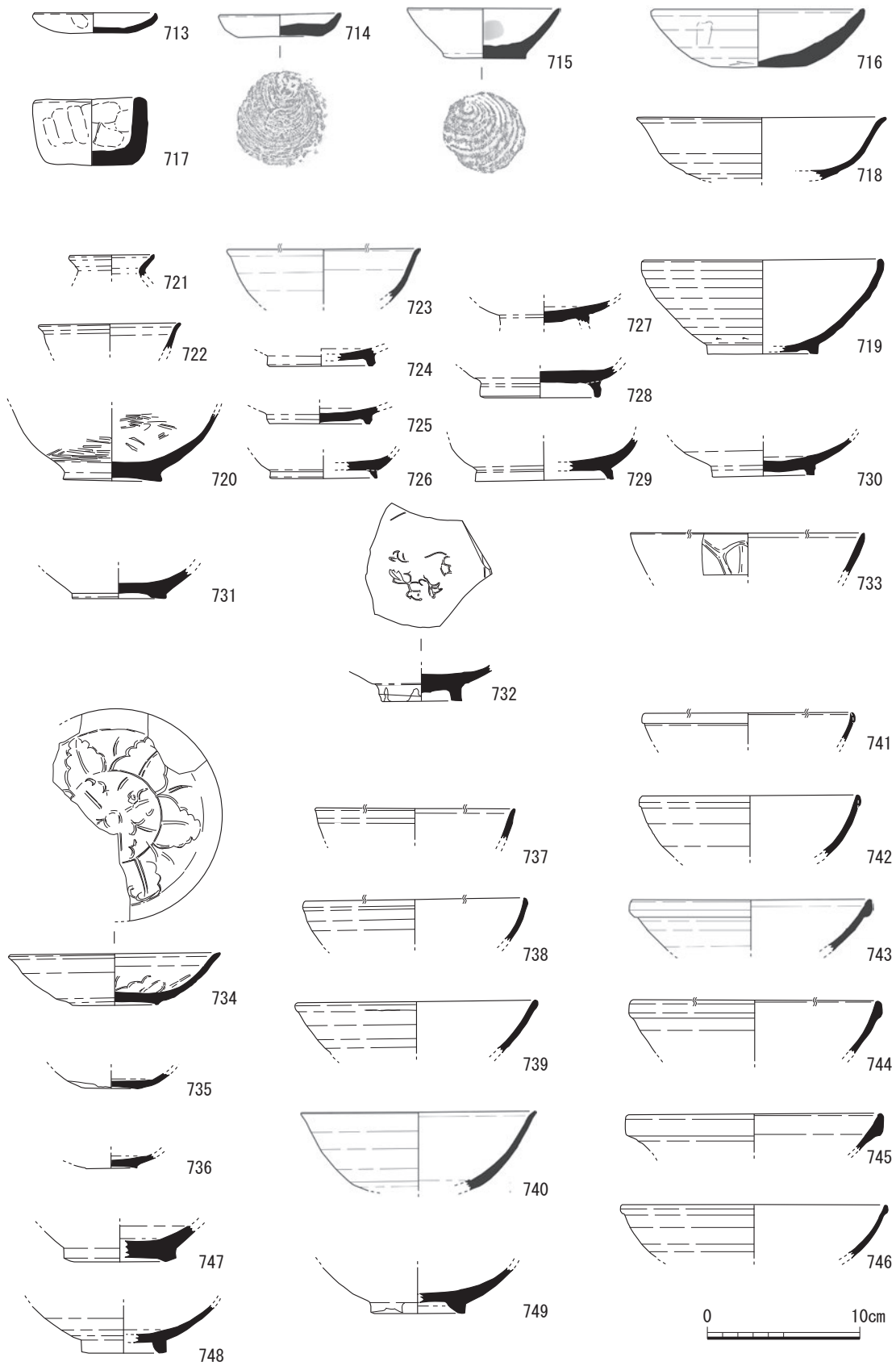
713・714は土師器の小皿である。713は、3分の2が残存し、口径8cm、器高の実測値は1.4cmを測る。焼成は良く、胎土はやや密で3mm以下の白色鉱物・石英粒を少量含む。上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内外面に回転ナデが施される。底部に回転糸切り痕を残す。中世前半期に属する。714は土師器の皿である。2分の1が残存し、口径7.9cm、器高1.5cmを測る。内外面にヨコナデが施され、外面底部に糸切り痕が確認できる。

715は土師器の碗もしくは皿である。器形は4分の1が残存する。口径10cm、器高3.4cmを測る。焼成は良く、胎土は密で2mm以下の白色鉱物と極小の雲母を微量含む。上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内外面に回転ナデが施される。底部に回転糸切り痕を残す。内面に煤が多く付着することから、灯明皿として利用されていたと考えられる。716は土師器の皿である。4分の1が残存し、口径13.8cm、器高3.9cmを測る。焼成は良く、胎土は密で0.5mm以下の白色鉱物と極小の雲母を含む。上端部の断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。内外面に回転ナデが施される。底部に回転糸切り痕を残す。中世前半期に属する。

717は土師質の埴塼である。器形は2分の1が残存する。口径7.4cm、器高4.5cmを図る。胎土は粗く、焼成は良好である。底部が黒色を帯びていることから、被熱痕跡と考えられる。古代に属するかもしれないが、中世と判断した。

718は、灰釉陶器碗である。口縁部の8分の1の破片で、口径16.2cm、残存高4.1cmを測る。胎土は密で、素地は灰白色を呈し、釉調も灰白色である。

719は須恵器碗である。器形は4分の1が残存する。口径15.5cm、高台径7.2cm、器高6.2cmを測る。内外面に回転ナデ、外面の底部付近はヘラケズリが施される。古代に属する。



第93図 6区出土土器 3

720は、黒色土器の椀である。口縁部を欠くが5分の2ほどが残存する。底部に糸切り痕を残す高台部は、直径6.4cmを測る。内外面を丁寧にミガキを施す。外面はにぶい黄橙色、内面は暗灰色を呈する。

721は、緑釉陶器の小壺の口縁である。口縁の8分の1が残存し、口径5.4cm、残存高1.5cmを測る。胎土は密で、素地は明褐灰色、釉調はオリーブ灰色である。

722・723は、緑釉陶器椀の口縁である。722は、小片で口径約9.2cmを測る。胎土は密で素地は灰白色、釉調は明緑色である。723も口縁12分の1以下の小片で、口径12.5cm、残存高3.4cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が灰褐色、釉調はオリーブ灰色である。

724～730は緑釉陶器椀の高台部である。724は高台径6.8cm、残存高1.2cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が褐灰色、釉調はオリーブ灰色である。削り出し高台をもつ。725は高台径6.5cm、残存高1.2cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が灰黄色、釉調は灰白色である。削り出し高台をもつ。726は高台部の3分の1が残存し、高台径が6.9cm、残存高1.5cmを測る。胎土は密で焼成はやや軟質、色調は胎土が浅黄橙色、釉調は明緑色である。貼り付け高台である。727は高台部径約5.8cm、残存高1.5cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が灰白色、釉調はオリーブ灰色である。削り出し高台をもつ。728は、高台径7.4cm、残存高2.2cmを測る。胎土は密で焼成は軟質、色調は素地が灰白色、釉調は明緑色である。729は高台径9.0cm、残存高2.6cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が浅黄橙色、釉調は明緑色である。削り出し高台をもつ。730は高台径6.5cm、残存高2.4cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が灰白色、釉調は灰白色である。削り出し高台をもつ。

731は越州窯系青磁の椀の底部である。高台径6.1cm、残存高2cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が灰白色、釉調はオリーブ灰色である。蛇の目高台で、高台畳付の釉を削る。I類と考えられ、古代に属する。

732は青磁の椀である。底部のみが残存する。高台径5.3cm、残存器高2.4cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が灰白色、釉調はオリーブ灰色である。

733は龍泉窯の青磁椀の口縁部片である。器形は12分の1以下が残存する。口径が復元値で15.3cm、残存高2.8cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が灰白色、釉調はオリーブ灰色である。II類と考える。中世前半期に属する。

734は白磁の皿である。器形は2分の1が残存する。口径13.8cm、底部径5.5cm、器高3.4cmを測る。見込み部に草花文を描く。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が灰白色、釉調は灰白色である。皿VII類と考える。中世前半期に属する。

735・736は、白磁皿の底部片である。735は底部が完存する。底径3.5cm、残存高1.1cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。中世前半期に属する。736は白底部の4分の3が残存し、底径が3.4cm、残存高0.9cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。II類と考える。中世前期に属する。

737～740は、白磁椀である。737は口縁の12分の1が残存する。口径13cm、残存高2cmを測る。

胎土は密で焼成は良好、色調は素地が白色、釉調は灰白色である。中世前半期に属する。738は口縁部の12分の1が残存する。口径14.4cm、残存高2.9cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が白色、釉調は灰白色である。椀Ⅱ類と考える。中世前半期に属する。739は口縁部の12分の1が残存する。口径15.7cm、残存高3.5cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が白色、釉調は浅黄色である。中世前期に属する。740は6分の1が残存する。口径15.3cm、残存高5.1cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。Ⅴ類と考える。中世前半期に属する。

741～746は、玉縁口縁をもつ白磁椀である。741は、口縁部12分の1以下の小片で、口径はおよそ13.6cmを測る。胎土は密で、焼成は良好、色調釉調ともに灰白色である。742は口縁部の12分の1以下の小片である。口径14.1cm、残存高4.1cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。Ⅱ類と考える。中世前期に属する。743は6分の1が残存する。口径15.6cm、残存高3.3cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が灰白色、釉調は灰白色である。Ⅳ類と考える。中世前期に属する。744は口縁部12分の1以下の小片で、口径16.0cm、残存高3.5cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。Ⅳ類と考える。中世前期に属する。745は口縁部の12分の1が残存する。口径16.6cm、残存高2.4cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。Ⅳ類と考える。中世前期に属する。746は8分の1が残存する。口径17.3cm、残存高3.5cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は素地が白色、釉は少し青みがかかった透明釉である。椀Ⅱ類と考える。中世前期に属する。

747～749は白磁の椀の底部片である。747は、高台の2分の1が残存する。高台径6.0cm、残存高2.4cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が灰白色、釉調は灰白色である。Ⅱ類と考える。中世前半期に属する。748は高台部の2分の1が残存する。高台径5.6cm、残存高3.2cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。Ⅳ類と考える。中世前期に属する。749は高台部の2分の1が残存する。高台径6.2cm、残存高3cmを測る。胎土は密で焼成は良好、色調は胎土が白色、釉調は灰白色である。Ⅱ類と考える。中世前半期に属する。

## （2）石器・石製品（第94図）

750はサヌカイト製の原礫面を残す大型剥片である。同一面から弥生土器が出土していることから、弥生時代に属するか。弥生時代に属する遺物として、碧玉製玉作りに伴う、碧玉（緑色凝灰岩）の分割礫が出土している。

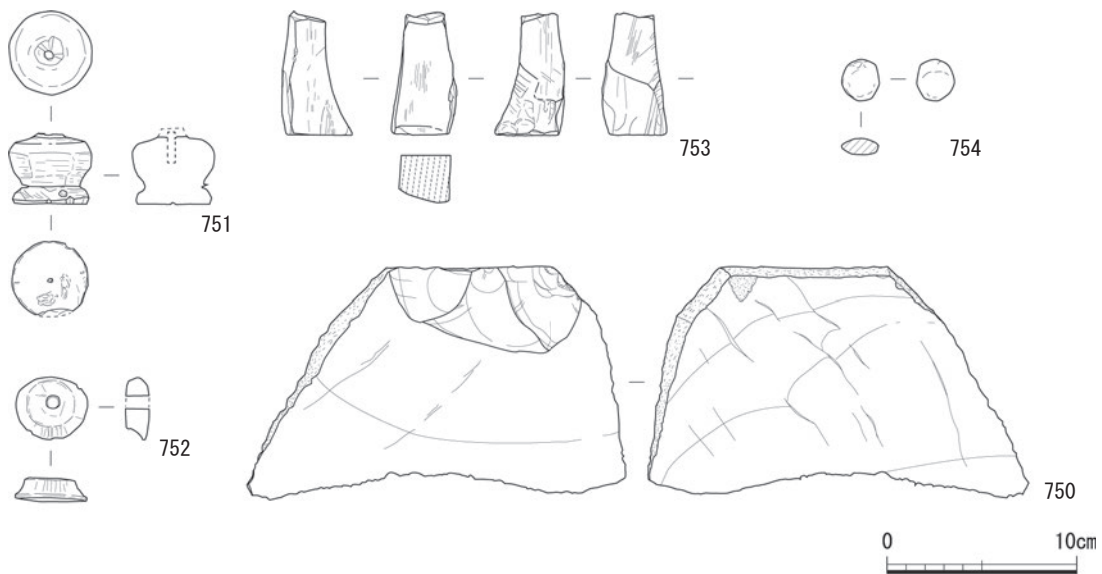
751は凝灰岩製の石製品である。貫通していない穿孔が確認できることから、紡錘車の未成品の可能性はある。

752は滑石製の紡錘車である。

753は砂岩製の砥石である。

754はチャートの円礫である。碁石の可能性はある。

## 3）小結



第94図 6区出土石製品

本調査区では、中央部から北西部にかけて弥生時代の土坑および自然流路とみられる落ち込みを確認し、その上位に古代末～中世の溝および掘立柱建物跡が認められた。遺構の分布は区内全体には及ばず、南東側では削平や攪乱の影響により、遺構および包含層の残存はきわめて不良であった。隣接区の状況からみると、本調査区は、谷口部から緩斜面へ移行する微高地－低位地形の地形変換帯の延長上に位置すると考えられる。3区西部で検出された溝群の配置や現在の湿潤傾向、さらに5区において安定層と考えられる黒色土の下位で確認された堆積状況と照合すると、本調査区も湧水や表流水の影響を受けやすい立地環境にあった可能性が高いと判断される。

これらの観察結果から、本調査区は同一帯域内の他区と比べて遺構密度が低く、利用頻度の低い周縁的土地利用域であったと考えられる。とくに、湧水や表流水の影響を受けやすい立地条件と整合的に、利用は時期的に限定的であった可能性が指摘される。

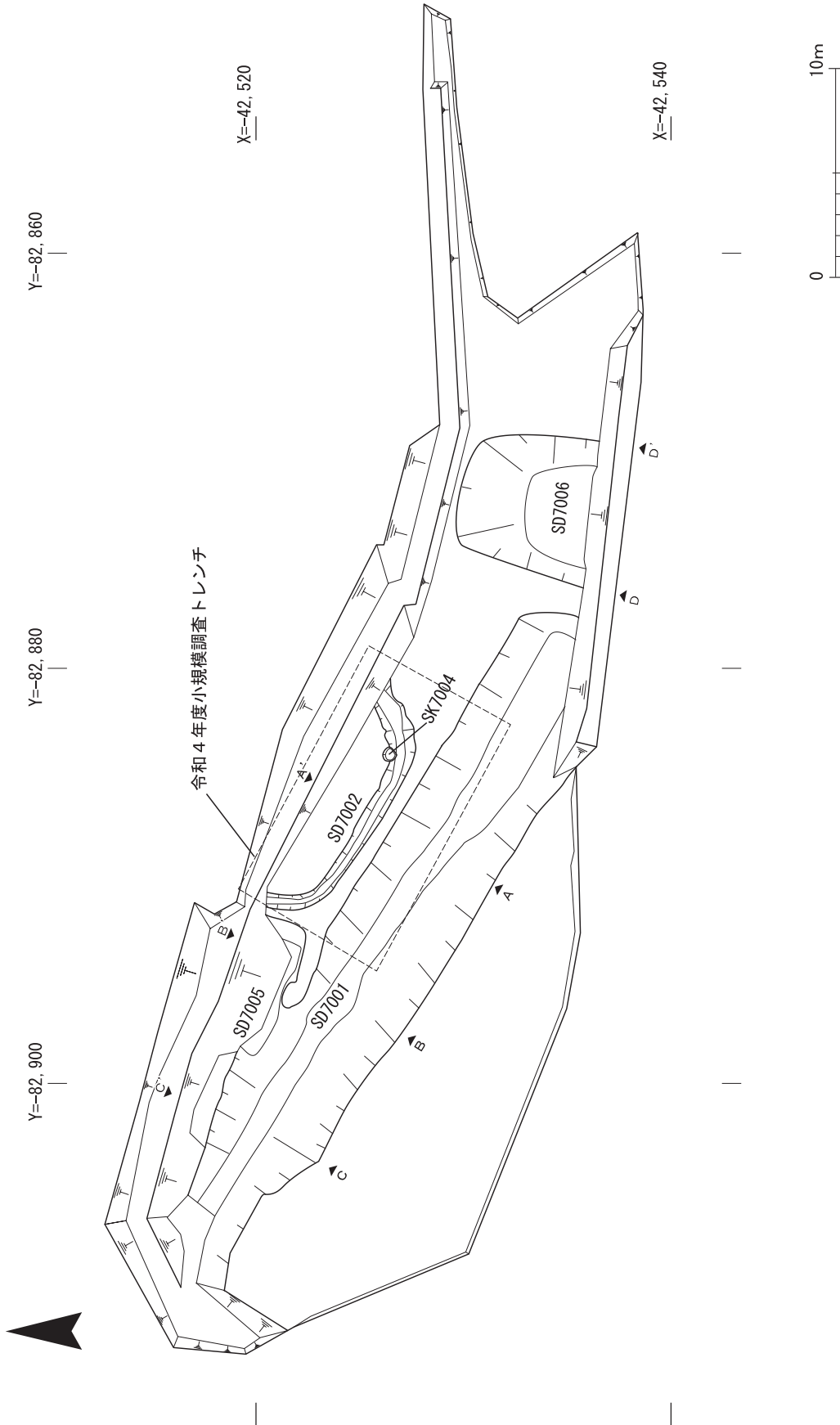
## 8. 7区 の 調 査

### 1) 地区の概要と検出遺構

#### (1) 調査の概要

7区は調査対象地および埋蔵文化財包蔵地の西端にあたり、後背山地を削り込んだ平坦面に位置する。令和4年度の小規模調査で、東西幅13.2m、南北幅7.7mの長方形を呈する調査区を設定した。重機をもちいて約2m掘削したところ、室町時代後期の遺物が出土したため、人力掘削に切り替えて掘削を実施した。調査区北側に畑地とみなしうる段状の造成を確認した。これを受けて、令和5年度に東西幅52.5m、南北幅18.1mの不定形な台形を呈する調査区へと拡張して調査を実施し、戦国期末の堀(S D7001、7005、7006)、段状に造成された平坦面の縁辺に設けられた溝(S D7002)、および土坑(S K7004)を検出した。

#### (2) 基本層序(第95・96図)



第95図 7区検出遺構図(1/300)

7区の大部分はS D7001であり、本調査区の基本層序はこれに従うため、S D7001の堆積状況とあわせて基本層序として記載する。

### (3) 検出遺構(第94図)

**堀S D7001** S D7001は7区を北西から南東にかけて横断する堀である。検出長約38.8m、検出幅11.8m、最大深5.5mを測る。北西方向へさらに延伸するとみられるが、調査区外となるため確認できなかった。遺構の埋土は、断面における堆積構造および基質の性状の違いから、おおむね上位の堆積単位群(第1層～第22層)と下位の堆積単位群(第23～32層)に区分できる。

上位の堆積単位群は、不整形な塊状単位の集合からなる。各堆積単位は0.3～0.8m程度で、形状は不定形であり、境界は直線的ではなく凹凸に富んでいる。堆積単位ごとに色調および粒径に差が認められ、粗粒な花崗岩風化土を主体とする部分と、比較的細粒で暗色～白色を呈するものが混在する。断面上では、水平に連続する層理面やラミナ構造は確認できない。これらの塊状単位は、断面において北側から南側に向かって重なり合うように分布する。

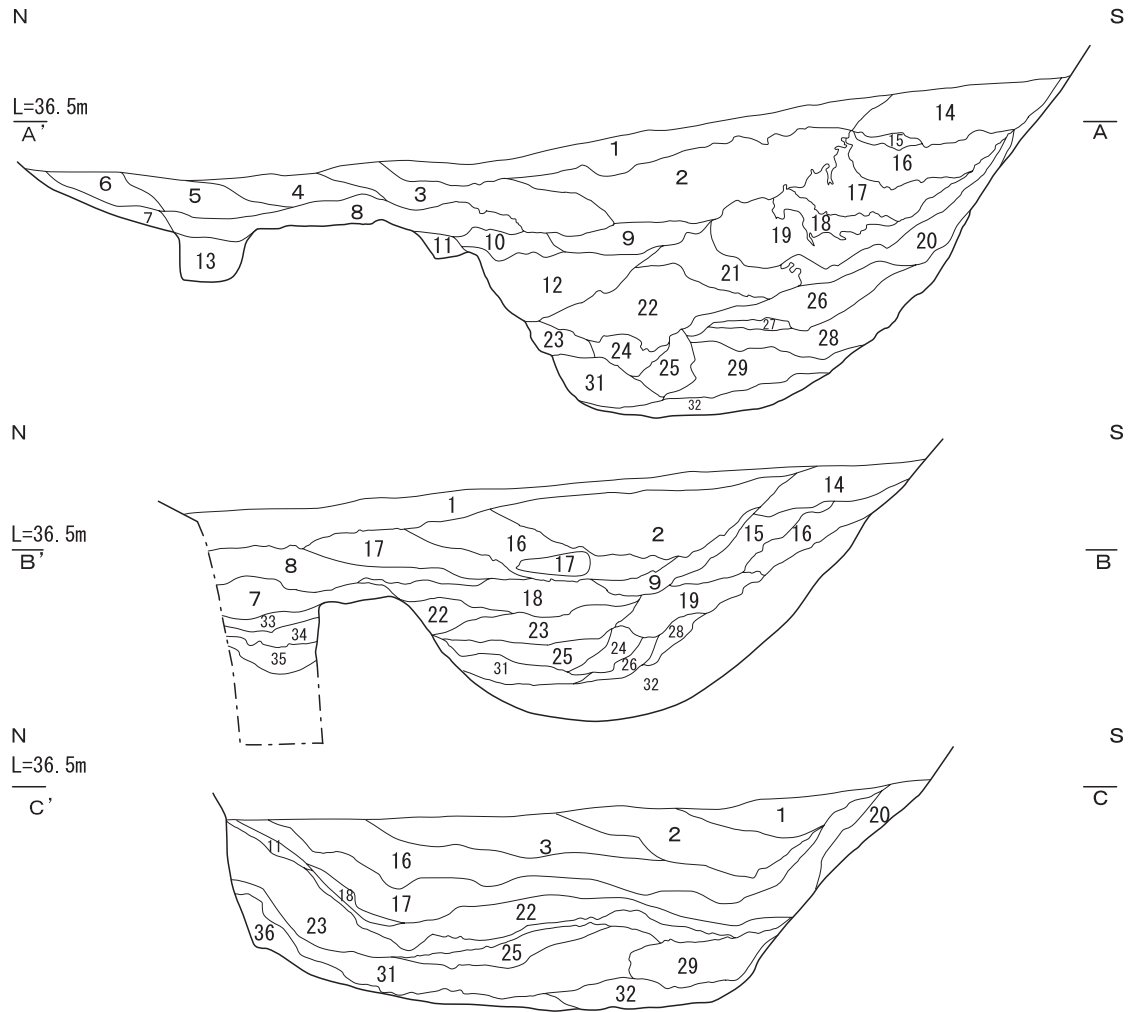
下位の堆積単位群は、上位層に比べて細粒で均質な基質からなり、断面全体にわたって連続的に分布する。堆積物中には、緩やかに湾曲する層理構造が認められ、複数のラミナがほぼ平行に観察できる。ラミナの厚さは一定ではなく、局所的に間隔の変化がみられる。下位堆積単位群の最下部には、上位のラミナ構造とは異なる堆積状況が局所的に認められることから、機能維持のための浚渫がなされた可能性がある。

上位および下位の堆積単位群の境界は平坦ではなく、不整形で凹凸を伴う。境界部では、下位のラミナ構造が途中で途切れ、上位堆積物によって切られており、境界面は断面全体で連続性に欠けている。

出土遺物をみると、下位堆積単位群からは、瀬戸焼すり鉢、瓦質土器火鉢・風炉、越前焼すり鉢など、中世後期から戦国期末に属する遺物がまとまって出土している。一方、上位堆積単位群からは、中世前期から戦国時代末期までの青磁・白磁・軟質施釉陶器などの遺物に加え、古墳時代に属する須恵器が混在して出土しており、時期差の大きい遺物群が同一堆積内に含まれる。また、軟質施釉陶器の椀(楽焼茶椀、第98図769)は、上位堆積単位群と下位堆積単位群の境界付近から出土している。本遺物は戦国期末から近世初頭に属することから、堆積構造および遺物の出土状況を総合すると、下位堆積単位群は堀が機能していた段階の堆積、上位堆積単位群は堀の廃絶に伴って一括して埋め立てられた堆積と位置づけることができる。

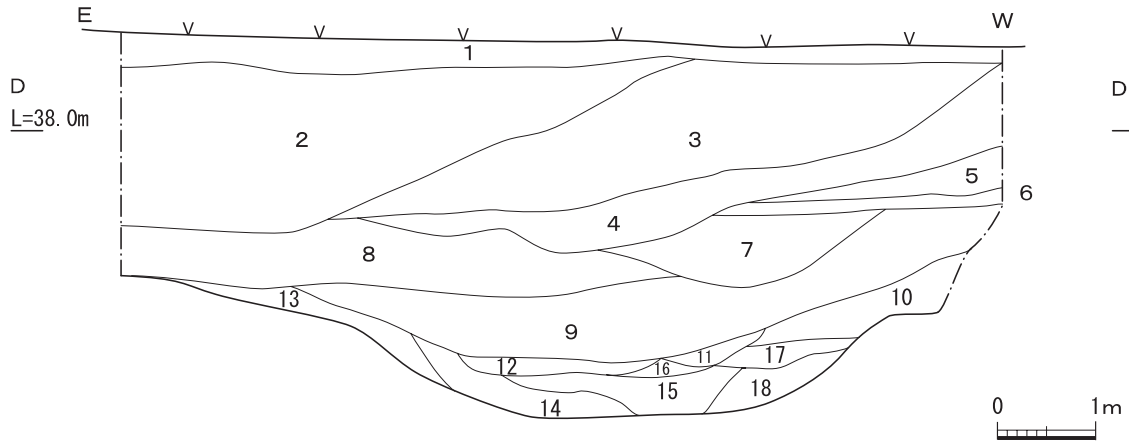
**堀S D7005** S D7005は調査区北西、壁面で確認したS D7001に接続すると考えられる検出幅約8.2m、検出深2.2mを測る堀である。検出直後に、地下水の侵食によって調査区の壁面が崩落したため、全容は不明であるが、位置関係および規模から、S D7001の北西方向への延長部である可能性が高い。

**堀S D7006** S D7006は7区南東側において検出された堀で、検出長約7.2m、最大幅6.9m、最大深約3.8mを測る。平面形はおおむね楕円状を呈し、掘り込みは南方向へ延びる。S D7001とは平面的に接続しない。断面における掘り込み形状は、全体として椀状を呈し、法面は比較的



- |   |   |
|---|---|
| 1 褐灰色 (5YR 5/1) 粗粒砂含む中粒砂  | 18 黄灰色 (2.5Y 6/1) 粗粒砂含む中粒砂                              |
| 2 明褐色 (7.5YR 7/1) 粗粒砂含む中粒砂  | 19 褐灰色 (10YR 6/1) 粗粒砂含む中粒砂                              |
| 3 灰褐色 (5YR 6/2) 粗粒砂含む中粒砂  | 20 褐灰色 (10YR 4/1) 粗粒砂含む中粒砂                              |
| 4 灰褐色 (7.5YR 5/2) 粗粒砂含む中粒砂  | 21 褐灰色 (7.5YR 5/1) 粗粒砂含む中粒砂                             |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 粗粒砂含む中粒砂  | 22 灰赤色 (2.5Y 5/2) 粗粒砂含む中粒砂                              |
| 6 灰褐色 (7.5YR 5/2) 粗粒砂含む中粒砂 北側地山ブロック少量含む                             | 23 赤灰色 (2.5Y 6/1) 粗粒砂含む中粒砂                              |
| 7 灰褐色 (10YR 6/2) 粗粒砂含む中粒砂   | 24 黒褐色 (10YR 3/1) 中粒砂含むシルト 粗粒砂わずかに含む                    |
| 8 灰褐色 (7.5YR 4/2) 中粒砂含む粗粒砂<br>北側地山ブロック多量に含む (~5cm偽礫状)<br>14層と同一の可能性 | 25 黒褐色 (7.5YR 3/1) 中粒砂含むシルト 粗粒砂わずかに含む                   |
| 9 明灰褐色 (5YR 6/1) 粗粒砂含む中粒砂 北側地山ブロック少量含む                              | 26 オリーブ黒色 (5Y 3/1) 中粒砂含むシルト 粗粒砂わずかに含む<br>南側地山ブロックわずかに含む |
| 10 褐灰色 (7.5YR 6/2) 粗粒砂含む中粒砂<br>下部に南側地山ブロック (5YR 8/1・粗粒砂) を僅かに含む     | 27 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粗粒砂含む中粒砂                             |
| 11 灰褐色 (5YR 6/2) 中粒砂含む粗粒砂   | 28 灰白色 (5Y 7/1) 粗粒砂含む中粒砂                                |
| 12 灰色 (5Y 6/1) 中粒砂含む粗粒砂 下部で22層との層境が不明瞭                              | 29 褐灰色 (7.5Y 6/1) 粗粒砂含む中粒砂                              |
| 13 褐灰色 (7.5YR 4/1) 中粒砂含む粗粒砂 雑魚溝の埋土                                  | 30 にぶい黄褐色 (10YR 7/4) 中粒砂含むシルト 粗粒砂わずかに含む                 |
| 14 褐灰色 (10YR 5/1) 粗粒砂含む中粒砂<br>北側地山ブロック (7.5YR 5/1シルト) 少量含む          | 31 にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 粗粒砂含む中粒砂                           |
| 15 黄灰色 (2.5Y 5/1) 粗粒砂含む中粒砂<br>北側地山ブロックを層状 (約3cm) に含む                | 32 明灰褐色 (7.5Y 7/1) 粗粒砂含む中粒砂                             |
| 16 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粗粒砂含む中粒砂  | 33 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂含む中粒砂 SD7005埋土                    |
| 17 黒褐色 (2.5Y 3/1) 中粒砂含む粗粒砂 シルト僅かに含む                                 | 34 黒褐色 (7.5YR 3/1) 中粒砂含む細粒砂 SD7005埋土                    |
|   | 35 黒褐色 (10YR 2/2) 極細粒砂含む中粒砂SD7005埋土                     |
|   | 36 黒褐色 (7.5YR 2/1) 中粒砂含む細粒砂                             |

第96図 堀 S D7001断面図(S=1/50)



- |                                     |                                       |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂含む粗粒砂 (耕作土)   | 10 灰褐色 (10YR 4/2) 細粒砂含む中粒砂 わずかに粗粒砂含む  |
| 2 にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 細粒砂含む中粒砂 (造成土か) | 11 褐灰色 (10YR 6/1) 中粒砂含む細粒砂 うすいラミナ構造あり |
| 3 明褐色 (10YR 3/3) 細粒砂含む粗粒砂 (造成土か)    | 12 褐灰色 (10YR 5/1) 中粒砂含む細粒砂 うすいラミナ構造あり |
| 4 暗黄褐色 (10YR 3/4) 極細粒砂含む中粒砂         | 13 黒褐色 (10YR 3/1) 極細粒砂含む中粒砂           |
| 5 褐色 (10YR 4/4) 細粒砂含む中粒砂            | 14 灰黄色 (10YR 4/2) 中粒砂含む細粒砂            |
| 6 淡灰黄色 (10YR 6/2) 細粒砂含む中粒砂          | 15 灰黄色 (10YR 5/2) 中粒砂含む細粒砂            |
| 灰黄色 (10YR 5/2) 極細粒砂の偽礫を含む           | 16 褐灰色 (10YR 4/1) 中粒砂含む細粒砂            |
| 7 暗赤褐色 (7.5YR 3/2) 中粒砂含む細粒砂         | 17 にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 中粒砂含む細粒砂         |
| 8 暗褐色 (10YR 2/2) 極細粒砂含む中粒砂 シルト質が強い  | 18 黒褐色 (7.5YR 3/1) 中粒砂含む細粒砂           |
| 9 暗灰色 (10YR 3/1) 極細粒砂含む中粒砂          |                                       |

第97図 堀 S D 7006断面図 (S=1/80)

なだらかである。埋土は全体として暗色を呈し、細粒で均質な基質からなる。断面において、堆積物の性状は上下で大きく変化せず、明瞭な層位区分は認められない。堆積物中に、水平に連続する層理面やラミナ構造は確認できず、塊状単位が重なり合うような堆積状況も認められない。ただし、底部付近には周囲の埋土とは性状を異にする堆積物が局所的に認められる。該当部は明色を呈し、全体として粗粒であるが、部分的に細粒である。形状はレンズ状を呈し、堆積単位が二つ並ぶように分布する。これらは断面全体には及ばず、S D 7001との境界付近に限って確認される。周囲の埋土との境界は比較的明瞭であり、上下方向に連続する層としては認められない。掘り込み面と埋土との境界は比較的連続しており、掘り込み面を切り込むような後続の掘削痕や、不整形な掘り返し痕は確認できない。以上のように、S D 7006は堆積構造に明瞭な段階差を示さず、S D 7001にみられる使用段階および廃絶段階を区別できる堆積状況とは異なることから、両者は形成過程を異にする堀であると位置づけられる。

**溝 S D 7002** SDS D 7002は、7区北側の地山面を段状に削り出した緩斜面に掘り込まれた溝で、検出長13.8m、最大幅1.0m、深さ0.8mを測る。S D 7001に隣接し、S K 7004によって切り込まれる。埋土は、細粒で均質な基質からなり、断面においてラミナ構造は認められない。堆積構造は全体として均一であり、流水による分級を示す明瞭な層理は確認できない。S D 7001の上位堆積単位群によって被覆されており、両遺構の間には上下関係が認められる。このことから、本遺構はS D 7001が廃絶・埋立される以前に形成され、S D 7001の廃絶に伴う上位堆積によって機能を喪失したものと位置づけられる。また、埋土が滞水環境下で形成されたとみられる堆積状

況を示すこと、ならびに S D 7001 下位堆積単位群にラミナ構造が認められることから、両者は同一もしくは近接した時期に、排水・導水に関連する機能を担っていた可能性がある。S D 7001 の廃絶に伴う一括的な埋め立ては、これら周辺の溝状遺構を含む一連の水利・排水機能の停止を反映するものと考えられる。

**土坑 S K 7004** 土坑 SK7004 は S D 7002 を切り込む直径 0.7m、深さ 0.3m を測る土坑である。内部には拳大の角礫がみられたほか、堆積物は S D 7002 と同様に滞水を示す基質であった。S D 7002 を切り込むことから、堀の埋め立て後に掘削されたと考える。遺構の性格を断定することはできないが、素掘り井戸の可能性はある。

## 2) 出土遺物

### (1) 土器

#### ① 堀 S D 7001 上層(第 98 図)

古墳時代から戦国期末の遺物が出土した。

755 は、弥生土器で小型の甕である。器形は 12 分の 1 が残存する。口径 11.9cm、残存高 3.6cm を測る。胎土は密で 2mm 以下の白色鉱物を多く含む。口縁は体部から外反し、端部で立ち上がる。

756 は羽釜である。器壁が荒れているため土師質に見えるが瓦質土器であろう。器形は口縁部が 12 分の 1 残存する。口径 21.3cm、残存高 4.4cm を測る。胎土は密で 1mm 以下の白色鉱物を含み、焼成はやや軟質である。内面にヨコナデ、鏝下部にユビオサエを施す。外面鏝下部に煤が付着する。中世前期に属する。

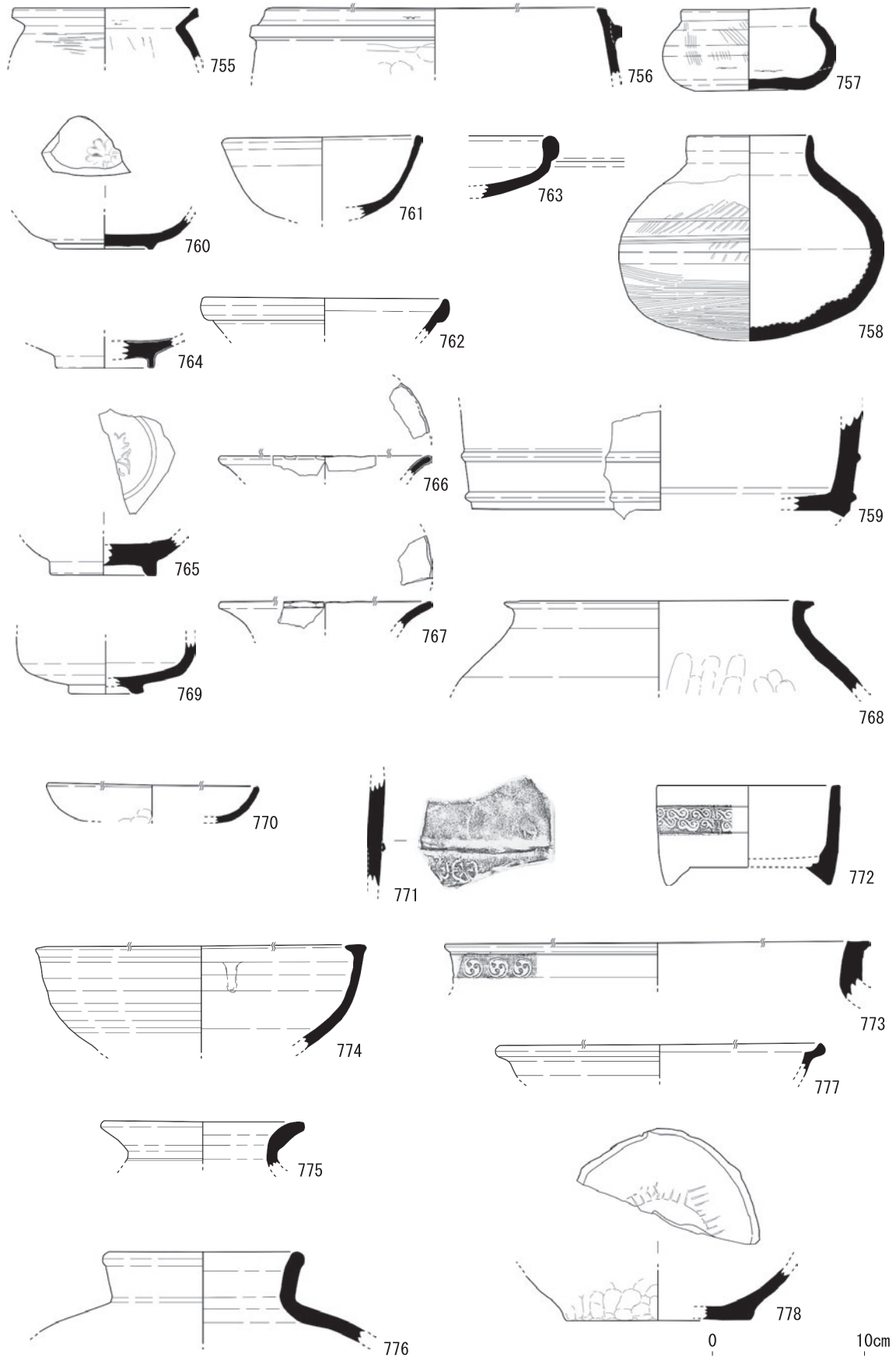
757・758 は須恵器の短頸壺である。757 は口縁部がわずかに残存するが、体部の残りは良い。口径 8.6cm、器高 5.3cm、底径 7.0cm を測る。胎土は密で、2mm 以下の白黒鉱物、1mm 以下の雲母を含む。内面はヨコナデ、外面に粗いハケ、ヨコナデ、体部下半にケズリを施す。古墳時代中期か。758 は器形が完存する。口径 7.9cm、器高 13.6cm を測る。胎土は粗く、焼成は良好である。口縁部内面と外面体部に回転ナデ、体部に 2 条の沈線と斜行するヘラ描き、底部にカキ目が確認できる。古墳時代中期に属する。

759 は瓦質土器の火鉢である。器形は底部が 12 分の 1 残存する。底径 24.8cm、脚片 5mm を含んだ残存高 7.0cm を測る。胎土は密で焼成は良好である。内面に回転ナデ、外面底部にケズリのち脚の接合痕が確認できる。中世後期に属する。

760 は、瀬戸・美濃灰釉丸皿である。見込みにスタンプ文がある。高台部の 2 分の 1 が残存する。高台径 6.6cm、残存高 1.8cm を測る。胎土は密で、焼成はやや軟質で、色調は素地がにぶい黄橙色、釉調はにぶい黄色である。

761 は、瀬戸・美濃灰釉陶器椀である。残存率 18 パーセントである。口径 12.8cm・残存高 5.3cm を測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は素地が灰白色、釉調は灰黄色である。

762 は白磁の椀である。760 は 762 は口縁部の 12 分の 1 が残存する。口径 15.8cm、残存高 2.3cm を測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は素地が白色、釉調は灰白色である。IV 類と考える。中世前期に属する。



第98図 7区出土土器1

763は青磁の盤である。器形は12分の1が残存する。残存高4.1cmを測る。胎土は密、焼成は良好、色調は素地が灰色、釉調はにぶい黄色である。

764～767は青磁である。764・765は椀である。764は6分の1が残存する。高台径6.6cm、残存高1.9cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は素地が灰白色、釉調は明オリーブ灰色である。中世後半期に属する。765は底部が4分の1が残存する。高台径6.9cm、残存高2.5cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は素地が白色、釉調は明オリーブ灰色である。中世後半期に属する。

766・767は稜花皿である。766の器形は12分の1が残存する。口径13.6cm、残存高1.3cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は素地が浅黄橙色、釉調はオリーブ灰色である。口縁端部に輪花をもつ。中世後半期に属する。767と同一個体の可能性がある。767の器形は12分の1が残存する。口径13.6cm、残存高1.7cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は素地が灰白色、釉調はオリーブ灰色である。口縁端部に輪花をもつ。中世後期に属する。

768は丹波焼の甕である。器形は口縁部が4分の1が残存する。口径19.0cm、残存高6.0cmを測る。胎土は密で0.5mm以下の白色鉱物を含み、焼成は良好である。内面にユビオサエが確認できるが、外面の調整は不明である。

769は軟質施釉陶器（黒楽）の椀である。器形は4分の1が残存する。高台径5.0cm、残存高3.5cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は素地がにぶい褐色、釉調は黒褐色である。

#### ②堀S D 7001下層(第98・99図)

S D 7001下層からは弥生時代から中世までの遺物が出土した。

770は土師器の皿である。器形は6分の1が残存する。13.7cm、残存高2.4cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。内外面ともにヨコナデし、底部にユビオサエが確認できる。

771～773は瓦質土器である。771は火鉢である。771の器形の残存率は不明である。残存高7cm、残存幅8.5cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。内外面ともに摩滅し、調整は不明である。文様帯に七宝文様のスタンプを施す。

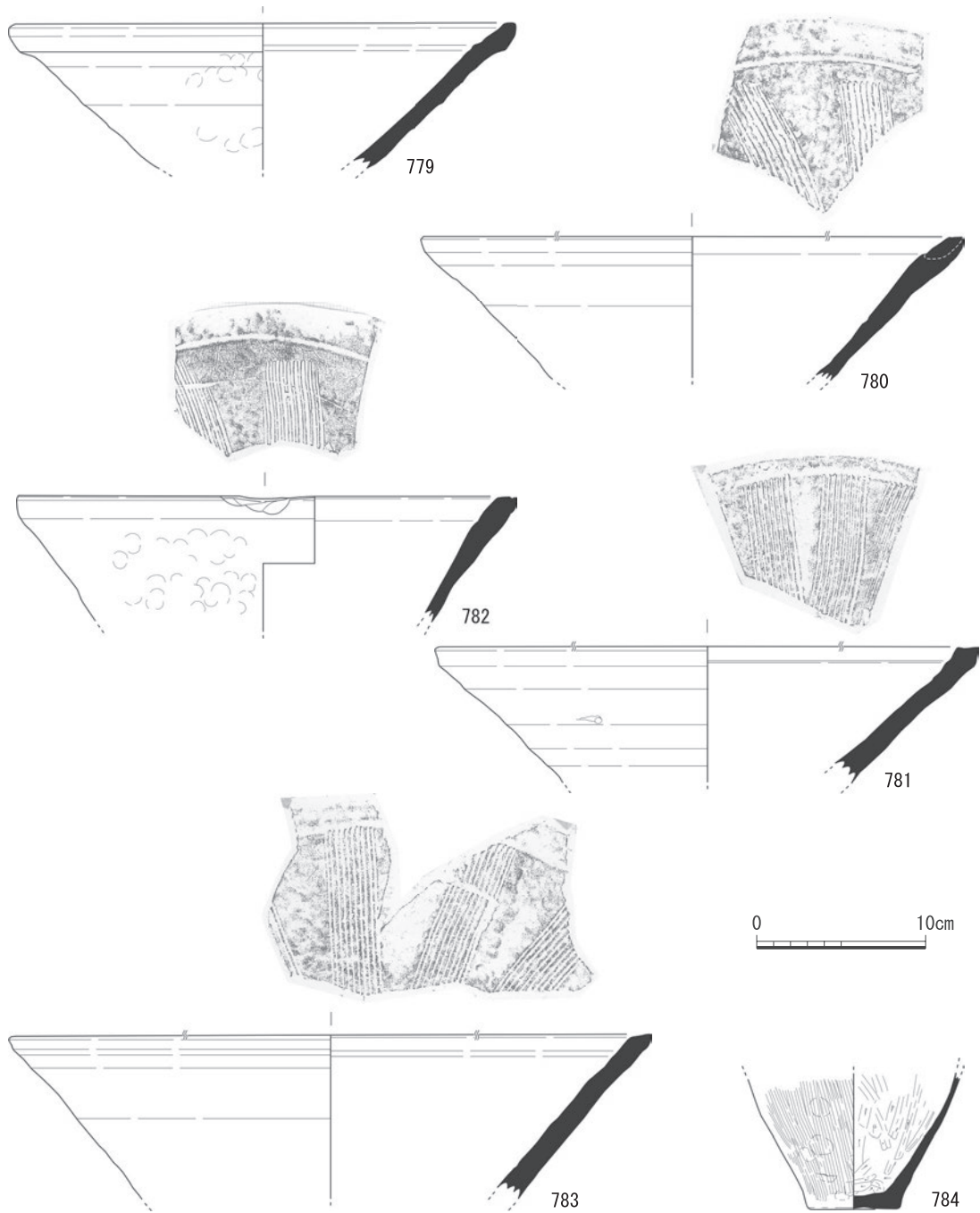
772は火舎香炉である。口縁部から6分の1が残存する。口径11.8cm、器高6.5cmを測る。胎土は密で焼成は良好である。内面ナデ、外面にミガキ、体部に文様帯があり、簡略化された唐草文スタンプが施される。

773は風炉である。器形は口縁部から6分の1が残存する。口径26.4cm、残存高3.8cmを測る。胎土は密で焼成は良好である。口縁部に文様帯があり、巴紋のスタンプが施される。

774は龍泉窯系青磁の鉢である。器形は口縁部の12分の1が残存する。口径21.7cm、残存高6.8cmを測る。胎土は密で色調は素地が灰白色、釉調が灰白色である。

775、776は丹波焼の壺である。775の器形は口縁部が12分の1ほど残存する。口径12.8cm、残存高3.0cmを測る。胎土は密で焼成は良好である。戦国期末～近世初頭に属する。776の器形は口縁部が12分の1ほど残存する。口径12.4cm、残存高5.9cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好である。

777は瀬戸・美濃焼のすり皿である。器形は口縁部が12分の1が残存する。口径21.1cm、残存高



第99図 7区出土土器2

2.1cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は素地が灰白色、釉調は黄褐色である。大窯第4段階と考える。戦国期末～近世初頭に属する。

778は陶器のすり鉢である。器形は底部が4分の1ほど残存する。底径12.2cm、残存高3.4cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。内面見込み付近に播目の痕跡、底部付近に雑なユビオサエ、底面にケズリが確認できる。

779～783は越前焼のすり鉢である。779の器形は口縁部の12分の1が残存する。口径30.0cm、残存高8.5cmを測る。胎土は密で焼成はやや軟質である。

780は越前焼のすり鉢である。器形は口縁部が12分の1ほど残存する。底径31.2cm、残存高8.5cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。内面に拵目が確認できる。戦国期末～近世初頭に属する。781の器形は口縁部が6分の1ほど残存する。口径30.8cm、残存高8.1cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。内面に拵目が確認できる。782の器形は口縁部が6分の1ほど残存する。口径28.8cm、残存高7.4cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。内面に拵目が確認できる。783の器形は口縁部が12分の1ほど残存する。口径37.0cm、残存高9.7cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。内面に拵目が確認できる。

784は弥生土器の甕もしくは壺である。器形は底部のみが残存する。底径5.4cm、残存高8.0cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好である。内面体部は荒いケズリのちハケ、底部付近はヘラケズリ、外面にハケを施す。弥生時代中期に属する。

## (2) 石造物ほか

### ①SD7001

SD7001からは五輪塔、石臼、砥石が出土している。なお、図化できていないが、サヌカイト製の有舌尖頭器2点が出土している。1点は、先端部は欠損し、全長8.6cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm、重さ13gを測り、他の1点は全長5.3cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ8.5gを測る。

785～787は五輪塔の空風輪である。それぞれの面に梵字が刻印される。

788、789は石臼の破片である。788は挽目が細かいことから、茶臼と考える。

790は砥石である。

### ②SD7002

791は碁石である。

### ③SK7003

792は五輪塔の地輪である。1面のみ梵字が刻印される。

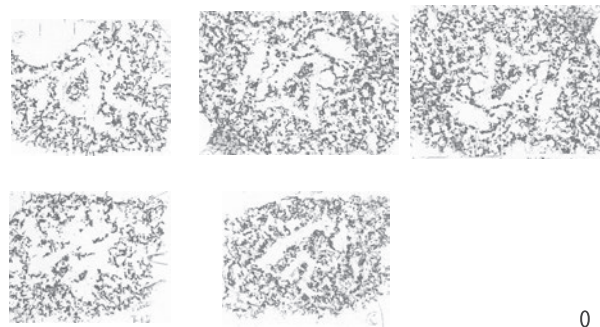
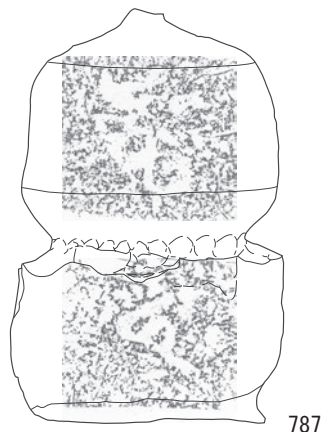
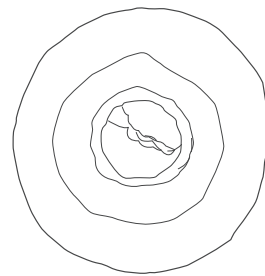
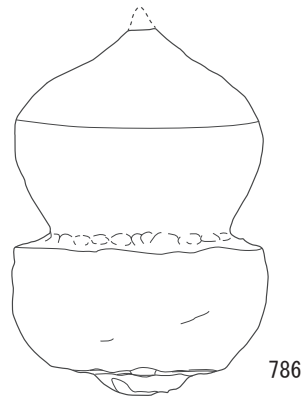
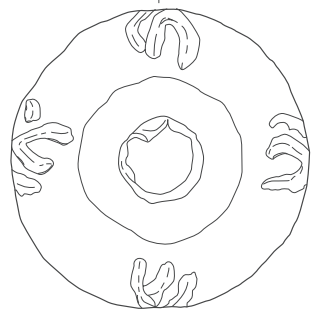
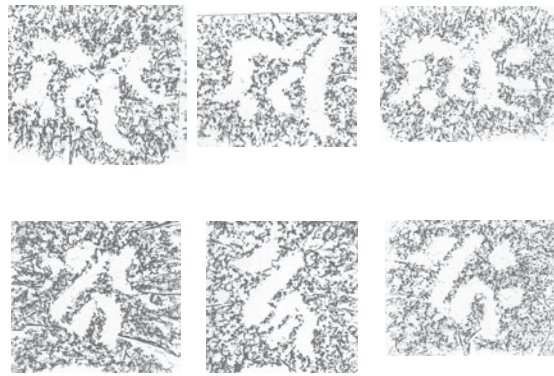
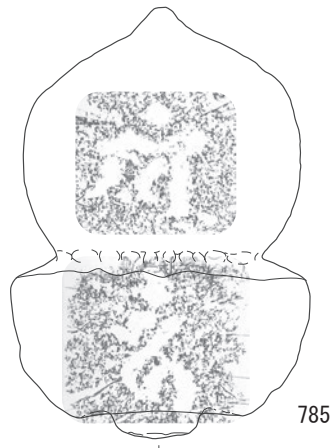
## 3) 小結

7区では、戦国期末に位置づけられる堀SD7001を中心として、これに関連する堀SD7005、形成過程を異にする堀SD7006、段状に造成された平坦面の縁辺に設けられた溝SD7002、ならびに土坑SK7004を検出した。

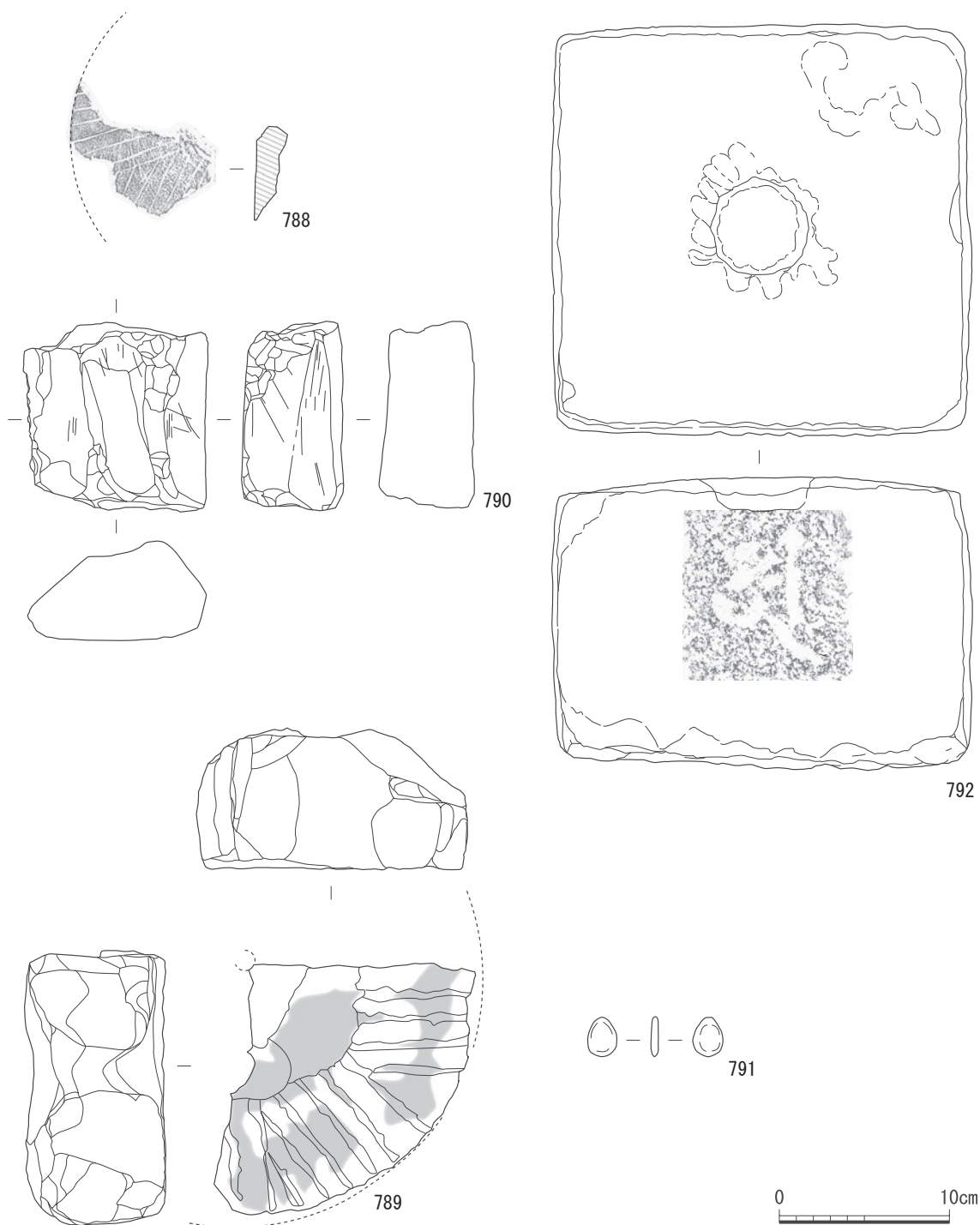
SD7001は、下位にラミナ構造や浚渫に伴う堆積状況を示す使用段階の堆積をもち、その上位を不整形な塊状堆積が覆う二相構造を示す。上位堆積は分級や連続的な層理を欠き、下位堆積を切る不整形な境界をもつことから、堀の廃絶に伴って人為的に一括して、ごく短期間に埋め立てられたものと判断される。SD7005は位置関係および規模から、SD7001の北西方向への延長部である可能性が高い。

一方、SD7006はSD7001とは平面的に接続せず、堆積構造に明瞭な段階差を示さないことから、SD7001とは形成過程を異にする堀であると位置づけられる。

溝SD7002はSD7001に隣接して分布し、その上位堆積によって被覆されることから、SD7001と同時に機能し、同時に埋められた遺構と考えられる。SD7001下位堆積およびSD7002の



第100図 7区出土石造物



第101図 7区出土石造物、石製品

堆積状況から、両者は排水・導水に関わる機能を担っていた可能性が高い。S K7004はS D7002を切り込む関係にあり、機能を喪失した後に掘削された遺構であるとみなしうる。

出土遺物の層位別傾向をみると、S D7001下位からは戦国期末に属する遺物がまとまって出土するのに対し、上位堆積からは時期差の大きい遺物が混在して出土している。これらの状況は、S D7001が一定期間機能したのち、廃絶に伴って一括して埋め立てられた過程をよく反映している。

## 9. 総括

### 1) 地形帯の区分と調査地の全体構造

本調査は、背後山地の谷口から前面の緩斜面および低位湿地へと連続する地形に設定した複数の調査区を対象として、層序・堆積過程・遺構分布を総合的に検討した。その結果、本調査地における土地利用は均質ではなく、微地形差および水文条件の差異によって、機能的に分化した帯域の相互関係により構成されていたことが明らかとなった。

本調査地の地形構造は、相対的に安定した微高地帯域、これに連続する移行・調整帯域、さらに背後谷筋および前面低地に接続する低位湿地域という三層の構造として把握できる。これらの帯域は、環境条件を反映し、異なる機能を担う場として分化したと考えられる。

2区、4区および7区が属する微高地帯域では、恒常的な居住を伺わせる遺構の分布が認められた。2区、4区では、近現代の耕作による攪乱を受けつつも包含層の保存状況は比較的良好であり、主として古代末から中世にかけての遺構・遺物が確認された。特に4区では、溝(S D 4001、S D 4003)で画された区画内に倉庫とみられる掘立柱建物(S B 4001)と母屋と考えられる掘立柱建物(S B 4002)、石組井戸(S E 4093)が伴い、建物の建て替えも確認されることから、本遺跡における人類活動の中核域として機能していたことを示す。

7区では戦国期に属する堀(S D 7001、S D 7005、S D 7006)が確認されている。特にS D 7001は大規模な掘削を伴う圍繞施設として機能していた可能性が高く、本遺跡が戦国期においても拠点的空間として再利用されたことを示唆する。

これに対して、3区、5区、6区が属する移行・調整帯域では、遺構分布は局所的かつ限定的であり、先述のような居住の痕跡は認められない。

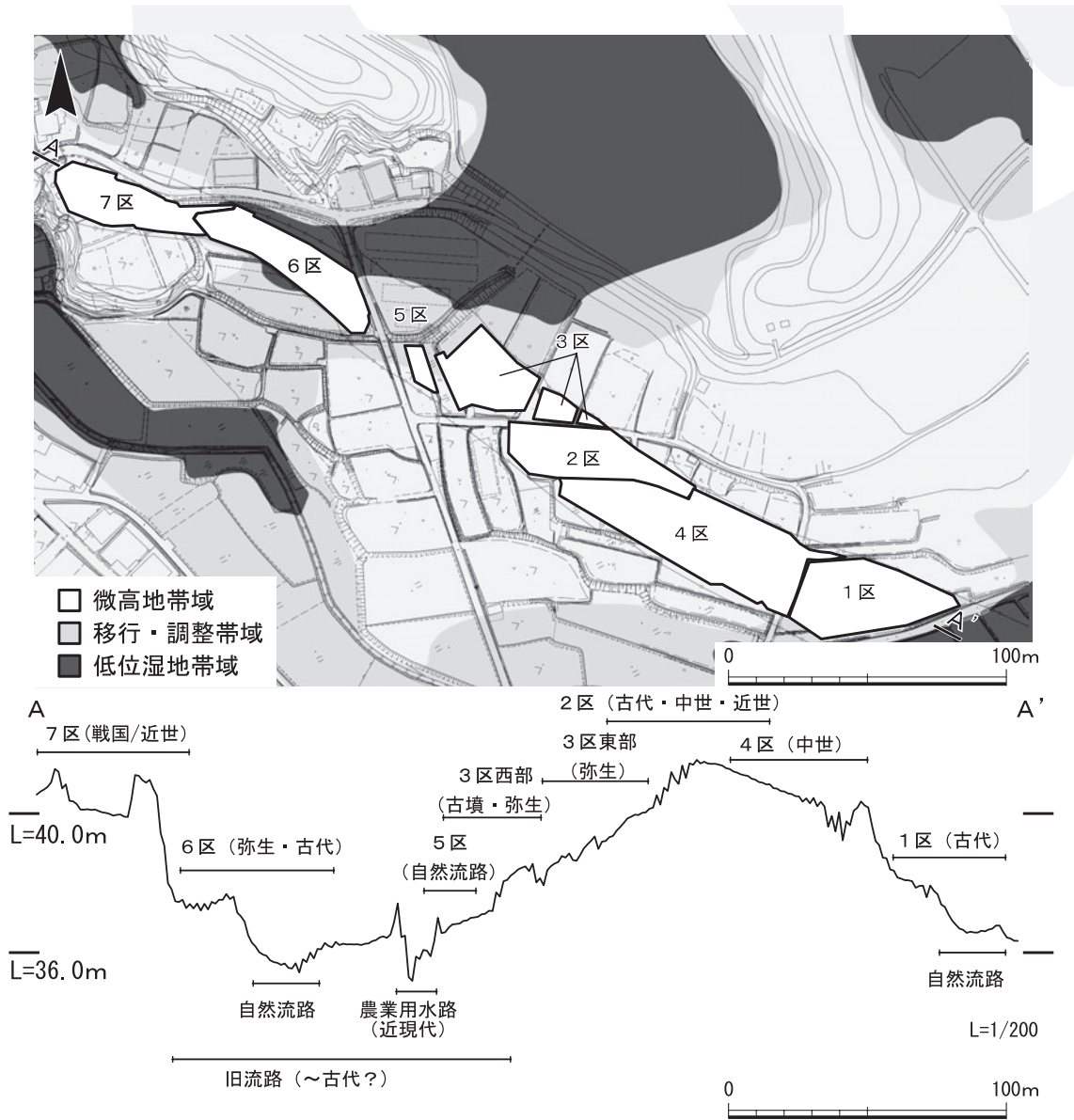
3区では弥生時代中期に属する溝群(S D 3068、S D 3095、S D 3070、S D 3098、S D 3091、S D 3096、S D 3097)および土坑(S K 3069)が検出され、切り合いを伴い、排水・集水機能をもつ溝として反復的に掘削された可能性が高い。

5区では遺構・遺物は確認されなかったが、安定層の下位に自然流路の痕跡が認められ、流路近接部で居住利用が制約されたことを示す。

また、6区では、弥生時代中期の土坑(S K 6144)、自然流路(NR 6120)と、古代末～中世の倉庫と考えられる掘立柱建物(S B 6001)、溝(S D 6003、S D 6020、S D 6027)が確認された。弥生時代は流路近接の不安定帯であったが、その後の堆積環境の変化で安定化し、古代末以降に補助的施設の立地が可能となったと考える。

以上から、3区～6区は流路に近接しているために地盤が安定せず、居住には適さない一方、排水関連遺構が集中して確認されることから、居住域を支える水文環境の制御および調整機能を担う移行・調整帯として機能していたと考えられる。

一方、1区は背後谷筋および近接河川からの流水が集約する低位湿地域に位置し、流路形成および土砂流入を反映した不安定な堆積環境を示す帯域である。本地点では、倉庫と考えられる掘



第102図 佐屋利遺跡地形区分図(S=1/2,500、平面：断面 1：8)

立柱建物跡 (S B 1001、S B 1002) と柵列 (S A 1003)、水利施設と考えられる木組遺構 (S X 1053) が確認されたが、流路・土砂流堆積に近接する立地から、居住域を支える水利管理および物資管理の機能を担う環境基盤帯として機能していたと考えられる。

したがって、本調査地における土地利用は、安定した微高地帯域に形成された居住中核域、これを取り巻く緩斜面帯域に展開する移行・調整帯、さらに低位湿地域に形成された環境基盤帯という三層が相互に関連する土地利用体系として構成されていたものと理解できる。

## 2) 遺跡の変遷

のと理解される。以下に、確認された遺構およびその分布に基づき、時期別の土地利用の変遷について整理する。

### (1) 弥生時代における排水管理の開始

弥生時代中期には3区で溝群・土坑が検出され、主軸の異なる2群が切り合うことから、排水・集水施設として反復的に維持管理されたと考えられる。6区でも同時期の遺構が確認されるが、居住に直結する遺構はなく、この段階は湿潤環境の制御を主眼とする整備期と位置づけられる。

#### (2) 古墳時代における限定的利用

弥生時代に形成された排水管理の一部は、古墳時代においても継続して利用されていた可能性がある。しかし、この段階に明確に帰属する建物跡などの遺構は極めて断片的であり、3区で竪穴建物跡の可能性がある溝(S D3092、S D3093、S D3102)が確認されるに留まる。遺構の残存状況が極めて不良であり、古墳時代以降の改変が強い影響を与えていると考えられる。

#### (3) 古代末から中世における居住空間の成立と中核域の形成

古代末から中世にかけて、本遺跡における土地利用は大きな転換を迎える。この時期には、微高地帯域に位置する4区において、継続的かつ安定した居住活動が営まれていたことが明らかである。同時期に6区・1区でも補助的施設が展開し、居住中核(4区)を外縁から支える配置が形成されたと考えられる。

#### (4) 中世後期から戦国期における拠点的空間の再編

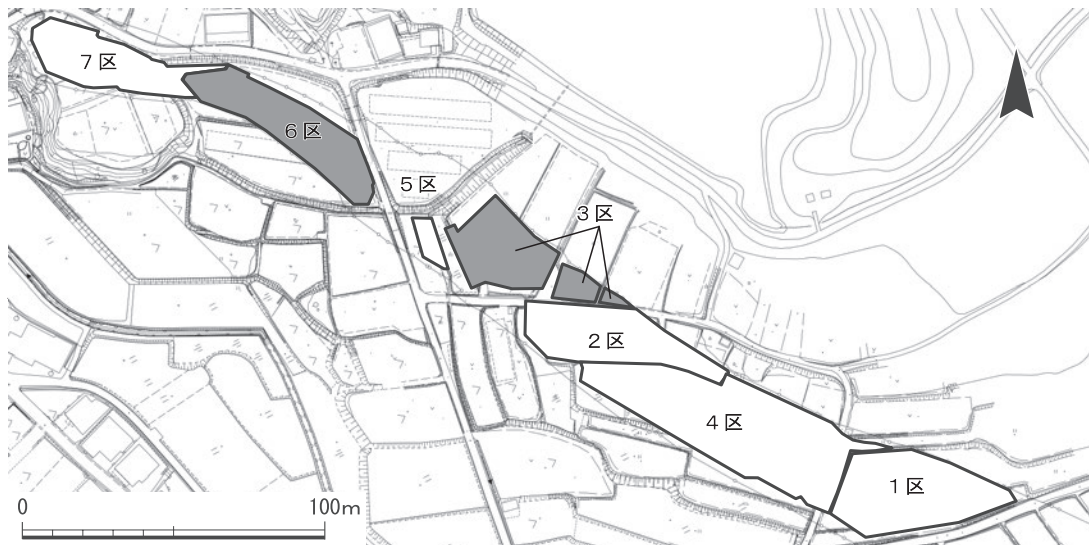
微高地帯域に位置する7区において、堀(S D7001、S D7005、S D7006)や2区で溝(S D2143)が新たに構築された。特にS D7001は大規模な掘削を伴う囲繞施設であり、当該地点が戦国期において拠点的空間として再利用されたことを示す。これらの堀は、水利施設としてのみではなく、防御的機能または区画機能を企図した可能性が高く、当該地点が中世後期から戦国期においても立地的優位性が高かったと考える。また、同時期の遺物が2区、4区でも出土していることから、広範囲に拠点的利用が及んでいたことを示す。

### 3) 総合評価

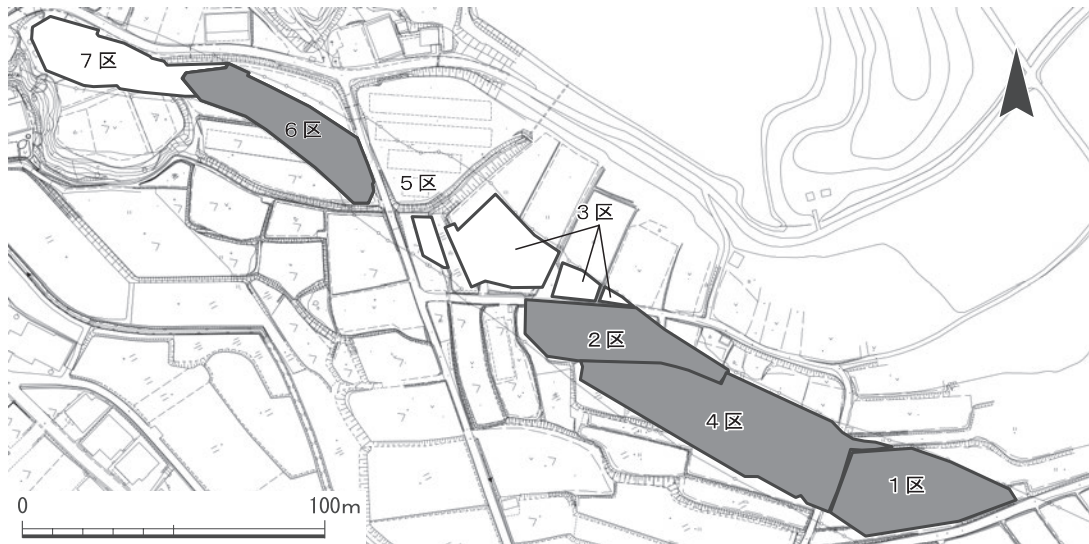
本遺跡における土地利用は、微高地帯域・移行調整帯・低位湿地域からなる三層構造のもとで展開し、弥生時代における排水管理の開始から、古墳時代の限定的利用を経て、古代末から中世にかけて居住機能を中核とする拠点へと段階的に発展したものと理解される。この過程は、土地利用の中心が大きく移動するものではなく、同一の地形内において環境条件の変化にあわせて利用様式が更新され、機能的に深化していく過程として把握される。

本地点は盆地低地および背後谷筋を結ぶ動線を把握できる谷口の結節点に位置し、さらに居住中核の形成に加え、囲繞施設による空間の区画化および防御的性格の付与が認められることから、本地点は周辺地域の動線および土地利用を統括する機能をもつ拠点的性格を備えていたと考えられる。また、微高地・緩斜面・低位湿地が近接するため、居住、水利管理、物資管理の機能を分担配置しつつ一体的に運用でき、拠点形成を可能とする条件を備えていたと理解できる。

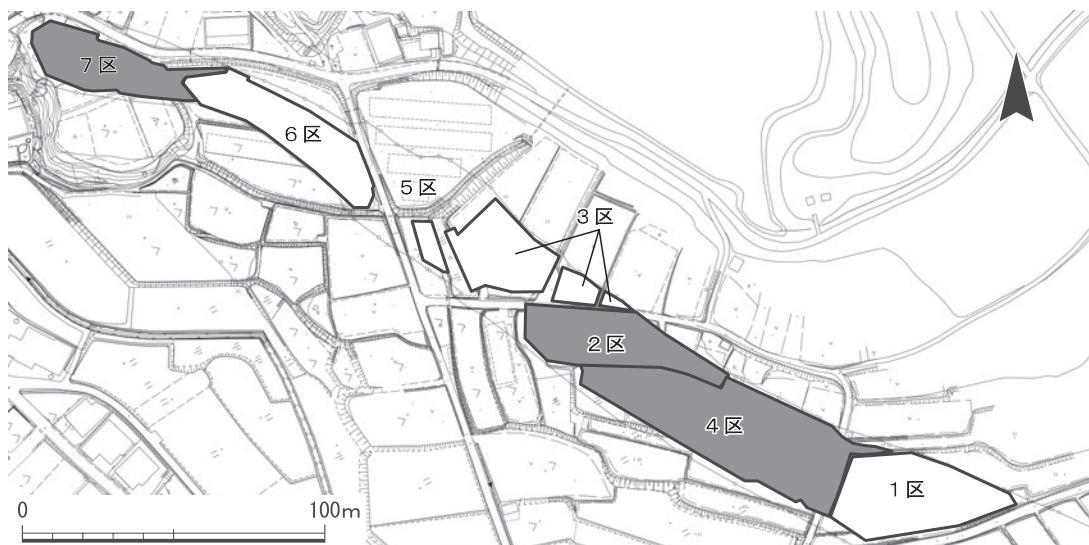
4区で確認した区画性をもつ居住空間および関連施設の分布は、このような地形的優位性を背景として、本地点に居住機能の中核が成立していたことを示す。また、7区で戦国期の囲繞施設が新たに構築されたことは、本地点が単なる居住地にとどまらず、空間的要衝として認識され、拠点的機能をもつ空間として再編された可能性を示している。



弥生時代の遺物を伴う遺構が確認できた調査区



古代末～中世前半期の遺物を伴う遺構が確認できた調査区



中世後半期の遺物を伴う遺構が確認できた調査区

第103図 佐屋利遺跡の変遷

以上のことから、本遺跡は、中郡盆地における谷口立地の集落が、居住中核の形成を経て拠点化に至る過程を具体的に示す事例として、地域における集落形成および拠点形成過程を理解するうえで重要な学術的意義を有する。 (面 将道)

参考文献

- 大川清・鈴木公雄・工楽善通(編)1996『日本土器事典』雄山閣
- 本村充保2006「遺跡出土下駄の編年及び地域性抽出に関する基礎的研究」『考古学論攷』第29冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 本村充保2021「近畿地方における中世の下駄の様相」『考古学論攷』第44冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 京丹後市史編さん委員会2015「図説京丹後市の自然環境」『京丹後市史本文編』京丹後市
- 京丹後市史編さん委員会2010『京丹後市の考古資料』(京丹後市史 資料編) 京丹後市
- 国土地理院編2025『基盤地図情報 数値標高モデル (DEM) 1mメッシュ』 国土地理院基盤地図情報ダウンロードサービス
- 竹原一彦1987「丹後における黒色土器について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 肥後弘幸2023「資料紹介 京丹後市佐屋利遺跡出土の大形石包丁」『京都府埋蔵文化財情報』第144号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 広川治・黒田 和男1960『宮津地域の地質(5万分の1地質図幅)および同説明書』地質調査所
- 平尾政幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 峰山町1963『峰山郷土史』上巻 峰山町
- 山本信夫2000『太宰府条坊X Vー陶磁器分類編一』太宰府市教育委員会

付表 4 1 区出土土器・土製品観察表

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
126	白磁	碗	1 区	SP94	(15.8)	(4.0)	—	口縁 3/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰白 (2.5Y 8/1)	内：施釉 外：施釉	
127	黒色 土器	碗	1 区	SP94	(14.5)	(3.1)	—	口縁 1/12 以下	内：黒 (N1.5/0) 外：灰黄褐 (10YR6/2)	内：丁寧なミガキ 外：粗いミガキ	
128	黒色 土器	碗	1 区	SP95	(16.3)	4.7	7.0	6/12	内：黒 (N1.5/0) 外：にぶい黄橙 (10YR7/2)	内面：圏線ミガキ 不定方向ミガキ 外：ミガキ、ケズリ	見込に「十 字」の線刻
129	黒色 土器	碗	1 区	SP30	(16.0)	(3.5)	—	口縁 1/12	内：黒 (N1.5/0) 外：にぶい黄橙 (10YR7/4)	内：密なミガキ 外：密なミガキ	外面に墨 書？
130	黒色 土器	碗	1 区	SP91	(15.7)	(2.9)	—	口縁 1/12 以下	内：黒 (N1.5/0) 外：にぶい黄橙 (10YR7/4)	内：粗いミガキ 外：粗いミガキ	
131	瓦質 土器	鍋	1 区	SX54	(29.8)	(2.2)	—	口縁 1/8	内外：褐灰 (10YR4/1)	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ケズ リ	外面全体に 煤付着
132	瓦器	碗	1 区	SX54 東	(15.9)	(4.5)	—	口縁 1/8	内外：黒 (N2/0)	内：暗文？、沈線、 圏線ミガキ、外：ミ ガキ、ユビオサエ	歪みあり
133	白磁	碗	1 区	SK55	(15.8)	(5.2)	—	口縁 3/12	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内：施釉 外：施釉	
134	土師器	皿	1 区	SX65	(11.9)	(2.2)	—	口縁 2/12	内外：浅黄橙 (10YR8/3)	内：工具ナデ 外：ヨコナデ	
135	弥生 土器	高杯	1 区	NR1005 下層	(14.8) (垂下 部径 23.0)	(2.3)	—	口縁 1/8	内：にぶい橙 (7.5YR7/4) 外：にぶい橙 (7.5YR6/4)	外：ミガキ？	
136	弥生 土器	甕・壺	1 区	NR1005	—	—	—	—	明褐灰 (7.5YR7/2)	外：ケズリのちナデ、 ケズリ、ユビオサエ	肩部片 靱殻痕
137	須恵器	蓋	1 区	NR1005 下層	(15.0)	(4.4)	—	口縁 4/12	灰白 (2.5Y7/1)	内：回転ナデ、 外：回転ヘラケズリ	
138	須恵器	蓋	1 区	SX105 下層	(14.7)	1.5	—	口縁 3/12	灰 (N5/0)	内：回転ナデ、外： 回転ナデ、ヘラオコ シ	歪みあり
139	須恵器	蓋	1 区	NR1005	(15)	(1.8)	—	口縁 3/12	灰白 (N7/0)	内：回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	2 条の平行 する圧痕
140	須恵器	蓋	1 区	NR1005	3.65	(1.6)	—	つま み完 存	褐灰 (10YR6/1)	上：回転ナデ、 下：回転ナデ、	つまみ部の み
141	須恵器	杯 B	1 区	NR1005	—	(1.8)	高台 11.5	底 1/12	内：褐灰 (10YR6/1) 外：灰 (N5/0) ~ 灰白 (7.5Y7/1)	内・外：回転ナデ	高台部 底部墨書
142	須恵器	杯 B	1 区	NR1005	—	(1.8)	高台 10.2	高台 4/12	内：浅黄橙 (10YR8/3) 外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：回転ナデ、一方 向ナデ 外：回転ナデ、ヘラ 切り痕	
143	須恵器	杯 B	1 区	NR1005	(11.0)	4.2	高台 7.8	口縁 2/12	灰 (N6/0)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ、ヘラ 切り	
144	須恵器	杯 B	1 区	NR1005	(12.8)	3.3	高台 8.7	口縁 3/12	灰 (N6/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	境目辺りに 爪状痕
145	須恵器	皿	1 区	NR1005	(14.3)	2.4	—	口縁 3/12	灰 (N8/0) (外面口縁付近一褐灰 (10YR5/1))	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ヘラ 切り痕	
146	須恵器	壺底部	1 区	NR1005	—	(5.4)	高台 (4.6)	高台 4/12	内：灰白 (2.5Y7/1) 外：黄灰 (2.5Y6/1)	内：回転ナデ、一方 向ナデ 外：回転ナデ、回転 ケズリ	
147	須恵器	甕	1 区	NR1005	(28.8)	(7.7)	—	口縁 2/12	内外：灰 (N5/0)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ、ユビ オサエ	粘土継ぎ目

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
148	須恵器	甕	1区	NR1005	(22.4)	(7.3)	—	口縁 2/12	内：灰白(N7/0) 外：灰白(10YR7/1) 断：灰白(N8/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、巾(7 条/2.3cm)タタキの ちカキメ	内面当て具
149	須恵器	横瓶	1区	NR1005	(12.4)	(6.2)	—	口縁 3/12	灰白(2.5Y7/1)	内：ナデ、円あて具 痕 外：格子目タタキ、 線刻(波状文?)	
150	須恵器	壺	1区	NR1005	—	(5.2)	(12.2)	底部 1/8	褐灰(10YR5/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転 ケズリ	
151	須恵器	円面硯	1区	NR1005	(10.4)	(2.2)	—	1/12	内・外：灰(N6/0)	内・外：回転ナデ	裏面に墨 書?
152	須恵器	椀	1区	NR1005	(15.5)	4.6	高台 (7.5)	口縁 2/12	灰白(N7/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
153	須恵器	椀	1区	NR1005	(14.4)	4.8	高台 最大) (6.4)	高台 7/12	灰白(2.5Y7/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ケズ リ込み、糸切り痕	歪み
154	灰釉 陶器	椀	1区	NR1005	—	(1.9)	高台 (7.5)	高台 2/12	にぶい黄橙(10YR7/2)	内面：ナデ、外：回 転ナデ、糸切り	
155	須恵器	椀	1区	NR1005	—	(2.5)	高台 最大 (7.3)	高台 3/12	内面見込：褐灰 (7.5YR6/1) 内面体部：灰(N6/0) 外：褐灰(10YR6/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、糸切 り	重ね焼きの 痕、墨痕?
156	土師器	皿	1区	NR1005	(9.6)	2.1	(5.6)	口縁 4/12	内：にぶい褐 (7.5YR6/3) 外：にぶい橙 (7.5YR6/4)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ、糸切 り	
157	土師器	小型壺	1区	NR1005	(9)	(10)	—	口縁 4/12	内：にぶい橙色 (7.5YR7/3) 外：橙色(5YR7/6)	内：ユビオサエ、ハ ケ後ナデ 外：細かいハケ	二重口縁 粘土継目
158	土師器	高杯	1区	NR1005	(16.2)	(5.9)	—	口縁 2/12	内：にぶい橙(5YR6/4) 外：橙(5YR6/6)	内：ヨコナデ、放射 状の工具痕 外：ヨコナデ、不定 方向ケズリ	杯部
159	土師器	高杯	1区	NR1005	—	(7.7)	裾部 ほぼ 完存	裾部 ほぼ 完存	内外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	外：ケズリ、ハケ 内面：ヨコナデ、ケ ズリ	脚部 粘土継ぎ目
160	黒色 土器	椀	1区	NR1005	(15.2)	(5.1)	—	口縁 5/12	内：黒N1.5/0 外：にぶい黄橙 10YR6/4	内：ミガキ 外：回転ナデのちミ ガキ	内：あばた 状の剥離
161	黒色 土器	椀底部	1区	NR1005	—	(1.6)	最大 7.3	底部 完存	内：黒(N1.5/0) 外：にぶい黄橙 (10YR6/4)	内：不定方向のミガ キ、外：ミガキ痕、 ナデ、糸切り	
162	黒色 土器	椀	1区	NR1005	15.8	5.9	底最 6.2	口縁 10/12	内：黒(N1.5/0) 外：にぶい黄橙 (10YR6/4)	内：ミガキ 外：丁寧なミガキ、 あり、糸切り	ヘラ記号の ような線刻
163	無釉 陶器	椀・皿	1区	NR1005	—	(1.7)	高台 最大 5.8	高台 ほぼ 完存	内外：灰(N6/0) 断：灰白(N7/0)	内面：ヘラミガキ、 外：回転ナデ、回転 ヘラケズリ、	重ね焼き痕
164	土錘		1区	NR1005	孔径 0.4	6.1	幅・径 2.5	完存	にぶい褐(7.5YR6/3)	外：ナデ	穴：少しの 面をもつ
165	須恵器	—	1区	NR1006	—	—	—	小片	内・外：灰(7.5Y5/1)	—	墨書あり
166	須恵器	杯身	1区	NR1006	10.7	4.7	—	全体 ほぼ 完存	内：紫灰(5P6/1) 外：灰白(N7/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転 ヘラケズリ	口縁端部を 故意に欠損
167	須恵器	杯B	1区	NR1006	—	(2.6)	高台) (9.7)	高台 3/12	内外：褐灰(10YR6/1) 断：灰白(2.5Y8/1)	内：回転ナデ、不定 方向にナデか? 外：回転ナデ	高台近くに 爪状の圧痕
168	須恵器	長頸壺	1区	NR1006	—	—	高台径	高台	灰白(N7/0)～灰 (N6/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、格子 状のタタキ	
169	須恵器	甕	1区	NR1006	頸部径 4.6	(10.3)	—	不明	内：灰白(N7/0) 外：灰(N5/1)	内：回転ナデ、ナデ、 外：回転ナデ、回転 ケズリ	自然釉

国道 312 号 (大宮峰山インター線) 関係遺跡発掘調査報告

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
170	須恵器	甕	1区	NR1006	(26.8)	(5.9)	—	口縁 2/12	内外：灰 (N5/0)	内：回転ナデ、やや強めのナデ、粘土継ぎ目痕 外：回転ナデ、カキ目の痕跡か？	歪み
171	緑釉陶器	底部	1区	NR1006	—	(1.5)	(6.4)	底 6/12	素地：浅黄橙 (10YR8/3) 釉調：明オリープ灰 (2.5GY7/1) 暗青灰 (5B3/1)	内：施釉 外：施釉、削り出し高台	
172	土師器	鉢	1区	NR1006	9.4	6.4	体部最大径 11.2	6/12	内、外：にぶい橙 (7.5YR6/4)	内：工具によるナデ、外：ヘラナデ？	黒斑
173	土師器	高杯	1区	NR1006	脚部 (10.1)	(10.3)	基部 (3.9)	全体 9/12	橙 (5YR6/6)	内：不明瞭、外：ヘラケズリ	粘土の継目
174	土師器	甕	1区	NR1006	(19)	(8.5)	—	口縁 ほぼ 完存	内：にぶい橙 (7.5YR7/3) 外：灰白 (7.5YR8/2)	内：ハケのちナデ、外：ヨコナデ、ユビオサエ、ハケ	外面口縁部に煤付着
175	弥生土器	台付き鉢・高杯	1区	SX1078	—	(4.5)	脚径 (14.8)	脚径 (1/12)	内：にぶい褐 (7.5YR6/3) 外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	外面口縁端部に煤付着
176	須恵器	杯B	1区	SX1078	(12.8)	3.5	—	口縁 1/8	内：褐灰 (10YR6/1) 外：灰 (N6/0)	内：褐灰 (10YR6/1) 外：灰 (N6/0) 断：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内面に墨痕か？
177	土師器	皿	1区	SX1078	(14.9)	(2.8)	—	口縁 1/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ナデ 外：ナデ、未調整、ユビオサエナデ	歪みあり
178	土師器	皿	1区	SX1078	(7.9)	1.7	—	口縁 2/12	灰白 (10YR8/2)	内：ナデ、外：ナデ、ユビオサエ	歪みあり
179	土師器	皿	1区	SX1078	(8.2)	1.3	—	口縁 3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：一方向ナデ、ヨコナデ 外：ヨコナデ、ナデ上げ、未調整	歪みあり
180	土師器	竈	1区	SX1078	—	(5.5)	不明瞭	—	外：浅黄橙 (7.5YR8/3)	外：ケズリのちナデ 底：ケズリ	
181	黒色土器	椀	1区	SX1078	16.3	4.7	底 6.7	口縁 4/12	内：黒 (N1.5/0) 外：にぶい黄橙 (10YR7/4)	内：ミガキ 外：ミガキ、回転ナデ、糸切り	
182	黒色土器	椀	1区	SX1078	16.4	4.8	底 6.2	底部 完存	内：黒 (N2/0) 外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内面：粗いミガキ 外：粗いミガキ、回転ナデ、糸切り痕	
183	黒色土器	小型壺	1区	SX1078	(7.4)	4.5	底 (5.4)	口縁 1/8	内外：黒 (N2/0)	内：内面底部に幅の狭いミガキ 外：不明	
184	青磁	椀	1区	SX1078	—	(5.3)	高台径 (6.0)	高台 2/12	素地：灰白 (2.5Y7/1) 釉調：灰オリープ (7.5Y5/2)	内：花文 外：施釉	龍泉窯系 1 類？
185	白磁	椀	1区	SX1078	(16.9)	(6.7)	高台 (7.0)	口縁 3/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内：施釉 外：施釉	
186	縄文土器	深鉢	1区	NR1007	不明	(7.9)	—	不明	灰黄褐 (10YR 5/2)	内：ケズリ後ナデ 外：三条沈線	
187	須恵器	杯B	1区	NR1007	—	(3.3)	高台 (7.5)	高台 3/12	内：灰 (N5/0) 外：灰 (N6/0)	内：回転ナデ、一方向ナデ 外：回転ナデ、ヘラ切り	
188	須恵器	壺	1区	NR1007	—	(4.3)	高台 7.0	高台 完存	内：灰 (N4/0) 外：灰 (N6/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ、ヘラ切り	底部外面全体に自然釉
189	土師器	高杯	1区	NR1007	基部径 3.3	(6.1)	—	—	内：にぶい橙 (7.5YR7/4) 外：赤橙 (10R6/6)	外：不明瞭 内：ケズリ	杯部の接合痕

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備考
190	緑釉陶器	椀	1区	NR1007	—	(1.6)	高台 (6.9)	高台 2/12	素地：灰白(7.5YR8/2) 釉調：灰白(5Y7/2)	内：施釉 外：施釉、丁寧なナデ及びミガキ、ケズリ?	
191	弥生土器	壺	1区	木組遺構北側	(16.9)	(9.7)	—	口縁 2/12	内：にぶい橙(7.5YR7/4) 外：灰白(7.5YR8/2)	外：ハケ	3条の凹線文
192	弥生土器	壺	1区	木組遺構北側	—	—	—	—	内外：浅黄橙(10YR8/3)	内：ヨコナデ、ケズリ 外：線刻	肩部
193	弥生土器	水差し	1区	木組遺構北側	6.9	15.6	2.2	口縁 1/8	内：橙(7.5YR7/6) 外：にぶい橙(7.5YR7/4)	内：ナデ、体部内面ケズリ 外：ハケのちミガキ	横位の把手 体部最大径 12.6 cm
194	土師器	甕	1区	木組遺構北側	(14.2)	(6.9)	—	口縁 2/12	内外：浅黄橙(10YR8/3)	体部内：ケズリ 外：ハケのちナデ	底部焼成前穿孔
195	土師器	高杯	1区	木組遺構北側	最小値) 3.7	(8.8)	—	脚部 9/12	脚の内部：にぶい黄橙(10YR7/3) 外：浅黄橙(10YR8/3)	内：脚部ケズリ 外：ケズリ痕、荒いハケのちナデかヘラナデ	
196	土師器	鉢もしくは壺	1区	木組遺構北側	—	(5.9)	裾部 (8.3)	脚裾部 完存	主に：橙(5YR7/8) 裾部：橙(2.5YR6/8) 脚部：浅黄橙(7.5YR8/4)	内：不明 外：ナデ、ユビオサエ、ヨコナデ	台部 雲母目立つ
197	弥生土器	壺もしくは甕	1区	木組遺構北側	—	(2.8)	(4.0)	底部 6/12	内：灰白(7.5YR8/2) 外：(主に)灰白(10YR8/2)	内：ケズリ、 外：ケズリのちナデ	底部焼成前穿孔
198	弥生土器	蓋	1区	木組遺構北側	部径) (3.2)	(7.0)	—	6/12	主に：にぶい橙(7.5YR7/4)	内：ヨコナデ 外：ユビオサエ	
199	須恵器	杯身	1区	木組遺構北側	(14.0)	5.3	—	口縁 1/8	内：明紫灰(5P7/1) 外：灰白(N7/0)	内：回転ナデ、不定方向ナデ 外：回転ナデ	ヘラ記号、 自然釉
200	須恵器	杯身	1区	木組遺構北側	(12.1)	3.8	—	口縁 2/12	内外：灰(N6/0)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ、ヘラ切り痕か?回転ヘラケズリ後軽いナデ	
201	須恵器	杯身	1区	木組遺構北側	(11.1)	3.7	—	口縁 3/12	内：灰白(10YR8/1) 外：灰白(2.5Y8/1)	内：回転ナデ、一部不定方向ナデ 外：回転ナデ、ヘラ切りのちケズリ	
202	須恵器	杯身(歪みあり)	1区	木組遺構北側	9.6	3.7	—	口縁 6/12	内外：青灰(5PB6/1)	内：不定方向ナデ、 回転ナデ、外：ケズリ、 回転ナデ	
203	須恵器	平瓶底部	1区	木組遺構北側	—	(6.6)	底) (17.4)	底部 3/12	内外：灰N6/0	内：回転ナデ、ナデ、 外：回転ナデ、回転ヘラケズリ、ナデ、 ユビオサエ	
204	土師器	小型丸底壺	1区	木組遺構北側	8.9	8.7	—	ほぼ 完存	にぶい黄橙(10YR 6/3)	内：強い指ナデ 外：ヨコナデ	
205	土師器	丸底壺	1区	木組遺構北側	10.5	12.7	—	口縁 5/12	内外：にぶい橙(7.5YR7/3)	内：外：ハケのちナデ	黒斑、煤? 付着
206	土師器	手づくね椀	1区	木組遺構北側	7.3	5.9	—	ほぼ 完存	にぶい橙(7.5YR7/4)	手づくね	外面の一部 に黒斑あり
207	弥生土器	大型壺	1区	包含層第1面	(最大) (61.6)	(15.4)	—	口縁 1/12	内：にぶい橙(7.5YR7/3) 外：浅黄橙(10YR8/3)	内：ヘラミガキ 外：丁寧なハケ	6条の凹線
208	弥生土器	大型壺口縁部	1区	包含層第1面	(最大) (54.4)	(12.2)	—	口縁 1/8	内外：にぶい黄橙(10YR6/3)	内：ハケのちヘラミガキ 外：調整不明瞭(ケズリのちナデか)	6条の凹線
209	須恵器	杯身	1区	包含層第1面	—	高台 (2.7)	高台径 (9.4)	高台 3/12	灰白(2.5Y 7/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	底部墨書
210	土師器	小型丸底壺	1区	包含層第1面	7.3	8.5	—	全体 10/12 程度	内：黒褐(10YR3/1) 外：にぶい黄橙(10YR7/3)	内：ヨコナデ 外：ケズリのちナデ	黒斑

国道 312 号 (大宮峰山インター線) 関係遺跡発掘調査報告

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
211	土師器	小型丸底壺	1区	包含層第1面	(10.0)	9.3	体部最大径 10.2	口縁 2/12	主に：浅黄橙 (7.5YR8/3)	内：ヨコナデ、不定方向ケズリ 外：ケズリのちナデ	
212	土師器	皿	1区	包含層第1面	8.2	1.8	4.7	ほぼ完存	にぶい橙 (7.5YR6/4)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、糸切り	回転台使用 器表に雲母
213	土師器	皿	1区	包含層第1面	14.9	3.3	—	11/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	内底部：ナデ、ユビオサエ 外：ナデ、ユビオサエ	煤付着
214	瓦器	椀	1区	包含層第1面	(14.8)	(3.9)	—	小片	内外：暗灰白 (N3/0)	内：(比較的密な) 圏線ミガキ、糸切り 外：ナデ、ユビオサエ	
215	黒色土器	椀	1区	包含層第1面	16.7	5.8	—	9/12	内：(10Y 2/1) 外：にぶい黄橙 (10YR 7/3)	内：ミガキ不定方向、ナデミガキ、外：ナデミガキ、ヘラケズリ、糸切り痕	A類
216	白磁	椀	1区	包含層第1面	—	(2.2)	高台 5.0	高台完存	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (5Y7/1)	内：圏線 外：施釉	高台削り出し、見込みに圏線
217	陶器	椀	1区	包含層第1面	—	(2.7)	底 (10.8)	小片	素地：灰白 (10YR8/1) 釉調：黒 (10YR2/1)	内：施釉 外：施釉	天目茶椀?
218	弥生土器	甕	1区	包含層第2面	(17)	(2.2)	—	口縁 1/8	内：にぶい黄橙 (10YR7/3) 外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ケズリ、	3条の擬凹線あり
219	弥生土器	甕	1区	包含層第2面	(16.8)	(7.6)	—	口縁 1/12 以下	内：浅黄橙 (10YR8/3) 外面の顔料：にぶい赤褐色 (5Y R 4/3)	内：ナデ、頸部下半ケズリ 外：ハケ	3条の擬凹線文 外面に顔料?
220	須恵器	杯蓋	1区	包含層第2面	(13.6)	(1.4)	—	不明	灰白 (2.5Y7/1)	内：回転ナデ 外：回転ヘラケズリ、回転ナデ	
221	須恵器	杯B	1区	包含層第2面	(12.5)	(3.9)	(7.3)	5/12	内・外：青灰 (5PB5/1) ~ 暗青灰 (5PB3/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	底部に墨書
222	須恵器	鉢	1区	包含層第2面	(24.5)	(4.2)	—	口縁 1/12	灰 (N6/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	東播系
223	土師器	甕	1区	包含層第2面	21.4	(11.2)	—	口縁完存	内：浅黄橙 (10Y8/3) 外：にぶい橙 (7.5YR6/4)	体部内面：ケズリ、口縁部内面：ナデ 外面：ハケ	頸部径 (17.8 ~ 15.1 cm)
224	土師器	甕	1区	包含層第2面	(29.2)	(9.7)	—	口縁 3/12	内：にぶい黄橙 (10YR6/3) 外：灰白 (10YR8/2)	内：ハケ、ナデ 外：ハケのちナデ、ユビオサエ	内面口縁部に煤付着
225	黒色土器	椀	1区	包含層第2面	—	(1.6)	(7.0)	底部 5/12	内：黒 (N2/0) 外：浅黄橙 (10YR8/3)	内：見込みに暗文 外：墨糸切り痕	墨書
226	土師器	二重口縁壺	1区	包含層黒褐色砂土	(17.4)	(7.5)	—	口縁 2/12	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	
227	土師器	二重口縁壺	1区	包含層黒褐色砂土	(16)	(6.5)	—	口縁 2/12	内：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外：にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内：ハケのちナデ 外：ヨコナデ、頸部下半ケズリ	
228	須恵器	杯蓋	1区	包含層黒褐色砂土	(13.1)	4.1	—	口縁 1/8	内：灰白 (10YR8/2) 外：灰白 (2.5Y8/1)	内：回転ナデ、 外：ヘラ切りの痕、 回転ヘラケズリ、 回転ナデ	
229	須恵器	杯蓋	1区	包含層黒褐色砂土	(13.7)	(3.7)	—	口縁 1/8	灰 (N6/0) 自然釉 - 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	自然釉
230	須恵器	杯B	1区	包含層黒褐色砂土	—	(1.9)	高台 (8.4)	高台 4/12	内：褐灰 (10YR6/1) 外：灰 (N6/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ヘラ切り	内面に重ね焼痕
231	須恵器	皿	1区	包含層黒褐色砂土	(15.5)	2.9	高台 6.9	高台 2/12	灰 (N6/0)	外：回転ナデ、 回転ヘラケズリ	輪状の貼り付け高台

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備考
232	須恵器	甗	1区	包含層 黒褐色 砂土	体部最 大径 9.2	(10.4)	—	体部 ほぼ 完存	内・外：灰 (N6/0)	内：回転ナデ 外：回転ヘラケズリ、 回転ナデ	沈線 透かし穴
233	須恵器	甗	1区	包含層 黒褐色 砂土	(19.6)	(4.4)	—	2/12	内：灰白 (N7/0) 外：暗灰 (N3/1)	内：回転ナデ、ケズ リのちナデ？ 外：回転ナデ	
234	須恵器	円面硯	1区	包含層 黒褐色 砂土	—	(2)	—	1/12	内・外：灰 (N5/0)	内・外：回転ナデ	使用痕
235	無釉 陶器	椀	1区	包含層 黒褐色 砂土	—	(2.0)	底 7.3	底部 完存	内・外：灰 (N6/0)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ、回転 糸切り	
236	須恵器	片口鉢	1区	包含層 黒褐色 砂土	(最大) (34.1)	(9.3)	—	口縁 不明	内：灰白 (N7/0)、 外：口縁付近：黄灰 (2.5Y5/1)、体部：灰 黄褐 (10YR6/2)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
237	土師器	椀	1区	包含層 黒褐色 砂土	(13.2)	(2.6)	—	口縁 1/12 以下	浅黄橙 (7.5YR8/3) 顔料？明赤褐色 (2.5YR5/8)		内外に顔料 塗布か
238	土師器	皿	1区	包含層 黒褐色 砂土	(8.0)	1.5	—	口縁 2/12	内：にぶい橙 (7.5YR7/3) 外：にぶい黄橙 (10YR7/3)	内外：回転ナデ、 外：糸切り痕	
239	土師器	皿	1区	包含層 黒褐色 砂土	8.3	1.2	—	全体 ほぼ 6/12	主に：灰白 (10YR8/2) (赤みを帯びている部 分もある)	内：ナデ、 外：ヨデ、ケズリ	内面に煤付 着か 歪み
240	土師器	皿	1区	包含層 黒褐色 砂土	(8.3)	(1.6)	—	口縁 5/12	内・外：にぶい橙 (5YR6/4) 底部外面：灰色	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	
241	土師器	皿	1区	包含層 黒褐色 砂土	(9.1)	1.8	—	口縁 1/8	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、糸切 り痕	
242	土師器	皿	1区	包含層 黒褐色 砂土	(9.5)	1.6	—	口縁 2/12	灰白 (7.5YR8/2)	内：ヘラナデ？ 外：ナデ	手づくね
243	土師器	皿	1区	包含層 黒褐色 砂土	(11.6)	(2.5)	—	口縁 1/8	灰白 (7.5YR8/2)	内：ナデ 外：ヨコナデ	
244	土師器	皿	1区	包含層 黒褐色 砂土	(12.7)	2.6	—	小片	灰白 (7.5YR8/1)	内外：ヨコナデ、ユ ビオサエ	
245	土師器	皿	1区	包含層 黒褐色 砂土	(13.0)	(2.4)	—	口縁 1/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、軽い ケズリ	
246	土師器	不明 (底部)	1区	包含層 黒褐色 砂土		(3.3)	底 4.8	底部 完存	内：にぶい褐色 (7.5YR6/3) 外：にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：ナデ 外：ケズリのちナデ	
247	土師器	高杯	1区	包含層 黒褐色 砂土	—	(4.5)	脚部 9.2	脚部 8/12	内・外：橙 (7.5YR7/6)	調整不明	粘土継目
248	瓦質 土器	三足付 羽釜	1区	包含層 黒褐色 砂土	(14.7)	(6.2)	—	小片	内外：灰白 (10YR8/2)	内：荒いハケ 外：ヨコナデ	
249	黒色 土器	椀	1区	包含層 黒褐色 砂土	(15.0)	(4.6)	—	小片	内：黒 (N1.5/0) 外：にぶい黄橙 (10YR6/4)	内：主に放射状のミ ガキ) 外：ミガキ	墨書
250	黒色 土器	椀	1区	包含層 黒褐色 砂土	—	(4.3)	—	小片	内：黒 (N1.5/0) 外：にぶい黄橙 (10YR6/3)	内：圏線ミガキ 外：ミガキ	外面に煤、 内面に漆？ 付着
251	黒色 土器	椀	1区	包含層 黒褐色 砂土	(15.0)	(4.8)	—	口縁 2/12	内：黒 (N1.5/0) 外：にぶい黄橙 (10YR6/3)	内：ミガキ 外：ヨコナデのち粗 いミガキ	外面に煤？ 付着
252	黒色 土器	小椀	1区	包含層 黒褐色 砂土	(10.7)	(2.5)	—	口縁 1/8	内外：黒 (N1.5/0)	内：ミガキ 外：ミガキ	

国道 312 号（大宮峰山インター線）関係遺跡発掘調査報告

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
253	黒色 土器	皿	1 区	包含層 黒褐色 砂土	(9.9)	1.6	—	口縁 1/8	黒 (N2/0)	内：調整不明 外：回転ナデ、糸切 り	
254	瓦質 土器	鉢	1 区	包含層 黒褐色 砂土	(29.0)	(8.0)	—	小片	内：灰 (N4/0) 外：口縁付近：暗灰 (N3/0)、体部：灰白 (10YR7/1)	内：ケズリのちナデ 外：回転ナデ	
255	瓦質 土器	火鉢	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	—	—	小片	内：白灰 (2.5Y7/1) 外：暗灰 (N3/0)	内：タタキ 外：調整等不明瞭	
256	瓦質 土器	鍋	1 区	包含層 黒褐色 砂土	(30.2)	(2.3)	—	小片	内外：暗灰 (N3/0)	内：ケズリのちナデ か？ 外：ヨコナデ、ユビ オサエ	
257	瓦質 土器	鍋	1 区	包含層 黒褐色 砂土	(29.2)	(2.9)	—	小片	内：暗灰 (N3/0) 外：黒 (N1.5/0)	内：強めのヨコナデ 外：ヨコナデ、	
258	瓦質 土器	甕	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	—	—	小片	内：灰 (N4/0) 外：暗灰 (N3/0)	内：同心円あて具痕、 ケズリのちナデ 外：矢羽根タタキ	
259	緑釉 陶器	底部	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	(1.8)	—	底 1/12	素地：にぶい橙 (5YR7/3) 釉調：灰 (N5/0)	内：施釉 外：施釉、削り出し 高台、回転ケズリ	
260	緑釉 陶器	耳皿 底部	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	(2.1)	5.4	底 10/12	素地：灰白 (10YR7/1) 釉調：暗緑灰 (10GY3/1) 灰黄 (2.5Y6/2)	内：施釉 外：施釉、底に回転 系切り	
261	灰釉 陶器	おろし 皿	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	(1.7)	底 7.0	底部 8/12	素地：灰白 (10YR8/2) 釉調：明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	内：おろし目施釉、 外：灰釉、底：糸切 り	古瀬戸
262	青磁	椀	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	(3.1)	高台 4.1	高台 10/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：明オリーブ (5GY7/1)	内：施釉 外：施釉	
263	青磁	椀	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	(2.0)	高台 5.9	高台 完存	素地：灰白 (2.5Y7/1) 釉調：灰オリーブ (5Y6/2)	内：施釉、線刻あり 外：施釉 (釉垂れあり)	
264	青磁	椀	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	(1.8)	高台 5.9	高台 9/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰黄 (2.5Y7/2)	内：施釉 線刻あり 外：施釉 (釉垂れあり)	
265	白磁	椀	1 区	包含層 黒褐色 砂土	(14.6)	(3.5)	—	口縁 1/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内外：施釉	
266	白磁	椀	1 区	包含層 黒褐色 砂土	(12.7)	(4.5)	—	口縁 1/12	素地 白 (N9/0) 釉調 黒 (10YR2/1)	内：施釉 外：施釉	
267	白磁	椀	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	(5.6)	高台 7.6	高台 3/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内：施釉 外：施釉	
268	白磁	小椀	1 区	包含層 黒褐色 砂土	最大 (10.8)	(2.6)	—	口縁 1/8	素地 白 (N9/0) 釉調 灰白 (5Y8/1)	内：施釉 圏線あり 外：施釉	
269	青磁	不明	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	(0.7)	底 (5.4)	底部 3/12	素地：白 (N9/0) 釉調：明オリーブ灰 (2GY7/1)	内：施釉 外：施釉	線刻あり、 ジグザグ状 の刺突模様
270	白磁	小椀	1 区	包含層 黒褐色 砂土	—	(1.2)	底 2.6	底部 9/12	素地：白 (N9/0) 釉調：白 (N9/0) (透明 釉？)	内：施釉 外：施釉	
271	—	土錘	1 区	包含層 黒褐色 砂土	孔径 0.4	4.7	径 2.0	—	にぶい橙 (7.5YR6/4)	外：ナデ	穴：少しの 面をもつ
272	—	土錘	1 区	包含層 黒褐色 砂土	孔径 0.5	5.0	径 1.9	ほぼ 完存	にぶい黄橙 (10YR7/3)	外：ナデ	

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備考
273	弥生 土器	広口壺	1区	包含層 真砂土	23.6	(10.9)	—	口縁 8/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	内：ハケ、頸部下 半掻き上げ 外：ハケ	口縁端部上 面に凹線 頸部に3条 の凹線文
274	弥生 土器	短頸壺	1区	包含層 真砂土	(20.0)	(5.1)	—	口縁 1/8	内：にぶい黄橙 (10YR7/3) 外：浅黄橙 (10YR8/3) 口縁：灰っぽい	内：ナデ 外：ナデ	口縁部4条 の凹線のち 棒状浮文(4 か所以上) 、頸部凹線
275	弥生 土器	水差し	1区	包含層 真砂土	体部径 (23.0)	—	—	部分	内：褐灰 (10YR4/1) 外：灰白 (7.5YR8/2)	内：ハケ 外：不明瞭	横位の把手
276	弥生 土器	壺・甕	1区	包含層 真砂土	—	(5.5)	底 13.0	底部 完存	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ハケ、ケズリ 外：ハケ	
277	弥生 土器	壺・甕	1区	包含層 真砂土	—	(5.0)	底 7.3	底部 完存	内：黒褐色 (10YR3/1) 外：灰白色 (7.5YR8/2)	内：ハケ、ケズリ 外：ハケ、ミガキ	
278	弥生 土器	高杯	1区	包含層 真砂土	(16.4)	(4.6)	—	口縁 2/12	内：橙色 (2.5YR6/6) 外：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内：剥離著しく調整 等不明 外：ヘラミガキ	口縁下端に 1条の凹線
279	弥生 土器	高杯	1区	包含層 真砂土	—	(11.4)	11	底部 7/12	浅黄橙 (10YR8/3)	内：ケズリ 外：ミガキ	脚裾部凹線 5条、穿孔 6カ所か (5カ所確 認)
280	弥生 土器	高杯	1区	包含層 真砂土	—	(7.5)	脚径 (9.6)	脚部 3/12 脚柱 6/12 程度	(主に)にぶい褐 (7.5YR6/3)	外：ヘラミガキ 内：上部に絞り痕、 下部はケズリ	脚柱部に10 条の沈線 (退化凹線 文) 透かし穴4 方向
281	土師器	高杯	1区	包含層 真砂土	—	(6.5)	裾部 9.8	裾部 4/12	裾部内面：褐灰 (7.5YR5/1) それ以外：浅黄橙 (10YR8/4)	外：ケズリ状のミガ キ 裾内部：ケズリのち ナデ	
282	弥生 土器	蓋	1区	包含層 真砂土	つまみ 8.1	(3.7)	—	天井 部4 /12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：ハケ 外：ハケのちナデ	つまみ部
283	須恵器	杯蓋	1区	包含層 真砂土	14.1	(4.1)	—	口縁 1/8	内外：白灰色 N7/0	内：回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	
284	須恵器	杯蓋	1区	包含層 真砂土	(13.9)	3.65	—	口縁 3/12	内：褐灰 (10YR6/1) 外：灰 (N6/0)	内：回転ナデ 外：ヘラ切りのち軽 いナデ、回転ナデ	
285	須恵器	杯身	1区	包含層 真砂土	11.6	3.9	—	口縁 8/12	内：灰白 (2.5Y7/1) 外：灰白 (N7/0)	内：ナデ、回転ナデ 外：回転ナデ、ヘラ 切り	
286	須恵器	杯身	1区	包含層 真砂土	(12.2)	3.5	—	口縁 3/12	内：灰白 (N6/0) 外：灰白 (N7/0)	内：一方向ナデ、回 転ナデ 外：ヘラ切り、回転ナ デ、回転ヘラケズリ	ヘラ記号
287	須恵器	杯身	1区	包含層 真砂土	(12.6)	3.5	高台 (9.0)	高台 3/12	灰 (N6/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
288	須恵器	杯身	1区	包含層 真砂土	(16.0)	4.2	高台 最大 (11.6)	口縁 1/8	内・断)灰白 (2.5Y 7/1) 外：黄灰 (2.5Y6/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転 ヘラケズリ	
289	須恵器	壺	1区	包含層 真砂土	10.6	(5.6)	—	口縁 1/8	内：灰色 (N5/0、銀色 っぽい) 外：灰色 (N4/0)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ	頸部に波状 文
290	須恵器	甕	1区	包含層 真砂土	(42.0)	(14.6)	—	口縁 1/8	内上部：灰黄褐 (10YR6/2)、内下部： 灰白 (2.5Y7/1) 外上部：灰白 (N8/0) 外下部：褐灰 (10YR4/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、器表 の荒れ著しい、タタ キ	内面自然釉 4条の沈線
291	須恵器	鉢	1区	包含層 真砂土	—	(6.4)	高台 (10.8)	高台 2/12	灰白 (N7/0)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ	
292	緑釉 陶器	椀	1区	包含層 真砂土	—	(1.7)	(6.8)	底 7/12	素地：灰白 (7.5Y7/1) 釉調：オリーブ灰 (10Y6/2)	内：施釉 外：施釉、露体部、 削り出し高台	

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
293	須恵器	椀	1区	包含層真砂土	—	(3.5)	高台最大 6.9	高台完存	灰 (N5/0) 内：一部灰褐 (7.5YR5/2)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ、糸切り	重ね焼きの 痕跡あり
294	土師器	小型丸底壺	1区	包含層真砂土	8.2	8.6	—	全体ほぼ完存	橙 (7.5YR7/6)	内：ナデ 外：ナデ	接合痕
295	土師器	小型丸底壺	1区	包含層真砂土	8.4	7.7	—	90%	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ナデ 外：ハケ後ナデ	
296	土師器	甕	1区	包含層真砂土	(15.8)	(3.7)	—	口縁 1/8	内：浅黄橙色 (10YR8/3) 外：灰白色 (7.5YR8/2)	内：ケズリ 外：ヨコナデ	
297	土師器	甕	1区	包含層真砂土	14.3	18.0	—	口縁 1/12	内：にぶい黄橙 (10YR7/3) 外：浅黄橙 (10YR8/3)	内：口縁ナデ、体部ケズリ 外：ハケ、口縁部付近ナデ	歪み 黒斑
298	弥生土器	甕	1区	包含層真砂土	22.4	(6.3)	—	口縁 3/12	内：灰白 (10YR8/2) 外：にぶい黄橙 (10YR6/3)	内：ハケ 外：ハケ、口縁部付近ヨコナデ	
299	土師器	甕	1区	包含層真砂土	頸部径 (6.5) 体部最大径 (10.0)	—	—	頸部 2/12	内外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ケズリ 外：ハケ	煤付着 黒斑
300	土師器	皿	1区	包含層真砂土	10	2.4	—	10/12	内：浅黄橙 (7.5YR8/4) 外：灰白 (7.5YR8/2)	内・外：回転ナデ	
301	土師器	鉢	1区	包含層真砂土	10.3	8.1	—	口縁 5/12	内外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ヘラナデ、ヨコナデ 外：ハケ	
302	土師器	高杯	1区	包含層真砂土	15.2	(11.0)	—	口縁 7/12	杯部：橙 (2.5YR6/6) 脚部外：にぶい橙 (5YR6/4) 脚部内：にぶい橙 (7.5YR6/3)	内：放射状のハケ後ヨコナデ、ケズリ 外：ケズリ後ナデ	透し孔 (3カ所)
303	土師器	高杯	1区	包含層真砂土	—	(7.6)	脚部径 8.6	脚部 3/12 程度	内：浅黄橙 (7.5YR8/4) 外：橙 (5YR6/6)	内：調整等不明) 外：ナデ	
304	土師器	高杯脚部	1区	包含層真砂土	—	(5.9)	脚部径 9.3	脚部 6/12	内：橙 (5YR7/6) 外：明赤褐 (5YR5/6)	内：ナデか？ 外：ケズリ後ナデ	
305	土師器	手づくね壺	1区	包含層真砂土	頸部径 3.5	3.9	体部最大径 4.6	体部完存	内：褐灰 (7.5YR4/1) 外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	

付表5 1区出土石器・石製品観察表

番号	種類	地区	出土地	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
306	玉石材	1区	NR1005	3.6	4.3	1.8	42.1	緑色凝灰岩
307	砥石	1区	4f 黒褐色砂土	6.8	4.1	2.4	99.8	砂岩
308	石鏃	1区	1g 西北黒褐色砂土	2.7	1.8	0.3	1.4	
309	石器	1区	3f 黒褐色砂土	2.1	2.7	0.7	3.3	黒曜石
310	石器 (基石?)	1区	3h 南黒褐色砂土	1.8	1.8	1.0		チャート

付表6 1区出土銭貨計測表

番号	種類	地区名	出土地	直径 (cm)	穴径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
311	宋元通宝	1区	4g 黒褐色砂土	2.6	0.6	0.1	3.08	
312	開元通宝	1区	3h 黒褐色砂土	2.3	0.7	0.1	2.71	

付表7 1区出土木製品観察表

数値は残存値 - 計測不能

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備 考
313	板戸 北棧	1区	SX1078	88.0	3.7	3.0	
314	板戸 南棧	1区	SX1078	88.2	4.4	3.0	
315	板戸 東棧	1区	SX1078	55.8	4.2	2.4	
316	板戸 西棧	1区	SX1078	48.6	3.6	2.9	
317	板戸 中央下層板	1区	SX1078	79.2	13.1	0.7	
318	板戸 北端板	1区	SX1078	78.9	10.5	0.7	
319	板戸 北中板	1区	SX1078	79.5	9.5	0.7	
320	板戸 中央板	1区	SX1078	80.0	14.1	1.1	
321	板戸 南板	1区	SX1078	81.0	7.8	0.6	
321	板戸 南板	1区	SX1078	80.4	7.8	0.6	
322	下駄	1区	3g区	17.5	10.2	2.3	
323	下駄	1区	3g区	15.7	5.2	8.2	
324	下駄	1区	3g区	17	8.6	1.9	
325	下駄	1区	3g区	20.5	11.2	3.1	
326	下駄	1区	3g区	23.2	4.8	2.4	
327	下駄	1区	2g区	16.4	9.3	6.6	各部高さ、前歯4.1cm、後歯5.0cm、 台1.6cm
328	下駄	1区	2g区	9.0	11.3	4	
329	下駄	1区	2h区	19.3	10.6	4.9	
330	折敷	1区	1g区	58.2	26.4	1.3	
332	折敷	1区	NR1005 黒褐色土	24.2	7.1	0.6	
334	折敷	1区	NR1005 黒褐色土	31.8	13.5	0.6	
336	折敷	1区	NR1005 黒褐色土	15.5	3.2	0.7	
337	折敷	1区	SX1053	10.8	5.7	0.5	
338	曲物	1区		径13.4	—	1.0	
339	曲物	1区	SX1053	径:13.0		0.8	
340	曲物	1区	2g区	径:12.2	4.0	0.3	
341	曲物	1区	4g区	9.5	3.5	0.5	穴径 0.3×0.4cm
342	曲物	1区	4g区	16.5	3.7	0.7	
343	曲物	1区	4g区	14.1	2.9	0.5	
344	曲物	1区	3h-2h区	23.6	4.2	0.4	
345	曲物	1区	10g区	8.0	2.5	1.0	
346	曲物	1区	SXX1053	3.0	1.3	0.3	

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備 考
347	人形	1 区	2g 区	9.5	3.6	0.6	
348	人形	1 区	2g 区	20.4	2.4	0.6	
349	卒塔婆	1 区	NR1007	32.4	3.4	0.5	
350	加工木	1 区	2h 区	28.4	4.2	0.8	
351	加工木	1 区	10g 区	19.5	2.6	0.7	
352	加工木	1 区	10g 区	16.0	3.0	0.6	
353	目釘付板材	1 区	4g 区	53	3.2	1.2	
354	目釘付板材	1 区	3f・3g 区	50.9	3.4	1.0	
355	目釘付板材	1 区	3h 区	40.4	3.3		
356	目釘付板材	1 区	SX1078 下層 3g 区	40.7	3.9	0.4	
357	目釘付板材	1 区	3f・3g 区 黒褐色砂土	16	2.4	1.0	
358	目釘付板材	1 区	3f・3g 区 黒褐色土	10.7	2.2	1.0	
359	目釘付板材	1 区	NR1005 黒褐色砂土	20.8	2.9	0.4	
361	目釘付板材	1 区	3h 区 黒褐色土	13.2	2.3	0.4	
362	先端加工木	1 区	NR1005 黒褐色土 2f 区	69.1	1.9	0.5	
363	先端加工木	1 区	NR1005 黒褐色土 2f 区	59.1	2.3	0.8	
364	先端加工木	1 区	NR1005 黒褐色土 2f 区	43.6	1	0.8	
365	先端加工木	1 区	NR1005 黒褐色土 2f 区	42.8	0.7	0.8	
366	先端加工木	1 区	NR1005 黒褐色土 2f 区	33.8	1.5	0.9	
367	先端加工木	1 区	3g 区	24.2	1.9	1.7	
368	先端加工木	1 区	NR1005 下層	42.0	3.3	2.6	
369	先端加工木	1 区	2g 区	18.0	0.7	0.7	
370	有孔木材	1 区	4h 区	75.4	11.1	2.3	
371	加工木	1 区	3f 区黒褐色土	7.4	頭部：2.5 下部：2.5	頭部：1.8 下部：1.9	
372	加工木	1 区	4g 区	14.2	2.3	1.4	
373	加工木	1 区	第 1 遺構面	6.3	4.6	0.7	
374	加工木	1 区	5g 区	15.6	8.7	1.7	
375	加工木	1 区	5g 区 黒褐色土	上部：径 1.2	下部：径 2.0	高さ：4.4	
376	加工木	1 区	NR10055 5g・4g 区西黒褐色土	7.8	2.7	0.9	
377	加工木	1 区	NR1005 黒褐色土 2g 区	10.7	2.8	0.7	
378	加工木	1 区	1g 区	10.6	2.4	0.5	
379	加工木	1 区	2g 区	13.8	2.3	0.4	

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
380	加工木	1区	SX1078	15.8	2.7	0.9	
381	加工木	1区	NR1005 黒褐色土 2g区	15.1	3.0	2.6	
382	椀	1区	1h区 黒褐色土	高さ (1.6)	高台径 8.1	0.6	漆底部片、漆塗り
383	椀	1区	2h区 黒褐色土	高さ (1.1)	高台径 8.3	0.6～1.0	高台部片、漆塗り
384	椀	1区	1h区 黒褐色土	高さ (1.0)	高台径 8.6	1.0	高台部片、漆塗り
385	櫛	1区	2f区 黒褐色土	2.6	3.5	0.9	
386	櫛	1区	3g区 黒褐色土	2.8	2.8	1.7	
387	球	1区	1g区西北 黒褐色 土	6.2	6.0	6.0	
388	球	1区	1g区西北 黒褐色 土	6.1	6.1	6.4	
389	鎌柄	1区	4g区	28.7	2.0	2.0	
390	木簡	1区	2g区	8.2	4.8	0.3	
391	木簡	1区	1g区	18.6	3.7	0.5	
392	もえさし	1区	2f区 黒褐色土	6.8	1.4	0.6	
393	もえさし	1区	4g区	5.7	1.1	0.6	

付表8 2区出土土器・土製品観察表

口径・底径欄：( ) 復元径 器高欄：( ) 残存高 - 計測不能

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備考
394	土師器	高杯	2区	SD2143		(6.5)	(10.4)	脚部 3/12	内：灰褐(7.5YR4/2) 外：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内：ケズリ 外：ケズリ後ナデ?	黒斑
395	青磁	椀	2区	SD2143	-	(2.7)	高台 最大 (5.2)	高台 完存	素地：灰白(10YR7/1) 釉調：オリーブ灰色 (5GY 6/1) 露体部：にぶい褐 (7.5YR5/3)	内：施釉、 外：施釉、圏線	内面 線刻
396	青磁	椀	2区	SD2143	(15.0)	(4.4)	-	小片	素地) 灰白(N8/1) 釉調) オリーブ灰 (2.5GY6/1)	内外：施釉	外：陰刻
397	青磁	椀	2区	SD2143	(13.0)	(4.4)	-	小片	素地：灰白(N7/0) 釉調：灰オリーブ(5Y 6/2)	内外：施釉	龍泉窯 内：線刻 外：線刻(蓮弁文)
398	瓦質 土器	すり鉢	2区	SD2143	(31.0)	(7.6)	-	小片	灰白(10YR8/2) 内面口縁端部付近：灰 (N6/0)	内：すり目、沈線 外：回転ナデ	
399	瓦質 土器	すり鉢	2区	SD2143	(33.0)	(6.0)	-	口縁 1/6	内：暗灰色(N3/0) 外：褐灰色(10YR5/1)	内面：すり目 外：ケズリか?、ハ ケ	歪み
400	土師器	皿	2区	SX2153	(8.6)	(1.2)	-	口縁 1/12	内：にぶい橙 (7.5YR7/4) 外：明赤褐(5YR5/6)	内：ナデ、 外：沈線、ユビオサエ、 ナデ	
401	土師器	皿	2区	SX2153	8.4	1.4	-	全体 5/12	にぶい橙(7.5YR7/4) 断：灰白(7.5YR8/2)	内：ナデ 外：ヨコナデ、ケズ リ	
402	土師器	皿	2区	SX2153	(10.6)	(2.0)	-	口縁 1/8	内断：橙(7.5YR6/6) 外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ヨコナデ、 外：軽いケズリ	

国道 312 号（大宮峰山インター線）関係遺跡発掘調査報告

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
403	土師器	皿	2区	SX2153	(11.5)	(2.3)	—	口縁 1/12	内外：にぶい褐 (7.5YR5/3)	内：ヨコナデ、 外：ケズリ後ナデ、 ユビオサエ	
404	土師器	皿	2区	SX2153	(11.0)	(3.0)	—	口縁 1/4	にぶい橙 (7.5YR6/4)	内：ヨコナデ、ユビ オサエ、外：ヨコナデ、 ユビオサエ	
405	土師器	皿	2区	SX2153	13	2.9	—	全体 10/12	にぶい橙 (7.5YR7/4) (底部外面の一部 - 褐 灰色 (7.5YR5/1))	内：ユビオサエ、ヨ コナデ、外：ヨコナデ、 ユビオサエ	
406	黒色 土器	椀	2区	SX2153	(16.1)	(4.7)	—	口縁 1/8	内：黒 (N1.5/0) 外：灰白 (7.5YR8/2)	内面：ミガキ 外：全面にミガキ	
407	土師器	高杯	2区	SX2159	16.7	5.0	—	口縁 3/12	橙 (5YR6/6) 断：灰白 (2.5YR7/1)	内：ミガキ？、ヨコ ナデ 外：ヨコナデ、調整 不明瞭	
408	土師器	皿	2区	SX2159	8.5	1.6	—	完存	にぶい橙 (5YR7/4)	内：ナデ、ヨコナデ 外：ヨコナデ、未調 整気味	煤付着、灯 明皿
409	陶器	小鉢	2区	SP2121	(9.0)	(4.0)	—	口縁 1/6	素地：橙 (7.5YR7/6) 釉調：にぶい褐 (7.5YR6/3)	内外：施釉、 外：陰刻あり	唐津焼？
410	土師器	皿	2区	SP2153	(14.0)	(2.0)	—	口縁 3/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：圏線、ナデ、 外：ナデ、ピオサエ	
411	土師器	皿	2区	SP2153	(8.4)	1.2	—	全体 5/12	内外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ナデ、外：ユビ オサエ痕、ナデ	歪み
412	土師器	皿	2区	SX2153	(8.6)	1.2	—	口縁 3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ナデ、外：ナデ、 ユビオサエ	
413	土師器	皿	2区	SP2153	(7.5)	1.6	—	全体 4/12	内外：灰褐 (7.5YR 5/2)	内：ナデ、外：ナデ、 ユビオサエ	
414	土師器	高杯	2区	SP2163	22.8	(9.9)	—	口縁 6/12	橙 (5YR7/6)	内：ハケ、ナデ 外：ハケ、ナデ	歪み
415	土師器	皿	2区	SP2204	8.2	1.6	—	11/12	内外：橙 (7.5YR7/6) 断：褐灰 (7.5YR5/1)	内：ナデ、外：ナデ、 立ち上がり未調整	
416	土師器	皿	2区	SP2204	8	1.8	—	11/12	橙 (7.5YR7/6)	内：ナデ、外：ナデ、 未調整	粘土つなぎ 目痕あり
417	土師器	皿	2区	SD2004	8.2	1.4	—	完存	内外：橙 (5YR6/6)	内：ナデ 外：ケズリ後ナデ	歪み、外面 に粘土継ぎ 目
418	土師器	皿	2区	SP2149	(10.0)	2.0	—	口縁 1/12	内外：にぶい褐 (7.5YR7/4)	内：ナデ 外：ナデ、	
419	土師器	皿	2区 ②	SX02	(13.2)	(2.6)	—	口縁 1/12	橙 (5YR7/6)	内：ヨコナデ、 外：ケズリ後ナデか	
420	白磁	椀	2区	SD2004 黒褐色 砂土	—	(2.1)	高台 5.9	高台 完存	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (7.5Y7/1)	内：圏線、施釉 外：施釉	
421	瓦質 土器	すり鉢	2区	SP2226	(31.8)	(6.8)	—	口縁 1/12	内外：にぶい褐 (7.5YR6/3)	内面：すり目、外： ナデ、ユビオサエ	煤付着 東播系
422	土師器	皿	2区	SD2004	12.1	(2.75)	—	口縁 4/12	内外：橙 (5YR6/6) 断：灰白 (7.5YR8/1)	内面：ナデ (工具痕) 外：ナデ、ケズリ、 ユビオサエ	
423	土師器	皿	2区	耕作土	13.4	3.1	—	ほぼ 完存	にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：定方向ナデ、ヨ コナデ 外：ヨコナデ、ユビ オサエ	
424	瓦質 土器	羽釜	2区	SD2029	(28.7)	6.0	—	小片	内：浅黄橙 (7.5YR8/3) 外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ケズリのちナデ 外：ナデ	鏝の下側に 煤付着
425	瓦質 土器	すり鉢	2区	SP2116	—	(4.1)	底) (8)	底部 1/12	内：灰白 (10YR 8/1) 一部灰白 (N4/0) 外：灰白 (10YR8/2)	内面：すり目 外：ハケ、ユビオサ エ	底部に置台 の庄痕？
426	瓦質 土器	風炉	2区 ②		(27.7) 最大径 (34.0)	(8.3)	—	—	内：褐灰 (10YR5/1) 外：灰黄褐 (10YR6/2)	内：ナデ、ユビオサ エ？ 外：ナデのち不定方 向にミガキ	

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
427	青磁	椀	2区	e7・8、 f7・8、 褐色砂 土	(13.7)	(4.0)	—	小片	素地：灰白 (2.5Y7/1) 釉調：オリーブ灰白 (2.5GY6/1)	内外：施釉 外：線刻、沈線	内外共に全 面に細かい 貫入あり
428	青磁	椀	2区	e7・8、 f7・8、 褐色砂 土	(14.8)	(4.7)	—	口縁 1/12	素地：灰白 (2.5Y 8/1) 釉調：灰オリーブ (5Y5/2)	内外：施釉 外：沈線あり	
429	青磁	椀	2区	b7・b8 d7・d8 黒褐色 砂土	(6.4)	(3.7)	—	高台 2/12	素地：灰白 (7.5YR8/1) 釉調：明オリーブ灰 (5GY7/1)	内：圏線か？、施釉、 外：施釉、蓮弁文、 露胎部、施釉	全面に細か い貫入、 見込浮文 (双 魚文?)、 外面蓮弁文

付表9 4区出土土器・土製品観察表

口径・底径欄：( ) 復元径 器高欄：( ) 残存高 — 計測不能

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
430	縄文 土器	破片	4区	SD4001	最大長 (5.8)	最大幅 (5.3)	—	小片	内：にぶい橙 (7.5YR7/3) 外：にぶい褐 (7.5YR5/3)	内：ナデ、ケズリ、 外：2条1組の条痕、 貝殻腹縁圧痕文(羽 状)	煤付着か
431	須恵器	高杯	4区	SD4001	(13.1)	12.3	(11.1)	9/12	杯部：主に紫灰 (5P6/1) 脚部：主に青灰 (5PB6/1)	杯内：回転ナデ 脚内：回転ナデ、杯 部外面にカキ目	自然釉？ 透かし穴2 方向
432	須恵器	杯身	4区	SD4001	(11.4)	(3.8)	—	口縁 4/12	内：灰 (N5/0 ~ N4/0) 外：褐灰 (10YR6/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転 ヘラケズリ	
433	須恵器	杯身	4区	SD4001	(13.3)	(2.9)	—	口縁 2/12	内：灰白 (2.5Y7/1) 外：灰白 (10YR8/2)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転 ヘラケズリ	
434	須恵器	杯身	4区	SD4001	(15.2)	(5.4)	—	11/12	灰白 (2.5Y8/1) ~ 黄 灰 (2.5Y6/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転 ヘラケズリ	
435	土師器	椀	4区	SD4001	(10.6)	(4.1)	—	口縁 3/12	内：褐灰 (7.5YR5/1) 外：浅黄橙 (10YR8/3)	内：ハケ、ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケ	
436	土師器	椀	4区	SD4001	13.4	(5.7)	—	8/12	内：浅黄橙 (7.5YR8/4) 外：灰白 (7.5YR8/2)	内：ミガキ後ナデ 外：ケズリ後ナデ	
437	土師器	甕	4区	SD4001	(24.0)	(7.1)	—	口縁 6/12	橙 (5YR6/6)	内：ヘラケズリ 外：ハケ目後ナデ 、ユビオサエ	
438	土師器	杯	4区	SX4001	12.6	2.9	—	口縁 5/12	内：橙 (5YR7/6) 外：淡橙 (5YR8/4) 断：灰白 (7.5YR8/2)	内：ヨコナデ、やや 強めのヨコナデ 外：ケズリ後ナデ消 し	
439	土師器	壺	4区	SD4001	(13.9)	(5.4)	—	6/12 全体 1/12	浅黄橙 (10YR8/2) ~ にぶい黄橙 (10YR 7/4)	内：ハケ、ナデ、 外：ナデ、ユビオサ エ	
440	須恵器	杯	4区	SD4001	(10.6)	(4.0)	—	6/12	灰 (7.5Y5/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
441	土師器	甕	4区	SD4001	(17.2)	(11.5)	—	口縁 6/12 全体 3/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：ナデ 外：ナデ？、ユビオ サエ	
442	土師器	椀	4区	SD4001	11.6	4.5	—	完存	灰白 (5YR 8/2) ~ 橙 (5YR 6/6)	内：コナデ 外：ナデ、粘土紐痕 不調整	
443	土師器	椀	4区	SD4001	11.1	4.4	—	口縁 3/12	内外：橙 (2.5YR6/6) 断：中心辺り灰色が かる	内：ナデ 外：ナデ	粘土継ぎ 目？
444	土師器	甕	4区	SD4001	(22.0)	(9.0)	—	1/12	内：浅黄橙 (10YR8/3) 外：にぶい黄橙 (10YR7/2)	内：ハケ、ナデ 外：ハケ、ナデ	煤付着

国道 312 号（大宮峰山インター線）関係遺跡発掘調査報告

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
445	土師器	甕	4区	SD4001	(21.1)	(13.6)	—	口縁 4/12 全体 1/12	内：橙 (7.5YR7/6) 外：にぶい褐 (7.5YR5/3)	内：ヘラケズリ、ユビ オサエ、外：ユビ オサエ後ヨコナデ、 ユビオサエ後ナデ	所々にユビ オサエ残る
446	土師器	壺？	4区	SD4001	(29.4)	(6.5)	—	1/12	外：橙 (5YR6/6) 内：にぶい橙 (5YR6/4) ～灰褐 (5YR5/2)	内：ヘラケズリ後ナ デ、外：ヘラケズリ 後ナデ	
447	土師器	甕	4区	SD4001	(20.4)	(23.0)	—	7/12	外：橙 (7.5YR7/6) ～ 橙 (5YR6/8) 内：にぶい橙 (7.5YR 7/4) ～にぶい褐 (7.5YR6/3)	内：ケズリ、ユビオ サエ 外：ケズリか？	煤付着 平底に近い 丸底
448	土師器	甗？	4区	SD4001	(26.4)	(22.4)	—	3/12	外：橙 (5YR6/6) にぶ い橙 (7.5YR7/4) 内：浅黄橙 (7.5YR8/6)	内：ハケ、ナデ 外：ハケ後ナデ、一 部ミガキ？	粘土接合痕 あり、指幅に 5～7条
449	土師器	椀	4区	SD4003	(7.3)	2.5	—	口縁 3/12	浅黄橙 (10YR8/3)	内：調整不明 外：ケズリ、ユビオ サエ	
450	土師器	皿	4区	j18-19 SD4003	11.5	2.6	—	口縁 3/12	内外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ヨコナデからの ナデ上げ 外：ヨコナデ、ユビ オサエ、ケズリか？	
451	土師器	椀	4区	j18 SD4003	(13.8)	(5.1)	—	口縁 2/12	内外：にぶい赤褐 (5YR5/4)	内：ナデ、ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケ	
452	瓦質 土器	羽釜	4区	SD4025	(22.4)	(4.5)	—	口縁 1/12	内外：灰白 (2.5Y7/1)	内：ナデ 外：ナデ、沈線	歪つ、雲母 片目立つ、 煤付着
453	瓦質 土器	羽釜	4区	SD4025	(29.0)	(9.4)	—	口縁 1/12	内：灰白 (10YR7/1) 外：黒褐 (7.5YR3/2)	内：調整不明 外：ケズリ？	煤付着
454	瓦質 土器	羽釜	4区	SD4025	(32.6)	(8.7)	—	口縁 1/12	内：褐灰 (10YR6/1) 外：にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：ナデ 外：鏝付着のユビオ サエ、ナデ	粘土継ぎ目
455	土師器	皿	4区	SD4030	10.6～ 11.2	2.7	—	ほぼ 完存	灰白 (7.5YR 8/2) ～ 淡赤橙 (2.5YR 7/4)	内：ナデ 外：ナデ、不調整	歪つ
456	土師器	皿	4区	SD4030	(14.4)	(2.7)	—	4/12	浅黄橙 (10YR8/3)	内：ナデ 外：ナデ	
457	土師器	皿	4区	SD4044	(13.4)	2.9	—	口縁 1/12	内外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ナデ、工具 外：ナデ、未調整	
458	土師器	皿	4区	SK4351	8.2	1.8	—	完存	灰白 (7.5YR8/2)	内：ナデ、外：ナデ、 ユビオサエ	
459	白磁	皿	4区	SE4093	9.2	(1.5)	—	口縁 2/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰黄 (2.5Y7/2)	内：施釉 外：施釉	
460	青磁	椀	4区	SE4093		(3.0)	高台) 5.4	高台 6/12	素地：灰 (N6/0) 釉調：暗オリーブ (5Y4/4)	内：施釉 外：施釉	内面圏線 重ね焼き 痕？
461	白磁	椀	4区	SE4093	(16.0)	(4.0)	—	2/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰白 (7.5Y8/1)	内外：施釉	
462	黒色 土器	椀	4区	SE4142	15.8	5.8	—	口縁 5/12	内：黒 (N1.5/0) 外：口縁付近：褐 (7.5YR4/3) 底部：灰 褐 (7.5YR6/2)	内：主に圏線ミガキ、 見込みミガキ 外：ミガキ、回転糸 切り	
463	黒色 土器	椀	4区	SE4142	16.3	5.3	6.5	口縁 1/12 底部 完存	内：黒 (N1.5/0) 外 (口縁付近)： 黒 (N2/0)、浅黄橙 (10YR8/3)	内：ミガキ 外：ミガキ、軽いケ ズリ、回転糸切り	ヘラ記号 「×」
464	土師器	皿	4区	SP4045	11.7	2.2	—	1/12	内：褐灰 (7.5YR5/1) 外：灰黄褐 (10YR6/2)	内・外：ナデ、ユビ オサエ	
465	土師器	皿	4区	SP4046	7.8	1.5	—	5/12	灰白 (7.5YR8/2)	内・外：ナデ 口縁：ヨコナデ	
466	土師器	皿	4区	SP4051	7.8	1.5	—	2/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内・外：ヨコナデ	
467	土師器	皿	4区	SP4052	8.3	2.2	—	完存	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内：ハケ 外：ナデ	歪み
468	土師器	皿	4区	SP4052	8.7	2.0	—	完存	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内：ハケ、外：ユビ オサエ、底部ナデ	歪み

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
469	土師器	皿	4区	SP4058	11.6	3.0	—	3/12	浅黄橙 (10YR8/3)	内外ナデ	
470	土師器	皿	4区	SP4058	(13.2)	2.8	—	6/12	にぶい橙 (5YR7/4)	内：ナデ 外：ヨコナデ、ナデ、 ユビオサエ	
471	土師器	皿	4区	SP4094	8	1.7	—	6/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内：ナデ 外：口縁：ナデ	
472	土師器	皿	4区	SP4094	10.8	2.8	—	1/12	内外：浅黄橙 (7.5YR8/3)	内・外：ナデ	
473	土師器	皿	4区	SP4094	12.7	2.5	—	2/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内・外ナデ	
474	土師器	皿	4区	SP4094	8	1.5	—	4/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内・外ナデ 底部ユビオサエ	
475	土師器	皿	4区	SP4094	(10.0)	(2.4)	—	口縁 1/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内・外：ナデ	
476	土師器	皿	4区	SP4156	7.8	1.5	—	1/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内外：ナデ	
477	土師器	皿	4区	SP4156	7.8	1.5	—	5/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内：ハケ 外：ナデ	
478	土師器	皿	4区	SP4214	8.1～ 8.6	1.5	—	完存	浅黄橙 (10YR 8/3)	内・外：ナデ	
479	土師器	皿	4区	SP4214	12.4	2.8	—	完存	浅黄橙 (10YR 8/3)	内：ナデ 外：ナデ、ユビオサエ、 不調整	
480	土師器	皿	4区	SP4235	12.2	2.2	—	1/12	灰白 (7.5YR8/2)	内外：ナデ	
481	土師器	皿	4区	SP4035	7.4	1.3	—	4/12	内外：浅黄橙 (7.5YR8/3)	内：ナデ 口縁：ユビオサエ	
482	土師器	皿	4区	SP4035	8.2	1.5	—	6/12	灰白 (10YR8/2) ～灰 黄褐 (10YR6/2)	内：ナデ 外：掌痕	
483	土師器	皿	4区	SP4039	8.2	1.5	—	5/12	内外：浅黄橙 (7.5YR8/3)	内外：ナデ 口縁：ナデ	
484	土師器	皿	4区	SP4061	8	1.5	—	5/12	にぶい橙 (5YR7/4)	内・外：ナデ	煤付着
485	土師器	皿	4区	SP4079	12.2	2.9	—	1/12	内：明褐灰 (7.5YR7/2) 外：褐灰 (7.5YR6/1)	内：一方向ナデ 外：ヨコナデ	
486	土師器	皿	4区	SP4113	8.4	1.9	—	完存	内外：灰白 (10YR8/2)	内外：ナデ 口縁：ユビオサエ	
487	土師器	皿	4区	SP4114	12.7	2.3	—	2/12	内外：灰白 (7.5YR8/1)	内外：ナデ	
488	土師器	皿	4区	SP4116	12.2	2.7	—	完存	灰白 (7.5YR8/2)	内・外：ナデ	
489	土師器	皿	4区	SP4132	11.8	2.5	—	2/12	灰白 (7.5YR8/2)	内・外：ナデ	
490	土師器	皿	4区	SP4132	7.2	1.5	—	6/12	内：灰褐 (7.5YR6/2) 外：(部分的に) 褐灰 (7.5YR5/1)	内：ハケ 外口縁：ハケ	
491	土師器	鍋	4区	SP4198	31	14.3	—	1/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	内：ハケ、外：ユビ オサエ、ナデ	
492	土師器	皿	4区	SP4094	11.8	2.3	—	1/12	灰白 (7.5YR8/2)	内外：ヨコナデ	
493	土師器	皿	4区	SP4213	11.9	3.1	—	完存	内：明褐灰 (7.5YR7/2) 外：灰褐 (7.5YR6/2)	内：ヨコナデ	
494	土師器	皿	4区	SP4346	8	1.5	底4.0	完存	浅黄橙 (10YR8/3) ～ 灰白 (10YR8/1)	内：工具痕、ナデ 外：ナデ	歪つ
495	土師器	皿	4区	NR1008	8.1	1.5	—	完存	にぶい橙 (5YR7/3)	内：ナデ 外：ナデ、不調整	切り込み円 板法、煤付 着
496	土師器	皿	4区	NR1008	12.8	2.8	—	ほぼ 完存	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：ナデ、ユビオサエ、 外：ナデ、ユビオサ エ不調整	
497	須恵器	杯身	4区	NR1008	(14.2)	(2.7)	—	1/12	灰白 (10YR8/1)	外：回転ナデ 内：ヨコナデ	
498	須恵器	壺	4区	NR1008	体部最 大径) (12.6)	(9.4)	底 (9.3)	最大 径部 2/12	外：主に褐 (7.5YR4/3) 内：にぶい褐 (7.5YR6/3)	内：ユビオサエ、転 ナデ	内・外面・ 底部に自然 釉

国道 312 号 (大宮峰山インター線) 関係遺跡発掘調査報告

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
499	須恵器	壺E	4区	NR1008	7.3	6.8	底) 5.7	完存	灰 (N4/0)	内: ナデ 外: 回転ナデ	底部に墨書「東」
500	白磁	椀	4区	NR1008	(14.0)	(3.1)	—	1/12	素地: 灰白 (N8/0) 釉調: 灰白 (10Y8/1)	内外: 施釉 口縁: ハケ	
501	灰釉陶器	甕・壺 口縁部	4区	NR1008	(12.0)	(3.2)	—	口縁 1/12	素地: にぶい黄橙 (10YR7/2) 釉調: 灰オリーブ (7.5Y5/3) ~ 灰黄 (2.5Y7/2)	内: 施釉?、タタキ痕?、ナデ 外: 施釉?	
502	黒色土器	皿	4区	NR1008	8	(1.8)	—	全体 9/12	内: にぶい褐 (7YR6/3) 外: にぶい黄橙 (10YR7/3)	内: ナデ、 外: ナデ、回転糸切り	
503	白磁	皿	4区	NR1008	(8.8)	(1.5)	—	1/12	素地: 灰白 (N8/0) 釉調: 灰黄 (2.5Y7/2)	内外: 施釉	
504	黒色土器	椀	4区	NR1008	16	4.8	—	口縁 5/12 底部 完存	内: 黒褐 (10YR3/1) 外: にぶい黄橙 (10YR6/3)	内: ミガキ 外: ミガキ、糸切り	内面に煤
505	須恵器	甕	4区	NR1008	体部最大径) (9.1) 頸部径 (3.0)	(6.2)	—	最大 径部 6/12	内: 灰白 (N7/0) 外: 灰白 (N7/0) ~ 灰白 (N6/0) 断: 灰白 (10YR7/1)	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、回転ケズリ	穿孔
506	須恵器	蓋	4区	NR1008	(15.8)	(3.2)	—	完存	灰 (N8/0) ~ 黄灰 (2.5Y6/1)	内・外: 回転ナデ	かえり
507	須恵器	蓋	4区	NR1008	13.6	(1.2)	—	8/12	灰 (N5/0)	内: 回転ナデ 外: ケズリ後ナデ	墨書「道」
508	須恵器	片口鉢	4区	NR1008	(27.7)	(12.7)	底) (10.1)	口縁 3/12	外: 大部分暗灰 (N3/0) 内: 灰白 (2.5Y8/1)	内・外: 回転ナデ、 回転糸切り	片口 東播系
509	須恵器	脚付壺	4区	NR1008	頸部 (7.2) 最大径 (12.9)	(9.8)	—	頸部 6/12	(主に) 灰白 (N7/0)	内: ナデ、ユビオサエ、 外: カキ目、回転ケズリ、ナデ	自然釉?
510	須恵器	杯	4区	NR1008	(11.8)	(4.4)	底) (7.2)	口径 3/12 底径 6/12	灰 (N6/0)	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	
511	白磁	椀	4区	NR1008	—	(3.2)	高台) (7.0)	7/12	素地: 灰白 (N8/0) 釉調: 灰白 (5Y 8/2)	内: 施釉、外: 施釉、 露胎部、飛びカンナ、 削り出し高台	
512	白磁	椀	4区	NR1008	(16)	(5.5)	—	1/12	素地: 白 施釉: 灰白 (5Y8/2)	内: 施釉 外: 施釉	
513	白磁	椀	4区	NR1008	(16.0)	(3.4)	—	1/12	素地: 灰白 (N8/0) 釉調: 灰白 (2.5Y7/1)	内外: 施釉	
514	白磁	椀	4区	NR1008	(17.0)	(3.5)	—	1/12	素地: 灰白 (7.5Y8/1) 釉調: 灰白 (5Y8/2)	内外: 施釉	
515	須恵器	甕	4区	NR1008	(12.6)	(4.5)	—	頸部 3/12	外、内面の一部: 暗灰白 (N3/0) 内: 灰白 (10YR8/1) 断面はさらに白っぽい	内: 回転ナデ、同心 円のタタキ、外: 回 転ナデ、格子状タ タキ?	東播系
516	白磁	椀	4区	NR1008	—	(2.8)	高台) (6.1)	5/12	素地: 灰白 (N8/0) 釉調: 灰白 (5Y8/1)	内: 施釉、外: 施釉、 削り出し高台	
517	白磁	椀	4区	NR1008	—	(2.5)	—	1/12	素地: 灰白 (2.5Y7/1) 釉調: 灰白 (5Y8/1)	内外: 施釉	
518	土師器	皿	4区	包含層	(8.0)	(1.6)	—	9/12	にぶい橙 (7.5YR7/4) ~ 橙 (2.5YR 7/6)	内・外: ナデ	
519	土師器	皿	4区	包含層	7.8	1.5	—	9/12	灰白 (10YR8/2)	内・外: ナデ、不調 整	切り込み円 板技法か?
520	白磁	椀	4区	包含層	—	(2.3)	高台) (4.2)	2/12	素地: 灰白 (2.5Y8/2) 釉調: 灰白 (2.5Y8/1)	内: 施釉、外: 施釉、 削り出し高台	
521	緑釉陶器	椀	4区	包含層	—	(1.4)	高台) 3.8	高台 完存	素地: 灰白 (10YR7/1) 釉調: オリーブ黄 (7.5Y6/3)	内: 施釉、外: 施釉、 削り出し高台	
522	青磁	椀	4区	包含層	(15.0)	(2.3)	—	1/12	素地: 灰白 (N8/0) 釉調: 灰 (7.5Y6/1)	内外: 施釉	

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備考
523	白磁	椀	4区	包含層	(14.0)	(2.9)	—	1/12	素地：灰白 (5Y8/1) 釉調：灰 (7.5Y6/1)	内：施釉 外：施釉	
524	土師器	皿	4区	包含層	(12.1)	(2.9)	—	7/12	浅黄橙 (10YR 8/3)	内・外：ナデ	
525	須恵器	壺	4区	i21 茶褐色 土	体部最 大径) (12.8)	(7.3)	底 (8.6)	底 2/12	外：主に灰白 (N8/0) 内：にぶい褐 (7.5YR5/4)	内：ナデ、ユビオサ エ、外：自然釉剥離、 自然釉	外：自然釉 オリーブ (7.5Y5/3)
526	陶磁器	椀	4区	包含層	—	(2.5)	—	1/12	釉調：灰白 (5Y7/2)、 オリーブ (5Y 2/2)	内外：施釉	
527	青磁	椀	4区	j18 茶褐色 土	(16.8)	(5.0)	—	2/12	釉調：灰 (7.5Y6/1) 素地：灰白 (2.5Y7/1)	内外：施釉	内面に片彫 蓮花文
528	青磁	椀	4区	包含層	—	(3.4)	高台 ほぼ 5.2	高台 ほぼ 完	素地：灰白 (10YR8/1) 釉調：灰オリーブ (5Y5/3)	内：施釉、外：施釉、 削り出し高台	
529	白磁	椀	4区	q15 灰褐色 砂土	—	(3.7)	高台 7.2	高台 完存	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰白 (5Y7/1)	内：施釉 外：施釉、削り出し 高台、露胎部	
530	黒色 土器	椀	4区	包含層	(16.6)	(5.2)	底 (6.0)	7/12	内：黒 (N3/0) 外：灰白 (10YR8/2) ～褐灰 (10YR6/1)	内：ミガキ 外：ミガキ、ヨコナデ、 糸切り痕	
531	黒色 土器	椀	4区	包含層	(16.3)	(5.4)	底 (6.0)	4/12	内：黒 (10YR2/1) 外：にぶい黄橙 (10YR6/3)	内：ミガキ 外：ミガキ 底部糸切り	
532	須恵器	短頸壺	4区	包含層	5.8	8	—	完存	灰白 (N8/0)～灰 (N6/0)	内：回転ナデ、外： 回転ナデ、ケズリ	自然釉
533	青磁	椀	4区	包含層	—	(3.9)	—	—	釉調：灰オリーブ (5Y6/2) 素地：灰白 (N7/0)	内外：施釉 内面に花文	
534	土師器	皿	4区	包含層	8.8	1.4	底 7.2	ほぼ 完存	浅黄橙 (10YR8/3)～ 淡赤橙 (2.5YR7/4)	内：ナデ 外：ナデ、不調整	切り込み円 板技法
535	青磁	香炉	4区	o19 灰褐色 砂土	(10.2)	(4.2)	—	口縁 1/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：オリーブ (5Y5/4)	内外：施釉	
536	磁器	椀	4区	包含層	—	(1.5)	底 (4.9)	底 6/12	施釉：明緑灰 (10GY8/1)	内：施釉 外：施釉、削り出し 高台	景德镇
537	土師器	皿	4区	包含層	8.4	1.6	—	完存	にぶい橙 (5YR7/4)～ 橙 (2.5YR6/6)	内：ナデ 外：ナデ、不調整	切り込み円 板技法か？
538	土師器	皿	4区	包含層	8.5	1.7	5.6	ほぼ 完存	にぶい橙 (10YR7/4)	内・外：ナデ	切り込み円 板技法
539	土師器	皿	4区	包含層	7.8	1.5	—	ほぼ 完存	にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ナデ 外：ナデ、不調整	
540	土師器	甕	4区	包含層	(33.0)	(14.0)	—	2/12	内面：にぶい褐 (7.5YR6/3) 外：黒 (10YR 2/1)	内：ナデ、 外：ユビオサエ、ナデ、 ハケ	粘土痕
541	黒色 土器	椀	4区	包含層	—	(1.2)	高台 4.6	3/12	黒 (7.5YR 2/1)	内：ミガキ 外：糸切り痕	貼り付け j 高台
542	黒色 土器	椀	4区	包含層	(15.7)	6	高台 6.7(最 大)	口縁 6/12 高台 完存	内：黒 (N1.5/0) 外：灰褐 (7.5YR4/2) 黒っぽい部分もあり	内：丁寧で、密な圏 線ミガキ後外：ミガ キ、回転ナデ、回転 糸切り	内黒
543	白磁	椀	4区	包含層	—	(2.2)	—	1/12	素地：灰白 (2.5Y8/2) 釉調：灰白 (7.5Y8/1)	内外：施釉	
544	白磁	椀	4区	包含層	—	(4.5)	高台 7.8	口径 5/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰白 (7.5Y8/1)	内面：施釉 外：施釉、露胎部、 削り出し高台	見込み草花 文
545	白磁	椀	4区	包含層	—	(2.4)	—	1/12	素地：灰白 (2.5Y8/1) 釉調：灰白 (2.5Y7/1)	内外：施釉	
546	白磁	椀	4区	包含層	(16.8)	(4.6)	—	3/12	釉調：灰白 (7Y7/2) 素地：灰白 (5Y8/1)	内：施釉 外：施釉、露胎部	
547	白磁	浅形椀	4区	包含層	12.5	(4.1)	高台 5.0	口径 5/12	釉調：灰白 (5Y8/2) 素地：灰白 (5Y8/1)	内：施釉調 外：施釉、削り出し 高台、露胎部	

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
548	青磁	椀	4区	包含層	—	(2.4)	—	1/12	釉調:オリーブ (5Y5/4) 素地:灰白 (2.5Y8/2)	内外:施釉	
549	青磁	椀	4区	包含層	—	(2.6)	—	1/12	釉調:暗オリーブ灰 (2.5GY7/1) 素地:灰白 (N8/0)	内外:施釉	

付表10 2区・4区出土石製品、鉄製品観察表

(数値は現存値)

番号	種類	地区	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
550	石鏃	4区	SD4001 溝底	2.8	1.9	0.3	1.6	
551	石鏃	4区	NR1008 黒褐色土	6.4	b - b' 1.4	b 0.5	5.1	
552	磨製石斧	4区	NR1008	5.9	7.4	2.4	139.4	
553	玉石材	4区	NR1008 黒褐色土	3.1	1.9	1.3	6.6	碧玉 (緑色凝灰岩)
554	玉石材	4区	NR1008 黒褐色土	2.2	2.7	1.9	15.4	碧玉 (緑色凝灰岩)
555	玉石材	4区	NR1008 黒褐色土	3.2	3.9	1.5	20.7	碧玉 (緑色凝灰岩)
556	玉石材	4区	NR1008	—	—	—	11.1	碧玉 (緑色凝灰岩)
557	玉石材	4区	NR1008 黒褐色土	3.2	2.9	1.4	18.6	碧玉 (緑色凝灰岩)
558	玉石材	4区	NR1008	2.7	1.5	0.8	4.5	碧玉 (緑色凝灰岩)
559	石鋸	4区	NR1008	2.4	6.7	0.5	10.2	石材:紅簾片岩
560	砥石	4区	S D 4001	12.1	7.5	5.2	605	
561	石鍋	4区	NR1008	—	9.6	2.6	272.5	
562	硯	4区	NR1008	10.3	6.2	1.45	220.5	
563	刀子	4区	SP4214	全) 29.0 刃) 19.0 茎) 10.0	刀身: 3.0 茎: 2.1	刀身: 0.4 茎: 0.5	—	鞘と柄の木質残る
564	砥石	4区	121	7.8	3.6	3.0	92.1	
565	硯	4区	o18 黒褐色土	8.7	5.8	1.7	230.3	

付表11 4区出土銭貨観察表

番号	種類	地区名	出土地点	直径 (cm)	穴径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
566	開元通寶	2区	SP2003 埋土	2.4	0.7	0.3	3.8	2枚重なる
567	祥符元寶	2区	SP2003 掘削	2.5	0.7	0.2	3.4	2枚重なる
568	景德元寶	2区	SP2003 掘削	2.4	0.7	0.3	2.6	2枚重なる
569	元祐通寶	4区	SP4040	2.5	0.6	0.5	8.8	4枚重なる 北宋篆書
570	熙寧元寶	4区	SP4040	2.5	0.8	0.2	2.5	真書北宋?
571	天聖元寶	4区	SP4040	2.5	0.7	0.1	2.2	真書北宋
572	元豊通寶	4区	SP4040	2.4	0.7	0.2	2.9	行書北宋
573	天禧通寶	4区	SP4040	2.4	0.7	0.2	3	真書北宋

番号	種類	地区名	出土地点	直径 (cm)	穴径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
574	紹聖元寶	4区	SP4040	2.5	0.7	0.2	2.7	行書北宋
575	紹聖元寶	4区	SP4040	2.5	0.7	0.2	2.7	行書北宋
576	紹聖元寶	4区	SP4040	2.5	0.7	0.1	2.9	6枚重なる 行書北宋

付表12 4区出土木製品観察表

(数値は現存値)

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
577	杭	4区	SP4166	18.6	9.2	7.3	
578	棒状木製品	4区	o14 NR1008	31.1	1.2	1.1	
579	棒状木製品	4区	o18 NR1008	16.4	2	0.9	
580	棒状木製品	4区	o15 NR1008	16.2	0.7	0.5	
581	折敷	4区	n21 NR1008	13.6	8.5	1.1	
582	曲物	4区	n18 NR1008	径12		1	
583	板材	4区	m 22-21 NR1008 黒褐色砂土	7.3	3.6	0.6	
584	板材	4区	o15 NR1008	14.3	2.8	0.5	
585	燃えさし	4区	o15 NR1008 り	17.8	2.2	1.5	
586	燃えさし	4区	o17 NR1008 黒褐色砂土	26	1.4	1.1	
587	燃えさし	4区	o15 NR1008	32.8	1.3	0.7	
588	燃えさし	4区	o17 NR1008 黒褐色砂土	40	1.2	1.1	
589	燃えさし	4区	o15 NR1008	14.7	1.8	1.2	
590	燃えさし	4区	m16 東 NR1008	16.3	a : 0.8 b : 3.5	a : 0.5 b : 1.4	
591	燃えさし	4区	m 22-21 NR1008 黒褐色砂土	9.9	3.5	0.7	
592	燃えさし	4区	o15 NR1008 灰褐色砂土	8.9	3.7	3.4	
593	板材	4区	o18 NR1008 灰褐色砂土	36.1	a-a' : 6 b-b' : 5.5	2.2	
594	板材	4区	NR1008	21	5.5	1.6	
595	板材	4区	m15-p17 NR1008 黒褐色砂土	9.6	8.4	1.9	
596	板材	4区	m21 NR1008 黒褐色砂土	28	7.6	1	
597	板材	4区	o17 NR1008 黒褐色砂土	23.6	6.3	1.3	
598	板材	4区	o19 NR1008 黒褐色砂土	23.3	4.7	1	
599	棒状木製品	4区	o15 NR1008 灰褐色砂土	16.5	2.6	1.2	
600	木製品 (曲物の部材)	4区	NR1008	16.2	3.8	0.7	
601	木製品 (建築部材)	4区	NR1008	37.6	3	0.4	
602	木製品	4区	o19 NR1008 黒褐色砂土	3.7	4.4	2.7	

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
603	木製品	4区	SE4215	17.3	5	1.9	
604	木製品	4区	o19 NR1008 黒褐色 砂土	16	5	3.3	
605	板材	4区	o15 NR1008 灰褐色 砂土	11.8	6.8	2.1	
606	建築部材	4区	m 23 NR1008 黒褐色 土	15.9	5.1	4.6	
607	木簡	4区	NR1008	13	4.2	0.5	墨書あり
608	木簡 卒塔婆	4区	NR1008	11	2.9	0.5	

付表13 3区出土土器・土製品観察表

口径・底径欄：( ) 復元径 器高欄：( ) 残存高 - 計測不能

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備考
609	弥生 土器	鉢	3区	SX3002	(17.7)	(9.3)	-	口縁 1/6	内：黒褐 (7.5YR3/1) 外：にぶい橙 (7.5YR6/4)	内：ナデ 外：ミガキ	
610	弥生 土器	高杯	3区	SX3002	-	12.0	12.8	脚部 ほぼ 完存	内：褐灰 (7.5YR5/1) 外：にぶい黄褐 (10YR7/4)	内：シボリ痕、粗い ヘラケズリ 外：粗いヘラミガキ	
611	弥生 土器	短頸壺	3区	SK3069	(17.8)	(5.1)	-	口縁 1/12	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/3) 断：褐灰 (7.5YR5/1)	内：ナデ、ナデ 外：ナデ、ハケ	指頭圧痕文 突帯
612	弥生 土器	短頸壺	3区	SK3069	(19.0)	(14.5)	-	口縁 4/12	内・外：にぶい黄橙 (10YR7/4)	内：ナデ、 外：ハケ、ナデ	指頭圧痕文 突帯
613	弥生 土器	甕	3区	SK3069	(15.0)	(3.9)	-	口縁 1/6	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ナデ 外：ハケ	口縁部から 体部にかけて 付着物
614	弥生 土器	高杯	3区	SK3069	(18.0)	(6.2)	-	口縁 1/3	内・外：浅黄橙 (10YR8/3)	内：ハケ 外：ヘラケズリ、ヘ ラミガキ	口縁外面に 6条の凹線 文
615	弥生 土器	広口壺	3区	SD3068	外寸 (23.6) 内寸 (20.8)	(8.5)	-	頸部 7/12 口縁 4/12	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ハケ後ナデ 外：ハケ	頸部に3条 の凹線文
616	弥生 土器	高杯	3区	SD3068	(28.2)	(17.0)	-	4/12	内・外：浅黄橙 (7.5YR8/3)	内：ハケ後ヘラミガ キ、ナデ 外：ハケ後ヘラミガ キ、脚部内：ケズリ	ヘラ状工具 による凹線 文5条
617	弥生 土器	高杯	3区	SD3068	-	(5.8)	脚 (14.0)	脚 7/12	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	外：ヘラミガキ 脚部内：ケズリ後ナ デ	3条の退化 凹線文
618	弥生 土器	高杯	3区	SD3068	-	(15.0)	底9.8	脚部 完存	杯部内面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 外：浅黄橙 (7.5YR8/4) ～にぶい黄橙 (10YR7/4)	外：ヘラミガキ、ナ デ 脚部内：ヘラケズリ、	
619	弥生 土器	短頸壺 または 水差し	3区	SD3091	13.6	(7.9)	-	口縁 完存	外：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内：黒褐 (10YR3/1)	内：ナデ、ハケ、頸 部下半ヘラケズリ 外：ハケ	口縁部に3 条の凹線文
620	弥生 土器	高杯	3区	SD3091	(23.8)	(5.7)	-	口縁 2/12	内・外：明赤褐 (2.5YR5/8)	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	杯部の屈曲 部に3条の 凹線文
621	弥生 土器	高杯	3区	SD3091	-	(9.6)	-	脚柱 部	内：暗灰 (N3/0) 外：灰黄褐 (10YR4/2)	内：ハケ後ヘラミガ キ 外：ヘラミガキ	5条の退化 凹線文
622	弥生 土器	高杯	3区	SD3091	凹線 (2.1)	(8.7)	-	不明	内・外：にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	内：ヘラケズリ 外：ヘラミガキ	脚柱部上下 2か所に5 条の退化凹 線文

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
623	弥生 土器	高杯	3 区	SD3091	凹部) (2.4)	(6.9)	—	不明	内・外：浅黄橙 (7.5YR8/4)	外：ヘラミガキ 内：ハケ後ケズリ	4方向透か し穴、5条 の凹線文
624	弥生 土器	高杯	3 区	SD3091	—	(3.5)	底 (11.2)	底 2/12	内・外：にぶい黄 橙 (10YR7/2) ~ 褐灰 (10YR6/1)	内：ハケ 外：ヘラミガキ	脚端面に1 条の凹線
625	弥生 土器	広口壺	3 区	SD3095	(19.7)	(8.3)	—	全体 3/12	浅黄橙 (10YR8/3)	外：ヨコナデ、ハケ	頸部に3条 の凹線文
626	弥生 土器	甕	3 区	SD3095	口径) (17.0)	(5.0)	—	口径 1/8	内・外：にぶい黄橙 (10YR6/4)	内：ハケ 外：ハケ	
627	弥生 土器	甕	3 区	SD3095	口径) (17.9)	(6.9)	—	口径 3/12	内：にぶい黄橙 (10YR7/3) 外：灰褐 (7.5YR4/2)	内：ハケ 外：タタキ後ハケ	煤附着
628	弥生 土器	台付き 鉢	3 区	SD3095	(17.6)	(6.5)	—	口縁 1/8	内・外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 外：黒斑黒 (N2/0)	内：ハケ 外：ハケ後ヘラミガ キ	口縁部に2 条の凹線文
629	弥生 土器	台付き 鉢	3 区	SD3095	—	(7.35)	9.7	脚完 存	内・外：にぶい黄橙 (10YR7/4)	内：ハケ 外：ハケ後ミガキ	
630	弥生 土器	広口壺	3 区	SD3096	30.6	(7.0)	—	口縁 3/12	内・外：にぶい黄橙 (10YR7/4)	内：ハケ 外：ハケメ後ナデ	口縁部に5 条の凹線文 口縁部内面 に扇形文
631	弥生 土器	広口壺	3 区	SD3096	(25.4)	(9.7)	—	5/12	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ハケ後ナデ、 外：ハケ	頸部に3条 以上の凹線 文、口縁部 内面に楕圓 描き半円
632	弥生 土器	甕	3 区	SD3096	(32.0)	36.4	—	口縁 1/3	内：浅黄 (2.5Y7/3) 外：淡黄 (2.5Y8/3)	内：ナデ 外：ハケ	
633	弥生 土器	高杯	3 区	SD3096	内寸) (14.4) 外寸) (24.0)	(6.9)	—	杯 9/12	浅黄橙 (10YR8/3) ~ 浅黄橙 (7.5YR8/4) 黒斑) 褐灰 (10YR4/1)	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	
634	弥生 土器	高杯	3 区	SD3096	—	(9.0)	脚) 11.4	脚完 存	外：浅黄橙 (7.5YR8/3) 黒斑) 黒 (10YR2/1) 内：浅黄橙 (10YR8/3)	調整不明瞭	脚柱部に退 化凹線文
635	弥生 土器	広口壺	3 区	SD3097	(22.6)	(9.5)	—	3/12	内：浅黄橙 (10YR8/3) ~ にぶい黄橙 (10YR7/2) 外：浅黄橙 (7.5YR8/3) ~ にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ハケ 外：ハケ	頸部に幅広 の凹線文
636	弥生 土器	広口壺	3 区	SD3097	(25.8)	(3.1)	—	口縁 7/12	内・外：にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：ナデ 外：ナデ	口縁部内面 に扇形文
637	弥生 土器	短頸壺 または 水差し	3 区	SD3097	(12.5)	(8.9)	—	口縁 8/12	浅黄橙 (10YR8/3) 内面に一部灰白 (10YR7/1)	内：頸部下半ヘラケ ズリ、ナデ 外：ハケ	口縁部上部 に3条の凹 線文
638	弥生 土器	壺	3 区	SD3097	(8.0)	(5.4)	—	3/12	内外：にぶい橙 (7.5YR6/4)	内外面調整不明 外面はヘラミガキか	紐穴
639	弥生 土器	壺	3 区	SD3097	4.6	6.8	—	小片	外：灰白 (2.5Y8/2) 内：黒褐 (2.5Y3/1)	ハケ後ナデ	絵画土器 鹿か
640	弥生 土器?	甕	3 区	SD3097	(14.0)	(9.7)	—	口縁 2/12	内：にぶい橙 (7.5YR7/4) にぶい黄橙 (10YR7/3) ~ 暗褐 (10YR3/3)	内：ケズリ? 外：ハケ	被熱痕著し い
641	弥生 土器	甕	3 区	SD3097	(18.0)	(19.7)	—	口縁 10/12	内外：にぶい黄橙 (10YR7/2)	内：ハケ 外：ハケ、表面剥離	
642	弥生 土器	甕	3 区	SD3097	(17.0)	(16.0)	—	口 2/12	外：浅黄橙 (10YR8/4) ~ 橙 (5YR7/6) ~ 橙 (2.5YR6/6) 内：にぶい橙 (10YR7/3)	内：下半部ヘラケズ リ、上半ハケ 外：ハケ	口縁端部に 凹線
643	弥生 土器	甕	3 区	SD3097	(19.7)	(10.1)	—	小片	内：灰黄 (2.5Y7/2) 外：浅黄橙 (10YR8/3)	内：ハケ後ケズリ 外：ハケ	
644	弥生 土器	甕	3 区	SD3097	(35.2)	(11.2)	—	口縁 1/12	内：浅黄 (2.5Y7/3) 外：淡黄 (2.5Y8/3)	内：ナデ、ユビオサ エ 外：ハケ	口縁面に2 条の凹線文

国道 312 号 (大宮峰山インター線) 関係遺跡発掘調査報告

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
645	弥生 土器	甕	3 区	SD3097	(22.6)	(17.0)	—	口縁 1/12	内外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ハケ, ユビオサ エ、外：ハケ	
646	弥生 土器	甕	3 区	SD3097	(33.4)	(8.4)	—	口縁 1/12	内外：褐灰 (5YR6/6)	内：ハケ 外：ハケ	
647	弥生 土器	壺・甕	3 区	SD3097	—	(12.3)	底 6.1	底部 完存	内：にぶい黄褐 (10YR4/3) ~黄褐 (10YR5/6) 外：黒褐 (10YR3/2)	内：ハケ 外：ハケ	
648	弥生 土器	壺・甕	3 区	SD3097	—	(9.4)	底部 7.5	底部 完存	内外：にぶい黄橙 (10YR7/2)	内：ヘラケズリ 外：ハケ	
649	弥生 土器	鉢	3 区	SD3097	(21.2)	(11.3)	—	小片	内外：にぶい黄橙 (10YR7/4)	内：ハケ 外：ヘラミガキ	口縁部に3 条の凹線文
650	弥生 土器	台付き 鉢	3 区	SD3097	(11.8)	(6.2)	—	口縁 1/8	内：にぶい黄橙 (10YR7/4) 黒斑部 黒褐 (10YR3/1) 外：灰白 (10YR8/2)	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	
651	弥生 土器	脚付き 鉢	3 区	SD3097	不明	(5.45)	底 (9.0)	底 9/12	内外：にぶい黄橙 (10YR7/3) ~褐杯 (10YR4/1)	内：ヘラケズリ後ナ デ 外：ヘラミガキ	脚部上半に 12条以上の ヘラ描き沈 線文(退化 凹線文)透 かし穴1対
652	弥生 土器	脚付き 鉢	3 区	SD3097	—	(8.5)	底 6.6	脚部 完存	浅黄橙 (7.5YR8/4) 黒斑部 褐灰 (10YR4/1)	内：ナデ 外：ヘラミガキ	
653	弥生 土器	高杯	3 区	SD3097	—	(3.2)	底 (10.0)	底部 4/12	内外：にぶい橙 (7.5YR7/3) ~にぶい 橙 (5YR7/4)	内：ヘラケズリ 外：ヘラミガキ	透かし穴
654	須恵器	甕	3 区	SD3097	不明	(5.7)	—	小片	内外：灰 (N5/0)		楯描波状文
655	土師器	高杯	3 区	SD3097	(11.6)	(4.9)	—	杯部 5/12	外：にぶい橙 (5YR7/4) 内：にぶい橙 (5YR7/4) ~橙 (2.5YR6/6)	調整不明	ユビオサエ あり
656	須恵器	椀	3 区	SD3097	(13.0)	5.5	底 6.0	3/12	外：灰 (N5/0) 内：暗灰 (N3/0) ~灰 (N5/0)	内： 外：回転ナデ、糸切 り	自然釉
657	弥生 土器	甕	3 区	黒褐色 砂	(16.7)	(9.8)	—	口縁 1/12	内外：浅黄橙 (7.5YR8/3)	内外：ハケ	
658	弥生 土器	壺・甕 の底部	3 区	黒褐色 砂	—	(6.0)	7.6	底部 3/4	内外：灰褐色 (7.5YR4/2)	内外：ハケ 底部に粗いハケ	焼成後に底 部中央に穿 孔
659	弥生 土器	台付き 鉢	3 区	黒褐色 砂	—	(6.2)	7.6	脚部 1/3	内：黄灰 (2.5Y6/1) 外：灰白 (10YR8/2)	内：ナデ 外：ヘラミガキ	
660	弥生 土器	高杯	3 区		(26.0)	(6.6)	—	1/8	浅黄橙 (10YR8/3) 黒斑部 黒褐 (10YR3/1)	内：タテ後ヨコのヘ ラミガキ 外：ヘラミガキ	杯部境に4 条の凹線文
661	弥生 土器	高杯	3 区	黒褐色 砂	(27.8)	(6.6)	—	口縁 2/12	浅黄橙 (7.5YR8/4) 黒斑部 黒褐 (10YR3/1)	内：調整不明 外：ヘラミガキ	杯部境に2 条の凹線文
662	土師器	高杯	3 区	黒褐色 砂	—	(7.4)	底 (12.9)	脚部 7/12	外面・脚部内面) 橙 (2.5YR6/6) 杯内部) 浅黄橙 (7.5YR8/6)	杯内：調整不明 外：ナデ?	
663	土師器	高杯	3 区	黒褐色 砂	—	(10.7)	底 8.8	脚部 3/4	内外：淡橙 (5YR8/4)	内：ケズリ 外：ナデ?	
664	瓦質 土器	鍋	3 区	黒褐色 砂	(24.0)	(6.4)	—	小片	外：褐灰 (10YR6/1) 内面の素地：灰白 (10YR8/1)	内：剥離のため不明 外：ナデ	

付表14 3区出土石器・石製品観察表

(数値は現存値)

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
665	大型石包丁	3区	SD3098	32.2	11.4	1.6	717	凝灰岩
666	大型石包丁	3区	SD3098	35.6	14.2	1.3	950	凝灰岩
667	石斧	3区	包含層	14.3	4.7	3.6	420	緑色片岩
668	石包丁?	3区	黒色土	5.5	5.2	1.1	65	破片、凝灰岩
669	石包丁?	3区	r23 黒褐色砂	3.7	4.3	0.58	10	破片、凝灰岩
670	石包丁?	3区	n23 黒褐色砂	7.7	5.4	1.15	70	破片、凝灰岩
671	大型石包丁	3区	黒色土	11.7	16.6	1.07	275	破片、凝灰岩
672	紡錘車	3区	黒褐色砂	直径4.1	—	高さ1.1	10	滑石、2分の1欠損
673	紡錘車	3区	黒褐色砂	5.6	5.6	1.9	80	

付表15 6区出土土器・土製品観察表

口径・底径欄：( ) 復元径 器高欄：( ) 残存高 — 計測不能

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
674	須恵器	杯	6区	SP6072	—	(1.7)	高台 (9.0)	高台 2/12	内外：灰白 (2.5YR7/1)	内：回転ナデ 外：回転ヘラ切り後ナデ	
675	弥生土器	甕	6区	SK6144	(21.4)	(20.0)	—	口縁 7/12	内：体部褐灰 (10YR4/1) 口縁灰白 (7.5YR8/2) 外：体部灰褐 (7.5YR4/2) 口縁灰白 (7.5YR8/2)	内：ハケ後ケズリ、ユビオサエ 外：ハケ	
676	須恵器	蓋	6区	SD6003	(13.2)	2.3	—	口縁 1/12	内外：灰白 (2.5YR7/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ切り	
677	土師器	皿	6区	SD6003	(9.0)	1.2	—	口 3/12	内：にぶい黄橙 (10YR6/3) 外：にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切り	
678	弥生土器	広口壺	6区	NR6120	—	10.0	—	小片	にぶい黄橙 (10YR7/3)	外：ハケ後ナデ?	直線文、斜格子文、円形浮文
679	弥生土器	広口壺	6区	NR6120	—	8.3	—	小片	にぶい黄橙 (10YR7/3)	外：ハケ後ナデ?	直線文、斜格子文、円形浮文
680	弥生土器	壺	6区	NR6120	—	9.3	—	小片	外：黒斑 黒 (N3/0) 内：浅黄橙 (10YR8/3)	外：ハケ後ナデ?	直線文、斜格子文、円形浮文
681	弥生土器	壺	6区	NR6120	(25.3)	(1.7)	—	口縁 1/8	内外：にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：ナデ 外：ナデ	口縁端部に刻み目文
682	弥生土器	壺	6区	NR6120	(28.0)	(10)	—	口縁 4/12	内外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：調整不明 外：ハケ	頸部に2条以上の凹線文、口縁端部2段刻み目文、円形浮文
683	弥生土器	甕	6区	NR6120	(13.6)	19.4	5.9	60%	内外：にぶい橙 (7.5YR6/3)	内：ハケ後ヘラケズリ 外：ハケ	
684	弥生土器	甕	6区	NR6120	(14.8)	(9.1)	—	口縁 5/12	内外：にぶい橙 (7.5YR7/3) 断：灰 (N4/4)	内：ハケ 外：ハケ	煤付着

国道 312 号 (大宮峰山インター線) 関係遺跡発掘調査報告

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
685	緑釉陶器	椀底部	6区	NR6120	—	(3.3)	高台 6.3	高台完存	素地：灰白 (10YR7/1) ~ 浅黄橙 (7.5YR8/6) 釉調：浅黄 (2.5Y7/3)	内：施釉 外：施釉	沈線のような工具痕が見られる
686	緑釉陶器	底部	6区	NR6120	—	(1.6)	高台 (6.6)	小片	素地：浅黄橙 (10YR8/3) 釉調：明黄褐 (2.5Y6/6)	内：施釉、圏線 外：施釉	重ね焼き？
687	白磁	椀	6区	NR6120	(14.0)	(4.1)	—	小片	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内・外：施釉	
688	白磁	椀	6区	NR6120	—	(2.0)	(6.5)	底 3/12	内外：灰白 (2.5YR8/1) 釉：灰白 (2.5YR8/2)	内：施釉 外：施釉、露体部	
689	土製品	不明	6区	h10 黒褐色粗砂	2.0	2.0	0.8	—	多孔面：褐灰 (10YR4/1) 爪状圧痕面：灰白 (10YR7/1)		穿孔：1mm径、深さ3.5~4mm、爪状圧痕
690	縄文土器	鉢	6区	f・e15 褐色砂	—	(6.7)	—	小片	内：黒 (N1.5/0) 外：灰褐 (7.5YR4/2)	内：ナデ 外：巻貝状痕？	煤付着 雲母目立つ
691	縄文土器	鉢	6区	f・e15 褐色砂	—	(6.5)	—	小片	内：黒 (7.5YR2/1) 外：黒褐 (7.5YR3/2) ~ 黒 (7.5YR2/1)	内：ケズリ、ナデ、ユビオサエ、条痕 外：巻貝状痕か？、ミガキか？	粘土紐継ぎ目、煤付着 雲母目立つ
692	縄文土器	鉢	6区	f・e15 褐色砂	—	(6.5)	—	小片	内：黒褐 (7.5YR3/1) ~ 明褐灰 (7.5YR7/2) 外：灰褐 (7.5YR4/2)	内：ナデ、条痕 外：ナデ	煤付着 雲母目立つ
693	弥生土器	甕	6区	k・j9 黒褐色砂	(16.5)	(9.1)	—	口縁 6/12	内外：浅黄橙 (10YR8/3)	内：ハケ 外：ハケ	外面全体に煤付着
694	須恵器	蓋	6区	e11 灰褐色土	つまみ径) 2.35	(1.85)	—	つまみ完存	内：灰 (N5/0) 外：褐灰 (10YR6/1)	内：回転ナデ 外：回転ケズリ、回転ナデ	内面に墨痕
695	須恵器	蓋	6区	h9 黒褐色土	(14.9)	(2.1)	—	口縁 1/8	内外：灰 (N6/09)	内：回転ナデ、 外：回転ケズリ、回転ナデ	
696	須恵器	蓋	6区	e12 黒褐色砂	(17.1)	(1.9)	—	口縁 4/12	内：灰白 (10YR8/1) 外：灰白 (2.5Y7/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	つまみ剥離
697	須恵器	蓋	6区	表土	(17.0)	(2.1)	—	50%	灰 (N5/0)	外：回転ケズリ、回転ナデ、 内：回転ナデ、	転用硯か？、 内外面墨痕
698	須恵器	蓋	6区	j9	(18.2)	(1.35)	—	小片	内外：灰白 (10YR7/1) 断：灰白 (10YR7/2)	内：回転ナデ、 外：回転ケズリ、回転ナデ	つまみ剥離 つまみ付近に墨付着？
699	須恵器	蓋	6区	d12 灰褐色土	(12.0)	(1.5)	—	1/12	灰 (5Y6/1)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ、	墨書
700	須恵器	蓋	6区	19 黒褐色土	(14.0)	1.7	—	小片	灰白 (10YR7/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	墨書 重ね焼き
701	須恵器	蓋	6区	h11 黒褐色土	(12.0)	(2.4)	—	3/12	灰 (N4/0)	内：指ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラケズリ	
702	須恵器	杯A	6区	g9 黒褐色土	(13.8)	2.8	—	45%	浅黄橙 (10YR8/3)	内：ナデ、 外：ナデ、ヘラ切り	内面焦げ付着
703	須恵器	皿・杯	6区	d12 灰褐色土	—	—	—	小片	褐灰 (10YR6/1)	回転ナデ、ヘラ切り後ケズリ、	底部に墨書？記号
704	須恵器	杯B	6区	h9	—	(2.6)	高台最大 (5.8)	高台 3/12	内：灰 (N5/0) 外：灰 (N4/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	自然釉？
705	須恵器	杯B	6区	h9 黒褐色土	(9.0)	(4.1)	高台 (6.7)	小片	内外：灰 (N5/0) 断：明紫灰 (5RP7/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
706	須恵器	杯B	6区	g9 黒褐色土	(12.7)	(3.25)	高台 (8.7)	口縁 1/12 高台 2/12	内：褐灰 (10YR6/1) 外：灰 (N5/1)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
707	須恵器	杯B	6区	e12 灰褐色砂	(12.8)	(3.7)	高台 (8.4)	口縁 2/12	内：明褐灰 (7.5YR7/1) 外：灰白 (N8/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
708	須恵器	杯B	6区	h12 黒褐色土	—	(1.7)	高台最大) (10.8)	高台 3/12	褐灰 (10YR6/1) 断：灰白 (2.5Y7/1)	内：回転ナデ、 外：回転ナデ、ヘラ 切り	底部外面に 墨書
709	須恵器	杯B	6区		—	(2.2)	高台 (12.2)	高台 2/12	灰白 (2.5Y7/1)	内：回転ナデ 外：ヘラ切り	底部外面に 墨書「大」 爪状圧痕 粘土継ぎ 目？
710	須恵器	杯	6区	g10	(16.8)	(3.3)	(14.8)	小片	内外：褐灰 (10YR5/1) 断：灰 (N6/0)	内外：回転ナデ、	
711	須恵器	蓋	6区	g11	—	(0.9)	—	小片	灰 (N5/0)	外：ツマミ接合部ハ クリ、回転ナデ、 内：回転ナデ、	墨書「首」？
712	須恵器	杯？	6区	k10 灰褐色土	—	—	—	小片	灰褐 (7.5YR6/2)	内：回転ナデ、 外：ヘラ切り、ハク リ	
713	土師器	皿	6区	h12	(7.95)	1.4	—	65%	浅黄橙 (10YR8/3)	内外：マメツ調整不 明瞭	
714	土師器	皿	6区	h10 黒褐色土	(7.9)	1.5	—	85%	にぶい橙 (7.5YR6/4)	内：ヨコナデ、 外：ヨコナデ、糸切 り	
715	土師器	皿	6区	d・e12	(10.0)	(3.35)	—	60%	にぶい橙 (7.5YR7/3)	内：ナデ 外：ナデ、糸切り	内面煤付着 灯明皿
716	土師器	皿	6区		(13.8)	3.85	—	35%	にぶい橙 (7.5YR6/4)	内：沈線？、ナデ 外：ナデ、糸切り	歪み
717	土師質	埴塼	6区	j10	7.4	4.5	—	80%	内外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	内：ナデ 外：ナデ	下部焦げる
718	灰釉 陶器	椀	6区	h11 黒褐色土	(16.2)	(4.1)	—	口縁 1/8	素地：灰白 (2.5Y8/1) 釉調：灰白 (10YR8/1)	内：釉が見られる 外：釉が見られる	
719	須恵器	椀	6区	h10 黒褐色土	(15.5)	(6.2)	高台 (7.2)	口縁 3/12	灰 (N6/0)	内：回転ナデ、 外：回転ケズリ、回 転ナデ、	
720	黒色 土器	椀	6区	h11 黒褐色土	—	(4.6)	底6.4	40%	外：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内：暗灰 (N3/0)	内：ミガキ、 外：ミガキ、ナデ、 糸切り	
721	緑釉 陶器	壺	6区	i・j12 ・13 黒褐色土	(5.4)	(1.5)	—	口縁 1/8	素地：明褐灰 (7.5YR7/1) 釉調：オリーブ灰 (10Y5/2)	内・外：施釉	
722	緑釉 陶器	椀	6区	K・110	(9.2)	(1.8)	—	口縁 1/12	素地：灰白 (10YR8/2) 釉調：明緑	内・外：施釉	
723	緑釉 陶器	椀	6区	d11 灰褐色土	(12.5)	(3.4)	—	小片	素地：灰褐 (7.5YR6/2) 釉調：オリーブ灰 (10Y5/2)	内・外：施釉	
724	緑釉 陶器	椀	6区	i9 黒褐色土	—	(1.2)	高台 (6.8)	高台 2/12	素地：褐灰 (10YR6/1) 施釉：オリーブ灰 (2.5GY6/1)	内：施釉、圏線 外：施釉	重ね焼き？
725	緑釉 陶器	椀	6区	c12 黒褐色土	—	(1.2)	高台 (6.5)	高台 3/12	素地：灰白 (10YR8/2) 釉調：灰黄 (2.5Y7/2)	内：施釉、圏線 外：施釉	重ね焼き
726	緑釉 陶器	椀	6区	g10	—	(1.5)	高台 6.9	高台 4/12	素地：浅黄橙 (10YR8/3) 釉調：明緑	内：施釉 外：施釉	
727	緑釉 陶器	椀	6区	j・k 12・13 黒褐色土	—	(1.5)	高台 (5.8)	高台 3/12	素地：灰白 (2.5Y7/1) 釉調：オリーブ灰 (10Y6/2)	内：施釉	
728	緑釉 陶器	椀	6区	j11	—	(2.2)	高台) (7.4)	高台 6/12	素地：灰白 (10YR8/2) 釉調：明緑	内：施釉 外：施釉、糸切り	
729	緑釉 陶器	椀	6区	i11 黒褐色土	—	(2.6)	高台) (9.0)	高台 3/12	素地：浅黄橙 (7.5YR8/3) 釉調：明緑	内：施釉 外：施釉、糸切り	
730	緑釉 陶器	底部	6区	e11 黒褐色土	—	(2.4)	高台) (6.5)	高台 )5/12	素地：灰白 (10YR7/1) 釉調：灰白 (5Y7/2)	内：施釉 外：施釉	

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
731	青磁	椀	6区	e10・11 黒褐色土	—	(2.0)	高台 (6.1)	高台 4/12	素地：灰白 (10YR7/1) 釉調：オリーブ灰 (2.5GY6/1)	内：施釉 外：施釉	越州窯 蛇の目高台
732	青磁	椀	6区	e10・11 黒褐色土	—	(2.4)	高台 5.3	高台 完存	素地：灰白 (N8/0) 釉調：オリーブ灰 (5GY6/1)	内：施釉 外：施釉、釉垂れ	見込に線刻
733	青磁	椀	6区	北西部	(15.3)	(2.8)	—	小片	素地：灰白 (2.5Y7/1) 釉調：オリーブ灰 (2.5GY6/1)	内：施釉 外：蓮弁文か？	龍泉窯
734	白磁	皿	6区	i9 黒褐色土	(13.8)	(3.4)	底 (5.5)	口 4/12	素地) 灰白 (2.5Y8/1) 釉調) 灰白 (7.5Y8/1)	内：施釉 外：施釉	見込：篋描き草花文、削り出し高台
735	白磁	皿	6区		—	(3.5)	底 3.5	底完存	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (5Y8/1)	内：施釉、圏線 外：部分的に施釉	細かい貫入
736	白磁	皿	6区		—	(0.9)	底 3.4	底 9/12	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内：施釉、圏線 外：施釉	細かい貫入
737	白磁	椀	6区	j・k12・13 黒褐色土	(13.0)	(2.0)	—	小片	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内：施釉 外：施釉	
738	白磁	椀	6区	i10 黒褐色土	(14.4)	(2.9)	—	小片	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (10YR8/1)	内外：施釉	細かい貫入
739	白磁	椀	6区	h10 黒褐色土	(15.7)	(3.5)	—	口 1/12	素地：白 (N9/0) 釉調：浅黄 (2.5Y7/2)	内：施釉 外：施釉	
740	白磁	椀	6区	i・j10	(15.3)	(5.1)	—	口 2/12	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内：施釉 外：施釉	
741	白磁	椀	6区	K・110	(13.6)	(1.9)	—	小片	素地：灰白 (10YR8/1) 釉調：灰白 (2.5Y8/2)	内：施釉 外：施釉	
742	白磁	椀	6区	f10 黒褐色土	(14.1)	(4.1)	—	小片	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/2)	内：施釉 外：施釉	
743	白磁	椀	6区	d12 灰褐色土	(15.6)	(3.3)	—	口縁 2/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰白 (2.5Y7/1)	内：施釉 外：施釉	
744	白磁	椀	6区	南側	(16.0)	(3.5)	—	口 1/12 以下	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内外：施釉	
745	白磁	椀口縁	6区	北側	(16.6)	(2.4)	—	口 1/12	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内外：施釉	
746	白磁	椀	6区	i9 黒褐色土	(17.3)	(3.5)	—	口 1/8	素地：白 (N9/0) 釉調：少し青みかかった透明釉	内外：施釉	
747	白磁	椀	6区	h10	—	(2.4)	高台 (6.0)	高台 6/12	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	内：沈線、圏線、施釉	
748	白磁	椀	6区	J・k11	—	(3.2)	高台最大) (5.6)	高台 5/12	素地：灰白 (N8/0) 釉調：灰白 (5Y7/1)	内：施釉 外：施釉	
749	白磁	椀	6区	h10 黒褐色土	—	(3.0)	高台最大) (6.2)	高台 6/12	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (7.5Y8/2) 緑がかっている	内：施釉 外：施釉、釉垂れ	細かい貫入

付表16 6区出土石器・石製品観察表

(数値は現存値)

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
750	大型剥片 (石材)	6区	SD6179	12.2	20.2	2.9	668	サヌカイト
751	紡錘車? (未製品)	6区	i6 黒褐色土	3.65	4.4	4.0	950	凝灰岩
752	紡錘車	6区	i11 黒褐色土	3.25	1.25	0.7	22.1	滑石製
753	砥石	6区	o13 黒褐色土	6.5	3.2	3.4	100	砂岩製
754	基石	6区	f10 黒褐色土	2.2	1.9	0.9	5.3	チャート製

付表17 7区出土土器・土製品観察表

口径・底径欄：( ) 復元径 器高欄：( ) 残存高 - 計測不能

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
755	弥生土器	甕	7区	SD7001 上層	(11.9)	(3.6)	—	口縁 1/12	内・外：黒(N1.5/0) 部分的ににぶい黄橙 (10YR7/2)	内：ケズリ 外：ナデ、ミガキ	
756	瓦質土器	羽釜	7区	SD7001 上層	(21.3)	(4.4)	—	口縁 1/12	内：にぶい橙 (7.5YR6/4) 外：にぶい褐 (7.5YR5/3)	内：ナデ？ 外：ナデ、ユビオサエ	銚から下に 煤付着
757	須恵器	短頸壺	7区	SD7001 上層	(8.6)	(5.3)	(7.0)	小片	内：にぶい橙 (7.5YR7/3) 外：灰白(7.5YR8/2) (橙色の部分あり)	内：回転ナデ 外：ハケナデ、ケズリ、 未調整？	体部最大径 (11.4)
758	須恵器	短頸壺	7区	SD7001 上層	7.9	13.6	—	完存	灰白(N7/0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、タタキ	胴部に2条 の沈線
759	瓦質土器	火鉢	7区	SD7001 上層	—	(7.0)	底 (24.8)	底 1/12	内：灰(N6/0) 外：黄灰(2.5Y5/1)	内：回転ナデ？ 外：ケズリ後脚部接 合	煤付着、脚 の痕
760	白磁	椀	7区	SD7001 上層	—	(1.8)	高台 (6.6)	高台 1/2	素地)にぶい黄橙 (10YR7/2) 釉調)にぶい黄 (2.5Y6/3)	内外：施釉	
761	白磁	椀	7区	SD7001 上層	(12.8)	(5.3)	—	2/12	素地)灰白(2.5Y7/1) 釉調)灰黄(2.5Y6/2)	内外：施釉	
762	白磁	椀	7区	SD7001 上層	(15.8)	(2.3)	—	口縁 1/12	素地：白(N9/0) 釉調：灰白(2.5Y8/1)	内外：施釉	
763	白磁	盤	7区	SD7001 上層	—	(4.1)	—	1/12	素地)灰白(2.5Y7/2) 釉調)にぶい黄 (2.5Y6/3)	内外：施釉	
764	青磁	椀	7区	SD7001 上層	—	(1.9)	高台 (6.6)	2/12	素地：灰白(10YR7/1) 釉調：明オリブ灰 (5GY7/1)	内外：施釉	
765	青磁	椀底部	7区	SD7001 上層	—	(2.5)	高台 (6.9)	高台 3/12	素地：白(N9/0) 釉調：明オリブ灰 (5GY7/1)	内：施釉 外：施釉	内面に線刻
766	青磁	稜花皿	7区	SD7001 上層	(13.6)	(1.3)	—	口縁 1/12	素地：浅黄橙 (7.5YR8/3) 釉調：オリブ灰 (10Y6/2)	内：施釉 外：施釉	口縁端部に 輪花？
767	青磁	稜花皿	7区	SD7001 上層	(13.6)	(1.7)	—	口縁 1/12	素地：灰白(2.5Y7/1) 釉調：オリブ灰 (2.5GY5/1)	内：施釉 外：施釉	口縁端部に 輪花
768	丹波焼	甕口縁	7区	SD7001 上層	最大) (20.4) 頸部) (19.0)	(6.0)	—	口縁 3/12	断：灰白(10YR7/1) 内外：暗褐(7.5YR3/3)	内：指押さえ痕あり	外面に付着 物
769	軟質施釉陶器	椀	7区	SD7001 上層	(5.0)	(3.5)	—	高台 3/12	釉釉：黒褐(10YR2/2) 断：にぶい褐 (7.5YR5/4)	内：施釉 外：施釉、ケズリ出 し高台	黒楽茶椀か
770	土師器	皿	7区	SD7001 下層	(13.7)	(2.4)	—	口縁 2/12	内：橙(5YR6/6)～に ぶい褐(7.5YR) 外：にぶい黄橙 (10YR6/3)	内：ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	
771	瓦質土器	火鉢	7区	SD7001 下層	高さ) (7.0)	幅) (8.5)	—	不明	—	調整不明	凸帯、スタ ンプ文様
772	瓦質土器	火舎 香炉	7区	SD7001 下層	(11.8)	(6.5)	—	口縁 2/12	灰(N4/0)	内：ナデ、ミガキ 外：ミガキ	沈線、スタ ンプ文
773	瓦質土器	風炉	7区	SD7001 下層	(26.4)	(3.8)	—	2/12	灰黄褐(10YR6/2)	外：スタンプ文様	拓本あり
774	青磁	鉢	7区	SD7001 下層	最大) (21.7)	(6.8)	—	口縁 1/12	素地：灰白(N8/0) 釉調：灰白(5Y7/2)	内外：施釉 外：釉垂れあり	
775	丹波焼	壺	7区	SD7001 下層	(12.8)	(3.0)	—	口縁 1/12	内外：褐(7.5YR4/3) 断：褐灰(7.5YR6/1)	内：自然釉？ 外：自然釉？、カキ メ痕？	

番号	種類	器種	地区	出土地	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	調整	備 考
776	丹波焼	壺口縁	7区	SD7001 下層	(12.4)	(5.9)	—	口縁 1/12	内：赤褐 (10R4/3) ~ 黒褐 (10YR3/1) 外：赤褐 (10R4/3)、淡 黄 (2.5Y8/3)	内：赤褐 (10R4/3)、 黒褐 (10YR3/1)	付着物
777	瀬戸焼	すり皿	7区	SD7001 下層	(21.1)	(2.1)	—	口縁 1/12	素地：灰白 (10YR8/2) 釉調：黄褐 (10YR5/6)	内・外：施釉	
778	常滑焼	すり鉢	7区	SD7001 下層	—	(3.4)	底 (12.2)	底部 3/12	内：灰白 (10YR8/2) 外：にぶい黄橙 (10YR6/3) 底部は少し 黒ずんでいる	内：スリメ？ 外：ケズリ、ユビオサ エ	
779	越前焼	すり鉢	7区	SD7001 下層	(30.0)	(8.5)	—	1/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	内：スリメ 外：ユビオサエ	
780	越前焼	すり鉢	7区	SD7001 下層	(31.2)	(8.5)	—	1/12	灰 (N4/0)	内：スリメ	
781	越前焼	すり鉢	7区	SD7001 下層	(30.8)	(8.1)	—	2/12	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内：スリメ	拓本あり
782	越前焼	すり鉢	7区	SD7001 下層	(28.8)	(7.4)	—	2/12	灰 (5Y4/1)	内：スリメ 外：ユビオサエ	
783	越前焼	すり鉢	7区	SD7001 下層	(37.0)	(9.7)	—	1/12	外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	内：スリメ	拓本あり
784	弥生 土器	甕	7区	SD7001 下層	—	(8.0)	底 5.4	底完 存	内：にぶい黄橙 (10YR7/3) 外：灰白 (10YR8/2)	内面：ヘラケズリ 外：ハケ、ユビオサ エ	

付表18 7区出土石器・石製品観察表

(数値は現存値)

番号	種類	地区名	出土地点	高さ	縦 (cm)	横 (cm)	重さ (g)	備 考
785	五輪塔	7区	SD7001	残存高 21.7cm		空輪 14.0 風輪 15.0	5.9kg	空風輪、花崗岩
786	五輪塔	7区	SD7001	残存高 18.5cm		空輪 12.4 風輪 13.5	3.9kg	空風輪、花崗岩
787	五輪塔	7区	SE7003	残存高 20.9cm		空輪 13.0 風輪 13.8	5.3kg	空風輪、梵字四面あり
788	茶臼	7区	SD7001	(8.3)	(4.7)		1.9	
789	石臼	7区	SE7003	(8.3)	(16.0)	(13.7)	2.75kg	
790	砥石	7区		5.8	11.2	10.9		
791	基石	7区	SD7002	0.6	2.3	1.8	5.3 g	
792	五輪塔	7区		17.1cm	24.2	24.7	26kg	地輪、花崗岩

# 圖 版

図版第1 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

新町遺跡第2次



(1)調査前遠景(南から)



(2)調査前状況(西から)



(3)1-a トレンチ全景(東から)

新町遺跡第2次



(1) 1-a トレンチ全景(南から)



(2) 1-b トレンチ全景(西から)



(3) 1-b トレンチ北壁  
セクション(南から)

図版第3 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

新町遺跡第2次

(1)尾根上調査前状況(南から)



(2)2トレンチ全景(南西から)



(3)2トレンチ勾玉出土状況(東から)



図版第4 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

新町遺跡第2次



(1) 3トレンチ全景(南西から)



(2) 3トレンチS H70検出状況  
(南東から)



(3) 4トレンチ遺構検出作業  
(西から)

新町遺跡第2次



(1) 4トレンチ耕作溝群・ピット  
検出状況(西から)



(2) 5トレンチ調査前状況  
(北東から)



(3) 5トレンチ全景(東から)

図版第6 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

新町遺跡第2次



(1) 5トレンチ流路NR89  
(北西から)



(2) 尾根上I区南西部遺構  
検出状況(北東から)



(3) I区南東部NR42検出状況  
(北西から)

新町遺跡第2次



(1) I区南東部N R42検出状況  
(北東から)



(2) I区西部S E91検出状況  
(北から)



(3) S E91埋土分割調査状況  
(西から)

新町遺跡第2次



(1) S E91埋土中層部セクション  
(東から)



(2) S E91埋土下層部セクション  
(南東から)



(3) S E91断ち割り断面状況  
(南東から)

新町遺跡第2次



(1) I区南東角中近世遺構検出状況(東から)



(2) 土坑S K95完掘状況(北から)



(3) 土坑S K96埋土セクション(西から)

新町遺跡第2次



(1)土坑SK100半割埋土セクション(北東から)



(2)土坑SK100全景(西から)



(3)土坑SK90検出状況(南東から)

新町遺跡第2次



(1) S K90埋土セクション  
(南東から)



(2) S K90完掘状況(南東から)



(3) 風倒木跡 S X102  
埋土セクション(南から)

新町遺跡第2次



(1) S X 102完掘状況(南から)



(2) 竪穴建物 S H 70  
埋土セクション(南から)



(3) S H 70周壁溝検出状況  
(南西から)

新町遺跡第2次

(1) S H70床面調査状況  
(南西から)



(2) S H70 S K236埋土セクション  
(北西から)



(3) S K236完掘状況(南東から)



新町遺跡第2次



(1) S H70主柱穴 S P 248  
埋土セクション(南から)



(2) S H70全景(東から)



(3) S H70全景(南から)

新町遺跡第2次



(1)土坑 S K 266遺物出土状況  
(西から)



(2)土坑 S K 232遺物出土状況  
(南から)



(3)柱穴 S P 215遺物出土状況  
(西から)

新町遺跡第2次



(1) S H70主柱穴 S P247  
埋土セクション(南から)



(2) S P215埋土セクション  
(南から)



(3) 柱穴 S P216埋土セクション  
(東から)

新町遺跡第2次

(1) 自然流路N R42埋土第18層  
検出状況(北東から)



(2) N R42第18層調査状況  
(東から)



(3) N R42完掘状況(北西から)



図版第18 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

新町遺跡第2次



(1) NR42調査区南西  
壁面セクション(北東から)



(2) I区全景(北東から)



(3) I区全景(右下が北)

図版第19 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

新町遺跡第2次

(1) I区遠景と佐屋利遺跡  
(南西から)



(2) 1区遠景(南西から)



(3) II区と峰山盆地遠景(北から)



新町遺跡第2次



(1) II区全景(南西から)



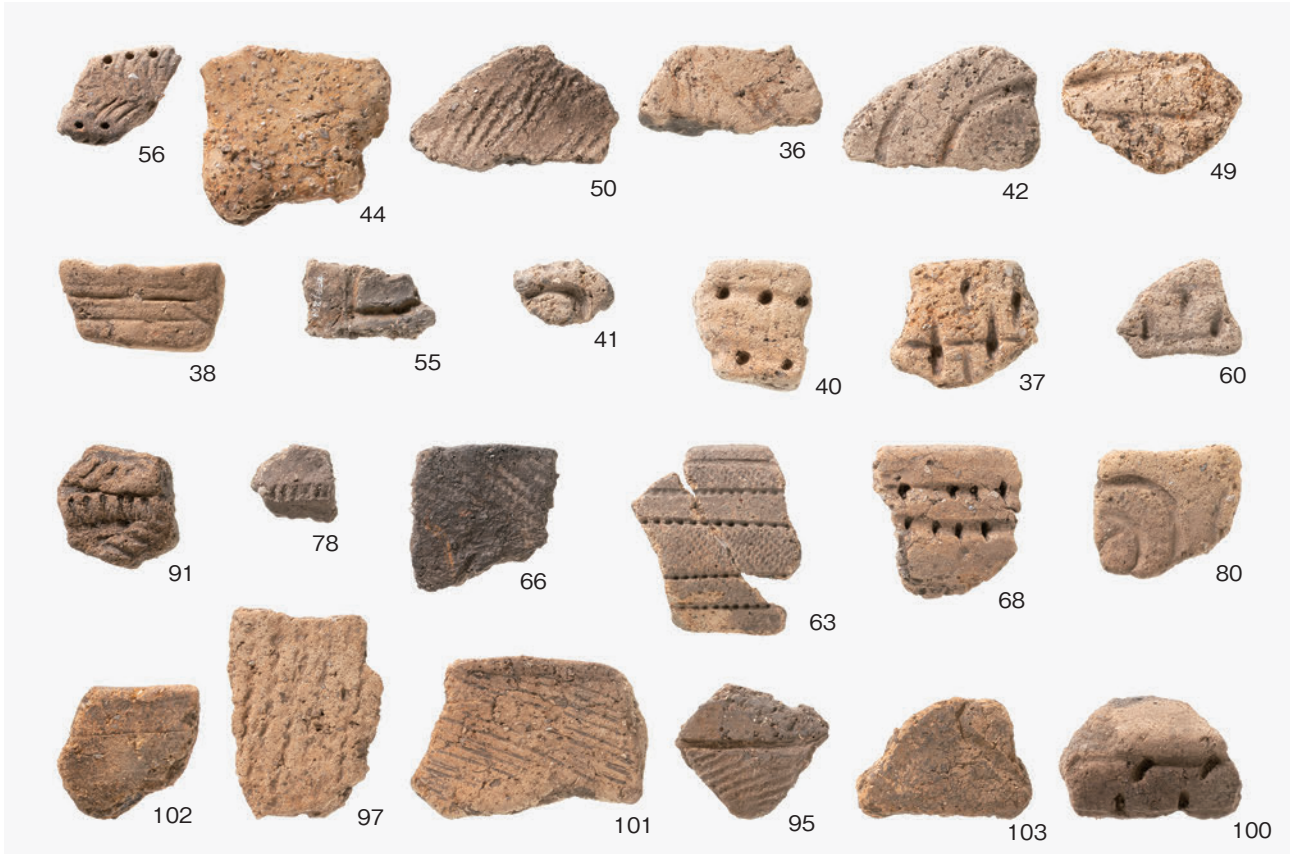
(2) 土器埋納坑 S X 205(南西から)



(3) S X 205深鉢埋納状況  
(南西から)



新町遺跡第2次



(1)出土遺物 2



(2)出土遺物 3

三分井根遺跡第2・3次



(1) 1区完掘状況(北から)



(2) 2区完掘状況(北から)



(3) 3区完掘状況(北から)

図版第24 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

三分井根遺跡第2・3次



(1) 4区完掘状況(北から)



(2) 1区壁面(北東から)



(3) 3区壁面(東から)



(1) 6区完掘状況(南から)



(2) 7区完掘状況(北から)



(3) 7区壁面(東から)



(1) 第2次調査遠景(南西から)



(2) 第3次調査遠景(北東から)

図版第27 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 1区調査前状況(南東から)



(2) 1区上層検出状況(北西から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 1区上層 S X1053検出状況  
(南から)



(2) 1区上層 S X1053  
遺物出土状況(南から)



(3) 1区上層 S X1053掘削状況  
(南から)

佐屋利遺跡第1～3次

(1) 1区上層 S P 1031半裁状況  
(南から)



(2) 1区上層 S P 1050半裁状況  
(南から)



(3) 1区上層 S P 1033半裁状況  
(南から)



図版第30 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 1区上層 S P1097段下げ  
(南から)



(2) 1区上層 S P1092段下げ  
(南から)



(3) 1区上層 S P1095段下げ  
(南から)

佐屋利遺跡第1～3次

(1) 1区上層 S P 1094段下げ  
(南から)



(2) 1区上層 S P 1099段下げ  
(南から)



(3) 1区上層 S P 1096半裁状況  
(南から)



図版第32 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 1区上層 S X1054  
セクション(南から)



(2) 1区上層 S P1099半裁状況  
(南から)



(3) 1区上層 S P1097半裁状況  
(南から)

佐屋利遺跡第1～3次

(1) 1区上層 S P 1095半裁状況  
(東から)



(2) 1区上層 S P 1093半裁状況  
(南から)



(3) 1区上層 S P 1075半裁状況  
(南から)





(1) 1区上層 自然流路内木製品(下駄か)出土状況(南西から)



(2) 1区上層 自然流路内木製品(下駄)出土状況(南西から)



(1) 1区上層 自然流路内木製品(下駄、木簡)出土状況(南西から)



(2) 1区上層 自然流路内木製品(戸板)出土状況(南西から)



(1) 1区上層全景(西から)



(2) 1区上層全景(東から)



(1) 1区上層 柵列検出状況(東から)



(2) 1区上層 柵列近景 西から



(1) 1区上層 掘立柱建物(北東)検出状況(東から)



(2) 1区上層 掘立柱建物(南西)検出状況(東から)



(1) 1区下層検出状況(西から)



(2) 1区下層検出状況(東から)

図版第40 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 1区下層 木組遺構検出状況  
遠景(東から)



(2) 1区下層 木組遺構検出状況  
近景(西から)



(3) 1区下層 木組遺構検出状況  
近景(北東から)

図版第41 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 1区下層全景(西から)



(2) 1区下層全景(東から)

図版第42 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 1区上層空撮(南から)



(2) 1区下層空撮(北東から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 2区北壁1(南から)



(2) 2区北壁2(南から)



(3) 2区耕作溝掘削状況(南から)

図版第44 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 2区西半全景(南東から)



(2) 2区西部(北東から)



(3) 2区中部(南から)

佐屋利遺跡第1～3次

(1) 銭貨埋納柱穴 S P 2003  
半裁状況(南東から)



(2) 銭貨検出状況近景(南から)



(3) S D 2143掘削状況(南から)





(1) 2区全景(上が北)



(2) 2区・3区遠景(南西から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 3区S X 3002土器出土状況  
(南から)



(2) 3区S D 4095大型石包丁  
出土状況(西から)



(3) S D 3069完掘状況(南から)



(1) 3区西壁(東から)



(2) 3区東半全景(東から)



(3) 3区西半全景(西から)



(1) 3区空撮(上が北)



(2) 3区空撮(南西から)



(1) 4区東半調査前(東から)



(2) 4区西半全景(西から)

図版第51 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S D4001検出状況(北西から)



(2) S D4001検出状況(南から)



(3) S D4003検出状況(南から)



(1) S D4001セクション(南から)



(2) S D4003セクション(南から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S P 4035半裁状況(南から)



(2) S P 4061半裁状況(南から)



(3) S P 4345半裁状況(南から)



(1) S P 4214 土器・鉄刀出土状況(南から)



(2) S P 4214 鉄刀出土状況(南から)



(1) S P 4040 錢貨出土状況(南から)



(2) S P 4040 錢貨出土状況近景(南から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S P 4030セクション(南から)



(2) S P 4044セクション(南から)



(3) S P 4065セクション(南から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S D4071内石組遺構検出状況  
(南から)



(2) S D4071セクション(南から)



(3) S D4071完掘状況(南から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S E 4073検出状況(南から)



(2) S E 4073完掘状況(南から)



(3) S E 4073半裁状況(南から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 自然流路検出状況(西から)



(2) 自然流路内井戸 S E 4215  
検出状況(南から)



(3) 自然流路内石組井戸底?  
S E 4004検出状況(南から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 自然流路内木質集中部  
(西から)



(2) 自然流路内木柁井戸 S E 4215  
検出状況(南から)



(3) 自然流路内木柁井戸 S E 4215  
完掘状況(南から)



(1) 4区空撮(上が北)



(2) 4区空撮(上が北)

図版第62 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 5区調査前状況(北から)



(2) 5区西壁(北東から)



(3) 5区完掘状況(北から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 6区調査前状況(東から)



(2) 6区全景(北東から)



(3) 6区全景(西から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S P 6046半裁状況(北から)



(2) S P 6070半裁状況(北から)



(3) S P 6072半裁状況(北から)

図版第65 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S P 6037 半裁状況(北から)



(2) S B 6200 全景(南から)



(3) S K 6144 半裁状況(南から)



(1) 6区空撮(上が北)



(2) 6区空撮(東から)



(1) 7区調査前状況(西から)



(2) 7区検出状況(西から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) 7区東壁(西から)



(2) S D7001セクション1  
(北西から)



(3) S D7001セクション2  
(西から)

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S D7002検出状況(東から)



(2) S P7004検出状況(南東から)



(3) S P7004半裁状況(南東から)



(1) S D7001下層検出状況(南西から)



(2) S D7001下層検出状況(東から)



(1) S D7001セクション1南(東から)



(2) S D7002セクション1北(南西から)

図版第72 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S D7003セクション1  
(東から)



(2) 7区拡張部セクション  
(西から)



(3) 7区拡張部南壁(北から)

図版第73 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



(1) S D7001完掘状況(東から)



(2) S D7001完掘状況(西から)

図版第74 国道312号(大宮峰山インター線)関係遺跡

佐屋利遺跡第1～3次



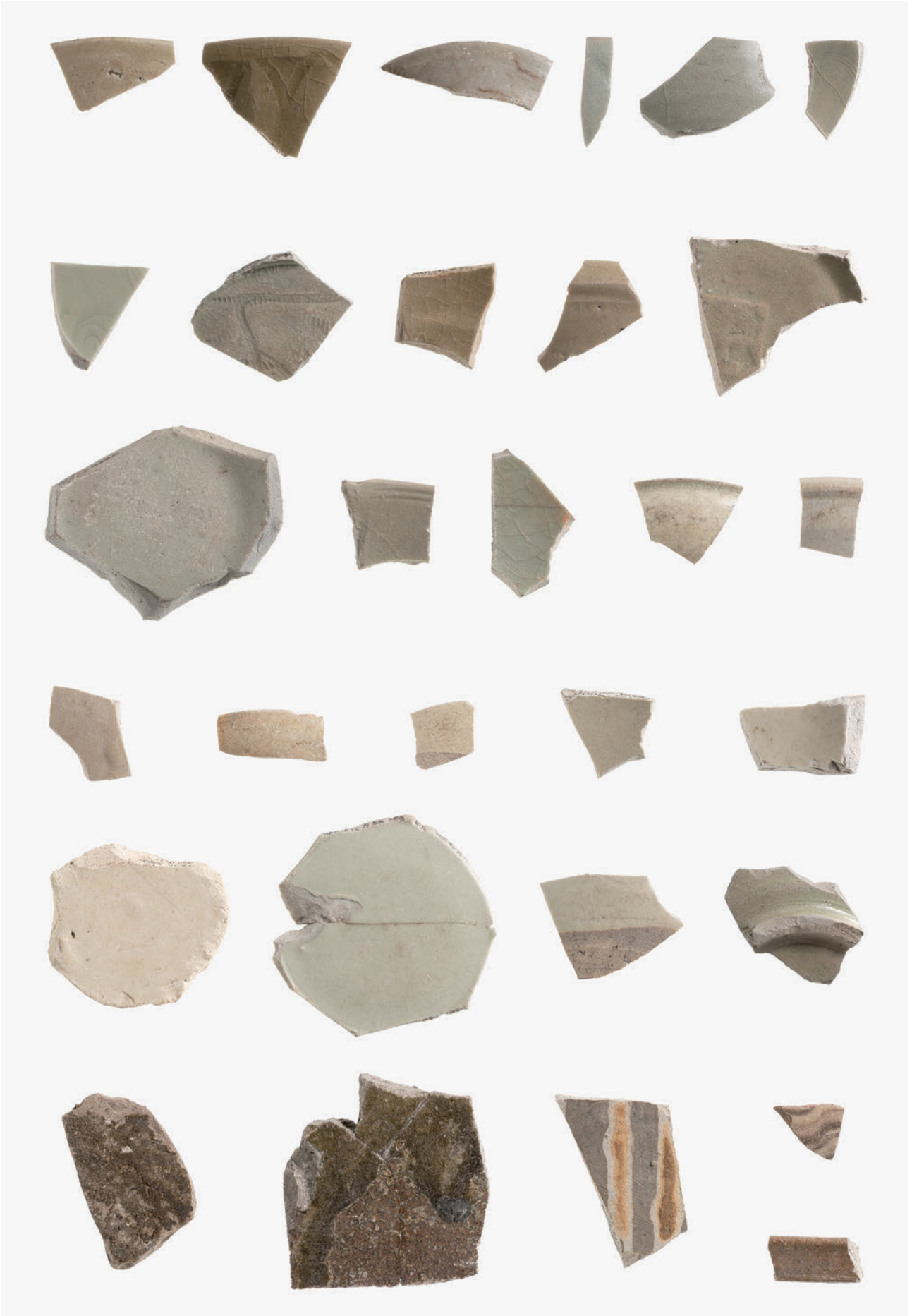
(1) 7区空撮(西から)



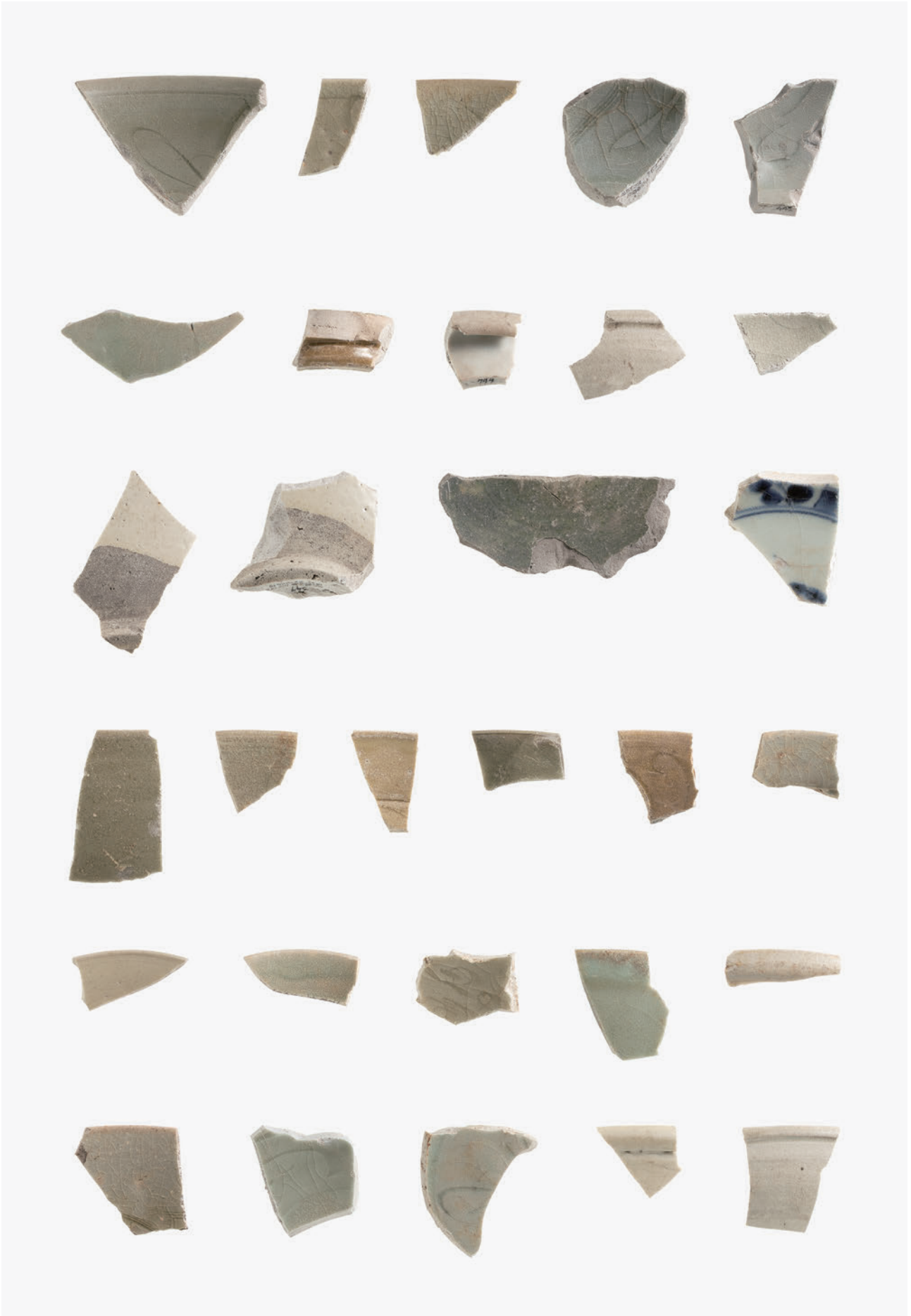
(2) 7区空撮(東から)



出土遺物 1 4区出土陶磁器類 1







出土遺物 4 4区出土陶磁器類 4



出土遺物 5 4区出土陶磁器類 5



出土遺物6 6区出土陶磁器類



(1)出土遺物7 1区出土白磁、灰釉陶器(外面)

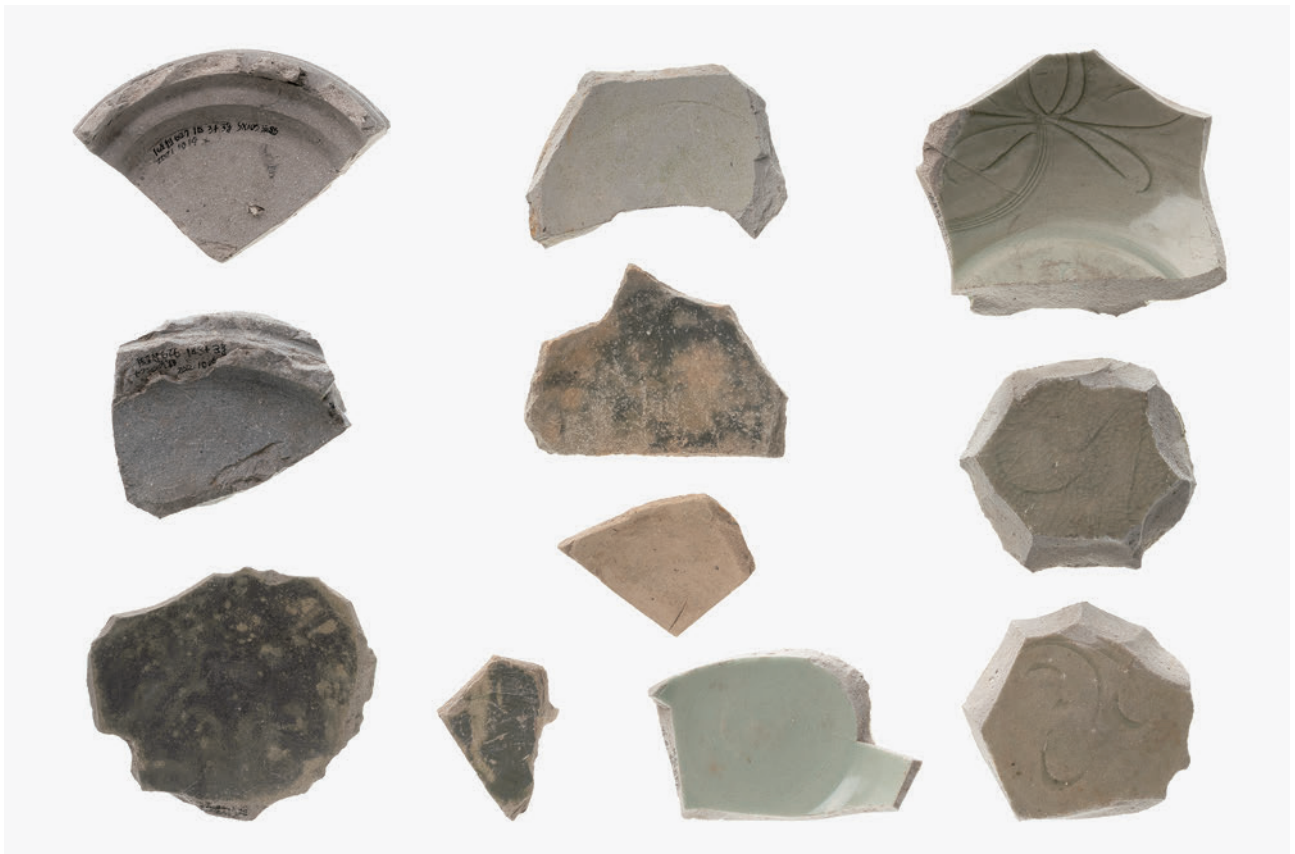


(2)出土遺物8 1区出土白磁、灰釉陶器(内面)

佐屋利遺跡第1～3次



(1)出土遺物9 1区出土青磁、緑釉陶器、須恵器(外面)



(2)出土遺物10 1区出土青磁、緑釉陶器、須恵器(内面)



(1)出土遺物11 1区出土墨書土器



(2)出土遺物12 1区出土縄文土器、土錘



211



294



204



205



295



223



210



301





出土遺物15 1区出土土師器高杯、皿、弥生土器





(1)出土遺物17 NR1007出土板戸



(2)出土遺物18 NR1007出土板戸



(1)出土遺物19 NR1007出土板戸部材



(2)出土遺物20 NR1007出土板戸部材



(1)出土遺物21 NR1007出土板戸部材(棧)



(2)出土遺物22 NR1007出土板戸部材(棧)



(1) 出土遺物23 NR1007出土板戸部材(棧)



(2) 出土遺物24 もえさし



(1)出土遺物25 目釘付板材



(2)出土遺物26 目釘付板材



(1)出土遺物27 折敷1



(2)出土遺物28 折敷2



(1) 出土遺物29 折敷3



(2) 出土遺物30 有孔木材



(1)出土遺物31 下駄



(2)出土遺物32 下駄



(1)出土遺物33 下駄



(2)出土遺物34 下駄



(1) 出土遺物35 木製品(不明木製品)



(2) 出土遺物36 木製品(不明木製品)



(1) 出土遺物37 木製品(曲物部材)



(2) 出土遺物38 木製品(曲物部材)



(1)出土遺物39 木製品(382・383・384；椀、385・386；櫛)



(2)出土遺物40 木製品(382・383・384；椀、385・386；櫛)

佐屋利遺跡第1～3次



出土遺物41 鎌柄ほか木製品(389：鎌柄、351・348・350：不明木製品、349：卒塔婆)



391

(1) 出土遺物42 呪符木簡(赤外線写真は奈良文化財研究所撮影)

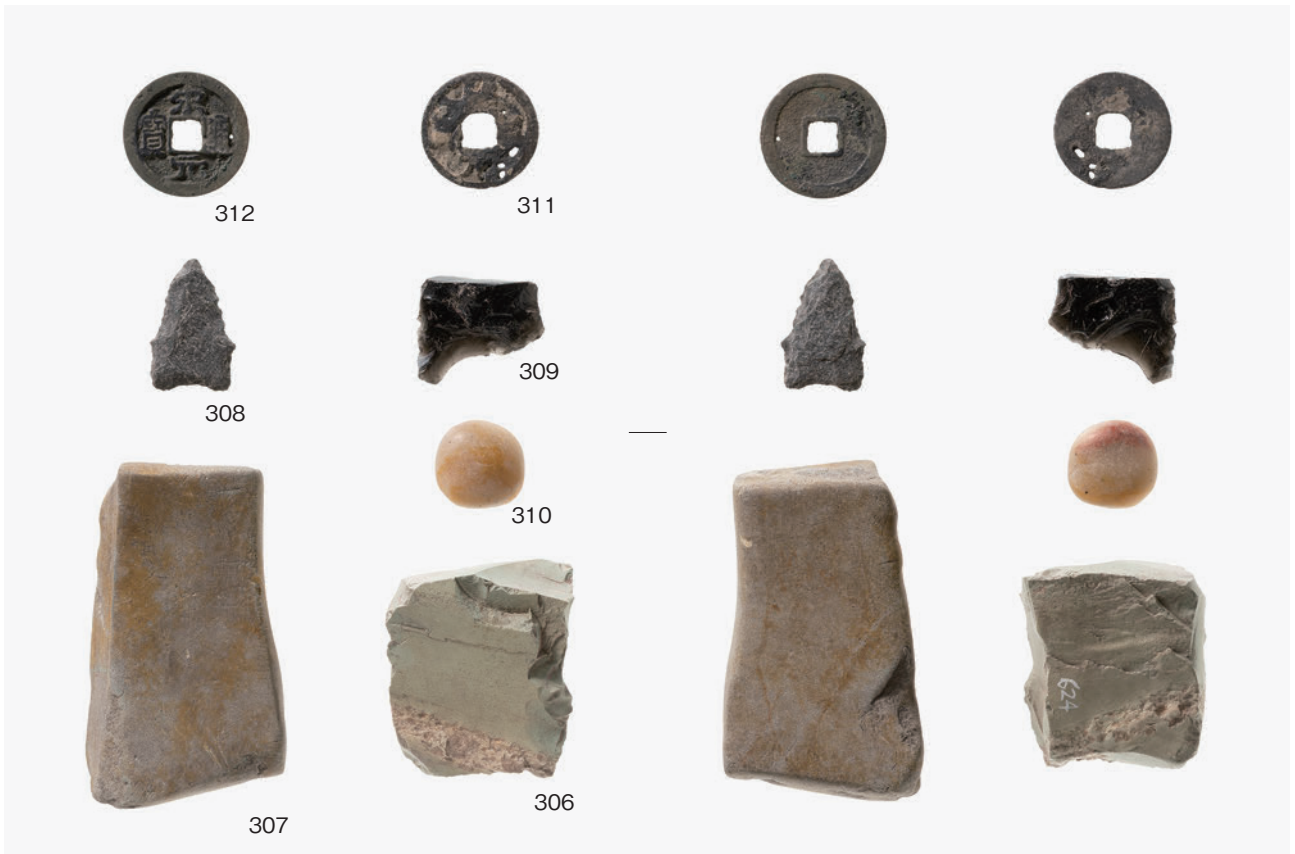


390

(2) 出土遺物43 木簡



(1)出土遺物44 木製品(388・387；球、347・352；不明木製品)



(2)出土遺物45 銭、石製品、石器







639



660



635



612



683



632



(1) 出土遺物49 3区出土遺物3



(2) 出土遺物50 3区出土遺物4 (大型石包丁)





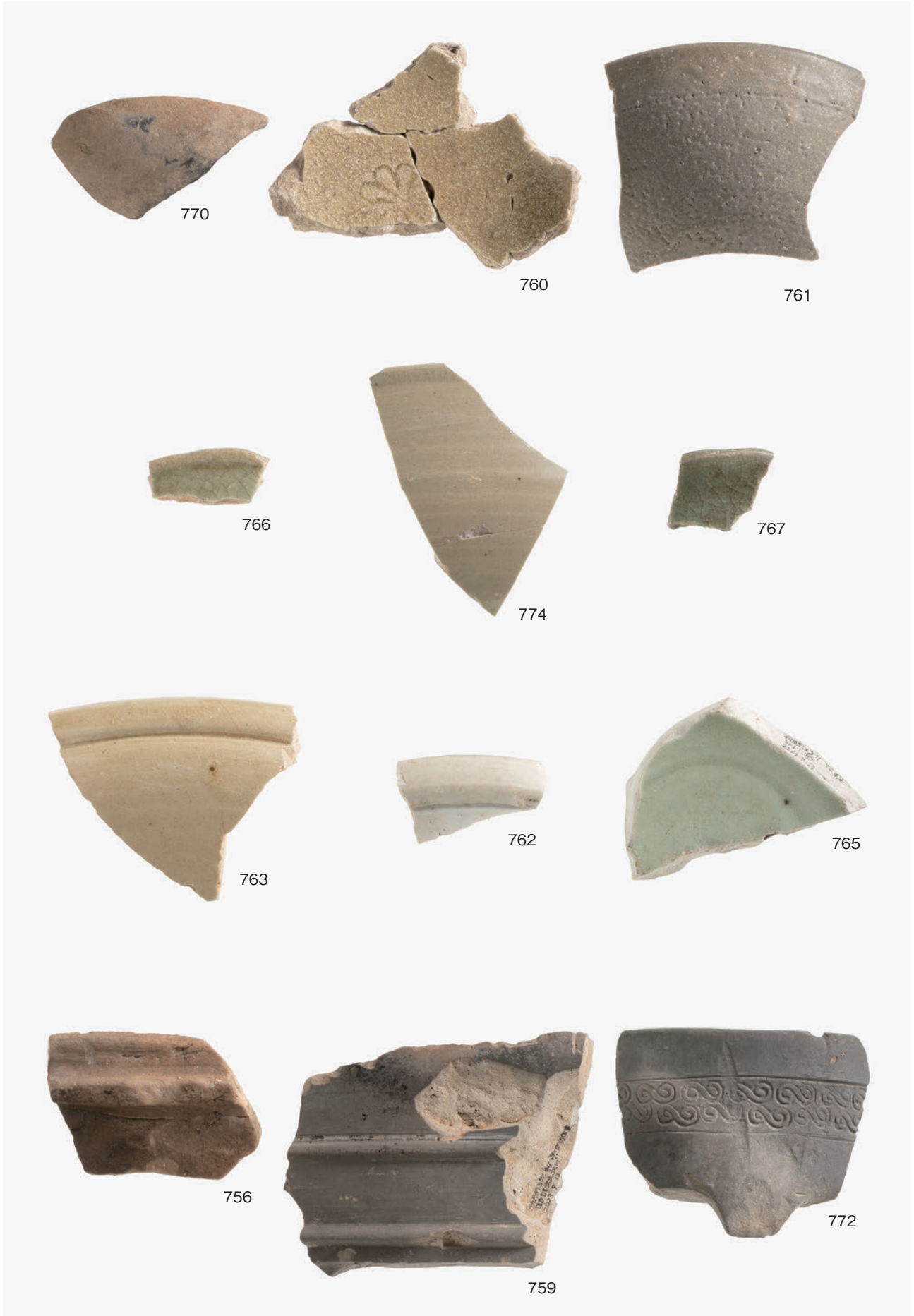
(1) 出土遺物52 4区出土遺物2



(2) 出土遺物53 6区出土遺物1









769

(1)出土遺物57 7区出土遺物2(軟質施釉陶器 楽茶碗)



769

(2)出土遺物58 7区出土遺物3(軟質施釉陶器 楽茶碗)

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第199冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第199冊
編著者名	面将道、竹原一彦、三好博喜、野島悠之
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel.075(933)3877
発行年月日	西暦2026年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
新町遺跡2次	きょうたんごし 京丹後市 みねやまちょうしんまち あらやま 峰山町新町・荒山	26212	5510	35° 36' 40"	135° 05' 21"	20200706 ~ 20210226	1,610	道路建設
三分井根遺跡 第2・3次	きょうたんごし 京丹後市 みねやまちょうしんまち 峰山町新町		5526	35° 36' 43"	135° 05' 30"	20210201 ~ 20210226 20210201 ~ 20210226	300 700	
佐屋利遺跡 第1～3次	きょうたんごし 京丹後市 みねやまちょうしんまち あらやま 峰山町新町・荒山		5524	35° 36' 44"	135° 05' 14"	20210512 ~ 20220304 20220512 ~ 20230130 20230614 ~ 20231114	4,300 3,240 850	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新町遺跡2次	集落	縄文、古墳、 中世	柱穴、竪穴住居、井戸	縄文土器、石器、土師器、須恵器	
三分井根遺跡 第2・3次	散布地	-	-	-	遺構遺物 なし
佐屋利遺跡 第1～3次	集落	弥生 奈良 平安 中世 戦国	溝、土坑、区画溝、立 柱建物、井戸、堀	有舌尖頭器、弥生土器、大型石包丁、 土師器、須恵器、越州磁器、緑釉陶器、 軟質施釉陶器(黒楽)、白磁、青磁、戸板、 折敷、人形	

所収遺跡名	要 約
新町遺跡 2次	縄文時代早期、後期、晩期の土器が出土し、後期の土器埋納遺構が検出された。また、古墳時代前期の竪穴建物1棟を検出し、周辺からは弥生時代後期から古墳時代の遺物が出土した。
三分井根遺跡 第2・3次	遺構・遺物なし
佐屋利遺跡 第1～3次	<p>弥生時代は、中期後葉の溝群・土坑等があり、溝内からは大型石包丁が2点重なって出土した。</p> <p>奈良時代は、顕著な遺構は確認できなかったが、墨書土器等が出土した。</p> <p>平安時代後期～鎌倉時代は、堀で区画された屋敷地に掘立柱建物が建てられる方形居館があり、多量の土器・陶磁器・木製品が出土した。</p> <p>戦国時代は巨大な堀を確認した。堀からは軟質施釉陶器(黒楽)椀が出土した。国衆の居館に伴う堀と思われる。</p>

京都府遺跡調査報告集 第199冊

令和8年3月31日

発行 公益財団法人  
京都府埋蔵文化財調査研究センター  
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷